

日本と韓国の中・近世における都市空間の比較研究

A comparative study between Japanese and Korean urban space.

(研究課題番号 国10044126)

1998年度～2000年度 科学研究費補助金（基盤研究B(2)）研究成果報告書

2001年3月

研究代表者 玉井 哲雄

(千葉大学工学部教授)

千葉大学附属図書館



20001846318



002
111
010001
2007

目次

まえがき	玉井 哲雄	1
I 日韓都市史研究の現状と課題		10
1. 日本都市史研究の動向	伊藤 裕久	10
2. 日本における町家研究の成果と動向	大場 修	16
3. 韓国都市史研究動向	李 京贊	28
日本語要約		46
4. 韓国住居史研究の現況と課題	田 鳳熙	48
日本語訳		58
II 邑城と城下町 ——日韓比較都市史研究会シンポジウム		70
1. 研究会とシンポジウムの主旨説明	玉井 哲雄	71
2. 18世紀に於ける水原華城の建設と商業都市	金 東旭	74
3. 邑城の都市形態	李 相棟	84
4. 城下町仙台の建設と変容	千葉 正樹	96
5. 城下町松本について	土本 俊和	108
6. 質疑応答の記録	討論参加者	114
参考資料・近世主要城下町一覧		124
III 日韓近代都市住宅の比較研究		126
1. 北村の古い道と都市韓屋（ソウルの都市韓屋）	宋 寅豪	126
日本語約		132
2. 日本における近代都市型住宅・住宅地の形成	松山 恵	136

千葉大学附属図書館



20001846318

まえがき

研究代表者 玉井哲雄

この研究は 「日本と韓国の中・近世における都市空間の比較研究」

A comparative study between Japanese and Korean urban space.

と題し、科学研究費補助金の交付を受け、1998(平成10)年度は、国際学術研究・共同研究、1999(平成11)年度・2000(平成12)年度は、基盤研究Bとして3年度にわたって実施された。研究組織、研究経費、研究の目的、そして研究の経過などは以下の通りである。

■研究組織

研究代表者	玉井 哲雄	千葉大学・工学部・教授
研究分担者	伊藤 裕久	東京理科大学・工学部・助教授
	大場 修	京都府立大学・人間環境学部・教授
	土本 俊和	信州大学・工学部・助教授
	モリス・マーティン	千葉大学・工学部・助教授
	李 相棟	京畿大学校・建設工学部・教授
	金 東旭	京畿大学校・建設工学科・教授
	田 鳳熙	ソウル大学校・工科大学建築学科・助教授
	李 京賛	圓光大学校・工科大学都市工学科・助教授
研究協力者	小泉 和子	愛知県立芸術大学・客員教授
	宋 寅豪	ソウル市立大学校・建築都市造景学部建築科・副教授

なお、研究の一環として行った調査、研究会、シンポジウムなどに随時参加していただいた研究者、大学院生、学生の名前は研究経過の対応部分に記した。

■研究経費	1998(平成10)年度	2,500 千円
	1999(平成11)年度	2,200 千円
	2000(平成12)年度	2,300 千円
	計	7,000 千円

■研究の目的

東アジアそれぞれの国の社会において重要な位置を占めている現代都市を考える上で、その前提となる中・近世都市の歴史的考察は欠かせない。日本においては、建築史の分野から中・近世の都市史研究が個別都市の空間構造をあきらかにすることを目指して研究が進んでいるものの、日本列島内の都市相互の比較研究や、諸外国の都市空間との比較研究はまだほとんど手が付けられていない。韓国においても、都市史研究の必要性が認識され、研究方法および基礎的な史料収集についての試みがなされているが、個別都市の空間

構造の分析は、ソウルなど一部の都市で部分的に試みられているものの、まだ十分な蓄積があるわけではない。

そこで本研究では、日本および韓国において中世・近世の都市史研究を先駆的に担っている建築史研究者が、互いにその調査研究成果を持ち寄って課題を討論し、互いに相手側の都市空間の調査研究に実際に参加して、都市空間を体験し、さらに具体的に相互に調査および研究内容の検討を行うことによって、日本・韓国それぞれの都市史研究の水準を向上させ、相互の都市の実質的な比較研究の可能性を追求しようとしている。

具体的には、日本においては三都、そして各地の城下町や寺内町など、韓国においてはソウル、そして各地の邑城に代表される中世から近世にかけての都市をとり上げ、その規模、街路や街区の形態、敷地内の建物配置やその構造・間取り・外観などを具体的に比較調査することにより、東アジアという広い視野から相互の都市空間の特質をあきらかにすることを目指す。

これらの作業が進めば、日韓両国のみならず東アジア全体を視野にいたした都市史研究の可能性が開かれるはずであり、21世紀世界の重要な課題である都市に関する様々な社会問題を考える上で、東アジアの都市の歴史的経験に基づいた発言のための有効な手がかりとなるはずである。

■研究の経過

1970年代以降の日本においては、都市空間の変容に対して「町並保存」という形で伝統的な都市空間の再評価が試みられ、それにともなって建築史の立場からの都市史研究も本格的に行われるようになった。韓国においても、やや時期的に遅れるものの都市の急激な変貌にともなって、建築調査および都市史研究が行われるようになった。1990年代に入ると、日韓それぞれの都市史研究者の間で、自国内だけではなく広く東アジア全体からみた都市空間の比較研究が重要という認識が形成され、実際に比較調査も行われてきた。

今回の日本と韓国の研究者による共同研究は、直接的には1994年5月に開かれた新都市建設をテーマとする「ソウル定都600年記念シンポジウム」(明知大学校建築文化研究所主催)において、研究代表者玉井哲雄が「日本の歴史的な新都市」というテーマで基調報告した際に、韓国の共同研究メンバーを中心とする都市史研究者との間の議論で、双方の問題意識の共通性が認識され、日韓都市史共同研究の可能性が提起されたことが契機となっている。

そのことをうけて、韓国側の研究グループの代表李相楳は、1995年2月から1996年1月までの一年間、外国人研究者として千葉大学において玉井哲雄と都市空間の調査方法、史料収集の方法、史料の分析方法について共同研究を行った。また、1996年6月には玉井、モリス、大場が、1997年3月には玉井が韓国を訪問して共同研究の内容の打ち合わせを行っている。

科学研究費が採択され、補助金が得られて以降3年間の実際の共同研究は、大きく以下のような内容を計画し実行した。

1. 日本側研究者が韓国を訪問し、韓国の実際の都市および都市を構成する建物を調査見学して、その現地で韓国側研究者と討論を行う。また、韓国側研究者が日本を訪れて同様に調査見学を行って現地で議論する。

2. 韓国側研究者が計画し、学生が多数参加して実行された都市韓屋実測調査に、調査日程を調整して日本側研究者も参加して、実際の住宅実測調査を部分的に分担する。これには日本側研究者に同行した学生も参加する。

3. 日本、韓国それぞれで行われた調査期間中に研究会を行い、それぞれが分担して研究報告を行い、討論を行う。研究会にはこの共同研究の研究分担者、研究協力者のみならず広く関連分野の研究者、大学院生、学生の参加を求める。

実際の調査日程、および研究会などの日程は以下に示した通りである。

●1998年度

1. 韓国忠清道・全羅道都市調査 (1998/08/22～1998/08/30)

ソウル市内都市遺構・伝統的建物調査

南山コル韓屋マウル 昌徳宮 嘉会洞 普門洞 景福宮 社稷壇

韓国内各地の代表的邑城など都市遺構の現地調査

海美邑城 藍浦邑城 沃溝邑城 全州邑城 高敞邑城 昌平

木浦 宝城カンコルマウル 樂安邑城 晋州 大邱 星州

日本側参加者 玉井哲雄 伊藤裕久 大場修 小泉和子

韓国側参加者 金東旭 李相棟 田鳳熙 宋寅豪 (都市韓屋の案内と説明)

韓国側調査協力者

李 王基 (牧園大学建築学科)

李 鎬洵 (密陽産業大学校建築工学科 大邱邑城の案内と説明)

金 基虎 (ソウル市立大学 研究会参加)

通訳

梶川 晶啓 (ソウル大学大学院生)

2. 日本国近畿地方都市調査 (1999/01/26～1999/02/01)

京都市内の町家と町並 大和郡山城下町 環濠集落 中家住宅

奈良国立文化財研究所：平城京資料館 発掘現場 奈良町の町家と町並

今井の町家と町並 富田林の町家と町並 京都伏見の町家と町並

大阪市内：大阪城 大阪城下町 心齋橋 御堂筋など

日本側参加者 玉井哲雄 伊藤裕久 大場修 土本俊和

韓国側参加者 金東旭 李相棟 田鳳熙 李京賛 宋寅豪

日本側調査協力者

石川 祐一 (京都市文化財保護課 京都市内案内と説明)

西山 和宏 (奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部遺構調査室 平城宮跡説明)

小林 広育 (奈良市教育委員会文化財課 奈良市内の説明と案内)

梁 在濬 (大阪大学工学部建築工学科博士課程大学院生 大阪市内の説明と案内)

小林 大祐 (京都文教短期大学 伏見市内の案内と説明)

通訳

金 眞成 (国立全南大学校湖南文化研究所特別研究員)

●1999年度

1. 韓国ソウル都市韓屋調査・慶州調査 (1999/06/30～1999/07/07)

ソウル：内需洞地区都市韓屋実測調査 桂洞韓屋調査 昌徳宮 秘苑

慶州：良洞マウル 慶州文化財研究所 皇龍寺遺跡 新羅王宮発掘調査現場

雁鴨池 感恩寺

日本側参加者 玉井哲雄 伊藤裕久 大場修 土本俊和 小泉和子

韓国側参加者 金東旭 李相求 田鳳熙 李京賛 宋寅豪

韓国側調査協力者

崔 榮基 (除羅伐大学建築学科 慶州市内の説明と案内)

日本側調査参加学生

大石真巳 紀伊 健 平野裕文 (千葉大学大学院生)

松山 恵 牧島美玲 (東京理科大学大学院生)

雫石絵麻 山本力矢 (東京理科大学学生)

通訳

梶川 晶啓 (駐大韓民国日本国大使館広報文化院専門調査員)

李 恵淳 (京畿大学校研究員)

2. 日本国東北地方都市調査 (1999/10/25～1999/10/31)

仙台市内：若林城 穀町 大崎八幡宮 仙台市立博物館 青葉城本丸石垣整備現場

平泉町：中尊寺 毛越寺 観自在王院 無量光院

酒田市内：鏡屋 旧本間家本宅 城輪柵 日和山公園 鶴岡市内：致道博物館

会津喜多方市内町並 下郷町大内宿 会津若松町並 さざえ堂

日本側参加者 玉井哲雄 伊藤裕久 大場修 土本俊和 モリス・マーティン

小泉和子

韓国側参加者 金東旭 李相棟 田鳳熙 李京賛 宋寅豪

日本側調査協力者

千葉 正樹 (東北大学大学院国際文化研究科 仙台市内案内と説明 研究会報告)

田中 則和 (仙台市教育委員会文化財課 青葉城本丸遺跡解説と案内)

金森 安孝 (仙台市教育委員会文化財課 青葉城本丸遺跡解説と案内)

八重樫忠郎 (平泉町教育委員会 平泉遺跡解説と案内)

本沢 慎輔 (平泉町教育委員会 平泉遺跡解説と案内)

清野 誠 (酒田市教育委員会文化財係 酒田市内文化財の案内と説明)

小檜山満好 (小檜山建築設計事務所 会津喜多方市内保存建物案内と説明)

通訳

李 雄九 (東北大学大学院生)
李 善姫 (東北大学大学院生)
金 真瑠 (東北大学大学院生)

●2000年度

1. 韓国ソウル都市韓屋調査・全州都市建築調査 (2000/06/19～2000/06/25)

ソウル：駱山・普門洞都市韓屋調査 嘉會洞都市韓屋実測調査
清州：都市・建築調査 全州：教洞韓屋実測調査

日本側参加者 玉井哲雄 伊藤裕久 大場修 土本俊和 小泉和子

韓国側参加者 金東旭 李相棟 田鳳熙 李京賛 宋寅豪

韓国調査協力者

鄭 石 (ソウル市政開発研究院 嘉會洞現況の解説)

金 泰永 (清州大学校建築工学部 清州の解説)

崔 孝昇 (清州大学校建築工学部 清州の解説と案内)

日本側調査参加研究者学生

斎藤知恵子 (国立科学博物館技術補佐員)

岸原かほる 児玉大典 中島千鶴 (千葉大学学生)

松山 恵 牧島美玲 雫石絵麻 (東京理科大学大学院生)

高松俊秀 (東京理科大学学生) 朴 倫爽 (信州大学学生)

通訳

李 恵淳 (京畿大学校研究員)

朴 倫爽 (信州大学学生)

2. 日本国関東地方・信州地方都市調査 (2001/01/04～2001/01/10)

東京深川・佃島・月島・谷中・根津地区都市調査

鎌倉市内寺院神社・都市遺構調査

東京「昭和のくらし博物館」調査

松本市内城郭・近代建築・伝統的建築・保存整備建物調査

小布施市内保存建物調査

長野市善光寺町並建物調査

日本側参加者 玉井哲雄 伊藤裕久 土本俊和 モリス・マーティン 小泉和子

韓国側参加者 金東旭 李相棟 田鳳熙 李京賛 宋寅豪

日本側調査協力者

馬淵 和雄 (鎌倉考古学研究所 鎌倉市内都市遺構の説明と案内)

降幡 廣信 (降幡廣信設計事務所 松本市内保存整備建物の解説と案内)

水上 慶子 (松本市教育文化振興財団 旧開智学校案内)

通訳

- 李 惠淳 (京畿大学校研究員)
朴 倫爽 (信州大学学生)
李 賢恒 (信州大学学生)

この間に行われた研究会などの主な報告内容および議論の内容は以下に示した。

●1998年度

第1回研究会 (1998/08/25 晋州国立慶尚大学校)

1. 大場 修 日本における町家研究の成果と動向
2. 田 鳳熙 住居史研究と氏族マウル

第2回研究会 (1998/08/29 国立ソウル大学校)

1. 玉井哲雄 研究会経過と今後の展望
2. 伊藤裕久 日本都市史研究の動向—建築史学における近世都市史研究を中心に
3. 李 相椋 ソウルの都市史研究について

第3回研究会 (1998/10/26 京都府立大学)

1. 金 東旭 韓国における時代変化と住宅の変遷
2. 田 鳳熙 韓国住居史研究の現況及び課題
3. 李 京賛 韓国都市史研究動向
4. 伊藤裕久 惣構をもつ集落と都市—環濠集落・寺内町・城下町
5. 大場 修 富田林・今井の町家

●1999年度

第4回研究会 (1999/07/01 京畿大学校ソウルキャンパス)

1. 宋 寅豪 ソウルの都市韓屋
2. 伊藤裕久 日本における近代都市型住宅・住宅地の形成
松山 恵 —20世紀初期の動向を中心に

第5回研究会 (1999/10/26 東北大学国際文化研究科大会議室)

1. 玉井哲雄 研究会の紹介と趣旨
2. 金 東旭 朝鮮時代の地方都市—水原華城と地方の邑城
3. 李 相椋 邑城の都市形態
4. 千葉正樹 城下町仙台の建設と変容
5. 土本俊和 城下町松本について

* 「日韓比較都市史研究会 一邑城と城下町」として東北大学国際文化研究科アジア社会論講座と共催のシンポジウムを開催。報告および議論の内容、そして主な討論参加者名はIIに掲載した。

●2000年度

第6回研究会（2000/06/24 圓光大学校）

韓国における条里と都市について

研究の今後の展望 報告書内容の検討

第7回研究会（2000/01/07 昭和のくらし博物館）

研究会全体の総括 報告書内容の検討

■研究の成果と本報告書の内容について

この報告書は3年間の研究成果を2000年度末の時点でまとめたものである。個々の内容とその背景を簡単に説明しておきたい。

「Ⅰ 日韓都市史研究の現状と課題」は、この共同研究の前提として日本と韓国それぞれの都市および都市を構成する町家ないし住居についての研究史の総括を試みたもので、研究会の場で報告された内容をあらためてまとめていただいたものである。このような試み日本でも必ずしも十分ではなく、韓国においてはほとんど初めての試みといってよい。日本と韓国両国の研究史を本格的にまとめた内容は貴重であると考えられる。

「Ⅱ 邑城と城下町 日韓比較都市史研究会シンポジウムの記録」は、われわれ日韓比較都市史研究会が東北大学国際文化研究科アジア社会論講座と共催で開催したシンポジウムの記録である。シンポジウムにいたる経緯を簡単に説明しておく。

韓国側研究者にとって、一般的に日本列島内でも関東以北の都市はなじみの少ない世界ということがあり、この共同研究の機会に是非東北地方の都市を実地に見たいという希望があってこの調査を計画した。仙台を調査の拠点にしたのは、韓国からの航空機の便の良さもあったが、仙台が東日本を代表する城下町であって調査対象となる場が多く、しかも都市史に関して討論できる研究者がそろっていることが理由であった。

仙台における調査の内容について、当初は仙台北城下町研究を主導されている渡辺浩一氏（国文学研究資料館史料館）に相談し、同氏が体調を崩された後は千葉正樹氏（東北大学大学院国際文化研究科）に引き継いでいただいた。その過程で、仙台の研究者との討論の場として、このシンポジウムの計画が浮かび上がった。韓国の都市史研究者と仙台の都市史研究者が議論できる機会は貴重であり、最終的には東北大学国際文化研究科アジア社会論講座の全面的な協力のもとに、仙台周辺の数多くの研究者が参加していただくことができた。テーマは、この研究会の基本的な課題である日本と韓国の都市の比較という観点から、韓国においては「邑城」、日本においては「城下町」というそれぞれの地域を代表する都市を取り上げることにした。韓国側の金東旭先生、李相棟先生にはあらかじめ連絡して邑城に関するテーマと資料を用意していただいた。

報告と討論の内容は読んでいただきたいが、学術的な内容のみならず、基礎的な知識についても相互に初めての知見も多く、韓国と日本の都市史研究をめぐる状況についての基本的な知識の確認がおこなれた。もちろん都市の特質に関しての実質的な議論が行われる

とともに、その過程で研究の可能性が残されていることもあきらかになったと考える。

「Ⅲ 日韓近代都市住宅の比較研究」は、今回の研究の過程で実現した都市韓屋調査に関する調査研究部分の成果である。宋寅豪氏には、多年の研究蓄積に基づいたソウル都市韓屋の研究成果をまとめていただき、松山恵氏にも韓屋調査に参加した視点を基にした日本の近代都市住宅形成過程の問題を論じていただいた。これらはそれぞれ研究会での報告をあらためてまとめていただいたものである。小泉和子氏には家具史研究の立場から、今回の都市韓屋を中心とする住居内の家具の実体調査の結果をまとめていただいた。制約の多い調査であったにもかかわらず、実地調査と聞き取りを実行され、集められたデータを詳細に整理分析された結果である。従来具体的なデータに基づいて論じられたことのほとんどない、都市居住様式の日韓比較に関する貴重な研究成果となるはずである。

「Ⅳ ソウル内需洞・嘉會洞都市韓屋調査報告」は1999年度と2000年度に実行された都市韓屋調査の報告である。この日韓共同研究の一環として都市住宅調査が当初から計画されていたが、具体的な調査対象などは未定であった。1998年度の調査および研究討議の過程で日本側から韓国の都市住宅に関する調査の希望が強く出され、それに韓国側が答える形で調査は実現した。韓国側調査の責任者である李相求氏の解説にもあるように、ソウル市内再開発の過程で壊されることが決まっていた内需洞地区の調査である。韓国側の京畿大学、ソウル大学、ソウル市立大学の調査チームが実行した調査の一部分を、日本側の千葉大学、東京理科大学、信州大学の調査メンバーが分担する形で行われた。韓国側には多数の学生が参加し、日本側も学生が参加した。時間的にも厳しい状況の調査であり、日韓共同調査はできなかったが、調査実測図面の書き方の基本から全く考え方が異なっているなど興味深い経験は多かった。このような機会を今後も実現したいと考えている。

本報告書に掲載したのは、李相棟氏に編集・解説していただいた韓国側による内需洞地区の調査図面の一部と、伊藤裕久氏に編集・解説していただいた日本側による内需洞・嘉會洞地区の調査図面のほぼ全体である。なお、日本側図面は調査参加メンバーが中心になって行い、最終的な整理編集は雫石絵麻(東京理科大学大学院生)が担当した。

調査全般に関して韓国側の李相棟氏、金東旭氏の日本語に依存することが多かったが、通訳として名前をあげた方々にそれぞれの場で通訳をお願いした。国際共同研究において実質的な研究成果を目指すには言語の問題が重要であることをあらためて痛感した。この報告書の使用言語については、時間やスペースの関係で全ての内容に日韓両国語を使うことはできなかった。韓国語の文章には最低限日本語の要約をつけることにしたが、日本側で刊行する報告書ということで、日本語文章に韓国語要約を付けてはいない。

本報告書全般に関して執筆分担協力していただいた方々以外に、最終的な原稿の整理に中島千鶴(千葉大学学生)の協力を得た。また、報告書の編集段階で日本側と韓国側の連絡調整と一部原稿の翻訳を分担していただいた李惠淳さんには特に感謝したい。

■研究発表

この間の研究成果で学会誌等に発表した主要なものは以下の通りである。

- 玉井哲雄「『清明上河図』と日本の都市景観」 【アジア遊学】11号、1999年
玉井哲雄「都市空間に表現される首都性」 【年報都市史研究】7号、1999年
伊藤裕久「近世後期における江戸周辺部の居住空間」
【日本建築学会関東支部研究報告集】1998年
伊藤裕久「甲斐善光寺境内の建築と町」 【甲斐路】89号、1998年
土本俊和「京都の町屋における軸部と小屋組」
【日本建築学会計画系論文集】513号、1998年
土本俊和「地子と地租の間」 【建築史学】33号、1999年
モリスマーティン「中世政治都市鎌倉の中核部分の計画の前例と意味」
【年報都市史研究】6号、1998年
モリスマーティン「近世初期上層住宅のサービスシステムにおける大台所」
【日本建築学会計画系論文集】532号、2000年

■今後の展望

日本と韓国との間の学術的交流は必ずしも十分に行われているわけではない。我々研究者が属している都市史・建築史の分野においても相互に学術的な興味関心は持っているにもかかわらず、都市・建築の具体的な場に即した形の調査研究の機会は少なく、研究者相互の間で建設的な議論が行われてきたわけではない。今回の我々が実行した共同研究がこのような状況を打開する一つの契機となること期待したい。

本報告書に収めた研究成果は研究会全体で目指したことから見ればまだごく一部分である。今後も研究分担者、研究協力者の間で研究発表や討論の機会を計画するとともに、研究自体の充実発展を考えていきたい。

■謝辞

最後に、この間の我々の調査研究は実に多くの研究者、現場担当者の協力によって実現できた。特に都市の実際の現場を重視することを目的としたために、調査現場、発掘現場、そして住宅に実際に住んでいられる方々の協力が必要であった。ここに名前を挙げられなかった方々も含めてあらためて感謝したい。

I 日韓都市史研究の現状と課題

1. 日本都市史研究の動向

伊藤裕久

1) 80年代までの都市史研究

- ・古代都市（都城）や中世京都が中心的な素材
- ・近世城下町研究の第一段階（伊藤・西川・内藤）
- ・京都・江戸を中心とした町・町屋敷研究（玉井）
- ・武家住宅・民家・町並・寺院など建築タイプ別に分化した研究が主流

※日本都市史研究の把握：伊藤毅「学会展望「日本都市史」」『建築史学』1986年

- 伊藤鄭爾『中世住居史』東京大学出版会1958年 「日本都市史」『建築学大系』彰国社,1960年
→都市社会や家・家族との関わりで都市・住居追求した先駆的研究
現在に継承されていない重要な研究視点
→都市デザイン論：都市デザイン研究体『日本の都市空間』鹿島出版会,1968年
- 西川幸治『日本都市史研究』日本放送出版協会,1972年
明確な都市史的判断（通史的叙述）をもって都市の将来を構想→保存修景論
中世寺内町・近世城下町→都市共同体論／擬制的軍事都市：軍学を初めとする都市論の検討
→西川・藤本・武藤編『まちに住まう—大阪都市住宅史』平凡社,1989年

※高度成長期という時代背景：建築界における都市論・都市住宅論の展開
上田篤・土屋敦夫編『町家—共同研究』鹿島出版会1975年

- 内藤 昌『江戸と江戸城』鹿島出版会,1967年→都市設計への興味
「江戸の都市と建築」1972年→「都市図屏風」の研究
- 小寺武久『都市の空間形態に関する史的研究』（私家版、博士論文）1977年
古代・中世の京都研究＋近世都市の空間的特質→両側町／町屋敷と武家屋敷の相違
日本における都市空間の全体的特質を通史的に分析した労作
細部の空間へのこだわり／復原的研究の基礎
- 玉井哲雄『江戸町人地に関する研究』近世風俗研究会,1977年
『江戸—失われた都市空間を読む』平凡社,1986年
町方史料を用いた都市史研究の方法論を提示した画期的研究
町・町屋敷の内部構造の追求→空間と社会の関係を追求
- 京都における都市史研究の深化＝「町」の研究
高橋康夫『京都中世都市史研究』思文閣,1983年
日向 進『近世京都町屋の形成と展開過程に関する史的研究』（学位論文）1983

- 小川 保『近世京都における町の成立と解体に関する研究』（学位論文）1985年
「近世都市における宅地の境界とその変遷」『建築史論叢』1988年
野口 徹『町屋の展開過程—その基礎的条件をめぐって』（学位論文）1983年
『中世京都の町屋』東京大学出版会,1988年

※江戸・京都の近世都市史研究の進展のもとで、近世史と建築史を繋ぐ接点が用意された

○近世城下町研究の展開

- 宮本雅明「近世初期城下町のヴィスタに基づく都市設計」『建築史学』1985年
「近世初期都市の景観政策と都市造形」『建築史学』1986年
→都市デザイン論というよりも城下町の性格の変化を追求 政治的都市→経済的都市への移行

○伊藤毅『近世大坂成立史論』生活史研究所,1987年

- 建築史学における中近世移行期都市空間論の嚆矢
寺内町／石山本願寺・天満寺内・四天王寺・先行集落／秀吉の都市計画

○民家・町並の調査研究と保存（70年代以降）

- ・今井町1956.57年 妻籠宿1977年 「伝統的建造物群保存地区」他町並調査報告書100冊以上
- ・玉井哲雄「近世都市における町並の構成—越前三国湊の町家と都市構造」『建築史学』1984年
建築遺構調査→都市空間構造：建築史学の独自性と限界
町並の完成期（近世後期）と都市形成（近世初期）の画期のタイムラグ
建築と都市の間を埋める作業の重要性
- ・野口徹『日本近世の都市と建築』法政大学出版会,1992年
東京大学稲垣研究室 竹原1978年 宿根木1981年 大和郡山1982年・1984年
- ・上野邦一『歴史的環境地区の空間特性についての基礎的研究』（学位論文）1990年
都市機能による既存の都市類型にとらわれず町並形式から空間特性を追求
奈良文化財研究所による調査研究 奈良井1976年 高山1975年 奈良町1983年 他
- ・近年の調査研究動向→大場報告
大場修他「長浜」日向進他「小浜」など／町づくりへのシフト（関連調査研究の増加）

2) 90年代の都市史研究

- ・文献史学と建築史学の共同研究の場の形成／「空間＝社会」という視角

①『都市史入門Ⅰ～Ⅲ』東京大学出版会,1989年

- 中世都市への関心が中心→『図集日本都市史』東京大学出版会,1993年として集大成
- ・高橋康夫「中世都市空間の様相と特質」 中世京都における市と町
 - ・伊藤 毅「中世都市と寺院」 町と寺内・境内の関係
 - ・宮本雅明「空間志向の都市史」中世博多の復原（神仏の都市空間）
 - ・玉井哲雄「都市史における都市空間研究」方法論の提起→考古史料・絵画史料・伝承史料

②『日本の近世9 都市の時代』中央公論社,1992年

- ・玉井哲雄「近世都市空間の特質」
- ・伊藤 毅「近世都市と寺院」

③『年報都市史研究Ⅰ～Ⅴ』山川出版社1993年～ テーマ：城下町の発展段階論と巨大都市論

I「城下町の原景」1993年

- ・伊藤 毅「境内と町」
- ・伊藤裕久「近世市町の空間形成」

II「城下町の類型」1994年

- ・宮本雅明「城下町の空間類型」
 - ・高橋康夫「麓集落—その成立と景観」
 - ・玉井哲雄「町割・屋敷割・町屋—近世都市空間成立過程に関する一考察」
- ※研究動向 藤川昌樹「近世の武家屋敷と都市史研究」

III「巨大城下町」1995年

- ・伊藤 毅「江戸寺院への視角—近世の巨大都市と寺院」
- ・玉井哲雄「近世巨大都市空間の成立と展開」
- ・鈴木博之「巨大都市形成の単位—ロンドンにおけるエステート開発」

IV「市と場」1996年

- ・伊藤裕久「中世末から近世初の町と市」
- ・三井 涉「近世中期以降における都市内寺院境内の変容（浅草寺）」

V「商人と町」1997年

- ・谷 直樹「商家集住体としての町（大坂）」

④高橋・吉田・宮本・伊藤『図集 日本都市史』東京大学出版会,1993年

- ①からの問題意識の発展 古代都城と近世城下町の間を繋ぐ論理＝「境内」論
「境内」と「町」：発生→成熟→再編と継承

⑤史学会シンポジウム1992年,1993年

⑤-1『都市と商人・芸能民—中世から近世へ』山川出版会,1993年

- ・伊藤 毅「宿の二類型」
- ・伊藤裕久「戦国期上吉田宿の町割・屋敷地割とその変容」

⑤-2『武家屋敷—空間と社会』山川出版会,1994年

- ・藤川昌樹「徳川期京都における武家屋敷の成立」

⑥その他の学際的研究（考古学を中心とした都市史研究）

「中世都市研究会」の発足1993年：中世史（文献）と考古学研究者を中心とした組織

⑥-1『中世都市史研究1～5』新人物往来社,1994年～

特集：都市空間／古代から中世へ／津・泊・宿／都市と宗教／都市をつくる

3)取り上げられた中心的なテーマ

●中近世移行期の都市空間論

①一連の玉井論文：近世都市空間の成立過程の問題

玉井哲雄「都市の計画と建設」『日本通史11近世1』岩波書店,1993年

高橋康夫「中近世都市の空間と構造—京都を事例として」『関西近世考古学研究Ⅲ』1992年

②伊藤裕久「中・近世移行期の都市史研究—中世町場の視角から」1992年（学会近畿支部シンポ）

第1期：寺内町／戦国・織豊期城下町／堺・博多／惣村と町場

伊藤裕久『中世集落の空間構造』生活史研究所,1992年

第2期：宿・市・津・泊などの「都市的」な場の形成の問題

伊藤 毅「宿の二類型」（前掲）

伊藤裕久「戦国期上吉田宿の町割・屋敷地割とその変容」（前掲）

③今後のポイント：中世都市考古学の発展、発掘成果に対する関連諸学の精緻な分析作業

堺 博多 一乗谷 鎌倉 京都 大坂 清洲 安土 名護屋

草戸千軒 尾道 鞆 十三湊 多賀城（国府） 平泉

宿・市→都市的な場という段階で「都市」として特定はできていない

cf.小野 正敏「城戸の外のもうひとつの町」『太宰府陶磁器研究』1995年

「二元論」に対する城戸外の町の発展 一乗谷：阿波賀 敦賀：善妙寺領の復原

十三湊の発掘調査：カッチョ（防風柵）の継承・室町時代からの連続性

主張1：在地の町場研究の立場からみると近世的都市形態の骨格は16世紀中頃には成立

15世紀以降17世紀までを連続的に捉える必要性が大

●巨大都市論 都市「内」社会と単位社会構造=同質の社会集団の重層と異なる社会集団の複合

①寺院社会と町

伊藤 毅 「近世都市と寺院」「江戸寺院への視角」（前掲）

三井 涉 「近世初頭における浅草寺境内の変容」『建築史学』1992年

「近世寺院境内における遊興の演出」『建築史の鉤脈』1995年

②武家社会と町 宮崎勝美／「藩邸研究会」

藤川昌樹「近世京都における町奥型屋敷の成立とその背景」『建築史の鉤脈』1995年

藤川昌樹「徳川期京都における武家屋敷の成立」1994

③単位社会構造：町を越えた広がりへの追求 大店・表店・裏店・身分的周縁（被差別部落）

玉井・小川の先駆的研究に対して建築史学では蓄積が少ない

谷 直樹「商家集住体としての町」（前掲）

表借家／町と筋／裸貸しなど大坂を事例に新たな町の存在形態を主張

主張2：表店・裏店の民衆世界に対する都市空間→市場社会 「売りの形態」（前売・床店）

建築史で欠落／近世中後期都市空間の分析不足／近代都市空間との関わりの追求

●「境内」的空間の解体

城下町・港町など均質な近世都市空間の成立を公の成立に伴う境内の解体過程として捉え、近代都市への志向を近世都市にみる視角

宮本雅明「日本海の港町—空間構造をめくって—」中近東文化センター,1994年

●三都研究から比較都市史研究へ

規模や形態比較の段階から空間=社会構造の比較への展望→東アジアの比較都市史研究

主張3：日本における「町」の独自性の追求

4)まとめと今後の課題

●三都研究に対する一定の評価とそれに対する地方都市研究の問題

- 都市空間のもつ個性・地域性：地域的集住環境の特異点ではなく結節点とみることが可能
- ・制度としての都市・村落を統一的視点で把握／関係性に注目／都市の周縁は地域の中心
- ・都市と農村（町家と農家）を前提とするのではなく中間的な社会集団・居住形態にも注目
- ・町家論の地域的展開

玉井哲雄「江戸の町家・京の町家」『列島の文化史1』1984年

『東日本町家建築の系統的把握のための基礎的調査研究』科研報告書,1987年

宮本雅明・中川等『近世地方城下町における町屋と町並の生成』住総研報告書,1988年

伊藤裕久「近世市町の空間形成」（前掲）

大場修「東日本における市町の構成と常設店舗の成立過程」『住総研研究年報』,1997年他

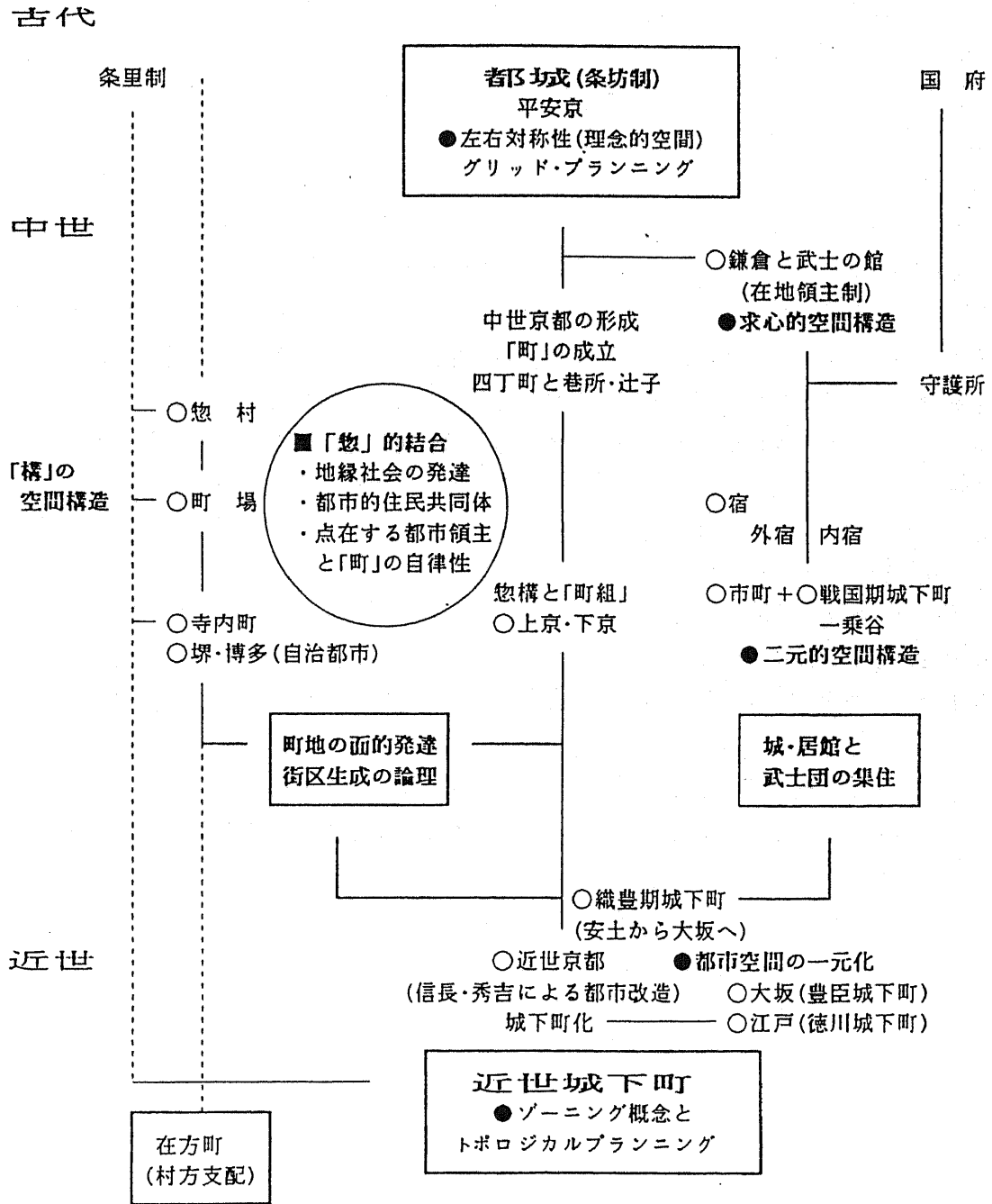
●文献史学と建築史学の視点のズレの指摘

- ・文献史学の社会構造の分析・研究成果に学ぶ点の多い建築史学における都市史研究の現状
- 都市史研究の方法論の格段の精緻化／あまりに両者の問題意識が共通の枠組みに収斂していくのもどうか／空間=社会は自明か？
- ・建築史学にとって重要な点は、現代人の尺度で歴史的都市を類型化・分析するのではなく、当該期の都市の社会状況を前提として、当時の人間にとっての都市空間をみる視点を持ち続けること（玉井）。

一方で

- ・都市の何を分析するか→研究「対象」としての都市史から研究「方法」としての都市史へ
- ・「建築学」としての都市史研究の独自の視点を見いだす必要性
- 現代都市に対する問題意識：伝統的都市空間の魅力／集住体・空間形態の本質／都市とコミュニティ／commons／計画性と自律性／ストック型社会の都市／開発と保存／環境共生／住民主体のまちづくり／災害と都市など（小林英之「防災・長崎・歴史」『建築史論叢』1988年）
- ・安易な歴史の引用はかなり問題だが、かといって取り上げられるテーマは、現代の都市状況を捉える研究者の視点の延長線上にあることはさけられないのではないか。
- ・将来の都市計画・デザインにとっての近世都市の重要性=近代を越えて現代都市に積層した都市空間→歴史的都市空間のもつ普遍的特質の追求を怠る訳には行かないのではないか。

日本における都市空間の展開図式



2. 日本における町家研究の成果と動向

大場 修 (京都府立大学)

1. はじめに

町家に対する建築史研究には、民家史研究を基礎とした町家研究と、都市史的な問題意識からの研究がある。研究史的にみれば、民家史研究が戦後の早い時期から現存する町家遺構の調査に着手しているが、遺構が残らない中世以前の状況については、都市史研究の進展とともに、主として文献や絵画資料を主体とした研究成果が近年急速に蓄積されつつある。

関連して、考古学における都市史的な関心の高まりとともに、中世以前の都市や町家遺構の発掘成果も増え、建築遺構に次ぐ遺構史料として注目されつつあるし、これらの成果に基づいた考古学からの都市史的な研究成果も増えている。

町家建築は、建築年の新旧をとまかくとすれば、遺構として多量に現存している。これらが各地で特色ある歴史的町並を構成し、伝建地区の選定数も着実に増えている。町家遺構は、伝建地区指定のための事前調査をはじめとして、各地で取り組まれている町家調査によりその多くが実測され記録されている。報告書の精粗にばらつきがあっても、その全国的な蓄積はそれ自体が町家研究の基礎資料として重要である。ただし、町家研究の立場からすれば、遺構調査を踏まえつつさらに研究レベルで町家を扱う取り組みは、民家(農家)研究ほどは活発ではない。

これは、遺構の年代にも制約されているのかも知れない。農家に比べて町家は古い遺構が残りにくく、近代の町家を主体とする場合が少なくない。実際、近代和風建築調査で取り上げられる例も多い。年代幅が狭ければ、歴史として捉えにくいのは事実であろう。いずれにせよ、町家研究は、その型が成立したであろう平安末期からは近代まで、幅広い年代の中でそれぞれに課題が設定しうるのは事実で、それぞれに課題と方法論は自ずから異なることになる。以下では、これまでの主要な町家研究をその課題ごとに整理することで、成果を概観したい。

なお、町家は「町屋」とも表記される。都市史研究では、文献史料に即して町屋が用いられることが多い。本論では、基本的には筆者の慣行に従い主として町家を使用するが、文献引用やその要旨に相当する部分では原則的に引用文献の使用法に従うこととする。

2. 古代末期～中世における京町家の形成過程に関する研究

いうまでもなく町家の成立過程はそれが立地する都市と不可分にあり、都市と一体に捉えることが求められる。近年、都市史研究の進展とともに町家に対する関心も高まるなかで、京町家の形成論は大きな成果を得つつある。

平安京以来の歴史の中で形成されてきた京町家については、従来平安末期から鎌倉期にかけて、商業の発展に伴い形成された店舗併用住宅であると漠然と考えられてきた。これに対して、野口徹氏は、供給住宅、長屋、付属屋という、従来の町家に対して抱いてきた

性格（持家、戸建、主屋）を逆転させる理念型の提起により、独自の形成論を提示した（野口徹『中世京都の町屋』東京大学出版会、1988年5月、）。

野口氏は、「何故、町屋は路に面しているのか、路に面する過程はどうであったのか、この単純な疑問こそ従来もっとも欠けていたものである」として、狭小間口がその理由にはならないし、町屋商業と結びつけることも、近世的町屋の成立を考える視点になり得ても、いまだ商業が店舗営業の形を取っていない平安末期において、町屋形成の要因ではなく、面路の住形式に商業が付随したにすぎないと否定した上で、「町屋は、その出発点において、独立した生活単位に対応する独立した住屋ではなくて、そうした住屋を機能面において補完し、物的面において囲む建築物であったからに他ならない。」と述べ、囲いの物的装置である垣の代替建築として垣部分に挿入される附属屋がその原型であるとする。そのためのもっとも単純で伸縮自在な建築として長屋形式が想定される。よく知られた「年中行事絵巻」が描く京の町屋は、面路建築としての町屋の本来の性格である棧敷性を象徴的に捉え強調していると述べる。

ここに京の町屋は、条坊制街区の周囲に垣の代替装置として設けられた供給住宅としての長屋型面路建築がその源流として想定される。町屋形成は、面路建築としての附属屋が戸口を独立させ庇の利用による平面の拡大などを伴いながら、住居として自立し展開する過程であり、零細な間口規模を持つ町屋の地割り形式は、このような先行する建築形式に、一定の歴史的条件下で、零細な間口規模の地割り形式（土地の権利上の区分）が徐々に成立した、と結論付けている。

宮本雅明氏は、同書に対する書評において、「京都以外の地域における町屋の形成論はその拠って立つ基盤を失い、新たな独自の形成論を組み立てる必要に迫られる」と述べ、従来日本の町屋の代表的存在として捉えられてきた京都の町屋の特異性が明確化されたことの、他地域の町屋形成論との関係とその影響に言及している。すなわち、地方の市町や宿に在家を核として成立する町屋、形態的には妻入町屋など、主屋の論理で形成されたとみなされる独立性の高い町屋の形成過程が、長屋の分割を主眼とする京都の町屋形成論では説明できないことを指摘し、それゆえ地域ごとの町屋形成論の成就が必要で、その積み上げが野口説の検証にも有意であると述べている（宮本雅明による書評『建築史学』第十一号、122～128頁、1988年9月、）。

また、野口説の延長として、洛中洛外図屏風にみる中世末期の町屋の外観が同図に描かれた門や塀と強い形態的類似を示す点や、その境界的な立地条件に着目して、京都の町屋が非住宅系の境界装置が都市的な文脈の中で建築化されたものと想定するとともに、近世京都の町屋がナンドという専用の寝間を本来的に持たないことにもふれ、その理由を非住宅系の境界装置から生成されたことに起因すると指摘する（伊藤毅「町屋の表層と中世京都」『都市の中世』吉川弘文館、1992年）。

一方、高橋康夫氏は、平安末期（12世紀後半）の「年中行事絵巻」を用いて、当時の町家について絵画史料から詳細に検討し、このなかで町家が棧敷として描写されていることについて、町家が臨時の棧敷として転化する境界的な空間施設であることを確認するとともに、絵巻に描かれた町家は屋根や軒の個別表現や窓の下の長押などの描き方などから、長屋ではなく一戸建てであろうと主張する（高橋康夫「町屋」『絵巻物の建築を読む』東京大学出版会、1996年11月、）。

洛中洛外図屏風にみる中世末期の京都の町家が棟割長屋型なのか独立屋なのかについては、土本俊和氏は、野口説の指摘を踏まえつつ、町屋の歴史的用語の詳細な検討から必然的に棟割長屋の形式が導き出されるとした。戦国期や17世紀前半の洛中洛外図屏風では、町屋の多くが柱と壁を共有する形式で描かれているが、これを絵画的象徴・省略とみるべき、とする高橋康夫説を退け、独立屋の集合体である近世町家の形成は、原初的に棟割長屋であった形式からの再編過程であることを主張している（土本俊和「織豊期京都の小屋と町屋—棟割長屋を原型とする短冊形地割の形成過程—」『建築史学』第31号、83～112頁、1998年9月、）。

以上のように、野口説が想起する町家の生成過程は、今後も様々な議論を喚起するであろう。これにより従来の町家に対する概念が大きく転換され、町家形成論が新たな段階へと押し上げられたことは間違いない。

3. 中世末～近世初期にかけての京町家の形成に関する研究

洛中洛外図屏風は、室町末期（16世紀）から近世初期の京都の町家形式を描く絵画史料として早くから注目されていて、京町家の意匠や構造、平面、規模などについての論考は、伊藤鄭爾氏を始めとして数多い（伊藤鄭爾「室町時代の町家」『中世住居史』東京大学出版会、1958年、谷直樹「京の町なみ」『近世風俗図譜3洛中洛外（一）』119～127頁、小学館、1983年、高橋康夫「京町家」『洛中洛外』平凡社、1988年、谷直樹「洛中洛外の世界屏風絵に見る京都中世の暮らし」『京の歴史と文化4』戦国・安土桃山時代 絢 天下人の登場、123～162頁、講談社、1994年6月、他）。

洛中洛外図屏風にみる中世末期から近世初期にかけての洛中の家並は、約120メートル四方の正方形街区の一辺に町家が4・5軒ほどしか描かないという絵画描写特有の省略法により、これをどの程度実景として受け取るべきかという問題が、制作年代や描かれた景観年時の問題とともに常につきまとっている。とりわけ、洛中洛外図屏風における京町家の裏屋敷が細分化されず、便所や井戸などが町共同体による一体的利用の状態として描かれている点は、いわゆる「鰻の寝床」と呼ばれる短冊状地割りが、京町家を語る上でその前提として考えられてきたことと本来は大きく矛盾する。しかしながら、従来は表現上の簡略化と見なされてきたのか、その点は殆ど不問のままに裏屋敷の構成などについて語られてきた。

土本俊和氏は、これまでア priori に一体のものと捉えてきた家と屋敷とを概念的に明確に区別した上で、通りに面した個々の家に対して、町家背後における未分割の一体的な町域を屋敷と見なすことで、その矛盾を明快に説明した（土本俊和「近世初頭京都の家と屋敷—町式目と町触による家屋敷売買規定からの再検討—」『日本建築学会計画系論文集』第491号、197～204頁、1997年1月、）。また、町屋のウラ地が近世初期に柵や塀により細分化され個化されるに伴い、町屋の裏手の開口部が大きく開かれハレの場と一体となった庭として普及することも17世紀前半の洛中洛外図屏風から読み解いている（須藤優子・土本「近世初頭京都のウラ地とウラ構え」『同論文集』第528号、203～210頁、2000年2月、）。

このように、土本氏は先に家のみが通りに建ち並び、その後に地割りが裏手に規定されていく過程を「建物先行型」と呼んで新たな町家形成の概念として規定した。これに対し

て、従来の、短冊形地割りを町家形成の前提に捉えてきた見方を「地割先行型」と括り、「建物先行型」と対峙させた。同時期の京都における建物と土地の関係に関する多くの具体事例の抽出と、二者の概念規定に基づいたこれらの解釈を通して、京都の市街地の形成と拡張過程の実態把握を進めるとともに、この概念規定の有効性が繰り返し検証される。

「建物先行型」という理念型は、野口氏により示された「面路型」住居としての町家形成が先行し、これが地割り（特に隣地境界線）の生成を促すというプロセスの提起である。土本氏は、まずこの具体例を天正19年（1591）の洛中地子赦免以降の町形成に見いだしている。すなわち、同年に移転した祇園御旅所（後の祇園御旅町と御旅町）を例示して、町屋が建ち並んだ後から町屋の変容過程にともない隣地境界が生成されたことを初めて具体的に論じた（土本「近世京都における祇園御旅所の成立と変容－領主的土地所有の解体と隣地境界線の生成」『同論文集』第456号、227～235頁、1994年2月、）。

この「建物先行型」概念に基づく考察を、個別の町から近世初期京都における多数の地尻年貢地の町々や、小屋之町など聚楽第が着工された天正14年（1586）以降の堀川通り以西一帯における小屋がけにより都市化された地域などへと広げることで、短冊型の地割形態へと収束するその原初形態として、「建物先行型」とみなせる通りに面した線形の薄皮部分である赦免地をまず想定し、その後、面路の分割により隣地境界が設定され、短冊型地割が創出される過程を示した（土本「17世紀前半京都の都市膨張－地尻年貢地の形態と成立過程－」『同論文集』第462号、167～176頁、1994年8月、同「小屋がけによる町－聚楽第建設に促された天正末京都の都市形成－」『論文集』第500号、221～228頁、1997年10月、）。

近世初期、京都における都市膨張過程のなかで、「建物先行型」町家による都市域の増殖過程は、その後支配的となる、町地を面的に創出する「地割先行型」の都市開発とは全く異なり、「一筆」の概念が始動する前段階を鮮やかに描き出している。

土本氏の論究は、さらに「建物先行型」の過程が、洛中の地子赦免を条件としながら、下京古町を除く洛中のほぼ全体における都市形成の型であり、洛中における短冊形地割に先行する町屋形成の型であることを、賦課の諸形式から論じている（土本「洛中地子赦免と町屋－建物先行型による短冊形地割の形成過程－」『建築史学』第27号、47～75頁、1996年9月、）。

また、京町家が街路に面して建ち並ぶ低層高密度で統一感のある景観、いわゆる「町なみ」の生成過程についても、公儀による賦課を家々が均等に負担する原理をその背景に見だし、「家並」の、すなわち「他の家々と同様に」公役を勤める最小の単位として町屋を位置づけ、卯建などは棟別均等賦課の単位としての建築表現であると指摘した（土本「近世京都にみる「町なみ」生成の歴史的前提」『同論文集』第479号、207～215頁、1996年1月、一方、同氏は、日向進氏などの手で研究が先行している（日向進「近世京都における新地開発と「地面支配人」－鴨東・河原の開発をめぐる－」『同論文集』第407号、1990年1月、他）17世紀中期以降の京都の都市拡張の過程が、職業的な開発業者の存在を背景にした「地割先行型」の都市開発によることを、開発主体の実体解明と、年貢徴収の単位としての地屋敷の創出過程の解明を通して具体的に描き出している（土本「京都高瀬新屋敷の創出－河原への開発と「開発之仁」－」『同論文集』第463号、167～174頁、1994年9月、他）。

このように、土本氏は、中世末から近世にかけての京都町家の存在形態と土地との関係について、新たな歴史像を斬新な視点で描いた。特に、「建物先行型」の町家形成という理念型の提示は、京都に限らず他の都市や街道町など在地における初源的な町家形成を考察する新たな視点としても有効で、今後他地域における検討にも耐えうる普遍性を持ちうるのではなかろうか。

4. 近世京都の町家形式に関する研究

近世京都の町家に関しては、大工の家柄（代々「近江屋吉兵衛」を襲名）である田中家の普請関係文書を主要史料として、また19世紀前半の京阪と江戸との風俗を対比的に記録した『守貞漫稿』（近世風俗志）なども用いて、その平面や構造、町並構成などが明らかにされている。日向進氏は、遺構の乏しい近世の京都町家について、田中家の住戸文書を網羅し京都町家の建築構成を詳細に明らかにしている。具体的には、その意匠、構成の洗練に数寄の技巧の熟成を見出すとともに、近江屋吉兵衛の普請文書から、天明大火直後の町家普請について、建築用材を始め大工工数、工費などの点からその実態を解明し、あわせて近江屋吉兵衛の営業形態の分析から町家大工の生産活動についても詳細な検討、近世京都における町家普請の実像を明らかにしている（日向進『近世京都の町・町家・町家大工』思文閣出版、1998年11月、同『近世における町家大工の営業形態に関する研究』（平成6・7年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書）1996年、他）。

京の町家については、中村昌生氏も、座敷の造作や坪庭の構成など、その意匠の洗練に言及している（中村昌生『京の町家』河原書店、1994年、）。

京都町家の遺構調査としては、『京都府の民家』第六冊、第七冊（京都府教育委員会1969年、1973年、）と『京の住まい—地域の文化財としての民家—』（京都市文化財保護課、1993年2月、）が詳しい。玉井哲雄氏も、『京都府の民家』第六冊、を参照しつつ、通り庭—列型平面が京町家の近世における基本形であり、同時に、表構えも「揚げみせ」「出格子」など共通する構成要素により定型化が進んでいることを指摘し、個々の町家における平面、意匠などの極度の類型化が、町並全体に統一と調和を実現せしめたと述べている（玉井哲雄『江戸の町家・京の町家』『列島の文化史1』日本エディタースクール出版部、124～155頁、1984年、）。

京都の町家で注目されるのが構造形式である。土間側妻面に柱が半間ごとに並び、屋根面の水平材を直接支え、軸部と小屋組とが分離されず一体の構造であることの独自性が指摘されている（『概説畿内の町家』『日本の民家』第六巻、町家・、138～145頁、鈴木嘉吉執筆、学習研究社、1980年9月、畑智弥・土本俊和「京都の町屋における軸部と小屋組」『日本建築学会計画系論文集』第513号、259～266頁、1998年11月、）。通し柱を多用する（特に妻壁部）このような構造形式は、先に土本氏が町家の起源に棟割長屋を想定したことと無関係ではなかろう。長屋形式から独立建てへの過程を想像するとき、上記のような構造特性の意味はすぐさま首肯できるように筆者にも思える。

5. 近世江戸城下の町家形式に関する研究

江戸の町家形式については、京都以上に遺構が残らず、かつ文献資料も少ないため、近世中期以前の実像を得ることは容易ではない。そんな中で、寛永期（1624～44）の江戸を

描いたとされる『江戸図屏風』（国立歴史民俗博物館所蔵）や町触などを用いた考察が、玉井哲雄氏などにより進められている（玉井哲雄『江戸 失われた都市空間を読む』平凡社、1986年6月、同「近世都市と町家」『講座・日本技術の社会史』第七巻、建築、p.183～216、日本評論社、1983年12月、同「江戸の町家・京の町家」『列島の文化史1』日本エディタースクール出版部、1984年、他）。

玉井氏は、『江戸名所図屏風』（出光美術館所蔵）などに描かれた表通りに面した長屋建て町家の存在に着目し、これが同業者集団による零細間口住戸が連なる長屋店舗とみなし、やがてはこれらが独立町家へと移行する前段階を示したものと指摘する。大規模店舗である大店が表通りを占め、多数の中小店舗との格差が町並にも明確に反映している近世中期以降の江戸市中とは異なった様相を明らかにして注目される。

また、江戸の町家の特徴として表庇の存在がある。玉井氏は、これについても、機能や都市施設としての役割、その変容過程などについて考察している。表庇は江戸を始め、川越、佐原、土浦など関東一円の「江戸風」と称される町家に共通する形式であり、庇下通りとも呼ばれアーケード状の通路を構成する。この空間は本来公儀地であるにもかかわらず、町家の庇下として半ば占有されている状況を明らかにし、また日本橋通りや本町通りでは一間庇が認められていることに、庇の役割が景観整備の観点から期待されていたことを読み取っている。なお、江戸町家の庇下通りについては、他に鈴木理生氏による著作がある（鈴木理生『江戸のみちはアーケード』青蛙房、1997年1月、）。

関連して、黒石（青森県）や高田（新潟県）など東北地方の日本海側を中心に分布する「こみせ」や「雁木」もこれと同じである（雁木通りについては、菅野邦生、波多野純「近世における雁木通りの建設整備過程」『日本建築学会計画系論文集』第494号、221～228頁、1997年4月、菅野、波多野「近代における雁木通りの整備過程と衰退過程」『同論文集』第506号、133～140頁、1998年4月、があり、雁木通りの成立過程や近代における衰退過程が明らかにされている）。玉井氏は、雁木なども雪中道路として成立したというよりは、町家の表部に一般的に存在する庇の一種として捉えるべきであろうと指摘する。

玉井氏は、また『江戸図屏風』に描かれた角地に立つ三階櫓にも注目した。漆喰で塗り籠められ城郭建築にも似た櫓型町家は、「角屋敷之者」とも称せられた江戸町成立に重要な役割を果たした草創名主たちの多くが、その出自が武士であるという由緒やその家柄を誇示するために目立つ角地に建てたものだと捉えた（玉井哲雄「初期江戸の町と町家」『江戸 失われた都市空間を読む』平凡社、1986年6月、同「近世都市と町家」『講座・日本技術の社会史』第七巻、建築、p.183～216、日本評論社、1983年12月、）。

江戸の三階櫓については、その後、宮本雅明氏により新たな意味づけがなされている（宮本雅明「櫓屋敷考（上）」『日本建築学会計画系論文報告集』第355号、128～136頁、1985年9月、同「同（下）」『同論文報告集』第360号、93～101頁、1986年2月、）。すなわち、この三階櫓はむしろ幕府により設置が要求され、あるいは義務付けられていたものと解釈する余地があるとし、このような角地の櫓屋敷は、他にも大坂をはじめ仙台（芭蕉の辻）、鳥取など、同時代の各城下町に見いだせることから、為政者側の意向に従い、都心であることを表明し都心景観の積極的な景観演出を図ろうとする、ランドマークとしての機能への期待から建設されたものと指摘されている。

なお、景観施策としての町家形成に関する宮本氏の論考は、他にも、各地の近世城下町

における二階建て町家の奨励策を論じたものがあり、櫓屋敷と同様、城下町における町家普請が為政者の意図を背景に政策的に実施された側面を浮き彫りにした成果として注目される（同「近世初期都市の景観政策と都市造形-二階建町家建設奨励策と「二階町」をめぐって」『建築史学』第七号、60～85頁、1986年9月、他）。

また、近年波多野純氏は、近世初期江戸の町家の復原に取り組み、復原模型として多数制作展示されていることの意義も大きい（波多野純『復原・江戸の町』筑摩書房、1998年11月、同「一連の江戸図屏風を素材とした江戸の住まいと都市空間の復原的研究(1)」『住宅総合研究財団研究年報』No.22、1995年、他）。

6. 近世地方都市における町家形式と町家形成に関する研究

6-1. 民家史研究としての町家研究

戦後の復原と編年手法に基づく実証的な民家史研究は、橿原市今井町と五條市（いずれも奈良県）における民家（町家）調査がその先駆をなしている。今西家住宅（慶安3年、1650年、重文、今井町）などに代表される主要な町家遺構について、民家史研究の手法により、平面・構造・外観について建築的な発展過程を実証する研究であり、その後の町家調査の方法的基礎をなしている（関野克・太田博太郎、他「今井町民家の編年」「今井町民家についての若干の問題点」『日本建築学会論文報告集』第60号、613～620頁、1958年10月、渡辺定夫編著『今井の町並み』同朋舎出版、1994年、浅野清、林野全孝、他「五条市町家の編年と建築的特徴」「五条市町家の平面の型」『同論文報告集』第63号、601～608頁、1959年10月、）。

富田林旧寺内町については、遺構研究に文献（寛永21年、1644、万改帳）による検討が加味され、近世初期の町並構成について建築規模や平面構成などが明らかにされるとともに、町家形式が河内地方の農家住宅とほとんど同質であることが指摘されている（林野全孝「富田林の町と町屋の建築的変遷」『同論文報告集』第131号、1967年1月、大場 修、林野「富田林旧寺内町の町家の変遷について」『日本建築学会近畿支部研究報告書』第24号、653～656頁、1984年、伊藤裕久「在地寺内町の空間形成」『中世集落の空間構成-惣的結合と住居集合の歴史的展開-』143～184頁、生活史研究所、1992年、他）。

林野全孝氏は、今井町や五条、富田林など近畿地方における二列居室を基本とする主要な大型町家について、一列居室を主体とする小規模な町家と区分けした上で、これらを年代順に検討し、間取りや発展過程に畿内の近世農家住宅と違いが無いと述べ、農家との強い関係性を指摘している（林野『近畿の民家』151～171頁、相模書房、1980年、）。また、鈴木嘉吉氏も、今井町などにおける二列居室型の町家が農家から派生した形式として「今井型」と名付け、「京都型」町家と区別している（前掲「概説畿内の町家」『日本の民家』第六巻、町家・、）。

6-2. 町家の形成過程と都市構成に関する研究

町家の成立過程を明確にし、さらにその知見に基づいて都市全体の構成を実証的に明らかにする試みである。民家史研究の手法に基づく遺構調査と、都市史的な空間把握の手法を組み合わせた調査研究であり、各地で進められているいわゆる伝建調査などにおいてもこの視点が重視され、町家研究の基本的な方法といつてよい。（玉井哲雄「近世地方都市に

おける町並みの形成－越前三国湊の町家と都市構造－」『建築史学』第三号、1984年、宮本雅明、中川等「近世地方城下町における町屋と町並の生成（1）～（5）」『日本建築学会九州支部研究報告』第30号、1988年3月、同『伝統的都市集住環境の空間秩序生成に関する研究』住宅総合研究財団、1990年11月、大場「龍野旧城下町における町家の発展過程と町並の構成に関する一考察」『同論文報告集』第376号、137～149、1987年、同「東海道水口宿の町並構成と町家形式」『同論文報告集』第424号、117～128、1991年、同「泉大津市旧大津村の町並構成と工場立地－伝統地場産業都市の都市形成－」『日本建築学会計画系論文報告集』第440号、127～137、1992年、上野邦一『歴史的環境地区の空間的特性についての基礎的研究』1990年、他）。

7. 町家の地形式の形成過程に関する研究

7-1. 東日本の町家形式（店棟型町家）の町家形式とその成立過程に関する研究 東日本の関東から南東北地方にかけては、別棟の店棟を主屋に接続させ、通り庭を持たない外通路型の町家形式が広く分布する。川越（埼玉県）、喜多方・会津若松（福島県）、須坂（長野県）、村田（宮城県）などの町家はその代表的事例である。

しかし、草野和夫氏によると、寛文頃の福島城下（福島市）の町並は、街道に沿って妻を向けた奥に長い茅葺き寄棟造りの住居が並ぶ状況であったと指摘し、一方、一八世紀初頭頃の酒田町内（山形県酒井市）では、商家の多くが同様に茅葺き寄棟造りで下屋付き（店先）の妻を表構えとするが、大店には茅葺き主屋の表側に鍵型に平入の店舗（二階屋で茅葺きと板葺きが相半ばする）を接続していたという（草野和夫『東北民家史研究』59～62頁、中央公論美術出版、1991年4月、同『近世民家の成立過程』195～198頁、同出版社、1995年2月、）。

このような家屋形式の原型は、大内宿の町並に代表される東北地方の諸街道の宿駅に建てられた住居の構成と同様とみなされ、主屋は、東北地方に広く分布する広間型三間取りあるいは広間付四間取りと同質で、隣棟間を開けて外通路を確保し平入としていたと推察されている。

しかも、上記した酒井における平入店舗を接続した大店の家屋構成には、農家型主屋の前面に店棟が付加することにより成立したことを窺わせる。宮本雅明・中川等両氏は、会津若松を取り上げ、店棟が接続した町家形式の成立要因について、定期市経済の存続による常設店舗の成立の遅れに求め（前掲「近世地方城下町における町屋と町並の生成（1）～（5）」、『伝統的都市集住環境の空間秩序生成に関する研究』、玉井哲雄氏も、近世町家を「京都型町家」と「非京都型町家」と大別した上で、「非京都型町家」は、市ないし仮設店舗によるミセ付加型の町家形成が想定されると指摘している（玉井哲雄「町割・町屋敷・町家」『年報 都市史研究』2、城下町の類型、68～85頁、山川出版社、1994年12月、）。

伊藤裕久氏も会津地方の在方市町を取り上げ、近世市町の町割りとしとの密接な関係を明らかにし、町形成の視点から町家形成を含めて論じている（伊藤裕久「近世市町の空間構成－会津盆地の在方市町を素材として－」『年報都市史研究1』60頁、山川出版社、1993年9月、同「戦国期吉田宿の町割・屋敷割とその変容」『都市と商人・芸能民』山川出版社、1993年10月、他）。

筆者らも、会津高田の永井野地区（福島県）などで遺構調査を行い、店棟が形成される過程を文献と遺構から実証的に捉えている（大場・石川祐一「東日本における市町の構成と常設店舗の成立過程—近世町家の地方形式に関する史的研究—」『住宅総合研究財団研究年報』No.24、1997年、大場・石川「近世在方集落における町家形成（前編）—常設店舗の成立と町場の創出—」『日本建築学会計画系論文集』第510号、229～234頁、1998年8月、大場・石川・木名瀬佳世「近世在方集落における町家形成（後編）—会津旧永井野村における店棟造りの成立過程—」『同論文集』第514号、191～197頁、1998年12月、）。

さらに、草野氏は東北地方における近世後期の商家形態の特徴として土蔵造り店棟の成立を取り上げ、その出現は一九世紀初頭頃と述べ、土蔵造り店舗の早い遺構として村田町（宮城県）や喜多方（福島県）における遺構例（天保～嘉永頃）を紹介している（前掲『東北民家史研究』63頁、）。店蔵の成立以降も、外通路式の住居形式は主屋の基本形式として堅持される。

一方、弘前や黒石（青森県）など、東北地方北西部の諸都市における商家は、屋内に通り土間を通す平面形式であり、上記の住居形式とは異なる。しかし、平面構成の基本は外通路型住居と同じであり、通り土間は、多雪地帯であるために、「こみせ」の発達と同様に外通路が屋内化されたものと理解されている（前掲『東北民家史研究』318～330頁、）。なお、弘前や黒石では土蔵造りの店棟形式は見られない。

7-2. 町家の地方形式の成立要因に関する研究

町家の地方形式について、その成立要因の解明は地域固有の町家形成を捉える視点として重要である。具体的には、農家住宅との関係、町家の立地条件（地形や風土的条件）、法規制など人為的な条件などが想定される。

まず、日本の近世町家が広く平入りを主体とする中で、妻入町家が集中的に分布する地域がある。東日本の日本海側、近畿では摂津・丹波地方（摂丹地方）、伊勢・志摩地方、瀬戸内沿岸地方、九州北部地方、などがあげられる。これら妻入町家について、その形成過程に対する検討がある。

玉井氏は、東日本（日本海側）町家の地方的特質として妻入町家を認め、酒田（山形県）の町家調査を通して、その意味が平入と対峙させながら検討されている（玉井哲雄『東日本町家建築の系統的把握のための基礎的調査研究 昭和61年度科学研究補助金（一般研究C）研究成果報告書』1987年3月、）。また、三国湊（福井県三国町）における「かぐら建て」町家の形成過程に関する研究は、妻入町家の平入指向の一端を物語り興味深い（前掲、玉井「近世地方都市における町並みの形成—越前三国湊の町家と都市構造—」『建築史学』第三号、）。

伊勢・志摩や摂丹地方、九州北部にかけての妻入町家に関しては、各地域における独自の農家形式との密接な関係が明らかにされている（菅原洋一「伊勢・志摩における妻入町屋の成立」『建築史の想像力』1996年、林野全孝「亀岡における町屋建築の変遷と特徴」『建築学会計画系論文報告集』号外、1966年10月、大場「園部旧城下町における町家遺構の発展過程と地方的特質」『日本建築学会計画系論文報告集』第412号、1990年6月、同「近世篠山城下町における住宅形式の特質と町屋敷地の構成」『同論文報告集』第411号、1990年5月、『城下町佐賀の環境遺産1・2』宮本雅明、他執筆、佐賀市教育委員会、1991年1

月、他)。

次に、町家敷地の立地条件や地理的条件などについて、淀川堤防上に築かれた旧京街道枚方宿(大阪府)における町家形式の特徴を読み解いた研究や、洪水多発地帯における洪水に備えた独自の三階建て町家形式を形成した福知山旧城下町(京都府)の町家についての研究などがある(大場「近世枚方宿における屋敷地の形態と町家の形成過程について(前編) 近世後期の町家形式とその発展過程」『日本建築学会計画系論文報告集』第400号、1989年6月、同「同(後編) 町家の先行形式と屋敷地形成」『同論文報告集』第403号、1989年、大場・林野「福知山旧城下町の町家について」『日本建築学会学術講演梗概集』1985年、他)。

さらに、鍛葺きの町家形式に着目し、近世の梁間規制との関係からその町家形式の意味を検討した研究もある(大場「近世町家における梁間規制と鍛葺き—泉南地域における鍛葺き町家の構造と発展—」『建築史学』第三五号、2～29頁、2000年9月)。

8. 近代町家の形成と特色に関する研究

日本の歴史的町並は、その多くが明治以降(近代)の家屋を主体としている。したがって、古いものほど価値を置きがちな民家研究の視点に留まっていたら、町並の意味の理解やその価値評価が適切には行えず、町家の近代についてもその動向を把握し、近代町家の特色の理解が不可欠となっている。その意味で、町家の近代史の研究は、町並み保存との関連においても重要な課題となりつつある。

町家に近代独自の特徴を見いだす試みは、東京ではまず、藤森照信氏による看板建築の発見とその評価をあげねばならない(藤森照信『看板建築』三省堂、1988年6月)。(同時に、関東一円に広く普及している土蔵造りの商家建築について、煉瓦造りとの比較やその地方への伝播などの視点から研究が進んでいる(初田了「土蔵造りの町並」『都市の明治』153～178頁、筑摩書房、1981年9月、同「高岡の土蔵造りの町並み」『日本建築学会北陸支部研究報告集』第25号、1982年6月、『商都高岡の五つの町並み』高岡市、1997年3月、他)。

また、佃島や月島・築地などにおける小規模な借家住宅を中心とする明治から昭和前期における小規模な庶民住宅に関する研究も成果をあげている(江面嗣人「大正期における東京・音羽町の貸屋の類型と住居水準」『日本建築学会計画系論文報告集』第348号、59～69頁、1985年2月、同「明治・大正期における佃島の住居の類型と変遷」『同論文報告集』第396号、100～113頁、1989年2月、同「昭和初期の東京の町家形式とそれに対する市街地建築物法の影響」『同論文報告集』第418号、155～167頁、1990年12月、他)。(江面氏は、これら庶民住居における玄関や座敷、廊下などの成立過程、二階の続き間座敷の普及過程を明らかにするとともに、当時の建築法規(市街地建築物法)との関係や、ガス設備の敷設、板ガラスの普及などのこれら住居への影響などについて、多くの遺構調査から実証的に明らかにしている。

大阪市内にも、幕末以降、近代の町家建築が戦災を逃れて多数残されている。これらについては、早くから白木小三郎氏により調査がなされ、京都町家と同種の平面構成や構造を持ちながらも、外観は塗籠というその特徴が明らかにされている(白木小三郎「大坂町家の家構の展開と新田農家の形式」『新修大坂市史』第4巻、1990年、同「大坂三郷と平

野郷の構成と町屋と農家の家構」『新修大坂市史』第3巻、1989年3月、白木、他「『北船場』の町割と町家の変遷について」『大坂市立大学生生活科学部紀要』第28巻、1980年、他）。

また、近代大阪の町家形式について、洋風撰取と三階建化に着目し、その動向を実例に則して考察した研究がある（大場・山田智子「近代大阪における町家の諸相-近代町家の評価に向けての一考察-」『日本建築学会計画系論文集』第509号、1998年）。

さらに、近世後期から明治にかけて、大阪の町家形式や町空間の構成、宅地の所有形態、職業構成などについて、「竈図」などを活用した検討も成果をあげている（谷直樹他「伝統的都市型住居とその近代的変容-大阪船場道修町の町家」『現代住まい論のフロンティア』ミネルヴァ書房、p.68、1996年、三浦要一、谷直樹、他「近代大坂島之内・南米屋町における集住形態」『日本建築学会近畿支部研究報告集』34号、1994年、同、「近代初頭の大坂北船場における職住形態」『同研究報告集』33号、789～792頁、1993年、同「近代初頭の大坂北船場における住宅の平面類型と集住の形態（1）」『同（2）」『同研究報告集』32号、829～836頁、1992年、同「近代初頭の大坂愛日学区の伝統的町内空間」『同研究報告集』31号、553～556頁、1991年、他）。

さらに、市中に大量に供給された長屋建ての借家住宅も、近代大阪の居住形態を特徴付ける住宅形式として重要である。これらについても、明治、大正、昭和の各期における住宅形式の特徴が調査に基づいて明らかにされている。特に昭和期には、区画整理の進行に伴う宅地開発により、洋風を加味した独自の借家形式が成立している（『まちに住まう-大阪都市住宅史-』平凡社、261～277、1989年8月、寺内信、和田康由「大阪の長屋建設とその市街化に関する研究」『大阪工業大学 中研所報』第13巻第3号、1981年、寺内「大阪における近代長屋の変遷について」『大阪の歴史』No.31、p.21、1990年、同『大阪の長屋』INAX、1992年9月、大場、林野「旧平野郷の町割と町家について」『日本建築学会近畿支部研究報告書』第26号、709～712頁、1986年、他）。

9. むすび

重伝建地区（重要伝統的建造物群保存地区）は、2000年10月時点で全国55カ所を数え、町家を主体とする町並はその過半を占めている。伝建地区指定に向けて取り組まれる事前調査はその倍以上の件数にのぼり、それぞれに調査報告書が刊行されている。さらに、市町村で単独で行われる町並調査を加えるとその数は歴大であり、その多くが町家を扱っている。いわゆる民家緊急調査で全国一斉に調査がなされた農家住宅は、その後の遺構調査が必ずしも継続的になされていないことに比べると、町家・町並調査の実施総数はこれを遙かにしのぐとあってよい。

これらの調査報告書は、直接的には個々の地域における町並を生かした町づくりの基礎資料として有意義に活用されることが望まれるが、同時に、冒頭にも記したが、これらはまさに町家研究の地域ごとのデータベースとしての価値を有している。

ただし、残念ながら研究者に行き渡るほどの部数がなく、発行年の古いものなどは入手困難なものも多い。町家に関心を持つ研究者が等しくこれらのデータベースにアクセスできる状況とはほど遠い。しかも、前述の全国的な民家緊急調査は、農家が主体であったため、相前後して各府県で進められた民家の重文指定は、農家を中心に行われ、町家建築は少数に留まる結果となった。指定民家の中で農家と町家のアンバランスな状況は現在も変

わらない。もちろん、重伝建地区として選定されれば、地区内の町家はある程度保存されることとなるが、研究資料としての指定文化財を考えたとき、指定文化財の件数は、修理の際に刊行される修理工事報告書の冊数と連動するため、件数が多少は問題となる。農家住宅に関するこれまでの修理工事報告書の刊行数の実績に比べれば、町家のそれは遙かに少ない。すなわち、調査報告書のレベルからさらに詳しい町家建築の資料となると、農家ほどにはその蓄積は期待できない。

しかも、遺構調査を研究者が個人的に実施することも様々な点で困難がつきまとい、一定の恵まれた条件が揃わなければ取り組めない。遺構を用いた町家研究には、この種の難しさがある。

今後、遺構は加速度的に消失して行くことが予想されるなかで、遺構という一次史料に即した研究は、既往の報告書類を活用しない限り望めない状況になりつつある。それだけに、調査報告書などの研究資料としての保管とその活用方法が今後の課題としてますます大きくなっている。

また、町家研究の課題は、地域ごとの個別の研究から、町家の形成過程とその地域性について、地域を越えた統一的な視点から捉える段階にあると筆者は考えている。この点は、農家を主体としたいわゆる民家研究にも通ずることと思われ、民家研究では大局的な視点からの総論の構築がよりいっそう急がれる。

町家の場合、城下町を始め街道町など、その町の成立事情により町家形成は自ずから異なるろう。従って、近世町家の史的理解は、いうまでもなく都市史的な視点を持ちつつ、町家の形成過程を幾つかの型として典型的に抽出することが課題となる。「京都型町家」に対して、「非京都型町家」あるいは「今井型」という類型化は、その点で示唆に富む。しかしながら、地方都市の町家形式は、農家を出自とするものだけでは説明がつかないものが実は多く、第3、第4の型の提起がまたれる。

あわせて、近世から近代まで視野に含めた町家の形成と展開過程の解明は、その背景となる町家普請の技術や材料、大工の移動や伝播などについて具体的に明らかにする必要がある。そのためには、新たな史料発掘が不可欠であり、個別事例の地道な積み上げが不可欠である。町家は、都市という動的な社会の中で形成され発展した。それゆえ、町家形成とその発展過程には多岐にわたる要因がこれにかかわっていよう。町家を形づくるこれらの社会的要因と町家との関係について、その具体像の解明が、町家形成の典型的理解の基礎となると考えている。

以上、日本における町家研究について、町家を捉える視点や方法を加味しつつ既往の成果を概観し、若干の課題も示した。

3. 韓國都市史 研究動向

李京贊

(圓光大學 都市工學科)

1. 韓國都市史 研究動向 理解의 FRAMEWORK

1) 韓國에서의 都市史 研究動向의 時期區分

韓國에서 都市史라는 用語를 使用하는 경우는 그다지 흔치 않다. 여기에는 여러 가지 要因이 작용하고 있지만, 무엇보다도 都市歷史가 그 自體로서 研究對象으로 認識되기보다는 다른 學問分野에서의 研究目的을 達成하기 위한 方法論의 하나로 간주되었다는 점이 중요한 要因으로 작용하고 있다. 이러한 傾向은 특히 物理的 現象과 결부된 都市歷史 研究에서 두드러지게 나타나고 있다. 실제 日本에서 物理的 現象과 결부된 都市歷史 研究가 建築史의 延長線上에서 建築史의 相對的 連繫概念으로서의 性格을 강하게 지니고 있는 반면, 韓國에서의 都市歷史 研究는 建築史나 都市 形態史보다는 考古學이나 都市計劃的 視覺과 連繫되는 傾向을 보이고 있었다. 결과 都市歷史와 관련된 대부분의 研究들에서 都市史라는 用語를 직접적으로 사용하기보다는 都市計劃史나 都市形成.發達史, 都市空間構造(空間構成體系)變化 등의 用語를 주로 채용하였다.

韓國에서 都市史에 觀心을 갖기 시작한 것은 30 여년이 채 안 되는 1970 年代부터의 일이다. 그나마 考古學이나 歷史學 中心의 都市史 研究로부터 탈피하여 都市의 物理的形態 中心으로 研究領域이 확장된 것은 불과 20 여년도 안 되는 짧은 歷史를 지니고 있다. 그간에 진행된 研究成果가 그다지 많은 양은 아니지만, 20 여년이라는 짧은 기간동안 研究方法論이나 研究觀點에서 많은 變化를 겪어 왔다. 비록 보는 觀點에 따라 견해차는 있을 수 있지만 1970 年代 以後 韓國에서 진행되어 온 都市史 研究는 크게 1970 年代 都市史 研究의 胎動期, 1980 年代 韓國 都市史 研究의 多元化 時期, 1990 年代 韓國 都市史 研究 定着期 등의 3 時期로 區分될 수 있다.

2) 時代別 韓國都市史 研究의 主要 TERMINOLOGY

韓國都市史 研究動向을 이해하는데 중요시되는 要素中の 하나는 都市史 研究를 위한 時代區分과 時代別 都市史 研究의 주요 터미놀로지(terminology)에 관한 問題이다. 먼저 韓國都市史의 時代區分問題와 관련하여 普遍성을 지니는 一般論을 제기하기란 용이한 일이 아니다. 실제 韓國都市史 研究에서는 一般的으로 一般史에서 채용되는 王朝

交替나 社會發展段階를 中心으로 한 古代.中世.近代의 時代區分方法 1)을 基本骨格으로 채용하고 있지만(市政開發研究院, 1994)2), 細分化된 時代區分方法이나 具體的인 時點은 보는 觀點에 따라 서로 다르게 설정되고 있다.

먼저 尹定燮(윤정섭, 1987)과 金哲洙(김철수, 1996)는 東洋 都市計劃史와 西歐 都市計劃史의 比較研究 觀點에서 韓國都市計劃史 時代를 原始.古代.中古代.中世.近世.現代 등의 6 時期로 區分하고 있는데 3), 多분히 西歐式 都市計劃史를 기준하여 韓國都市史 時代를 區分한 나머지 區分된 時點과 時代를 代表하는 都市에 대한 記述內容의 實存 時點 사이에 部分的인 誤差가 나타나고 있다. 한편 리화선(리화선, 1989: 1993 년 영인본)은 韓國史를 原始 및 古代.中世.近代.現代 등의 4 時代로 區分하는 한편 개개의 時代를 11 개의 建築.都市史 時期로 細分하여 建築과 都市의 歷史的 展開過程을 記述하고 있다 4). 리화선의 韓國都市史 時期區分론은 마르크스 史學의 社會構成體論에 바탕을 둔 것으로 生産樣式의 變化에 따른 社會主義로의 社會構成體의 移行過程을 모델로하고 있다. 이러한 方法은 獨自的인 韓國建築.都市史의 時代區分體系를 確立하고 있다는 점에서 큰 성과를 나타내고 있지만, 時期別 都市特性에 관한 內容이 城郭構造와 기초적인 內部區劃體系에 대한 記述의 描寫에 치중하고 있어 社會構成體論을 바탕으로 한 時期區分과의 連繫性을 제대로 確立하지 못하는 아쉬움이 있다.

韓國都市史 研究와 관련하여 時代區分이 지니는 意味는 都市史 研究의 主要 對象要素나 歷史的 解析의 中心概念이 時代別로 다른 양상을 나타내고 있다는 점에 있다. 概括的인 側面에서 物理的 環境을 中心으로 韓國에서 進行된 既存 研究成果로부터 導出되는 時代別 都市史 研究의 主要 研究對象과 要素, 및 概念과 관련된 terminology 는 古代.中世.近代의 三分法的 時代區分을 바탕으로 다음과 같은 흐름으로 要約될 수 있다.

①古代都市史: 三國時代~統一新羅時代

都城과 地方行政都市로서의 九州五小京

都市概念-都城과 城邑

都市立地와 都城圍郭構造-城郭(山城構造)

都市區劃-里坊制(格子形 土地區劃)

②中世都市史: 後三國時代~高麗·朝鮮時代

都城(開京, 漢陽)

新計劃都市-水原

都市概念-邑城都市

都市立地思想-風水地理

都市圍郭-山城과 邑城(평산성, 방형성)

都市區劃-高麗의 部坊里制와 行政統治制度로서의 朝鮮의 部坊制

都市骨格-城門 中心의 邑城道路體系

都市構造-機能地域分化(城內과 城外, 身分階層에 따른 居住領域 分化)

都市制度-朝鮮朝 身分階層別 住宅規模 制限
 都市施設-高麗 開京의 市廛長廊과 朝鮮 漢陽의 市廛行廊, 宮闕, 官衙, 市廛, 場市
 ③근대都市史: 19世紀 後半 開港期 以後
 開港場, 居留地, 軍用地(軍事基地, 兵站基地)
 近代都市計劃-市區改正, 市街地計劃
 都市構造-機能地域分化(新市街/舊市街/貧民窟의 區域區分)
 都市組織-住居組織

2. 1970年代 韓國都市史 研究의 胎動期

韓國에서의 都市史 研究는 1970年代부터 本格的으로 이루어지기 시작하였다. 물론 이전에도 歷史學과 考古學을 中心으로 間歇的인 研究들이 進行되어 왔지만, 都市形態나 內部空間構成보다는 古代 都城의 立地要件으로서 風水地理(고유섭, 1942; 이병도, 1948)와 城郭(고유섭, 1936; 이병도, 1931, 1939a, 1939b, 1941, 1956, 1966, 1976; 이성학, 1964; 홍사준, 1960, 1971)를 中心으로 한 研究가 주로 進行되었다.5)

1970年代에 進行된 韓國都市史 研究는 本格的으로 以前부터 進行되어 오던 歷史學과 考古學的 觀點을 그대로 계승하고 있지만, 研究觀點이 都市計劃史와 建築美學 및 歷史地理學的 觀點으로까지 本格的으로 擴張되고 있다는 점에서 以前 時期와는 差別性을 나타내고 있다. 研究領域의 側面에서도 1970年代의 韓國都市史 研究는 都市의 形態要素와 內部空間構造로까지 觀心領域이 확장되어 既存의 風水地理나 城郭 研究와 함께 보다 多樣한 研究가 進行되기 시작하였다. 특히 당시 韓國都市史 研究의 主要 研究領域을 이루고 있던 風水地理와 城郭 研究는 既存의 歷史學과 考古學的 觀點에서 進行되는 것(성주탁, 1976, 1980; 원영환, 1976; 윤무병, 성주탁, 1977; 이병도, 1976; 이원근, 1975, 1981; 정영호, 1972; 홍사준, 1971; 반영환, 1978; 차용걸, 1975)이 主流를 이루고 있었지만, 計劃史的 研究觀點이 導入되면서 風水地理說이 都邑形成過程(손정목, 1973, 1985)과 施設空間計劃에 미친 影響(유재현, 1979, 장성준, 1978)에 대한 研究나 建築美學的인 視覺에서의 城郭研究(신영훈, 1976) 등이 進行되었다. 1970年代 韓國都市史 研究가 本格的으로 進行되기 시작한 데는 傳統 歷史文化財에 대한 관심의 增加現象이 중요한 要因으로 작용하고 있는데, 이러한 傾向은 傳統要素의 保存과 결부되어 計劃史的 觀點에서 進行된 研究들(윤무병, 1972; 장명수, 1972, 1975)에서 잘 나타나고 있다.

한편 1970年代에는 都市內部空間構造를 對象으로 한 都市史研究가 試圖되었는데, 都市內部 機能地域의 分布를 中心으로 地理學的 觀點에서 進行된 研究(강대현, 1980; 원학희, 1978)가 成果를 보이고 있다. 이와 더불어 計劃史的 觀點에서 이루어진 古代 都市構成體系에 대한 復原的 研究(김경모, 1984; 김재봉, 1971; 신영훈, 1975; 윤무병, 1972; 장순용, 1976)는 비록 古代 慶州 中心의 한정된 地域을 中心으로 進行되었지만 都市內部空間構造를 共通의 研究領域으로 하여 考古學과 歷史學, 그리고 計劃史的

視覺이 통합될 수 있는 가능성을 제시해 주었다.

이와 함께 1970年代 都市史 研究에서 나타난 成果 中の 하나로 都市形成史에 관한 研究(김의환, 1974)와 함께 '都市史學'이라는 用語가 公式的으로 使用되는 한편(손정목, 1976) 社會史的 視覺에서의 都市史 研究가 試圖되었으며(손정목, 1977), 심도있는 내용을 다룬 것은 아니지만 歷史學과 地理學을 中心으로 研究의 時.空間範圍를 확장하여 보다 包括的인 視覺에서 都市史를 접근하려는 試圖(오영모, 1976; 홍경희, 1979)가 있었다.

2. 1980年代 韓國都市史 研究의 多元化 時期

韓國都市史 研究에서 1970年代가 都市史 研究의 土臺를 構築한 時期라고 한다면, 1980年代는 研究領域과 研究觀點의 多元化 現象이 본격적으로 進행된 時期라 할 수 있다. 먼저 研究對象時期的 側面에서 研究의 무게중심이 古代 都城으로부터 中世都市로 轉移되는 한편, 通史 研究로까지 研究領域이 擴張되고 있다. 內容的인 側面에서도 1970年代 都市史 研究의 主流를 이루고 있던 風水地理(손정목, 1985)와 古代 城郭研究(이원근, 1981; 윤무병, 1982)로부터 탈피하여 中世 首都와 地方 邑城都市의 城郭(이원근, 1981) 및 內部空間構造를 中心으로 한 研究가 자리를 잡고 있다.

그러나 1980年代 都市史 研究에서 나타난 가장 특징적인 現象中的의 하나는 研究觀點과 主題가 多樣化되었다는 점이다. 먼저 1970年代 後半期부터 試圖되었던 綜合都市史 研究가 가일층 발전되어 通史와 時代史를 中心으로 한 都市史 研究가 本格的으로 試圖되었다. 1980年代 당시의 通史 研究는 現場調査보다는 文獻資料를 中心으로 접근하고 있고, 研究觀點 역시 土木史와 國土開發史的 觀點(김의원, 1982)이나, 比較都市計劃史적 觀點(윤정섭, 1987)에서 進행되었다는 점에서 어느 정도의 限界를 지니고 있지만 都市의 形態의 側面을 中心으로 韓國都市通史를 정리하려는 最初의 試圖였다는 점에서 큰 意味를 지니고 있었다. 한편 開港期로부터 日帝占有期에 이르는 時期的 都市化過程(손정목, 1982a, 1982b)과 解放 以後의 都市現象(손정목, 1990)을 中心으로 近.現代都市發達史를 社會史와 計劃史的 觀點에서 綜合化하려는 試圖가 있었다.

都市通史 研究와 함께 1980年代 都市史 研究에서 거둔 큰 成果中的의 하나는 1970年代 後半期부터 地理學과 考古史學的 觀點에서 試圖되었던 都市內部空間構造 研究가 多樣한 觀點으로 擴張되면서 韓國都市史 研究의 中心主題로 자리잡게 되었다는 점이다. 특히 1980年代의 都市空間構造와 관련한 都市史 研究에서는 既存의 地理學과 考古學은 물론 計劃史와 形態學的 觀點이 강하게 반영되면서 都市發達史와 都市形態史를 中心으로 都市空間構造를 이해하려는 試圖가 본격적으로 進행되었다. 研究對象의 側面에서도 都城 中心으로 進행되어 왔던 既存 古代 都市史 研究가 地方都市로 확장되면서 首都와 地方 邑城을 中心으로 한 中世 城郭都市 研究가 主要 觀心分野로 급부상하였다. 都市空間構造와 관련된 研究主題 역시 多元化되는 樣相을 나타내고

있는데, 考古史學的 觀點에서 進행된 古代 都市의 土地區劃體系에 대한 研究(박홍수, 1983; 김경모, 1984; 박태우, 1987)와 都市計劃史적 觀點에서 進행된 朝鮮朝 邑城을 中心으로 한 中世 都市의 平面構成原理에 관한 研究(김철수, 1983,1984; 김철수,박병주, 1984; 김선범,윤정섭, 1987; 김선범, 1989; 주중권, 1987,1988; 이창무, 1988; 백인길, 1989; 문정희,이경렬, 1990), 都市空間이나 景觀構成體系와 관련하여 文化,思想史 속에서 表출되는 理想的 都市觀에 대한 解釋的 分析을 통하여 規範的 都市計劃原理와 思想을 導出하고자 한 研究(형기주, 1985; 김의원, 1987; 이상구, 1990), 景觀計劃史的 觀點에서 進행된 都城과 邑城의 景觀要素 및 景觀構成體系에 관한 研究(박찬룡, 1986; 김한배,박찬룡, 1987a,1987b; 최기수, 1989), 歷史景觀에서의 都市象徴性的 變遷過程에 관한 研究(이규목, 1987), 形態類型學的 觀點에서 進행된 朝鮮朝 地方 邑城의 街路體系와 都市平面 類型 研究(이상구, 1984,1986), 歷史地理學的 觀點에서 進행된 都市發達史 研究(임덕순, 1985; 원영환, 1988), 그리고 生態學的 觀點에서 進행된 都市中心部 土地利用의 變化過程 研究(윤정섭,황희연, 1986,1987; 황희연, 1987) 등은 空間構造와 관련하여 이루어진 1980年代 都市史 研究의 중요한 成果들이었다.

3. 1990年代 韓國都市史 研究의 定着期

1) 韓國都市史 研究方法의 體系化를 향한 새로운 단서들

韓國 都市史 研究에서 1990年代는 以前에 形成된 都市史 研究方法들이 多樣化되는 한편 보다 폭넓은 主題를 대상으로 한 研究들이 進행되는 등, 韓國都市史 研究의 體系化를 향한 새로운 단서들이 뿌리를 내리는 時期로 간주된다. 1990年代 韓國都市史 研究가 急進展하게 된 背景에는 開放化時代에 부응하여 대두된 傳統歷史文化 價値의 再評價에 대한 社會的 合意가 중요한 要因으로 作用하고 있었다. 특히 서울 定都 600年 記念事業의 일환으로 展開된 서울史 研究와 각종 國際심포지움 5), 그리고 傳統歷史文化要素의 發掘,保存,活用に 대한 汎國家的 열의는 서울을 비롯한 傳統 地方都市의 歷史研究에 各 學問分野의 觀心을 불러일으키는 중요한 契機가 되었다.

1990年代의 韓國都市史 研究는 內容的인 側面에서 以前 時期에 비하여 보다 명확한 性格을 지닌 專門研究領域으로 分化되는 特性을 나타내는 한편, 空間的인 側面에서는 個別 都市史를 中心으로 研究가 集中되는 傾向을 나타내고 있다. 먼저 既存의 考古學을 中心으로 進행되었던 古代 都城과 城郭 研究가 時,空間的으로 統合된 보다 廣域的이고 綜合的인 研究(성주탁, 1995; 심정보, 1995) 形態로 進행되었다. 한편 都市形成,發達史나 都市計劃原理 역시 1990年代 都市史 研究의 중요한 主題로 작용하여 個別 歷史都市의 形成,發達過程에 관한 通史 研究(장명수, 1994a,1994b; 김동욱, 1996)와 特定 時代의 市街地 形成過程(김광우, 1994), 都城空間構造와 計劃原理(이우중, 1995), 그리고 都市計劃施設로서의 市廛(허영록, 1995)에 관한 研究 등이 進행되었는데, 建築,都市計劃史的 觀點을 바탕으로 한 接近方法에 의거하고 있다는 점에서 以前 時期의

歷史地理學的 觀點에서 이루어진 都市發達史 研究와는 差別性を 보이고 있었다.

그러나 1990 年代 都市史 研究의 主流를 形成한 것은 무엇보다도 都市景觀史와 都市形態史 研究였다. 먼저 都市形態史 研究의 發達は 1990 年代 都市史 研究가 거둔 가장 큰 成果 中の 하나였다. 1990 年代에 進행된 都市形態史 研究는 形態(類型)學的 接近方法을 收用하면서 보다 進一步된 形態를 취하고 있었다. 이 時期의 都市形態史 研究는 都市의 形態要素에 대한 位階的 解體를 토대로 都市形態를 高찰하는 한편, 筆地와 都市組織을 中心으로 보다 마이크로한 分析單位를 設定하여 都市形態의 變化過程을 技術.解釋하고 있다는 점에서 都市 自體를 統合的인 單一 形態要素로 設定하고 있는 既存 歷史地理學的 觀點에서의 都市形成.發達史 研究나 都市計劃史의 觀點에서 進행된 都市景觀史 研究와는 差別性を 지니고 있었다. 보다 細部的으로 1990 年代에 形態學的 觀點에서 進행된 都市史 研究는 크게 ①歷史都市가 지니고 있는 物理的 要素의 形態特性이나 構成體系에 關한 體系의 分析을 통하여 導出되는 要素 自體의 內在的인 秩序體系를 바탕으로 都市形態를 理解하고자 하는 解釋的 研究, ②都市形態를 構成하는 要素들의 形態特性과 構成體系에서 나타나는 歷史的 現象을 包括的 또는 個別的인 形態要素 中心으로 記述하는 記述的 研究, ③人間이나 社會的 側面을 바탕으로 都市의 物理的.形態的 現象이나 形態的 特性들에 대한 觀察結果나 事實들을 說明하고자 하는 說明的 研究 등 다양한 形態로 進행되었다. 먼저 1990 年代 都市形態史 研究의 主流를 形成하였던 것은 記述的 接近方法을 채용하여 都市形態를 類型化하거나 形態要素의 形成.變化過程을 考察하는 것이었는데, 立地패턴을 中心으로 中世 都市를 類型化하고자 한 形態類型學的 研究(이상구, 1994), 街路.城郭 등 都市骨格要素의 構成體系와 變化過程에 대한 記述的 研究(유제현, 1991; 양승우, 1988; 양승우.주중원, 1991,1992; 이상구, 1992,1994; 배현미, 1993,1995,1997; 배현미의 1인, 1998; 임의제, 1999), 街路와 筆地를 기반으로 한 都市組織의 形成.變化過程에 관한 記述的 研究(양승우, 1994; 이상구, 1992; 손세관의 3인, 1996; 손승광.양우현, 1997) 등은 이 時期에 이루어진 대표적인 研究成果였다. 한편 解釋的 接近方法을 活用한 都市形態史 研究는 古代 格子型 都市平面의 構成體系에 關한 解釋을 바탕으로 그 基本性格을 이해하고자 한 起源論的 研究(이경찬, 1997a,1997b,1997c)와 筆地構造의 變化過程에서 表출되는 內在的인 體系성을 理解하는 한편 이를 토대로 街區의 形態類型學的 分類를 試圖한 研究(이경찬, 1992a,1992b) 등에서 활용되었으며, 일각에서는 說明的 接近方法을 토대로 都市組織과 住居地域內 細街路의 形成.變化過程을 筆地所有權(이경찬, 1996)이나 居民의 社會文化的 規範과 連繫시켜 說明하려는 노력(이경찬, 1999,2000)이 進행되기도 하였다.

한편 都市形態史 研究와 더불어 1990 年代 韓國都市史 研究에서 두드러지는 現象의 하나는 都市景觀史 研究가 크게 跳躍하고 있다는 점이다. 1980 年代부터 間歇的으로 進행되어 오던 都市景觀史 研究는 1990 年代에 들어서면서 計劃史的 觀點과 文化歷史地理學的 觀點을 강하게 收用하면서 急進展하는 樣相을 나타내고 있다. 특히

1990 年代의 都市景觀史 研究는 研究觀點 뿐만 아니라 研究主題의 역시 造景要素로서의 숲(林)으로부터 城郭과 市街地建築景觀(townscape)에 이르기까지 多樣性을 보이고 있는데, 傳統歷史都市를 대상으로 計劃史的 觀點을 가미하여 進행된 都市숲(林)의 形成過程 및 立地特性과 類型 研究(장동수.이규목.김학범, 1994; 장동수.이규목, 1994; 장동수, 1995), 지천경관 變化(박문호의 2 인, 1996), 文化歷史地理學과 景觀計劃史的 觀點을 가미한 市街地景觀의 變遷過程에 대한 解釋的 研究(황기원.유병림.이민우, 1993a,1993b, 이규목.김한배, 1994), 景觀計劃史的 觀點에서 進행된 歷史景觀의 景觀構成體系에 관한 研究(김한배의 8 인, 1992; 정기호, 1995), 朝鮮時代 個別 邑城都市를 中心으로 景觀要素를 抽出하고 景觀要素別 計劃特性과 變化過程을 高찰한 通史 研究(예명해, 1991a,1991b,1991c; 예명해.최창길, 1994), 古地圖를 活用한 歷史的 都市景觀의 復原研究(이상태, 1998) 등은 都市景觀史 研究와 關連하여 進행된 代表的인 研究成果였다.

研究觀點과 研究領域의 多元化.專門化와 함께 1990 年代 韓國都市史 研究에서 나타난 特徵的인 現象의 하나는 比較都市史 研究가 本格的으로 試圖되고 있다는 점이다. 물론 一部 研究에서는 以前 時期부터 試圖되어 왔던 開設的인 汎世界的 比較都市計劃史 形態의 都市通史 研究(김철수, 1997)의 틀을 踏襲하고 있었지만, 새로운 接近方法에서 多樣한 觀點과 研究領域을 統合하는 形態로 進행된 比較都市史 研究는 1990 年代 韓國都市史 研究의 重要한 成果였다. 특히 이 時期에 進행된 比較都市史 研究는 以前의 比較都市計劃史 研究와는 다르게 比較研究의 空間的 範圍를 東아시아 三國에 집중시키고 있는데, 都市.建築計劃史的 觀點에서 試圖된 서울과 北京의 都市空間構造의 形成過程과 都市住居史에 대한 學術會議(東아시아 歷史都市의 傳統과 近代: 서울과 北京, 韓.中學術會議, 韓國建築家協會.韓國建築史學會, 1994. 12)를 비롯하여, 時代的인 同質性에 바탕을 두고 歷史地理學과 計劃史的 觀點에서 試圖된 東아시아 三國의 古代都市構造와 條坊制에 대한 比較研究(韓國의 古代都市構造와 條坊制에 대한 國際세미나, 서울대학교 地理敎育科, 1997. 11)나 東洋 三國의 首都를 대상으로 近代化에 따른 都市發達過程에 대한 比較都市史 研究(東洋 三國의 近代化와 都市發達: 서울.北京.東京의 比較史的 考察, '96 서울學國際심포지움, 서울學研究所, 1996. 10), 空間的인 同質性에 바탕을 두고 單一의 歷史都市 研究를 통하여 考古史學.都市形態史.都市社會經濟史.都市計劃史.都市景觀史 등의 多樣한 視覺을 綜合化하려는 試圖(東洋都市史 속의 서울, 서울市政開發研究院, 1994) 등은 1990 年代 東아시아 三國의 比較都市史 觀點에서 거두어들이는 큰 수확이었다.

2) 韓國都市史 研究에 대한 歷史學界의 새로운 움직임

한편 1990 年代 韓國都市史 研究에서 重要한 轉換點으로 記錄되는 現象의 하나는 一般史나 農村社會經濟史를 中心으로 進행되어 오던 歷史學 中心의 既存 社會經濟史 研究가 都市社會로까지 擴張되면서 物理的인 側面을 中心으로 進행되는 都市史 研究가

進一步할 수 있는 계기를 마련하고 있다는 점이다. 특히 歷史學的 觀點을 토대로 多様な 視覺에서 조명된 近世-近代로의 變革期 東아시아 三國과 西洋史, 中東.中央아시아의 比較都市史에 대한 세미나(歷史와 都市:제 40 회 전국歷史學대회, 서울대학교, 1997. 5)와 後續作業으로 이루어진 朝鮮 後期 都市構造에 대한 綜合的 比較都市史 研究結果(歷史와 都市, 동양사학회 편, 1999)는 歷史學界의 研究領域을 都市로 擴張시키는 중요한 계기가 되었다. 1990 年代에 歷史學的 觀點에서 진행된 都市史 研究는 研究領域의 側面에서도 都市內部構造와 土地所有制, 都市民의 生活과 文化, 그리고 都市發達過程 등 多様성을 나타내고 있는데, 특히 經濟史的 視覺에서 진행된 近代 土地所有權의 變動過程(姜秉植, 1994; 전병재, 조성윤, 1995, 왕현중, 1997)과 都市商業의 發達(최완기, 1994; 오성, 1997; 류승렬, 1997; 고동환, 1998; 이태진의 7 인, 1998, 고석규, 1999), 經濟史的 視覺에서 조명된 都市構造變化와 都市文化 發達過程(고동환, 1999), 都市民의 生業과 經濟活動(고동환, 1997), 近代都市財政問題(정재철, 김재훈, 1995), 社會史的 視覺에서 진행된 都市發達段階(이태진, 1994, 1995), 都市民의 社會的 性格(조성윤, 1993, 1995), 都市民의 社會的 風俗(장철수의 4 인, 1995), 都市民의 生活樣式과 意識構造(이문규, 1995) 등은 중요한 研究觀心分野로 작용하였다. 이 외에도 일각에서는 特定 時期의 都市象을 社會史.行政史.經濟史 등 多角的인 視覺에서 綜合化하려는 試圖(朴慶龍, 1995; 裴鐘茂, 1994)가 있었다.

4. 韓國 都市史 研究의 回顧와 展望

1970 年代 研究土臺를 構築하기 始作한 韓國都市史 研究는 劣惡한 與件에도 불구하고 나름대로의 研究成果를 導出하여 왔다. 하지만 研究成果物이 本格的으로 나타나기 시작한 것은 극히 最近의 일로, 1990 年代 以前까지만 하여도 그다지 많은 양의 研究成果가 排出되지는 못하였다. 특히 都市史라는 研究分野의 基本性格에 대해서 充分한 論議가 이루어지지 않은 現 狀況에서 韓國都市史의 研究動向을 體系的으로 分類하고 理解하는 것이 그다지 容易한 일은 아니다. 실제 本稿에서는 都市形態學과 都市計劃學, 建築學, 造景學, 地理學은 물론 考古學과 歷史學까지 包含하여 都市의 物理的 環境에 관련된 全般 分野를 關聯分野로 設定하여 韓國都市史 研究動向을 파악하고 있지만, 都市史의 基本性格에 대한 論議를 바탕으로 分野別 研究成果物의 關聯性 與否를 再解釋할 수 있는 理論的 土臺를 構築할 필요가 있다.

비록 많은 양의 研究成果物이 排出된 것은 아니지만 지난 30 餘年 동안 進行되었던 韓國都市史 研究成果를 分析해보면 時期別 研究觀點이나 研究領域의 側面에서 比較的 明確한 轉移樣相을 나타내고 있음을 알 수 있다. 考古學과 歷史學을 中心으로 進行되었던 1970 年代 都市史 研究는 研究領域이 주로 立地와 風水地理, 城郭에 限定되어 있었으며 研究時代 역시 古代都市史가 主流를 形成하고 있었다. 이에 反하여 1980 年代 韓國 都市史 研究에서는 都市計劃學과 地理學的 觀點을 바탕으로 한

計劃史的 視覺에서의 都市史 研究가 主流를 形成하고 있다는 점이 特徵的인 現象으로 간주된다. 또한 1980 年代의 都市史 研究는 研究領域의 側面에서 古代都市史 中心의 既存 研究領域을 脫皮하여 朝鮮朝 首都와 地方 邑城을 中心으로 한 中世都市史 研究가 中心課題로 대두되고 있다. 그러나 1990 年代 以前の 研究成果를 살펴보면 都市史 研究가 都市 自體의 歷史에 대한 觀心보다는 다른 學問分野의 目的達成을 위한 方法論으로 收用되는 것이 普遍的이었다. 1990 年代의 韓國 都市史 研究는 이러한 側面에서 以前 時期와는 差別性を 지니는 중요한 時期라 할 수 있다. 무엇보다도 1990 年代 韓國 都市史 研究에서는 考古歷史學. 都市發達史. 都市計劃史. 都市 形態史. 都市景觀史 등 보다 專門化된 研究領域에 基礎한 研究成果物이 排出되 기 시작하면서 都市의 歷史 自體가 研究對象으로 간주되는 傾向을 나타내고 있다. 특히 1990 年代 後半部에는 既存에 一般史와 農村社會를 中心으로 進行되어 오던 社會經濟史 研究가 歷史學界을 中心으로 都市社會 研究로 擴張되는 한편 物理的 側面에서의 都市歷史에 觀心を 갖기 시작하면서 韓國都市史 研究의 새로운 可能性을 提示해주고 있다.

그러나 그간에 進行된 일련의 노력에도 불구하고 韓國都市史 研究와 관련하여 여전히 해결해야 할 問題가 산적해 있다. 먼저 韓國都市史 研究의 發展을 위해 무엇보다도 시급한 것은 史料를 發掘하는 일이다. 韓國都市史 研究를 進行하는데 겪는 어려움 중의 남아있는 歷史的 物件이 충분치 않다는 점이다. 現在 19 世紀 以前の 歷史的 事實을 發見하는 方法은 考古學的 發掘이나 몇몇 古地圖를 除外하고는 全無한 실정이다. 특히 극소수 남아있는 19 世紀 以後의 극히 제한된 數의 物件들이 대부분 農村地域을 中心으로 分布하고 있어 都市地域 研究를 위한 物件을 찾아보기가 여간 용이한 일이 아니다. 게다가 그나마 殘存하는 近代 都市史 研究의 端緒들조차도 여기저기 흩어진 狀態로 방치되고 있으며, 급격한 都市開發의 물결에 휩싸여 급격히 자취를 감추어 가고 있다. 결국 이것은 더 이상 늦기 전에 남아있는 歷史的 事實에 대한 調查記錄이 시급하다는 것을 意味한다. 또한 都市地域과 관련된 劣惡한 文獻史料環境은 歷史的 現象을 解釋하는데 큰 沮害要因으로 작용하고 있으며, 都市史 研究를 단순히 記述의 研究水準에 머물러 있게 하는 決定的 要因으로 작용하고 있다. 비록 최근에 代替史料로서 寫眞(서울市政開發研究院, 2000)이나 繪 史料(최기수, 1989, 1994; 최완수, 1994; 이수미, 1995) 등을 활용한 研究가 部分的으로 進行되고 있지만, 基礎史料는 물론 보다 多樣한 側面에서 基礎史料를 보완할 수 있는 代替史料의 發掘이 시급하다 하겠다.

다음으로 解決되어야 할 問題의 하나는 學問分野間 相互交流를 통한 都市史 研究課題이다. 특히 歷史研究의 核心分野로 간주되는 歷史學界의 既存 研究成果가 대부분 一般史나 農村社會를 中心으로 進行되고 있고 物的 環境과의 連繫性에 대한 研究가 미약하여 都市史 研究가 進一步하는데 큰 걸림돌로 작용하고 있다. 비록 1990 年代에 들어서 歷史學界의 소장파를 中心으로 物的 環境의 歷史에 관심을 지니는

한편, 都市를 대상으로 한 研究成果가 排出되고는 있지만 보다 폭넓은 研究가 絶실히 요구되는 실정이다. 특히 文獻史料와 實證的 史料가 극히 제한되어 있는 상황에서 韓國都市史 研究가 한걸음 나아가기 위해서는 都市의 物的 環境史와 人文社會經濟史의 連繫性을 확보하는 것이 무엇보다 시급하다 하겠다.

주 1) 一般史를 基準으로 한 韓國史는 古朝鮮 以前の 原始時代, 古朝鮮時代로부터 統一新羅時代(~9世紀末)에 이르는 古代, 後三國時代로부터 19世紀 開港期 以前(9C末~19C後期)까지의 中世, 그리고 開港期 以後(19C後期~)의 近代 등의 3 時期로 區分되는 것이 一般的이다. 古代는 다시 古朝鮮時代로부터 三韓時代에 이르는 時期(古典古代)와 三國時代로부터 統一新羅時代에 이르는 時期로 區分 可能하다. 한편 古代와 中世를 區分하는 時點은 9 世紀末 統一新羅時代와 後三國時代의 交替期로 設定되는 것이 一般的이지만 三國史記나 三國遺事의 記錄을 토대로 新羅史를 上代, 中代, 下代(혹은 上古, 中古, 下古)로 區分하고 中代에서 下代로 넘어가는 8 世紀末을 境界로 보는 視覺도 있다. 한편 19 世紀 後半 開港期 이외에 中世와 近代를 區分하는 時點은 1910 年 韓日合邦을 前後한 時期가 設定 可能하다.

주 2) 서울市政開發研究院에서 編輯·發刊된 東洋 都市史 속의 서울에서는 都市史 時期를 古代, 中世(日本의 경우 中, 近世), 近代로 區分되는 一般史의 時代區分骨格을 그대로 유지하는 차원에서 東洋 三國의 都市史에 대한 比較研究를 進行하고 있다. 그러나 時代別 時點은 개개 國家에 따라 서로 다르게 設定되고 있는데, 韓國의 경우 紀元前後의 三國建設期로부터 10 世紀 初까지의 時期를 古代로, 10 世紀 初 高麗 開國期로부터 19 世紀 末기까지의 時期를 中世로, 19 世紀 末기로부터 20 世紀 中엽에 이르는 時期를 近代로 하여 研究가 進行되고 있다.

주 3) 尹定燮은 韓國都市計劃史의 時期區分 時點을 原始時代(BC 20000 무렵~BC 2000 무렵; 舊石器時代와 新石器, 青銅器 時代)와 古代(BC 2000 무렵~BC 100 무렵; 西歐와 西아시아의 이집트, 메소포타미아, 아시리아, 바빌론, 페르시아, 히브리時代; 中國의 夏, 殷, 周 時代; 日本의 彌生文化), 中古代(BC 100 무렵~5 世紀末; 古代 그리스와 로마時代; 中國의 三國時代, 南北朝時代, 六朝時代; 日本의 야마다이왕國, 大化政權時代), 中世(6 世紀 초~14 世紀 말; 초기 그리스도교時代; 中國의 隋, 唐, 宋, 元朝時代; 日本의 平城京, 平安京時代), 近世(15 世紀 初~18 世紀末; 西歐의 르네상스로부터 바로크 時代; 中國의 明, 淸時代; 日本의 幕府時代), 現代(19 世紀 初~現在; 西歐의 産業革命 以後; 中國의 辛亥革命 以後; 日本의 明治維新 以後)로 區分하는 있다. 한편 古代의 代表적인 計劃都市로서 高句麗의 國內城, 百濟의 熊津城/泗 城, 新羅의 慶州, 中古代의 代表적인 計劃都市로서 統一新羅時代의 慶州, 中世의 代表적인 都市로서 高麗의 開京, 西京, 南京, 東京(慶州), 近世의 計劃都市로서 朝鮮朝 都城 漢陽과 각종 城郭都市들을 設定하고 있다. 한편 金哲洙 역시 韓國 都市計劃史 時期를 原始, 古代 前期, 古代 後期, 中世, 近世, 現代 등의 6 時期로 區分하고 있는데 原始와 古代를 區分하는 時點을 BC 3000 年 무렵으로 設定하는 것 이외에는 尹定燮의 時期區分方法을 그대로 유지하고 있다.

주 4) 리화선은 原始 및 古代, 中世, 近代, 現代 등의 4 時代를 骨格으로 都市史 時期를 BC. 3 世紀 以前

古朝鮮 以前の 原始建築, 古朝鮮時代로부터 三韓時代に 이르는 古代都市(以上 原始 및 古代都市), BC. 3世紀~7世紀 中葉의 三國都市, 7世紀 中葉~10世紀 初의 渤海.後期新羅都市, 10世紀 初~14世紀 末의 高麗都市, 14世紀 末~19世紀 中葉의 朝鮮都市(以上 中世都市), 19世紀 中葉 ~1910年代의 近代建築, 1910年~1920年代 前半期の 近代建築(以上 近代都市), 1920年代 後半~1954年の 現代都市, 民主建設時期的 現代都市, 解放戰爭時期的 現代建築, 戰後復舊期的 現代都市, 社會主義 建設期的 現代都市, 社會主義 完全勝利를 위한 鬭爭時期的 現代都市(以上 現代都市)로 區分하고 있다.

주 5) 서울 定都 600년 記念事業을 계기로 개최된 대표적인 都市史 關聯 심포지움은 1996년에 "東洋 三國의 近代化와 都市發達"이라는 題目 下에 개최된 '96 서울學國際심포지움(서울學研究所 主催)과 "日帝下 서울 都市化의 歷史的 性格"이라는 主題 下에 개최된 '96 서울學세미나(서울學研究所 主催) 등이 있다.

參考文獻

1970年代 以前

高裕燮, '開城의 城郭', *高麗時報*, 1936. 5.

高裕燮, '古代定都의 諸條件과 開城', *高麗時報*, 1942. 2. 16.

李丙燾, '朝鮮 太祖의 開國과 當時의 圖讖說', *高麗時代의 研究*, 1948.

1970年代

金在鵬, '新羅王都考', *朝鮮學報* 60, 1971.

孫禎睦, '丙子開國과 都市의 變化' 上 中 下, *都市問題*, 1975. 5 6 7.

孫禎睦, '李朝後期 서울周邊에 形成된 衛星都市에 關한 研究' 上 下, *都市問題*, 1975. 11 12.

孫禎睦, '風水地理說이 都邑形成에 미친 影響에 關한 研究', *都市問題*, 1973. 11.

孫禎睦, *朝鮮時代都市社會研究*, 一志社, 1977.

申榮勳, '新羅王京復原論', *韓國古建築斷章* 上, 東山文化社, 1975.

尹武炳, '歷史都市 慶州의 保存에 關한 研究', *文化財保存科學*, 1972.

尹武炳.成周鐸, '百濟山城의 新類型', *百濟研究* 8, 忠南大學校 百濟研究所, 1977. 12.

張聖浚, '風水地理局面이 갖는 建築的 想像力에 關한 考察', *大韓建築學會誌*, 第 22 卷 85 號, 1978.

1980 年代

- 金秉模, '都市計劃', *歷史都市 慶州*, 悅話堂, 1984.
- 金善範, '地方都市의 傳統空間保全을 위한 基礎研究-蔚山邑城과 彦陽邑城을 中心으로', *國土計劃* 卷 24, 第 2 號(通卷 54 號), 1989. 7.
- 金善範.尹定燮, '地方都市의 傳統空間保全을 위한 基礎研究 (1) - 蔚山 蔚州地方의 城郭을 中心으로', *國土計劃* 第 22 卷 第 3 號(通卷 49 號), 大韓國土.都市計劃學會, 1987.11.
- 金儀遠, *韓國國土開發史研究*, 大學圖書, 1982
- 金儀遠, 韓國傳統都市 構成의 原理, *空間* 237 호, 1987. 5
- 金哲洙.金炯萬, '韓國 城郭都市의 發展과 空間패턴에 關한 研究', *國土計劃* 第 17 卷 第 1 號, 大韓國土.都市計劃學會, 1982. 7.
- 金哲洙.朴炳柱, '韓國 城郭都市의 空間構成原理와 技法에 關한 研究', *國土計劃* 第 19 卷 第 1 號, 大韓國土.都市計劃學會, 1984. 6.
- 김한배.박찬용, 우리나라 都邑景觀 變遷過程의 基礎研究(I)(II), *韓國造景學會誌*, 韓國造景學會, 15 권 2 호, 1987. 12 / 15 권 2 호, 1987. 12
- 金鴻植, '樂安邑城의 空間構成에 關한 研究', *KIA JOURNAL* 1984. 1-2, 3-4.
- 金鴻植, '城邑里 空間構成에 關한 研究', *KIA JOURNAL* 1983. 11-12, 1984. 1-2.
- 文正熙, 李秉烈 : '우리나라 定住空間 形態와 都市 및 都市計劃에 關한 研究', *國土計劃* 第 25 卷 第 2 號(通卷 57 號), 大韓國土.都市計劃學會, 1990. 7.
- 朴贊龍, '朝鮮時代 邑城 定住地의 景觀構成 研究', *韓國造景學會誌* 12 卷 1 號, 1984
- 朴泰祐, 統一新羅時代의 地方都市에 對한 研究, *百濟研究* 18 輯(合本), 忠南大學校 百濟研究所, 1987
- 朴興洙, '箕田考', *道原柳承國博士華甲記念論文集*, 1983.
- 孫禎睦, *韓國 開港期 都市變化過程研究*, 一志社, 1982.
- 孫禎睦, *韓國 開港期 都市社會經濟史研究*, 一志社, 1982.
- 孫禎睦, *韓國現代都市의 발자취*, 一志社, 1990.
- 元永煥, '漢陽遷都와 首都建設考 - 太宗代를 中心으로', *鄉土서울* 45, 1988.
- 尹武炳, '慶州地方의 考古學的 遺蹟', *歷史都市 慶州*, 1984.
- 尹武炳, '新羅 王京의 坊制', *이병도박사 九旬記念 韓國私學論叢*, 1987.
- 尹定燮, *都市計劃史 概論*, 文運堂, 1987

尹定燮.黃熙淵, '서울 仁寺洞일대의 商業機能 浸透過程에 대한 都市生態學的 解析',
國土計劃 第 21 卷 第 3 號(通卷 46 號), 大韓國土.都市計劃學會, 1986. 11.

李揆穆, '韓國의 유토피아', *韓國의 都市研究*, 故新 尹定燮教授 華甲記念論文集, 1990.

이상구, '茶山 丁若鏞의 理想都市計劃', *韓國의 都市研究* 故新 尹定燮教授
華甲記念論文集, 1990.

이상구, '韓國邑城의 空間構成體系', *建築과 環境*, 1986 年 5 月.

李元根, '清州邑城考', *西原學報* 1, 1981.

任德淳, 서울의 首都起源과 發展過程, *地理學論叢 別號* 1, 서울大學校 社會科學大學
地理學科, 1985. 8.

林忠伸, '母空間의 原型 : 물과 向天的 흐름', *大韓建築學會誌* 第 25 卷 103 號, 1981.

朱鍾元, '邑城으로 부터 發達한 地方 中小都市의 空間構造의 特性과 그 適用에 關한
研究', *國土計劃* 第 23 卷 第 1 號(通卷 50 號), 大韓國土.都市計劃學會, 1988. 3

朱鍾元, '邑城으로 부터 發達한 地方 中小都市의 空間構造의 特性과 그 適用에 關한
研究', 서울大學校 工科大學 都市工學科, 1987. 12.

朱鍾元.이상구, '古代 東洋의 理想的 國土計劃原理에 關한 研究', *國土計劃* 卷 23,
第 3 號(通卷 52 號), 大韓國土.都市計劃學會, 1988. 8.

河在明 外 3 人, '都心韓屋住居地 開發方向摸索과 設計指針에 關한 研究',
大韓建築學會論文集 第 14 卷 第 1 號, 1998. 1.

邢基柱, '都城計劃과 宇宙的 象徵主義', *地理學* 第 32 號, 1985.

黃熙淵.尹定燮, '清州市 中心部의 土地利用 變化過程에 대한 都市生態學的 解析',
國土計劃 第 22 卷 第 1 號(通卷 47 號), 大韓國土.都市計劃學會, 1987. 3.

1990 年代

姜秉植, *日帝時代 서울의 土地研究*, 民族文化社, 1994

高東煥, '朝鮮後期 서울의 商業都市로의 成長', *東洋都市史속의 서울*, 서울市政開發研究員,
1995.

高東煥, *朝鮮後期 서울 商業發達史 研究*, 지식산업사, 1998

高東煥, *朝鮮後期 서울의 都市構造 變化와 都市文化*, 東洋史學會 編, 歷史와 都市,
서울대학교 출판부, 1999

金東旭, *建築思想과 實踐: 水原城*, 서울: 발언, 1996

- 金哲洙, *都市計劃史 - 空間構成의 原理와 技法*, 技文堂, 1997
- 김한배.이규목, '東洋의 世界觀의 觀點에서 본 韓國都市景觀의 特性', *韓國造景學會誌*, 21 권 4 호, 1994. 1
- 민덕식, 城郭遺蹟으로 본 百濟 前期都城 研究, *서울學研究*, 서울시立大學校 附設 서울學研究所, 제 9 호, 1997
- 朴慶龍, *開化期 漢城府 研究*, 一志社, 1995.
- 박문호.이상석.양진희, 역사적 변천을 통해서 본 서울시 지천의 현대적 활용 방안, *서울學研究*, 서울시立大學校 附設 서울學研究所, 제 7 호, 1996
- 裴鐘茂, *木浦開港史 研究*, 느티나무, 1994
- 裴賢美 外 1 人, '舊邑城을 中心으로 한 大邱市の 街路形成過程에 關한 研究', *大韓建築學會論文集* 14 卷 10 號, 1998. 10.
- 裴賢美, '朝鮮後期 서울의 都市骨格 復原에 關한 研究', *國土計劃* 第32卷 第6號, 1997. 12.
- 배현미, 조선후기의 복원도 작성을 통한 서울도시의 원형 재발견에 관한 연구, *서울學研究*, 서울시立大學校 附設 서울學研究所, 제 5 호, 1995
- 裴賢美, *韓國日本都市中心部形成過程關比較研究*, 日本東京大學校 博士學位論文, 1993.
- 서울市政開發研究院, *東洋 都市史 속의 서울*, 1994
- 서울市政開發研究院, *서울 20 世紀: 100 年の 寫眞記錄*, 서울시정개발연구원/서울學研究所, 2000
- 서울學研究所 편, *朝鮮後期 서울의 社會와 生活*, 1998
- 孫世貫 外 3 人, '街路體系 및 筆地組織을 中心으로 한 서울의 都市組織 變化過程에 關한 研究', *國土計劃* 第31卷 第3號(通卷 號), 1996.
- 孫勝光.梁宇鉉, '羅州邑城안 傳統住居地域에서의 都市組織 生成 및 變化過程 研究', *大韓建築學會論文集* 第13卷 第7號, 1997. 7.
- 沈正輔, *韓國 邑城의 研究*, 學研文化社, 1995.
- 梁承雨.朱鍾元, '서울시 都心部 都市形態 變化過程에 關한 研究(1)(2)', *國土計劃* 卷 26 第4號(通卷 62 號), 大韓國土.都市計劃學會, 1991. 11. / *國土計劃* 卷 27, 第3號(通卷 65 號), 大韓國土.都市計劃學會, 1992. 8.
- 芮明海, '朝鮮時代 大邱邑城에 關한 基礎研究 (1)(2)', *國土計劃* 第26卷 第3號(通卷 61 號), 大韓國土.都市計劃學會, 1991. 8. / *國土計劃* 第26卷 第4號(通卷 62 號), 大韓國土.都市計劃學會, 1991. 11.

- 芮明海, '朝鮮時代 密陽邑城에 關한 基礎研究 (1)', *國土計劃* 第 26 卷 第 2 號(通卷 60 號), 大韓國土.都市計劃學會, 1991. 5.
- 芮明海.崔昌吉, '地方都市의 傳統空間 保存에 關한 研究 (1)-尙州邑城을 中心으로', *國土計劃* 第 29 卷 第 3 號(通卷 73 號), 大韓國土.都市計劃學會, 1994. 8.
- 吳 星, *朝鮮後期 商人 研究*, 일조각, 1991
- 吳 星, *韓國 近代商業都市研究*, 國學資料院, 1997
- 柳濟憲, '韓國의 都市形態學에 關한 試論的 研究-湖南地方의 都市들을 中心으로', *國土計劃* 卷 26, 第 1 號(通卷 56 號), 大韓國土.都市計劃學會, 1991. 2.
- 李京贊, "日帝 初期 日本人의 土地占有過程에 關한 研究", *都市計劃論文集* 第 3 輯, 圓光大學校 도시.지역개발연구소, 1996. 2.
- 李京贊, '南原 格子形 土地區劃의 構成體系에 關한 歷史的 考察', *大韓建築學會論文集* 第 13 卷 第 9 號, 1997. 9
- 李京贊, '全州市街地 格子形 土地區劃의 形態的 特性에 關한 起源論的 考察', *國土計劃* 第 32 卷 第 4 號, 大韓國土.都市計劃學會, 1997. 8
- 李京贊, 都市型 韓屋住居地 接近空間의 形態學的 特性에 關한 研究 (I)(II), *國土計劃* 第 34 卷 第 6 號, 大韓國土.都市計劃學會, 1999. 12 / *國土計劃* 第 35 卷 第 1 號, 大韓國土.都市計劃學會, 2000. 2
- 이상구, '서울의 都市形態의 變遷', *建築文化*, 1992 年 8 月.
- 이상태, 古地圖를 이용한 18-19 世紀 서울 모습의 再現, *서울學研究*, 서울市立大學校 附設 서울學研究所, 제 11 호, 1998
- 이수미, 朝鮮時代 한강명승도 研究, *서울學研究*, 서울市立大學校 附設 서울學研究所, 제 6 호, 1995
- 이우중, 中國과 우리나라 都城의 計劃原理 및 空間構造의 比較에 關한 研究, *서울學研究*, 서울市立大學校 附設 서울學研究所, 제 5 호, 1995
- 이태진, 18-19 世紀 서울의 近代的 都市發達 樣相, *서울學研究*, 서울市立大學校 附設 서울學研究所, 제 4 호, 1995
- 이태진, 朝鮮時代 서울의 都市發達 段階, *서울學研究* 창간호, 서울市立大學校 附設 서울學研究所, 1994
- 이태진.서성호.한상권.고동환.고석규.이헌창.김태웅.허영란, *서울商業史 研究*, 서울學研究所, 1998
- 이혜은.임덕순.김연옥.이은숙.양보경, *서울의 景觀變化*, 서울學研究所, 1994

- 임의제.도심지내 큰길과 뒷길의 2 원적 특성에 관한 연구, *서울學研究*, 서울시立大學校 附設 서울學研究所, 제 14 호, 1999
- 장동수.이규목, '한국 傳統都市의 分布, 類型, 機能, 林相에 관한 研究', *國土計劃* 第 29 卷 第 2 號, 大韓國土.都市計劃學會, 1994. 5.
- 장동수.이규목.김학범, '한국 傳統都市의 立志的 特性과 類型에 관한 研究', *國土計劃* 第 29 卷 第 1 號, 大韓國土.都市計劃學會, 1994. 2.
- 張明洙, *城郭發達과 都市計劃 研究*, 學研文化社, 1994.
- 장철수.정승모.주강현.정중수.박경하, *서울의 社會風俗史*, 서울學研究所, 1995
- 전병재.조성윤, 日帝 侵略期 京城府 住民의 土地 所有와 變動, *서울學研究*, 서울시立大學校 附設 서울學研究所, 제 6 호, 1995
- 정기호, 歷史景觀에 내재된 圖形的 形式의 考察, *韓國造景學會誌*, 韓國造景學會, 22 권 4 호, 1995. 1
- 朱鐘元.李京贊, '都市內 筆地體系의 變化特性에 관한 研究', *國土計劃* 第 27 卷 第 4 號(通卷 66 號), 大韓國土.都市計劃學會, 1992. 11.
- 최완기, *朝鮮時代 서울의 經濟生活*, 서울學研究所, 1994
- 河在明 外 3 人, '都心韓屋住居地 開發方向摸索과 設計指針에 관한 研究', *大韓建築學會論文集* 第 14 卷 第 1 號, 1998. 1
- 허영록, 朝鮮시대 도시계획의 기본요소로서 시전에 대한 연구, *서울學研究*, 서울시立大學校 附設 서울學研究所, 제 6 호, 1995
- 황기원.유병림.이민우, '韓國 港灣都市의 都市景觀의 形成과 變化에 관한 研究(II)', *韓國造景學會誌*, 韓國造景學會, 21 권 2 호, 1993. 7
- 東아세아 歷史都市의 傳統과 近代: 서울과 北京*, 韓.中學術會議, 韓國建築家協會, 韓國建築史學會, 연세대학교 알렌관, 1994. 12
- 서울學研究所, *東洋 三國의 近代化와 都市發達: 서울.北京.東京의 比較史的 考察*, '96 서울學國際심포지움, 1996. 10: 世宗文化會館, 서울: 서울시립대학교 서울學研究所, 1996
- 서울學研究所, *日帝下 서울 都市化의 歷史的 性格*, '96 서울學 세미나, 1996. 6: 韓國프레스센터, 서울: 서울시립대학교 서울學研究所, 1996
- 韓國의 古代 都市構造와 條坊制에 대한 國際 세미나*, (王維坤.金田章裕.李琦錫), 서울大學校 地理教育科, 1997. 11. 13

要約文

韓國에서 都市史라는 用語를 使用하는 경우는 그다지 흔치 않다. 여기에는 여러 가지 要因이 작용하고 있지만, 무엇보다도 都市歷史가 그 自體로서 研究對象으로 認識되기보다는 다른 學問分野에서의 研究目的을 달성하기 위한 方法論의 하나로 간주되었다는 점이 중요한 要因으로 작용하고 있다. 이러한 傾向은 특히 物理的 現象과 결부된 都市歷史 研究에서 두드러지게 나타나고 있다. 실제 日本에서 物理的 現象과 결부된 都市歷史 研究가 建築史의 延長線 위에서 建築史의 相對的 連繫概念으로서의 性格을 강하게 지니고 있는 반면, 韓國에서의 都市歷史 研究는 建築史나 都市形態史보다는 考古學이나 都市計劃的 視覺과 連繫되는 傾向을 보이고 있었다. 결과 都市歷史와 관련된 대부분의 研究들에서 都市史라는 用語를 직접적으로 사용하기보다는 都市計劃史나 都市形成.發達史, 都市空間構造(空間構成體系)變化 등의 用語를 주로 채용하였다.

韓國에서 都市史에 觀心을 갖기 시작한 것은 30 여년이 채 안 되는 1970 年代부터의 일이다. 그나마 考古學이나 歷史學 中心의 都市史 研究로부터 탈피하여 都市의 物理的形態 中心으로 研究領域이 확장된 것은 불과 20 여년도 안 되는 짧은 歷史를 지니고 있다. 또한 研究成果物이 本格的으로 나타나기 시작한 것은 극히 最近의 일로, 1990 年代 以前까지만 하여도 그다지 많은 양의 研究成果가 排出되지는 못하였다. 특히 都市史라는 研究分野의 基本性格에 대해서 充分한 論議가 이루어지지 않은 現狀에서 韓國都市史의 研究動向을 體系的으로 分類하고 理解하는 것이 그다지 容易한 일은 아니다. 비록 많은 양의 研究成果物이 排出된 것은 아니지만 지난 30 餘年 동안 進行되었던 韓國都市史 研究成果를 分析해보면 時期別 研究觀點이나 研究領域의 側面에서 比較的 明確한 轉移樣相을 나타내고 있음을 알 수 있다. 비록 보는 觀點에 따라 견해차는 있을 수 있지만 1970 年代 以後 韓國에서 進행되어 온 都市史 研究는 크게 1970 年代 都市史 研究의 胎動期 1980 年代 韓國 都市史 研究의 多元化 時期 1990 年代 韓國 都市史 研究 定着期 등의 3 時期로 區分될 수 있다.

韓國에서의 都市史 研究는 1970 年代부터 本格的으로 이루어지기 시작하였다. 물론 이전에도 歷史學과 考古學을 中心으로 間歇的인 研究들이 進행되어 왔지만, 都市形態나 內部空間構成보다는 古代 都城의 立地要件으로서 風水地理와 都城立地, 그리고 城郭를 中心으로 한 研究가 주로 進행되었다. 1970 年代에 進행된 韓國都市史 研究는 基本的으로 以前부터 進행되어 오던 歷史學과 考古學的 觀點을 그대로 계승하고 있지만, 研究觀點이 都市計劃史와 建築美學 및 歷史地理學的 觀點으로까지 本格的으로 擴張되고 있다는 점에서 以前 時期와는 差別性을 나타내고 있다. 研究領域의 側面에서도 1970 年代의 韓國都市史 研究는 都市의 形態要素와 內部空間構造로까지 觀心領域이 확장되어 既存의 風水地理나 城郭 研究와 함께 보다 多樣한 研究가 進행되기 시작하였다.

韓國都市史 研究에서 1970 年代가 都市史 研究의 土臺를 構築한 時期라고 한다면, 1980 年代는 研究領域과 研究觀點의 多元化 現象이 본격적으로 進행된 時期라 할 수 있다. 먼저 研究對象時期的 側面에서 研究의 무게중심이 古代 都城으로부터 中世都市로 轉移되는 한편, 通史研究로까지 研究領域이 擴張되고 있다. 특히 內容的인 側面에서도 1970 年代 後半期부터 地理學과 考古史學的 觀點에서 試圖되었던 都市內部空間構造 研究가 多樣的 觀點으로 擴張되기 시작하면서, 1970 年代 都市史 研究의 主流를 이루고 있었던 風水地理와 古代 城郭研究로부터 脫피하여 中世 首都와 地方 邑城都市의 城郭 및 內部空間構造를 中心으로 한 都市史 研究로 전이되고 있다.

그러나 1990 年代 以前의 研究成果를 살펴보면 都市史 研究가 都市 自體의 歷史에 대한 觀心보다는 다른 學問分野의 目的達成을 위한 方法論으로 收用되는 것이 普遍的이었다. 1990 年代의 韓國 都市史 研究는 이러한 側面에서 以前 時期와는 差別性을 지니는 중요한 時期라 할 수 있다. 무엇보다도 1990 年代 韓國 都市史 研究에서는 考古歷史學, 都市發達史, 都市計劃史, 都市形態史, 都市景觀史 등 보다 專門化된 研究領域에 基礎한 研究成果物이 排出되기 시작하면서 都市의 歷史 自體가 研究對象으로 간주되는 傾向을 나타내고 있는데, 이 시기 韓國都市史 研究의 特徵的인 現象은 ①研究觀點과 研究領域이 보다 專門化?細分化되면서 體系的인 韓國都市史 研究의 土臺가 構築되기 시작하였다는 점 ②都市의 物的 側面 自體를 歷史研究의 對象으로 한 都市形態史와 都市景觀史 研究가 급격히 發達하고 있다는 점 ③東아시아 三國을 中心으로 한 比較都市史 研究가 本格的으로 試圖되고 있다는 점 등으로 요약될 수 있다. 특히 1990 年代 後半部에는 既存에 一般史와 農村社會를 中心으로 進行되어 오던 社會經濟史 研究가 歷史學界을 中心으로 都市社會 研究로 擴張되는 한편 物理的 側面에서의 都市歷史에 觀心을 갖기 시작하면서 韓國都市史 研究의 새로운 可能性을 提示해주고 있다.

李 京賛

韓国で都市史という用語を使うことはあまりない。また、都市の歴史のみを研究対象としてとらえることも少なかった。これには様々な要因があると考えられるが、都市の歴史そのものが研究対象として認識されるよりも、他分野の研究のための一つの方法論として取り上げられてきたことが主な要因であろう。特に、このような傾向は都市のフィジカルな現象をあつかう歴史研究に目立っている。実際、日本ではフィジカルな現象をあつかう都市歴史の研究が建築史の延長線上にあって、建築史と相対的に連繋を保った概念としての性格が強いと考えられる。ところが韓国の場合、都市歴史の研究は建築史また都市形態史というよりは、考古学または都市計画的な視角と連繋して考えられる傾向をみせている。その結果、都市歴史と関連する大部分の研究では都市史という用語を直接使用するよりは、都市計画史または、都市形成発達史、都市空間構造(都市構成体系)変化などの用語が主に採用されている。

韓国で都市史に関心が示されるようになったのは、30年ほど以前の1970年代からである。しかも、考古学または歴史学中心の都市史研究から離れて、都市のフィジカルな形態を中心とする研究領域がはじまってからは、わずか20年あまりという短い歴史しかない。また、研究の成果が本格的に出始めたのは、ごく最近のことであり、1990年代以前までは数少ない。特に都市史という研究分野の基本的な性格に対して十分な論議が行われていない現状を考えれば、韓国都市史の研究動向を体系的に分析し理解することはそれほど容易なことではない。しかしながら、決して多くはないが、30年あまりの間に進行してきた韓国都市史の研究成果を分析してみると、時代的な研究観点または研究領域の側面からみて、比較的明確な変遷の過程を見せていることがわかる。たとえ観点が少し異なったとしても1970年代以後、韓国で行われてきた都市史研究は大きく、

- ① 1970年代、都市史研究の胎動期、
- ② 1980年代、韓国都市史研究の多元化時期、
- ③ 1990年代、韓国都市史研究の定着期、

という3時期で区分される。

韓国で都市史研究は1970年代から本格的に行われてきた。むろん、以前にも歴史学と考古学の分野で断続的な研究が行われてきたが、これらは都市形態または内部空間構成というよりは、古代の都城の立地要件としての風水地理または都城立地、そして城郭を中心とする研究であった。1970年代に行われた韓国都市史の研究は、基本的には以前から進行してきた歴史学と考古学的の観点を残しているが、都市計画史、建築美学及び歴史地理学的にまで研究の観点が本格的に拡張されている点が以前の時期とは区別される。研究領域の側面からも、1970年代の研究は都市の形態要素と内部空間構造までにその関心の領域が広まり、既存の風水地理または城郭の研究だけではない多様な研究が進行し始めたのである。

韓国都市史の研究で1970年代が都市史研究の土台を構築した時期だとすると、1980年代

は研究領域と研究観点の多元化現象が本格的に行われた時期である。先ず、研究対象時期の焦点が古代都城から中世都市に移る一方、通史研究にまでその研究の領域が拡張された。特に、内容も1970年代後半期からは地理学と考古学的な観点から試みられた都市内部空間構造の研究が、多様な観点から拡張され始めた。1970年代の都市史研究の主流である風水地理と古代の城郭研究から離れ、中世首都と地方の邑城都市の城郭及び内部空間構造を中心とした都市史研究に移った。

しかし、1990年代以前の研究成果全体をみると、都市史の研究が都市自体の歴史への関心より、他学問分野の目的達成のための方法論として使用されることが一般的であった。1990年代の韓国の都市史研究はこのような側面から以前の時期と比べて区別される重要な時期であると言える。何よりも1990年代、韓国の都市史研究では考古歴史学、都市発達史、都市計画史、都市形態史、都市景観史など、より専門的な研究領域において研究の成果物が発表され始め、都市の歴史自体が研究対象として認識される傾向が現われている。この時期、韓国都市史研究の特徴的な現象としては、

- ① 研究観点と研究領域がより専門化、細分化されながら体系的な韓国の都市史研究の土台が構築され始めたという点、
- ② 都市の物的な側面自体を歴史研究の対象とした都市形態史と都市景観史の研究が急激に発達した点、
- ③ 東アジア三国を中心とした比較都市史研究が本格的に試みされている点などに要約される。

特に1990年代後半には、既に一般史と農村社会を中心として行われてきた社会経済史の研究が歴史学界を中心に都市社会の研究に拡張される一方、フィジカルな側面から都市歴史に関心が持たれ始めており、韓国の都市史研究の新しい可能性を提示している。

4. 韓國 住居史 研究의 現況 및 課題

田鳳熙 (서울大 建築學科)

1. 住居史 研究 前史 (解放 以前의 住居史 研究)

韓國의 住居에 대한 近代 學問的 接近은 解放 以前 日本人 學者에 의하여 시작되었으며, 아직도 그들의 研究 成果에 의존하는 바가 있다. 그러나 1920年代 傾부터 시작하는 이 時期의 작업은, 日本人들의 韓半島 進出을 위한 住居의 提供이라는 目的과 異國의 樣式으로서의 風土 建築에 대한 感傷的 記錄에 그친 감이 있으며, 建築史學者가 아닌 地理學者, 民俗學者, 建築家들에 의해 研究가 主導됨으로써 歷史的 變遷을 소홀히 다루었다. 이러한 側面은 解放以後 建築史學的 接近에 否定的 影響을 끼친 것으로 생각된다. 住居史 研究의 主要 爭點은, 日本住居의 傳來起源에 端緒를 提供하는 ‘마루(高床)’의 起源에 관한 것에서 출발하여, 中期以後에는 平面形式의 地域的 分布를 把握하여 地方型을 區分하는 작업과 文化財 級 住宅建築에 대한 調查報告로 이어진다.

研究者는 大部分 1916年 설립된 京城高工의 教授陣과 朝鮮總督府의 技術者(日本의 大學出身과 京城高工 出身)들이었으며, 研究 成果는 數種의 社會實態報告書를 除外하면 모두 ‘朝鮮建築會’ 發行의 「朝鮮 建築(1922年 創刊, 1944年 終刊, 月刊誌)」을 통해 發表되었다.

1.1. ‘民家’論

中下流層 住居에 대한 學問的 關心은 所謂 ‘民家’論에 의하여 시작되었다. 今和次郎에 의한 初期의 民家調査는 柳宗悅의 民藝學과 密接한 關係를 가지고 있는 것으로 보인다. 民藝學의 思想的 淵源은 英國의 Art & Craft Movement까지 거슬러 올라가는 것으로, 中下流層 住居를 近代 學問的 研究對象에 包含하였다는 점에서 意義가 크다. 그러나 所謂 ‘民家’가 朝鮮後期 實學者들의 百科全書類 著述 속에서 言及되는 農家와 뚜렷하게 區分되는 점은, 實學者들의 接近이 住生活의 改善에 焦點을 둔 反面, 近代 日本學者들의 關心은 ‘사라져 가는 것’을 前提로 한 愛好的 感想, 혹은 客觀的 記錄의 水準에 머무르고 있는 점이다. 물론 西歐近代의 傳來時期였다는 점을 考慮하여야겠지만, 이들 農家가 以後 1970年代 ‘새마을運動’에 의한 ‘農村聚落構造改善事業’ 以前까지 機能을 維持하고 있었던 점을 想起한다면, 너무 빨리 改善의 여지를 없애고 廢棄對象으로 치부한 점이 遺憾이다. 또한, 日本에서 사용되던 ‘民家’라는 用語를 그대로 韓半島에 適用함으로써, 以後의 研究에 있어 歷史的 社會階層과 일치하지 않는 概念上의 混亂을 惹起하였다.

1.2. '原型'論

建築學者에 의한 '民家' 研究는 初期의 構造的 記述을 통하여, '마루(高床)'의 存在를 확인하고 그 起源에 대한 論爭으로 이어진다. 아마도 韓國建築史上 最初의 論爭으로 기록될 이것은 村田治郎과 藤島亥治郎 사이에서 벌어지는데, 氣候調節과 聖所에 各各 根據를 두는 南方起源說과 北方起源說은 현재도 未解決인 채로 남아있다.

1930年代 以後에는 平面型의 地域的分布 및 그 形態의 發展過程에 관한 研究로 이어지며, 1940年代에는 少數이지만 韓國人에 의한 研究가 발표되기도 한다. 이 時期의 住居史研究는 野村孝文에 의하여 主導된다. 그는 東京帝大를 卒業하고 藤島亥治郎의 後任으로 京城高工에 赴任하여, 比較的 長期間 韓半島에 머무르면서 以前時期의 研究成果를 綜合하고, 現地調査를 통하여 住居地域型을 分類하였으며, '簡單한 것에서 보다 複雜한 것으로' 進行되는 住居型의 系列化를 試圖하였다.

1.3. '온돌'論 (或은 環境,衛生論)

住居史에 直接的으로 關係된 것은 아니지만, 初期부터 解放前까지 일정한 關心을 유지하고 있는 것이 '온돌'로 대표되는 住居環境 혹은 衛生에 대한 研究이다. 研究의 계기는 前述한 바와 같이 日本人의 韓半島 進出을 위한 住居의 提供에 있다. 日帝時期 韓半島에 進出한 日本人은 大部分 都市에 居住하였으며, 따라서 住居環境에 대한 研究도 都市住居에 集中되어있다.

그 關心은 主로 韓半島의 매서운 겨울 추위를 이겨내기 위한 온돌에 關係된 것이었으며, 이외에 벽돌, 西洋式 家具, 化粧室, 放火 등에 대한 研究도 並行되었다. 開港初期의 暖房施設로는 西洋式 페치카 등이 考慮되었으나, 中期以後에는 關野貞의 言及에서도 알 수 있듯이, 韓半島 氣候에 온돌이 適合하다는 것을 認識하고 그 改良方案 등이 研究되었다.

<主要參考文獻>

- 小田內通敏, 「朝鮮部落調査豫察報告」, 朝鮮總督府, 1923
- 小田內通敏, 「朝鮮部落調査報告」, 朝鮮總督府, 1924
- 今和次郎, 「朝鮮部落調査特別報告」, 朝鮮總督府, 1924
- 岩規善之, 「朝鮮民家の家構に就いて」, 「朝鮮と建築 3-2」. 1924
- 村田治郎, 「南鮮民家の家構私見(1)(2)(3)」, 「朝鮮と建築 4-3,5,7」. 1925
- 藤島亥治郎, 「濟州道の建築(4)」, 「朝鮮と建築 4-9」. 1925
- 善生永助, 「朝鮮의 聚落 - 後篇 同族部落」, 朝鮮總督府. 1935
- 野村孝文, 「開城雜記(4)」, 「朝鮮と建築 12-1」. 1933
- _____, 「朝鮮住宅의 考察」, 「朝鮮と建築 17-5」. 1938
- _____, 「朝鮮住宅의 變遷의 概要」, 「朝鮮と建築 21-10」. 1942
- 眞山武晟, 「北鮮地方의 住宅について」, 「朝鮮と建築 19-12」. 1940
- _____, 「南鮮地方의 住宅について」, 「朝鮮と建築 20-7」. 1941

2. 解放 以後 住居史 研究史 概括

解放 以後 1960年代까지는 몇몇의 先驅的 業績을 除外하고는, 住居史 分野를 포함한 建築史 全般에 걸쳐 뚜렷한 成果를 내지 못하는 研究의 沈滯期라고 할 수 있을 것이다. 當時에는 아직大學에 韓國建築史 科目이 正式 採擇되지 않았으며, 博物館이 주도하는 建築文化財의 管理 역시 文化財의 價値가 높은 住宅에 限定되었다. 이 時期의 研究者로는 發掘 및 文化財 保存事業의 成果를 活用한 金正基와 서울의 住居建築에 대한 새로운 調査를 실시한 朱南哲을 들 수 있으며, 그 成果가 各各 「韓國住居史(1970)」와 「韓國住宅建築(1980)」으로 發刊되었다.

1970年代 들어서, 韓國建築史는 經濟開發에 따른 傳統文化 毀損에 대한 憂慮와 함께 劃期的인 發展을 보게된다. 尹張燮의 「韓國建築史(1973)」는 한글로 쓰여진 최초의 韓國建築史通史로서 大學教材로 폭 넓게 使用되었고, 鄭寅國의 「韓國建築樣式論(1974)」은 樣式史의 解釋과 함께 풍부한 文化財 實測圖版을 收錄함으로써 學生 및 一般大衆의 學問的 接近을 도왔다.

住居史 分野에서의 1970年代의 主要한 成果는 文化財管理局에서 實施한 ‘民俗綜合調査’로 대표되는 實測調査의 普及이다. 地域別로 행해진 調査를 통해 새로운 實測資料의 發掘이 全國의으로 施行되었으며, 調査의 對象 또한 中下流層 住居 및 마을 單位로 까지 확대되었다. 이를 계기로 住居建築에 대한 資料蒐集이 활발히 進行되었으며, 以後 그 結果物이 申榮勳의 「韓國의 살림집(1983)」, 金鴻植의 「韓國의 民家(1992)」로 整理되었다.

1980年代는 大學院教育이 正常化되고, 先進國으로부터 留學生의 歸國이 本格化되며, 大學의 設立이 急增하여(現在의 4年制 建築科 學部の 半數以上) 많은 研究者들을 輩出하였다. 이에 따라 各 大學에서 學位論文이 量産되었고, 「大韓建築學會論文集」이 別刊되기 시작하였다. 結果的으로 研究의 量과 內容에 있어서 以前 時期에 비할 수 없는 發展을 보였다. 具體的으로는 住居의 物理的 特性에 대한 一次的 研究에 限定하지 않고, 傳統住居의 造營原理를 探索하거나 西歐의 先進 理論을 傳統住居에 代入하는 등의 試圖와 함께, 近代期 住居史에 대한 調査가 시작되었다.

1990年代는 대체로 1980年代 研究의 延長線上에 있는 것으로 보인다. 研究의 量은 좀더 增加하였고 內容도 보다 多様해진다. 또 1980年代에 輩出된 많은 研究人力을 바탕으로 ‘韓國建築歷史學會(1991)’가 설립되었다. 研究方法上 注目할 部分은, 歷史學에서의 生活史, 全體史의 影響을 받아 住生活의 復原을 試圖하거나, 都市史와의 連繫가 摸索되는 점, 文獻史料에 대한 接近이 本格化되는 것, 그리고 韓人居住 地域을 中心으로 海外地域에 대한 研究가 試圖되는 것 등을 들 수 있다.

<主要參考文獻>

- 金正基, 「韓國住居史」, 「韓國文化史大系IV」, 高麗大民族文化研究所. 1970
- 金正基 外, 「韓國民俗綜合報告書 1~10」, 文化財管理局, 1971~8
- 朱南哲, 「韓國住宅建築」, 一志社. 1980
- 張保雄, 「韓國의 民家研究」, 寶晉齋出版社. 1981
- 申榮勳, 「韓國의 살림집」, 悅話堂. 1983

金光彦, 「韓國의 住居民俗誌」, 民音社. 1988

리화선, 「朝鮮建築史」, 科學百科事典綜合出版社. 1989

金鴻植, 「韓國의 民家」, 한길사. 1992

3. 歷史的 接近 (對象別 分類)

住居史에 대한 歷史的 接近은 一次史料를 發掘하고, 그 物理的, 空間的 特性을 把握하는 것으로 시작하여(金一鎭), 地域的 特性을 把握하고, 傳統住居의 造營原理와 住生活을 復原하는 것으로 이어졌다. 다음에서는 主 研究對象에 따라 四分野로 나누어 研究의 經過를 살펴보겠다.

3.1. 上流層 住宅 (技法과 空間構成, 造營原理)

住居建築에 대한 關心은 藝術史的 建築史學의 影響으로 인하여, 初期에는 主로 ‘文化財의 價値’가 높은 住宅에 주력하였다. 地域的으로는 慶尙北道 地域의 上流層 住居, 특히 ‘良洞마을’과 ‘安東 일대’의 住宅에 研究勞力이 集中함으로써, ‘口字形 住居’가 上流層 住居의 基本型으로 認識되게 되었으며, 이러한 先入觀이 以後의 研究들에 상당한 影響을 주었다. 慶尙北道 地域에 研究가 集中한 것은 基本的으로 이 地域에 住居建築 文化財가 많이 남아있기 때문이며(國家指定寶物로 指定된 住宅 12個所 中 10個所, 宋周鉉), 특히 良洞마을의 ‘香壇’, ‘觀稼亭’, ‘無添堂’, ‘獨樂堂’ 등은 朝鮮前期의 遺構로써 歷史的 價値가 매우 높다. 그럼에도 不拘하고 特定地域에 偏重된 住居型이 上流層住居를 代表한다고 보는 것은 疑問이다.

上流層住居가 가지는 상대적으로 豊富한 文獻史料와, 造營過程에서의 觀念的 作用에 注目한 研究가 80年代 中葉以後 本格化되었다. 그 하나의 關心은 上流層住居의 造營者였던 性理學者들의 住居觀을 把握하려는 試圖인데, 性理學의 ‘陰陽論’에 근거한 內外空間構成原理(李康勳), ‘理氣論’에 근거한 住居型의 選擇(朴明德), ‘禮制’에 의한 正寢制의 解釋(洪升在, 金基柱), 그리고 性理學의 自然觀에 바탕을 둔 住居地 地理體系의 分析(李元教)에 대한 研究가 있다. 이와 같은 研究는 기존의 傳統 住居에 대한 理解의 次元을 한 段階 높인 것으로 평가되나, 性理學의 原理와 實際 建築 사이의 間隙 등으로 인하여 아직 많은 部分이 向後 研究課題로 남아있다.

住居史研究의 새로운 분야는 生活史的 接近 方法을 이용하는 것이다. 口傳資料와 家傳資料, 繪畫 등 補助史料를 活用하여 당시의 生活相과 住居 建設過程을 復原하려는 研究가 試圖되었다. 具體的으로는 朝鮮時期 居住者의 日記, 行狀, 文集 등을 分析하여 당시의 住生活과 住居 造營過程을 확인하는 研究(田鳳熙, 朴益秀)와 宮闕內殿建築에 대한 住居史的 接近(金東旭)이 있다.

<主要參考文獻>

金一鎭, ‘李氏朝鮮時代 上流住宅의 配置에 대한 基礎的 研究’, 「大韓建築學會誌 64號」, 1975

宋周鉉, ‘文化財로 指定된 全國住宅建造物 現況’, 「大韓建築學會誌 147號」, 1989

李康勳, 「韓國建築에 있어서 陰陽空間의 秩序」, 서울大 TD, 1989

- 朴明德, '朝鮮時代 住居建築의 形態決定要因에 관한 研究', 「大韓建築學會論文集」 1993
- 洪升在, 「朝鮮時代 上流住宅의 禮制的 體系에 관한 研究」, 弘益大 TD, 1992
- 金基柱, 「朝鮮時代 中期以後 班家の 空間使用과 平面形式에 미친 家禮의 影響」 延世大 TD, 1994
- 李元教, 「傳統建築의 配置에 對한 地理體系의 解釋에 關한 研究」, 서울大 TD, 1993
- 田鳳熙, '海南尹氏家の 住宅經營에 관한 研究', 「大韓建築學會論文集 97號」 1996
- 朴益秀, '求禮雲鳥樓의 住居史研究', 「大韓建築學會論文集 112號」, 1998
- 金東旭, '17世紀 朝鮮朝 宮闕內殿建物の 室內構成에 관한 研究', 「大韓建築學會論文集 48호」, 1992

3.2. 中下流層住居 (平面型, 地域的 分布 및 原型의 確認)

한편, 中下流層住居에 대한 研究는 基本的으로 單位 建物이 아닌 地域 單位로 행해졌다. 이는 上流層 住居에 대한 接近이 주로 建築技法이나 住居造營原理를 찾고자 한 것에 비하여, 中下流層住居에 대한 關心은 時間的 持續性을 갖는 住居原型, 地域的 分布에 따른 文化圈의 區分에 필요한 端緒를 探索하려는 目的을 갖기 때문이다. 따라서 地形的 特性을 共有하는 自然的 範圍, 혹은 社會共同體로서의 行政的 單位 등이 研究範圍가 되며, 그 最小單位로서 마을이 選擇되기도 하였다(張聖浚).

中下流層住居에 대한 研究는 平面形態와 지붕架構의 調査에 초점이 모아졌으며, 그간의 研究結果는 全國에 걸친 住居型의 分類로 綜合되었다. 主要한 分類基準은, 房의 보(樑)方向 配列方式, 안채 지붕의 形態, 配置形式 등이다. 그러나 北韓側 資料에 대한 接近이 制限됨으로 인하여, 韓半島 全體에 걸친 住居地圖를 작성하는 일까지는 발전하지 못하고 있으며, 南韓內에서도 여전히 새로운 資料가 發掘되고 있으므로 그 綜合的 整理 結果는 아직 時間을 요한다.

새로운 研究方法으로서, 口傳資料를 分析(李相海 外)하거나 人類學的 面接調査法을 活用한 研究(姜榮煥), 朝鮮後期에 發刊된 陽宅書에 대한 研究(李相海, 金鴻植 外)가 있으며, 最近에는 都市組織과 關聯하여 住宅規模 등을 比定하려는 試圖(金東旭)가 시작되었다.

<主要參考文獻>

- 張聖浚, '安東 土溪洞의 住宅類型에 대한 研究', 「大韓建築學會誌 81號」, 1978
- 李相海 外, '成造歌에 나타난 傳統住宅建築의 內容에 관한 研究', 「大韓建築學會論文集 22號」, 1989
- 姜榮煥, '地方大木들 의知識體系分析을 통한 傳統住居文化의 研究', 「大韓建築學會論文集 40號」, 1992
- 李相海, '19世紀 陽宅論에 나타난 살림집의 간잡이에 대한 研究' 「大韓建築學會論文集 20號」, 1988
- 金鴻植 外, '「民宅三要」를 통하여 본 朝鮮陽宅論에 관한 研究', 「大韓建築學會論文集 20號」, 1988
- 金東旭, '18世紀 舊 水原府 都市地域의 住宅規模와 構造', 「建築歷史研究 9號」, 1996
- 金一鎭, '가치구멍집에 관한 考察', 「大韓建築學會誌 78號」, 1977
- 曹成基, '韓國 南部地方의 民家에 關한 研究', 嶺南大 TD. 1985
- 崔 壹, '朝鮮 中期以後 南部地方 中上流住居에 關한 研究', 서울大 TD. 1989
- 姜榮煥, 「韓國住居文化의 歷史」, 技文堂. 1991
- 金一鎭, 金命進, '慶北地方의 椽집에 관한 研究', 「大韓建築學會論文集」 6-5. 1990
- 曹成基, '韓國 「中部型」 民家에 관한 研究', 「大韓建築學會論文集 40號」, 1992
- 田鳳熙, '朝鮮後期 住居史에 있어서 椽집화現象에 관한 研究', 「大韓建築學會論文集 96號」, 1996

표 1. 住居型 分類表 (第1章 및 第2章의 參考文獻 參照)

岩規 1924. ①	野村 1938. ②	리화선 1989. ③		張保雄 1981. ④		金光彦 1988. ⑤		金鴻植 1992. ⑥	
南鮮型	一般型	외겹집 (외통집)	一字形	單列型 (直家型)	一字形	홀집	피아도집	곶은자집	곶은자집
西鮮型			二字形		* 中央부역形				
中鮮型	都會型	외겹집 (외통집)	ㄱ, ㄷ字形 꺾음집	(曲家型)	ㄴ字形	홀집	경기도집	곶은자집	곶은자집
京城型			口字形파리 집		「」字形		충청도집		
北鮮型	北鮮型	두겹집 (양통집)	정주간有	複列型	5실형	겹집	함경도집	한일자집	외통집
			정주간無		4실형		강원도집		양통집
	붕당有	4실부정형	* 황해도 집		곶은자집		곶은자집		
		3실형	濟州道집					곶은자집	
濟州道型			* 側入形 (*가치구멍집)		* 양반집	곶은자집	곶은자집		

① 筆者는 當時 朝鮮總督府 建築 技師, 地域의 區分을 試圖한 最初의 例.

② 南鮮民家에 대한 村田의 研究報告(1924) 및 濟州道 建築에 관한 藤島의 報告(1925)를 참고하여, 西鮮(平安道), 中鮮(京畿道), 南鮮(三南)地方型을 묶어 一般型으로 하고, 濟州道型을 새로이 편입. 地域보다는 平面型을 우선하여 分類한 最初의 例.

그는 또, 正면칸에서의 부역의 유무를 기준으로 貴紳住宅과 一般住宅을 分類하기도 하였다.(1942)

③ 리종묵(1960), 황철산(1965)의 分類法을 수용, 分斷以後의 北韓學界의 研究成果를 集大成한 것. 外통집과 양통집을 大分類 基準으로 삼은 대표적인 例.

한편, 眞山武星은(1940,1941) 양통집은 北鮮型에, 그리고 外통집은 그외의 모든 型에 一般적이라는 견해를 밝힘으로써, 아마도 최초로 이 용어를 사용하고 있다.

④ 中央부역型, 濟州道型, 側入型, 4室不定形 등 새로운 유형을 추가함.

한편, 金一鎭(1977)에 따르면, 4실부정형은 咸慶道型의 慶尙道式 變形이고, 側入形은 가치구멍집(여칸집과 도투말이집)의 일부를 포함할 뿐이다.

⑤ 郡別로 행해진 오랜 기간의 現地調査를 정리한 결과물이다.

地域別 平面型 區分을 포기하고, 각 地域別로 多樣한 平面例 혹은 一般的 傾向만을 表記함.

⑥ 平面型뿐만 아니라 配置形式 등을 住居型 分類에 포함시켰고, 홀집에서의 變化한 形態로써 겹집을 양통집과 분리하였다. 또한 곶은자집과 한일자집을 大分類項에 둠으로써, 홀집과 겹집, 양통집 사이의 關係를 설정하고자하는 의도를 강조하였다.

그외, 配置形式을 區分하고, 다시 안채構成, 사랑채構成 形式을 따로 分類하는 方法 (최일, 1989)과 農村型 住居와 都市型 住居로 區分하고, 채나눔形式과 平面形式을 同時에 適用하는 方法 (姜榮煥, 1991) 등이 있다. 또한 겹집과 양통집의 분류에 대하여, 지역적인 구분이 아닌 시기적 변화임을 고찰한 연구결과(田鳳熙, 1996)도 있다.

3.3. 近代住居 (洋式住居, 都市住居)

近代住居에 대한 研究는 近代建築에 대한 研究의 일환으로 시작되었다(尹一柱, 朱南哲). 따라서 '近代=西歐'의 立場에서, 洋式建築의 範疇에 포함되는 外人館(金泰永)과 建築家에 의한 作品住宅, 近代的 共同住宅의 시작인 朝鮮住宅營團住宅(富井正憲) 등에 대한 研究가 있었으며, 최근에는 日本式住居의 韓半島內 變容과 影響에 關한 研究(李賢姬, 安聲浩)도 있다.

그러나, 近代 住居에 대한 研究가 본격화된 것은 '우리의 近代'에 대한 肯定的 認識의 結果이며, '近代=都市'라는 模式에 의해서 研究의 폭과 對象이 급격히 擴大되었다. 즉, 自生的 近代에 대한 探究가 實學者의 建築觀(金鴻植)와 近代初期 知識人의 住居意識(金純一)에 대한 研究로 나타났으며, 民衆史的 史觀의 影響으로 研究對象을 擴張하여, 民間建設業者에 의해 大量普及된 都市型韓屋(宋寅豪)과 農村住居의 近代的 變化(田鳳熙, 李鎬冽)에 대한 研究가 있었다. 이러한 近代住居에 대한 研究는 單位住居를 둘러싼 團地內의 道路와 筆地의 構造가 주요한 研究 主題(金聖雨 外)가 되어 住居史와 都市史의 連結고리를 이루며, 研究의 時期的 範圍를 現在까지 擴張함으로써 連續된 歷史敘述을 可能케 하는 점에서 意義를 갖는다.

<主要參考文獻>

- 尹一柱, 「韓國洋式建築 80年史」, 治庭文化史, 1967
朱南哲, 「李朝末부터 1945년까지의 韓國의 住宅變遷」, 「大韓建築學會誌 38號」, 1970
金泰永, 「韓國開港期 外人館의 建築的 特性에 關한 研究」, 서울大 TD, 1990
富井正憲, 「朝鮮住宅營團의 住宅에 關する 研究(1),(2)」 「住總研 研究年報 15,16」, 1988,1989
李賢姬, 「韓國에 있는 日式住居의 變遷과 그 影響에 關한 研究」, 漢陽大 TD, 1993
安聲浩, 「日帝強占期 속複道型 日本式 住宅의 移植과 傾向에 關한 研究」, 釜山大 TD, 1997
金鴻植, 「民族建築論」, 한길사, 1987
金純一, 「朝鮮後期の 住意識에 關한 研究」, 「大韓建築學會誌 98號」, 1981
_____, 「開化期の 住意識에 關한 研究」, 「大韓建築學會誌 106號」, 1982
宋寅豪, 「都市型韓屋의 類型研究」, 서울大 TD, 1990
田鳳熙, 「全南 寶性地域의 凹字形 住居에 關한 研究」 「大韓建築學會論文集 118號」 1998
李鎬冽, 「慶北地方 近代韓屋의 類型과 性格」, 「建築歷史研究 13號」, 1997
金聖雨 外, 「서울 四大門內의 傳統韓屋住居地에 있어서 近代的 變化의 初期性格」 「大韓建築學會論文集 99號」, 1997

3.4. 마을 (空間 構造)

마을(集落)에 대한 關心 및 研究가 시작된 것은 1970年代 후반의 일로, 당시 다목적댐(Dam) 建設로 인한 水沒地區에 대한 調査가 계기가 되어 최초로 마을에 대한 全數調査가 시작되었다(蔚山大, 崔孝昇 外). 以後 마을에 대한 調査는 一次的으로는 中下流層 住居에 대한 研究의 範圍를 最小生活共同體로 확대한다는 側面에서 시작하였으며, 곧 마을의 空間構造에 대한 研究가 뒤따랐다. 1980年代中葉에 시작된 마을의 空間構造에 대한 研究는 道路의 체계, 道路와 筆地의 關係를 비롯하여, 性格別 領域의 空間的 限定과 關係 등을 調査하였으며(韓弼元), 共同住宅의 設計 등에 援用하려는 試圖도 있었다. 1990年代 들어

서는, 朝鮮後期の 特徴的 마을形式인 氏族마을로 範圍를 구체화하고, 내부의 社會的 秩序 및 形成過程의 特性 등을 把握하려는 試圖(朴明德, 田鳳熙)가 있었다.

<主要參考文獻>

蔚山大, 「의인 섬마을」, 1976

崔孝昇 外, 「大清댁 水沒地區 農村聚落 實測調査」, 「大韓建築學會誌 98號」, 1981

韓弼元, 「農村 同族마을의 空間構造의 特性과 變化研究」, 서울大 TD, 1991

朴明德, 「嶺南地方 同族마을의 分派形態와 建築特性에 관한 研究」, 弘益大 TD, 1992

田鳳熙, 「朝鮮時代 氏族마을의 內在的 秩序와 建築的 特性에 관한 研究」, 서울大 TD, 1992

4. 現在的 接近 (傳統繼承論, Design Vocabulary)

住居史에 대한 現在的 接近方式은 歷史的 接近方式과 큰 差異를 보이지는 않지만, 傳統 建築文化의 現代의 繼承이라는 側面에 보다 主眼點을 두는 것으로, 새로운 資料의 發掘보다는, 多樣한 建築計劃理論을 이용하여 一次史料를 再分析하는 작업이 대부분이다. 1980年 「韓國建築의 外部空間」(安瑛培)에 의해 傳統建築에 대한 새로운 接近方式이 선보인 이래, 1980年代를 거치면서 西歐의 先進 建築理論을 직접 代 入하는 경우가 많았고, 최근에는 보다 독립적인 解釋技法을 찾아내기 위한 試圖가 돋보인다. 建築設計實 務와 建築史 研究를 연결하는 고리의 역할을 한 점에 큰 의의가 있다.

4.1. 形態 및 空間的 特性

1960年代末의 ‘傳統論爭’은 傳統建築에 대한 일반인의 關心을 환기시켰고, 이에 따른 傳統建築의 研究붐은 우선적으로 傳統建築物의 構成要素別 物理的 特性을 把握하는 일에 주력하였다. 全國의 주요한 建築文化財에 대한 調査와 함께, 各各의 形態를 蒐集하고, 分類하는 일은 建築設計의 直說的 復古主義로 이어진다. 그러나 住居建築의 경우는 다른 權威建築과 같은 規模나 意匠을 가지지 못하므로, 그 중심에 서는 벗어나게 된다.

이 系列에 속하는 研究로는, 權威建築에 대한 研究에서와 같이 지붕의 形態, 平面 및 立面의 比例 등 形態的 特性을 計量化하는 것과, 住居의 構成 要素를 채, 마당, 담장, 門 등으로 分類하고 그 各各의 物理的 特性을 調査한 研究 등이 있으며, Post-Modern 理論이 소개된 1980年代中葉以後에는 記號論, 場所論 (西垣安比古), 實驗美學 등을 代 入하려는 試圖도 있었다.

住居建築에 대한 現在的 接近의 가장 주요한 部分은 視覺的 體驗을 중심으로 하는 外部空間 혹은 配 置計劃의 側面에 集中되었다. 이와 같은 研究는 80年代以後 豫備建築家들의 碩士論文에 의해 촉발되었 으며, 韓國建築史의 研究붐을 助成하는데 크게 寄與하였다. 앞서 形態的 側面에 대한 研究가 住居建築의 경우 相對的 弱點을 가지고 있는 것에 반하여, 空間的 特性으로 範圍를 확장할 경우, 住居建築은 小規模 의 建築物 여러 채가 모여 있는 配置形式으로 인하여 오히려 集中的인 研究對象이 된다. 더욱이 住居建

築이 가지는 時間的 永續性은 傳統繼承이라는 時代的 要求에 適當한 부분으로 생각되어 일반인의 關心을 모았으며, 많은 새로운 分析技法을 만들어 내는데 기여하였다.

初期의 研究는 外部空間에 중심을 두어 마당의 形式과 性格에 따른 分類 등에 關心이 모아졌으며, 채와 마당의 關係, 마당을 限定하는 構成要素에 대한 研究로 이어졌다. 최근에는 分析의 空間的 範圍를 좀더 확대하여 自然的 地勢와 관련된 建築群의 布置를 分析하거나, 人間을 建築의 중심으로 놓고 특정 觀賞點에서 建築的 場面(金光鉉) 혹은 移動視點에서의 建築的 體驗(金寬錫)을 分析하는 研究 등이 이어 지고 있다.

<主要參考文獻>

西垣安比古, 「朝鮮に於ける「すまい」の場所論的研究」, 九州大 TD, 1989

金光鉉, '住宅 演慶堂의 形態分析', 「空間」 1983年 11月號

金寬錫, '朝鮮時代住居 「獨樂堂」 一廓에 관한 研究 (1), (2)', 「大韓建築學會誌 121, 122號」, 1984

* 그 외 많은 석사 논문들 참조.

4.2. 環境的 特性 - 煖房, 온돌

傳統住居建築에 대한 가장 大衆的 關心事는 온돌이다. 住居史研究 初期以來 온돌煖房方式의 環境工 學的 特性과 함께, 先史時期의 住居址發掘, 文獻史料의 記事分析등을 통한 史的 變遷過程에 관한 研究가 계속적으로 있어 왔다. 그 結果 온돌의 時期的 變化過程에 대한 理解가 深化(金善瑀, 余明錫 外)되었고, 環境工學의 特性에 대한 연구(李璟會)도 현재의 親環境의 生活態度에 부응하여 계속된 關心을 모으고 있 다.

<主要參考文獻>

金善瑀, '韓國 住居煖房의 史的考察', 「大韓建築學會誌 90號」, 1979

余明錫 外, '傳統온돌의 時代的 變遷과 形成過程에 관한 研究', 「大韓建築學會論文集 75號」, 1995

李璟會, '自然環境調節 側面에서 본 韓國傳統住居의 環境特性', 「大韓建築學會誌 130號」, 1986

4.3. 其他 (아파트와 農村住居)

이상과 같은 傳統住居에 대한 研究 이외에, 現대의 都市住居形式인 아파트 및 單獨住宅과 農村住宅 에 대한 研究에 있어서도 部分的으로 住居史的인 接近을 볼 수 있다. 1960年代以後의 單獨住宅과 함께 1980年代以後의 아파트는 各各 都市住居의 基本的 形式으로 作用하였으며, 그 平面型의 變化過程에서 傳統의인 要素를 發見할 수 있다(任昌福, 張成洙). 또한 1970年代 새마을運動에 따른 標準設計圖 普及以 後 農村住宅의 變容狀況을 살펴보는 것(朴庚玉)도 韓國人의 住生活意識을 確認하는데 有效한 資料를 提 供해준다.

<主要參考文獻>

- 任昌福, 「韓國 都市單獨住宅의 類型的 持續性과 變容性에 관한 研究」, 서울大 TD, 1989
 張成洙, 「1960~1970年代 韓國아파트의 變遷」, 서울大 TD, 1994
 朴庚玉, 「韓國農村住宅의 平面構成에 關する 研究」, 大阪市立大 TD, 1988

5. 向後 課題 (住居史의 復原)

以上の 內容은 모두 朝鮮(特히, 後期)에 集中된 遺構들을 對象으로 한 住居史研究의 經過를 整理한 것이다. 지금 남아 있는 遺構들을 보면, 朝鮮前期로 추정되는 10여 채를 제외하면 모두 壬辰倭亂以後에 創建된 것이고, 그 以前의 住居에 대해서는 文獻과 發掘에 依存할 수밖에 없다. 또한 朝鮮後期에 創建된 住居에 대해서도 그 編年이 지나치게 廣範圍하게(50年내지 100 年間隔) 되어 있기 때문에 앞으로 이에 대한 考證이 시급하다. 이러한 次元에서 細部部材에 대한 嚴密한 調査研究(金一鎭)은 큰 의미를 갖는다.

韓國에서 發掘調査된 住居址는 모두 70餘個所 400餘基에 이르지만, 考古學者에 의하여 發掘이 주도 되고, 建築史學者의 參與가 不足하여 住居史研究에 많은 障礙를 주고 있다. 具體的으로 構造形式 및 材料, 道具 등에 대한 研究가 未盡하며, 聚落全體에 대한 調査가 施行되지 않아 全貌를 밝히기 힘들다. (張慶浩, 裴秉宣)

住居에 관련된 記錄은 先史時期의 것은 中國史書의 斷片的 記錄이 있을 뿐이고, 本格的인 記錄은 高麗中期에 編纂된 「三國史記 屋舍條」가 最古이다. 「屋舍條」의 內容은 身分等級에 따른 家舍 및 家堡의 規模, 材料 및 意匠을 制限하는 것으로, 이의 解釋을 통하여 統一新羅時期 혹은 高麗時期의 住居에 대해 비교적 잘 알 수 있다(李相海). 高麗 및 朝鮮前期의 기록은 「高麗圖經」의 「室」내용이 일찍부터 온들과 關聯하여 注目을 모았으며, 最近 이외에도 個人文集類 등에서 住居關聯 條項을 發見하고 있다(李鎬洌). 朝鮮後期는 비교적 풍부한 文獻資料를 남기고 있는데, 王朝實錄 및 儀軌類 등의 官撰史料 외에, 朝鮮後期 實學者들의 著述을 통하여 當時의 住居觀 및 住居狀況을 把握할 수 있는 점은 前述한 바와 같다. (金東旭)

<主要參考文獻>

- 金一鎭, 「朝鮮時代 15世紀 住宅의 □ 雙窓에 관한 研究」, 「大韓建築學會論文集 59號」, 1993
 張慶浩, 裴秉宣, 「住居址의 發掘과 그 成果」, 「大韓建築學會誌 147號」, 1989
 李相海, 「三國史記」 「屋舍」條의 再考察, 「建築歷史研究 8號」, 1995
 李鎬洌, 「朝鮮前期 住宅史研究」, 嶺南大 TD, 1992
 金東旭, 「住宅關係의 文獻과 그 研究」, 「大韓建築學會誌 147號」, 1989

4. 韓國住居史研究の現況と課題

田鳳熙(ソウル大學校助教授, 建築學)

1. 住居史研究前史(解放(第二次世界大戦終結)以前の住居史研究)

韓國の住居に對する近代學問的アプローチは、解放以前の日本人學者たちにより着手され、未だに彼等の研究成果に依存するところがある。しかし、1920年頃より始まるこの時期の作業は、日本人による韓半島への進出のための住居提供という目的で、異國的な様式としての風土建築に對する感傷的な記録に止まる感があり、建築史學者でなく地理學者や民俗學者・建築家により研究が主導されることで歴史的變遷が軽んじられる傾向があった。このような側面は解放以後、建築史學的アプローチに否定的な影響を及ぼしたと考えられる。研究の主要な争點は、日本住居の傳來起源に端緒を提供する‘マル(高床)’の起源に關するものから、1930年代以後には平面形式の地域的分布を把握し、地方型を區分する作業と文化財級の住宅建築に對する調査報告に繋がって行く。

研究者は大部分1916年に設立された京城工業專門學校(1922年に京城高等工業學教に改稱、ソウル大學校工科大学の前身)の教授陣と朝鮮總督府の技術者(どちらも日本の大學か京城高工の出身者)であり、研究成果は數種の社會實態報告書を除きすべて‘朝鮮建築會’發行の『朝鮮と建築』(1922年創刊, 1944年終刊, 月刊誌)を通じて發表された。

1.1. ‘民家’論

中下流層住居に對する學問的關心は、いわゆる‘民家’論から始まった。今和次郎による初期の民家調査は、柳宗悅の民藝學と密接な關係をもつものと見られる。民藝學の思想的淵源は英國のアツ・アンド・クラフツ運動まで遡るもので、中下流層住居を近代學問的の研究對象に包含させた点で意義が大きい。しかし、朝鮮後期の實學者による百科全書類の著述の中で言及される農家と明確に區分されるのは、實學者のアプローチが住生活の改善に焦點をおく反面、近代の日本人學者はその關心を‘失われつつあるもの’を前提とした愛好的感想あるいは客觀的記録の水準に止まるという点である。もちろん、西歐近代の傳來時期であったという点を考慮しなければならないが、これら農家が以後1970年代の‘セマウル運動(新しい村づくり)’による‘農村聚落構造改善事業’以前まで機

能を維持していたという点を想起すれば、あまりにも早く改善の餘地を失くし、廢棄對象として處理してしまったという点は遺憾である。

一方、日本で使用されていた‘民家’という言葉をもそのまま韓半島に適用することで、以後の研究において歴史的社會階層と一致しない概念上の混亂を惹き起こした。

1.2. ‘原型’論

建築學者による‘民家’研究は初期の構造的な記述を通して、‘マル(高床)’の存在を確認しその起源についての論争に繋がった。おそらく韓國建築史上最初の論争として記録されるそれは、村田治郎と藤島亥治郎の間で起こったが、氣候調節と聖所を各各その根據とする南方起源説と北方起源説は、現在も未解決のままである。

1930年代以後には平面型の地域的分布及びその形態的發展過程に関する研究に繋がり、1940年代には少数ではあるが韓國人による研究も發表された。1930年代以後の住居史研究は野村孝文により主導された。彼は東京帝大を卒業後、藤島亥治郎の後任として京城高等工業學校に赴任、比較的長期間韓半島に滞在しながら以前の研究成果をまとめ、現地調査を通して住居の地域型を分類し、簡単なものからより複雑なものへと發展する住居型の系列化を試みた。

1.3. ‘オンドル’論 (あるいは環境・衛生論)

住居史に直接関係したものではないが、初期から解放前まで一定の關心が維持されているのは‘オンドル’に代表される住居の環境あるいは衛生についての研究である。この研究の契機は前述したように日本人の韓半島への進出のための住居の提供にある。日本統治期に韓半島へ進出した日本人は大部分が都市に居住していたため、住居環境についての研究も都市住居が主なものとなった。

その關心は主に韓半島の厳しい冬の寒さを耐えるためのオンドルに集中し、この他に煉瓦・西洋式家具・化粧室・防火などについての研究も並行して行われた。開港初期の煖房施設としては西洋式ペチカなどが考慮されたが、中期以後には關野貞の言及からも分かるように、韓半島の氣候にはオンドルが適合すると認識され、その改良方案などが研究された。

<主要参考文献>

小田内通敏, 『朝鮮部落調査豫察報告』, 朝鮮總督府, 1923

小田内通敏, 『朝鮮部落調査報告』, 朝鮮總督府, 1924

今和次郎, 『朝鮮部落調査特別報告』, 朝鮮總督府, 1924

岩規善之, 『朝鮮民家の家構に就いて』, 『朝鮮と建築』 3-2. 1924

村田治郎, 『南鮮民家の家構私見(1)(2)(3)』, 『朝鮮と建築』 4-3・5・7. 1925

藤島亥治郎, 『濟州道の建築(4)』, 『朝鮮と建築』 4-9. 1925

- 善生永助, 『朝鮮の聚落-後篇-同族部落』, 朝鮮總督府. 1935
野村孝文, 『開城雜記(4)』, 『朝鮮と建築』 12-1. 1933
_____, 『朝鮮住宅の考察』, 『朝鮮と建築』 17-5. 1938
_____, 『朝鮮住宅の變遷の概要』, 『朝鮮と建築』 21-10. 1942
眞山武晟, 『北鮮地方の住宅について』, 『朝鮮と建築』 19-12. 1940
_____, 『南鮮地方の住宅について』, 『朝鮮と建築』 20-7. 1941

2. 解放以後の住居史研究の概観

解放以後, 1960年代まではいくつかの先驅的業績を除いて, 住居史の分野を含めた建築史全般にわたり目立った成果が見られない研究の沈滞期と言えるであろう. 當時, 大學ではまだ韓國建築史という科目が正式に採擇されておらず, 博物館が主導する建築文化財の管理もやはり文化財的價値の高い住宅に限られていた. この時期の住居史研究は, 發掘および文化財保存事業の成果を活用した金正基と, ソウルの住居建築について新たな調査を実施した朱南哲が主導し, その成果が各『韓國住居史(1970)』と『韓國住宅建築(1980)』として發刊された.

1970年代に入ると, 韓國建築史は經濟開發による傳統文化の毀損に對する憂慮とともに劃期的な發展を見せる. 尹張燮の『韓國建築史(1973)』は韓國語で書かれた最初の韓國建築史通史であり, 大學教材として幅廣く使用され, 鄭寅國の『韓國建築様式論(1974)』は様式史的解釋とともに文化財の實測圖版を豊富に収録することで, 學生や一般大衆の學問的アプローチを促した.

住居史分野での1970年代の主要な成果は文化財管理局で實施した‘民俗綜合調査’に代表される實測調査の普及である. 地域別に行われた調査を通して新たな實測資料の發掘が全國的に施行され, 調査の對象も中下流層住居およびマウル(集落)單位に擴大した.これを契機に住居建築についての資料蒐集が活潑に行われ, 以後その結果は申榮勳の『韓國のすまい(1983)』と金鴻植の『韓國の民家(1992)』に整理された.

1980年代は, 大學院教育の正常化, 先進國で修學した留學生の歸國の本格化, 大學設立の急増(現在の4年制建築科學部の半數以上)が原因となって, 數多くの研究者を輩出した. これにより各大學から學位論文が量産され, 『大韓建築學會論文集』も創刊された. 結果的に研究の量と内容において以前の時期とは比較にならない發展を見せた.具體的には, 住居の物理的特性についての一次的な研究に限らず, 傳統住居の造營原理を探索したり, 西歐の先進理論を傳統住居に取り入れるなどの試みとともに, 近代期住居史に對する調査が始まった.

1990年代は大體1980年代の研究の延長線上にあると見られる.研究の量は多少増加し, 内容もより多様化した. また, 1980年代に輩出した多くの研究人力を基盤に‘韓國建築歷史學會(1991)’が設立された.研究の方法上注目される点としては, 歷史學からの生活史や全體史の影響を受けて住居

活の復原を試みたり、都市史との連繋が摸索された点や、文獻史料についてのアプローチが本格化したこと、そして韓國人居住地域を中心として海外地域に對する研究が試みられたことなどが挙げられる。

<主要參考文獻>

金正基，「韓國住居史」，『韓國文化史大系IV』，高麗大民族文化研究所，1970

金正基他，「韓國民俗綜合報告書1～10」，文化財管理局，1971～8

朱南哲，「韓國住宅建築」，一志社，1980

張保雄，「韓國の民家研究」，寶晉齋出版社，1981

申榮勳，「韓國のすまい」，悅話堂，1983

金光彦，「韓國の住居民俗誌」，民音社，1988

リ・ファソン，「朝鮮建築史」，科學百科事典綜合出版社，平壤，1989

金鴻植，「韓國の民家」，ハンギル社，1992

3. 歴史的アプローチ(對象別分類)

住居史に對する歴史的アプローチは、一次史料を發掘し、その物理的・空間的特性を把握することから始まり(金一鎮)、その地域的特性を把握し傳統住居の造營原理と住生活を復原することに繋がった。次に主な研究對象に従って4分野に分け、それぞれの研究経過をしてみる。

3.1. 上流層住宅(技法と空間構成、造營原理)

住居建築についての關心は藝術史的建築史學の影響により、初期には主に‘文化財的價值’が高い住宅に力が注がれた。地域的には慶尙北道地域の上流層住居、特に‘良洞マウル’と‘安東一帯’の住宅に研究成果が集中することにより、‘ロ字形住居’が上流層住居の基本型として認識され、このような先入観が以後の研究に多大な影響を與えた。慶尙北道地域に研究が集中したのは、基本的にその地域に住居建築の文化財が多く残っていたためであるが(國家指定寶物に指定された住宅12件のうち10件、宋周鉉)、特に良洞マウルの‘香壇’・‘觀稼亭’・‘無添堂’・‘獨樂堂’などは朝鮮前期の遺構として歴史的價值が非常に高い。それでも地域に偏重した住居型が、上流層住居を代表すると見るのは甚だ疑問である。

上流層住居のもつ相對的に豊富な文獻史料と、造營過程における觀念的作用に注目した研究が80年代の中葉以後本格化した。そのひとつは上流層住居の造營者であった性理學者の住居觀を把握しようとする試みであるが、性理學の‘陰陽論’を根據とする内外部空間構成原理(李康勳)・‘理氣論’を根據とする住居型の選擇(朴明德)・‘禮制’による正寢制の解釋(洪升在、金基柱)、そして性理學的自然觀を基礎とする住居地の地理體系の分析(李元教)による研究がある。このような研究は既存

の傳統住居についての理解の次元を一段階高めるものと評價されるが、性理學的原理と實際の建築の間の違いなどにより多くの部分が今後の研究課題として残された。

住居史研究の新たな分野は生活史的アプローチを利用するものである。口傳資料と家傳資料、繪畫などの補助史料を活用し、當時の生活相と住居の建設過程を復原する研究が試みられた。具體的には朝鮮時期居住者の日記、行狀、文集などを分析し、當時の住生活と住居の造營過程を確認する研究(田鳳熙、朴益秀)や宮闕内殿建築に對する住居史的アプローチ(金東旭)がある。

<主要參考文獻>

- 金一鎮, 「李氏朝鮮時代上流住宅の配置についての基礎的研究」, 『大韓建築學會誌』64號, 1975
宋周鉉, 「文化財に指定された全國住宅建造物の現況」, 『大韓建築學會誌』147號, 1989
李康勳, 「韓國建築における陰陽空間の秩序」, ソウル大博士論文, 1989
朴明德, 「朝鮮時代住居建築の形態決定要因に關する研究」, 『大韓建築學會論文集』1993
洪升在, 「朝鮮時代上流住宅の禮制的體系に關する研究」, 弘益大博士論文, 1992
金基柱, 「朝鮮時代中期以後班家の空間使用と平面形式に及ぼした家禮の影響」, 延世大博士論文, 1994
李元教, 「傳統建築の配置についての地理體系的解釋に關する研究」, ソウル大博士論文, 1993
田鳳熙, 「海南尹氏家の住宅經營に關する研究」, 『大韓建築學會論文集』97號, 1996
朴益秀, 「求禮雲鳥樓の住居史研究」, 『大韓建築學會論文集』112號, 1998
金東旭, 「17世紀朝鮮朝宮闕内殿建物の室内構成に關する研究」, 『大韓建築學會論文集』48號, 1992

3.2. 中下流層住居(平面型, 地域的分布および原型の確認)

一方, 中下流層住居についての研究は基本的に單位建物でなく地域單位で行われた。これは上流層住居に對するアプローチが主に建築技法や住居造營原理の解明を目指すのに比べ, 中下流層住居に對する關心は, 時間的持續性をもつ住居原型を追究し, 文化圈的區分に必要な端緒を探索する目的から始まったためである。したがって, 地形的特性を共有する自然的範圍あるいは社會共同體としての行政的單位などが研究範圍となり, その最小單位としてマウル(集落)が選擇されることもあった(張聖浚)。

中下流層住居についての研究は, 平面形態と屋根架構の調査に焦点が集まり, その間の研究結果は全國にわたる住居型の分類としてまとめられた。主要な分類基準は, 部屋の樑方向の配列方式や, アンチェ(主屋)の屋根形態と配置形式などである。しかし北朝鮮側の資料に對するアプローチが非常に制限されるため, 韓半島全體にわたる住居地圖を作成するところまでは發展せず, 韓國内でも現在でも新たな資料が発掘されており, その総合的な整理結果はまだ時間を要する。

新たな研究方法として, 口傳資料を分析(李相海他)したり, 人類學的面接調査法を活用した研究(姜榮煥), 朝鮮後期に發刊された陽宅書に對する研究(李相海, 金鴻植他)があり, 最近では都市

組織と関連し住宅規模や構造などを比定しようとする試み(金東旭)が始まっている。

表1. 住居型分類表 (第1章および第2章の参考文献参照)

岩規 1924.①	野村 1938.②	リ・ファソン 1989.③		張保雄 1981.④		金光彦 1988.⑤		金鴻植 1992.⑥		
南鮮型	一般型	ウエギョブチ ブ	一字形	単列型 (直家型)	一字形	平安道型	コブンジャチ ブ	コブンジャチ ブ	コブンジャチ ブ (曲尺型)	
西鮮型			二字形		* 中央厨房形					全羅道型
中鮮型	都會型	ウエトンチブ 単列型	ㄱ, ㄴ字形	(曲家型)	ㄴ字形	ホッチブ (單列 型)	京畿道型	コブンジャチ ブ (曲尺型)	コブンジャチ ブ (曲尺型)	
京城型			ㄷ字形		ㄷ字形		忠清道型			
			ㄹ字形トワ リチブ		ㄹ字形		慶尙道型			
北鮮型	北鮮型	トウギョブチ ブ ヤントンチブ 二列型	チョンジュ カン(厨間)	複列型	5室形	キョブチ ブ (複列 型)	咸慶道型	ハニルジャチ ブ (一字型)	ウエトンチブ (單列型)	
			チョンジュ カン無		4室形		江原道型			ヤントンチブ (二列型)
			ボンダン(封 堂)有		4室不定形		* 黄海道 型			キョブチブ (複列型)
					3室形					
		*側入形 (*カチクモンチ			濟州道型		* 兩班型			
	濟州道型									

① 筆者は當時朝鮮總督府の建築技師、地域的區分を試みた最初の例。

② 南鮮民家についての村田の研究報告(1924)および濟州道建築に関する藤島の報告(1925)を参考にし、西鮮(平安道)、中鮮(京畿道)、南鮮(三南)地方型を一般型とし、濟州道型を新たに編入。

地域よりも平面型を優先させて分類した最初の例。

彼はまた、正面間でのブオク(厨房)の有無を基準に貴紳住宅と一般住宅を分類した。(1942)

③ リ・チョンモク(1960)、ファン・チョルサン(1965)の分類法を取り入れたもの、分断以後の北朝鮮學界の研究成果を集大成。

ウエトンチブとヤントンチブを大分類基準として分類した代表的な例。

一方、眞山武星は(1940,1941)ヤントンチブ(兩通召)は北鮮型に、そしてウエトンチブ(單通召)はその他のすべての型に一般的であるという見解を明らかにすることにより、おそらく初めてこの用語を使用した。

④ 中央ブオク(厨房)型、濟州道型、側入型、4室不定形など新たな類型を追加。

一方、金一鎮(1977)によれば、4室不定形は咸慶道型の慶尙道式變形であり、側入形はカチクモンチブ(ヨカンチブとトルマリチブ)の一部を包含しただけのものである。

⑤ 郡別に行われた長期間の現地調査を整理した結果物である。

地域別の平面型區分を放棄し、各地域別に多様な平面例或いは一般的傾向のみを表記。

⑥ 平面型のみでなく配置形式などを住居型分類に包含し、ホッチブでの變化した形態としてキョブチブをヤントンチブと分離した。またコブンジャチブとハニルジャチブは大分類項に置くことでホッチブとキョブチブ、ヤントンチブの關係を設定しようとする意圖を強調した。

その他、配置形式を區分し、再びアンチェ(主屋)の構成、サランチェ(舍廊棟)の構成形式を別に分類する方法(崔壹, 1989)、農村型住居と都市型住居に區分し、分棟形式と平面形式を同時に適用する方法(姜榮煥, 1991)などがある。また、キョブチブとヤントンチブの分類に對して地域的な區分でわなく時期的な變化であることを考察した研究成果(田鳳熙, 1996)もある。

<主要参考文献>

- 張聖浚, 「安東土溪洞の住宅類型についての研究」, 『大韓建築學會誌』81號, 1978
- 李相海他, 「成造歌に表れた傳統住宅建築の内容に関する研究」, 『大韓建築學會論文集』22號, 1989
- 姜榮煥, 「地方大木の知識體系分析を通じた傳統住居文化の研究」, 『大韓建築學會論文集』40號, 1992
- 李相海, 「19世紀陽宅論に表れたすまいの間取りについての研究」, 『大韓建築學會論文集』20號, 1988
- 金鴻植他, 「『民宅三要』を通して見た朝鮮陽宅論に関する研究」, 『大韓建築學會論文集』20號, 1988
- 金東旭, 「18世紀舊水原府都市地域の住宅規模と構造」, 『建築歴史研究』9號, 1996
- 金一鎮, 「カチクモンチブに関する考察」, 『大韓建築學會誌』78號, 1977
- 曹成基, 「韓國南部地方の民家に関する研究」, 嶺南大博士論文, 1985
- 崔 壹, 「朝鮮中期以後南部地方の中上流住居に関する研究」, ソウル大博士論文, 1989
- 姜榮煥, 「韓國住居文化の歴史」, 技文堂, 1991
- 金一鎮, 金命進, 「慶北地方のキョプチブに関する研究」, 『大韓建築學會論文集』6-5, 1990
- 曹成基, 「韓國『中部型』民家に関する研究」, 『大韓建築學會論文集』40號, 1992
- 田鳳熙, 「朝鮮後期住居史におけるキョプチブ化現象に関する研究」, 『大韓建築學會論文集』96號, 1996

3.3. 近代住居(洋式住居, 都市住居)

近代住居についての研究は, 近代建築に対する研究の一環として始まった(尹一柱, 朱南哲). したがって‘近代=西歐’の立場で, 洋式建築の範疇に含まれる外人館(金泰永)と建築家による作品住宅, 近代的共同住宅の試作である朝鮮住宅營團住宅(富井正憲)などについての研究がなされ, 最近では日本式住居の韓半島内での變容と影響に關聯した研究(李賢姬, 安聲浩)もある.

しかし, 近代住居についての研究が本格化したのは‘我の近代’に対する肯定的認識の結果であり, ‘近代=都市’という模式により研究の幅と対象が急激に擴大した. すなわち, 自生的近代に対する探究が實學者の建築觀(金鴻植)と近代初期知識人の住居意識(金純一)に対する研究に表れ, 民衆史的史觀の影響として研究対象を擴げ, 民間建設業者により大量普及した都市型韓屋(宋寅豪)と農村住居の近代的變化(田鳳熙, 李鎬冽)についての研究が行われた. このような近代住居に対する研究は, 單位住居を取り巻く團地内の道路と筆地の構造が主要な研究主題(金聖兩他)となり, 住居史と都史の連結要素をなし, 研究の時期的範圍を現在まで擴張することにより連続した歴史敘述を可能にする点で意義がある.

<主要参考文献>

- 尹一柱, 『韓國洋式建築80年史』, 治庭文化史, 1967
- 朱南哲, 「李朝末から1945年までの韓國の住宅變遷」, 『大韓建築學會誌』38號, 1970
- 金泰永, 「韓國開港期外人館の建築的特性に関する研究」, ソウル大博士論文, 1990

- 富井正憲, 「朝鮮住宅營團の住宅に関する研究(1)(2)」, 『住總研研究年報』 15,16號, 1988,1989
- 李賢姬, 『韓國にある日式住居の變遷とその影響に関する研究』, 漢陽大博士論文, 1993
- 安聲浩, 『日帝強占期中廊下型日本式住宅の移植と傾向に関する研究』, 釜山大博士論文, 1997
- 金鴻植, 『民族建築論』, ハンギル社, 1987
- 金純一, 「朝鮮後期の住意識に関する研究」, 『大韓建築學會誌』 98號, 1981
- _____, 「開化期の住意識に関する研究」, 『大韓建築學會誌』 106號, 1982
- 宋寅豪, 『都市型韓屋の類型研究』, ソウル大博士論文, 1990
- 田鳳熙, 「全南寶性地域の凹字形住居に関する研究」, 『大韓建築學會論文集』 118號, 1998
- 李鎬冽, 「慶北地方近代韓屋の類型と性格」, 『建築歴史研究』 13號, 1997
- 金聖雨他, 「ソウル四大門内の傳統韓屋住居地における近代的變化の初期性格」, 『大韓建築學會論文集』 99號, 1997

3.4. マウル(空間構造)

マウル(集落)に對する關心および研究が始まったのは1970年代後半で、當時多目的ダム建設による水没地區についての調査が契機となり、最初にマウルに對する全數調査が始まった(蔚山大, 崔孝昇他)。以後マウルに對する調査は、一次的には中下流層住居についての研究の範圍を最小生活共同體として擴大するという側面から始まり、すぐにマウルの空間構造についての研究が続いた。1980年代中葉に始まったマウルの空間構造についての研究は、道路の體系や道路と敷地の關係を始め、性格別領域の空間的限定と關係などを調査し(韓弼元)、共同住宅の設計などに援用しようとする試みもあった。1990年代に入り、朝鮮後期の特徴的マウル形式である‘氏族マウル’に研究範圍を具體化し、内部の社會的秩序および形成過程の特性などを把握しようという試み(朴明德, 田鳳熙)がある。

<主要參考文獻>

- 蔚山大, 『宜仁・ソムマウル』, 1976
- 崔孝昇他, 「大清ダム水没地區農村聚落實測調査」, 『大韓建築學會誌』 98號, 1981
- 韓弼元, 『農村同族マウルの空間構造の特性と變化研究』, ソウル大博士論文, 1991
- 朴明德, 「嶺南地方同族マウルの分派形態と建築特性に関する研究」, 弘益大博士論文, 1992
- 田鳳熙, 「朝鮮時代氏族マウルの内在的秩序と建築的特性に関する研究」, ソウル大博士論文, 1992

4. 現在のアプローチ(傳統繼承論, Design Vocabulary)

住居史に對する現在のアプローチは、歴史的アプローチと大きな違いは見られないが、傳統建築文化の現代的繼承という側面により主眼點を置くもので、新たな資料の發掘よりは、多様な建築計劃理論を利用し一次史料を再分析する作業が大部分である。

1980年, 「韓國建築の外部空間」(安瑛培)により傳統建築に對する新たなアプローチが試みられ

て以来、1980年代には西歐の先進建築理論を直接取り入れる場合が多かったが、最近ではより独立な解釋技法を摸索する試みが見られる。これは、建築實務に従事する者に傳統建築文化に對する關心を喚起したところに大きな意義があり、實際の建築に應用されることもある。

4.1. 形態及び空間的特性

1960年代末の‘傳統論争’は傳統建築に對する一般人の關心を喚起し、傳統建築の研究ブームを起こすこととなり、傳統建築物の構成要素別の物理的特性を把握することに力が注がれた。全國の主要な建築文化財に對する調査とともに、それぞれの形態を蒐集・分類することは建築設計の直説的復古主義に繋がる。しかし、住居建築の場合は、他の權威建築のような規模や意匠をもたないため、その中心からは外れる。

この系列に屬する研究としては、權威的建築に對する研究に使用された屋根の形態、平面および立面の比例などの形態的特性を計量化することと、住居の構成要素を棟・マダン(庭)・口・門などに分類し、その各各の物理的特性を調査した研究などがあり、ポストモダン理論が紹介された1980年代中葉以後には記號論や、場所論(西垣安比古)、實驗美學などを取り入れようとする試みも見られた。

住居建築における現在のアプローチの最も主要な部分は視覺的體驗を中心とした外部空間、あるいは配置計劃的側面に集中した。このような研究は1980年代以後の豫備建築家の修士論文により觸發され、韓國建築史の研究ブームを助成するのに大きく寄與した。先の形態的側面に對する研究が住居建築の場合は相對的な弱點をもっているのに對し、空間的特性に範圍を擴張する場合、住居建築は小規模な建築物が數多く集合した配置形式により重要な研究對象となる。さらに、住居建築のもつ時間的永續性は、傳統繼承という時代的要求に適當な部分として考えられ、一般人の關心を集め、多くの新たな分析技法を作り出すことに寄與した。

初期の研究は外部空間に重心が置かれ、マダン(庭)の形式と性格による分類などに關心が集まり、棟とマダンの關係、マダンを限定する構成要素に對する研究に結びついた。最近では分析の空間的範圍をより擴大し、自然的地勢と關聯した建築群の配置を分析したり、人間を建築の中心に置き特定の觀賞点から建築的場面(金光鉉)、あるいは移動視點からの建築的體驗(金寬錫)を分析する研究などが行われている。

<主要參考文獻>

西垣安比古、「朝鮮に於ける「すまい」の場所論的研究」、九州大學博士論文、1989

金光鉉、「住宅演慶堂の形態分析」、「空間」1983年11月號

金寬錫、「朝鮮時代住居「獨樂堂」一廓に關する研究(1)(2)」、「大韓建築學會誌」121, 122號, 1984

4.2. 環境的特性 - 煖房, オンドル

傳統住居建築についての最も大衆的な関心事はオンドルである。住居史研究の初期以來オンドルの煖房方式の環境工學的特性とともに、先史時期の住居址發掘、文獻史料の記事分析などを通じた史的變遷過程に関する研究が繼續的に續けられてきた。その結果、オンドルの時期的變化過程についての理解が深化(金善瑀, 余明錫外)し、環境工學的特性についての研究(李璟會)も現在の親環境的な生活態度に應じて新たな關心を集めている。

<主要参考文献>

金善瑀, 「韓國住居煖房の史的考察」, 『大韓建築學會誌』90號, 1979

余明錫他, 「傳統オンドルの時代的變遷と形成過程に関する研究」, 『大韓建築學會論文集』75號, 1995

李璟會, 「自然環境調節側面から見た韓國傳統住居の環境特性」, 『大韓建築學會誌』, 1986

4.3. その他(アパートと農村住居)

以上のような傳統住居についての研究以外に、現代の都市住居形式であるアパートや單獨住宅、農村住宅についての研究においても部分的には住居史的なアプローチを見ることが出来る。1960年代以後の單獨住宅とともに、1980年代以後のアパートはそれぞれ都市住居の基本的形式として作用し、その平面型の變化過程から傳統的な要素が発見できる(任昌福, 張成洙)。また、1970年代のセマウル運動による標準設計圖の普及以後の變容狀況を見ることが(朴庚玉)も韓國人の住生活意識を確認するのに有効な資料を提供してくれる。

<主要参考文献>

任昌福, 「韓國都市單獨住宅の類型的持續性と變容性に関する研究」, ソウル大博士論文, 1989

張成洙, 「1960~1970年代韓國アパートの變遷」, ソウル大博士論文, 1994

朴庚玉, 「韓國農村住宅の平面構成に関する研究」, 大阪市立大博士論文, 1988

5. 向後の課題(住居史の復原)

以上の内容は、全て朝鮮時代(特に後期)に集中する遺構を對象とした住居史研究の経過を整理したものである。現在残っている遺構を見ると、朝鮮前期と推定される10餘棟を除けば、全てが壬辰倭亂(文祿の役)以降に創建されたもので、それ以前の住居については文獻と發掘に依存するしかない。また、朝鮮後期に創建された住居についてもその編年があまりにも幅廣く(50年ないしは100年間隔)、これからの考證が急がれる。このような次元で、細部部材についての嚴密な調査研究(金

一鎮)は大きな意味をもつ。

韓国で発掘調査された住居址は全部で70餘箇所、400餘基に上るが、考古學者による発掘が主導されたため、建築史學者の參與が不足し住居史研究の上で大きな障害となっている。具體的に構造形式や材料、道具などについての研究が不足し、聚落全體に對する調査が行われず、聚落の全貌を明かにし難い狀況である(張慶浩, 裴秉宣)。

住居に關聯した記録は、先史時期のものは中國史書に登場する斷片的な記録があるのみで、本格的な記録としては高麗中期に編纂された『三國史記』の「屋舍條」が最古である。「屋舍條」の内容は身分等級による家舍および家堡の規模・材料および意匠を制限するもので、この解釋を通して統一新羅時期あるいは高麗時期の住居について比較的よく理解できる(李相海)。高麗時期の記録は『高麗圖經』の「□室」の内容が早くからオンドルと關連して注目を集め、最近この他にも個人文集類などから住居關連條項が発見されている(李鎬洙)。朝鮮後期は比較的豊富な文獻資料を残しており、王朝實錄および儀軌類などの官撰史料の他にも、朝鮮後期の實學者の著述を通し、當時の住居觀や住居狀況を把握することができる点は、前述の通りである(金東旭)。

<主要參考文獻>

- 金一鎮, 「朝鮮時代15世紀住宅の□雙窓に關する研究」, 『大韓建築學會論文集』59號, 1993
張慶浩, 裴秉宣, 「住居址の發掘とその成果」, 『大韓建築學會誌』147號, 1989
李相海, 「『三國史記』「屋舍」條の再考察」, 『建築歴史研究』8號, 1995
李鎬洙, 「朝鮮前期住宅史研究」, 嶺南大博士論文, 1992
金東旭, 「住宅關係の文獻とその研究」, 『大韓建築學會誌』147號, 1989

Ⅱ 邑城と城下町 ——日韓比較都市史研究会シンポジウム

シンポジウムの記録

ここに収載したのは 1999年10月26日 に東北大学国際文化研究科大会議室において、東北大学国際文化研究科アジア社会論講座との共催で開催したシンポジウムの記録である。開催にいたる経緯は「まえがき」に簡単に記した。報告者とテーマ、そして討論の発言者は以下の通りである。

■報告者とテーマ

1. 玉井 哲雄 研究会とシンポジウムの主旨説明
2. 金 東旭 18世紀における水原華城の建設と商業都市
3. 李 相椽 邑城の都市形態
4. 千葉 正樹 城下町仙台の建設と変容
5. 土本 俊和 城下町松本について

■討論参加者（発言順）

- 小泉 和子（愛知県立芸術大学）
瀬川 昌久（東北大学東北アジア研究センター）
平川 新（東北大学東北アジア研究センター）
前田洋一郎（東北大学大学院生）
入間田宣夫（東北大学東北アジア研究センター）
千葉 正樹（東北大学大学院国際文化研究科）
李 善姫（東北大学大学院生）
斎藤 善之（東北学院大学経済学部）
宋 寅豪（ソウル市立大学校建築都市造景学部建築科）
李 京賛（圓光大学校工科大学都市工学科）

当日の報告は日本側は日本語、韓国側は韓国語で行い、適宜通訳の方々に訳していただいた。討論部分も基本的には同様である。

掲載した内容は、当日の録音内容を原稿に起こし、報告者それぞれに見ていただいて加筆修正していただいたものを基に、討論部分も含めて玉井哲雄の責任で編集構成したものである。個々の報告についての質疑内容はそれぞれの報告直後に行ったが、この記録では最後にまとめた。当日配布したレジュメについては、その内容を再構成して掲載した。金東旭報告のスライドは、編集の都合で割愛した。

当日の通訳は李雄九、李善姫、金真珮（いずれも東北大学大学院生）で、テープ原稿起こしと整理は大石真巳（千葉大学大学院生）、長川良宣（千葉大学学生）が分担した。

東北大学国際文化研究科アジア社会論講座関係者の方々には会場の設営、整理など大変お世話になった。記して感謝しておきたい。

1. 研究会とシンポジウムの主旨説明

玉井 哲雄

■研究会の内容

最初に、この研究会の経緯、現在に至るまでどういうことをやってきたのか、現時点でどのようなことを考えているのかということの説明させていただきます。

「日韓比較都市史研究会」とは、仙台でこのシンポジウムを開くにあたって、会の名称が必要ということではじめて名乗りました。これからは積極的に使っていこうと思います。この研究会は、1998年度から3年間の「日本と韓国の中・近世における都市空間の比較研究」という研究題目の文部省科学研究費補助金が採択されて発足しました。別紙リストのメンバー（研究組織参照）で、共同研究を始めて今年が2年目になります。実際には、日本側と韓国側の都市史研究者が、相互の都市を訪問しあって実地調査し、その都市の現場で議論し、また研究会でお互いの報告を基に討論し、研究を進めていこうということです。

まず昨年度1998年度は、8月に我々日本側が韓国の方に参りまして、後でお話がある邑城を中心とする都市を、韓国側研究者の案内で見廻りました。それから今年1月の終わりから2月の初めにかけて、日本の近畿地方に韓国の方々に来て頂いて、私達日本側の研究者と一緒に近畿地方の主要な都市、京都、大阪、そして今井、富田林などの寺内町を廻って、やっぱり都市の現場で議論して参りました。

それから今年度1999年度は、6月の終わりから7月の初めにかけて、韓国ソウルの「内需洞」という地区の都市住宅に日本側研究者が行って、韓国側研究者の方々の実測調査に参加させて頂きました。たくさんの韓国の学生が参加した調査でしたが、日本側の学生も参加しました。今年度の2回目が、ここに来てやっております東北地方の都市調査です。

この間に、研究会を開いています。1回目・2回目は、日本側、韓国側それぞれの都市史研究がどういう状況にあるのかということをお互いに資料を出し合って説明し合い、議論するというところから始めました。3回目の近畿地方の都市をまわっている間には、近畿地方の都市の具体的データに基づいた報告も行いました。

今年度の第4回研究会は、ソウルの京畿大学校で行いまして、この時は近代都市住宅の調査を致しましたので、日本側と韓国側それぞれが近代都市ないし近代都市住宅の調査データに関する報告を行い、お互いにデータ交換を致しました。以上述べたような経過で私達の研究会はやってまいりました。

■研究会にいたる経緯

この様な共同研究が実現するに至った過程を遡って説明させていただきます。

1960年代の後半以来、都市史研究は日本の学会の中で一定の地位を占めてまいりました。東京オリンピックが1964（昭和39）年にありました。ちょうどあの頃に、東京の都市改造が一気に進みました。都市改造と言えば聞こえはいいのですが、都市破壊、都市に様々な形で維持されていた来た伝統が、その段階で一気に失われてしまったといってしまうでしょう。いわゆる高度経済成長という日本社会全体の変化に伴う変動でした。これこそが日本の都市史研究が本格的に始まった契機であると私は考えております。

その都市史研究の成果が、論文とか研究書という形で出始めたのが1980年代です。そして1980年代の終わりから1990年代初めにかけての時期に転換期が来ました。ちょうど1990年とか1991年頃に、例えば「都市史研究会」「近代都市史研究会」「中世都市研究会」などという、一連の都市史研究の研究会ないし研究グループが発足しております。またその時期に、1990年が江戸開府400年、1994年が平安遷都1200周年という記念行事が行われました。同時に韓国では1994年にソウル定都600周年記念の記念行事が行われていました。

この研究会を始める大きなきっかけとなった「ソウル定都 600年韓日国際シンポジウム」も開かれました。たまたま私はそれ以前から、ソウルの都市史に興味を持っておりまして、ソウルに何回か行っていた関係でそのシンポジウムに参加させて頂きました。その時に、ここにいらっしゃる金東旭先生ともお話をしました。その当時日本の都市史研究は、かなり盛んになっていたんですけども、韓国の方ではまだ今一つそういう感じではないという印象で、やっぱりこれは日本と韓国の都市史研究の交流を図らなければならないと思いました。

その1994年に、実は後で報告して頂く李相楳先生が日本にいらっしやいまして、1995年4月から私のいる千葉大学に1年間外国人研究者という形で在籍されることになりました。その間の1年間、日本のあちらこちらの都市を見て歩いて頂いて、益々これは日本と韓国の都市を色々な形で比較しなくてはならないということに思い至りました。というのは、先程ちょっと申しました様に、日本の都市史研究が1990年以降、転換点を迎えていました。研究の方向がやや不明瞭になってきて、先が見えないという所に来ていました。研究者の多くが考えたことは、日本の中だけではなく、少し外国まで視野を広げてみようではないかということでした。しかし、それは専らヨーロッパの都市との比較をめざしていました。「比較都市史研究会」という研究会が、既に10年以上前から存在しております。日本とヨーロッパ経済史の方々が中心になって作られた研究会で、研究内容自体は非常に優れたことをしてらっしやいます。しかしながら、やはりヨーロッパ中心の立場から日本の都市を見ることになります。

都市史研究の議論は、必ず都市とは何ぞやから始まる訳ですけど、ヨーロッパ的な都市を基準に考えたら、日本に都市はないという極論すら、その当時まだありました。それでは城下町は都市ではなくなってしまう。これはおかしい。私自身は江戸という日本列島の中心都市の研究をやっておりましたので、とりあえず、朝鮮半島の中心都市としてのソウルを考えたい。江戸とソウルをどういう形で対比させて考えようか、比較が上手くはいかないような気が致しましたが、ともかくお互いをよく知らないといけないという時に、李相楳先生がいらっしやいました。そこで日本と韓国の都市史の比較研究を計画しました。李相楳先生がいらっしやる時に、科研のタイトルと内容を考えて申請致しました。

実際にこの申請が通ったのは3年後で、実際に始まったのは1998年、昨年からはじまりました。ともかくそういう形で始まった研究会ですから、まず日本の研究者は韓国の都市を知らない、それから韓国の都市史研究者は日本の都市を充分まだご存じない。だから、お互い、まず基礎から勉強しよう。少なくとも現場に行って、現地で都市をお互いに見ながら議論をして、基本的な知識をまず蓄積して、そこから意見を積み重ねて行こうということを始めました。

■城下町と邑城

ですからまずは日本の場合には「城下町」、そこから私の場合は韓国の代表的な都市として「邑城」を考えました。城下町と邑城を取り上げたことが、日本と韓国の都市を比較する場合にいいのかどうかはまだよく分かりません。なぜ城下町と邑城を持ち出したのかというと、日本の場合、城下町を除いて都市を論じることはできないだろうと考えました。日本の都市類型には、例えば平安京、平城京に代表される都城がありますし、寺内町とか港町、いわゆる城下町に入らないような都市もあります。それから近代都市は、また別の概念で考えなくてはならないということがあります。ただ日本の都市の歴史を考えて、城下町で形成された都市のあり方は、恐らくそれ以前の都城から受け継いでいるはずだし、それから中世段階で形成されてきた都市的な伝統受け継いでいる。そのような都市的な伝統は、近代そして現代の都市に受け継がれているはずだというふうに考えました。

韓国のことは私はまだよく分かりませんが、何回か韓国に足を運んで受けた印象では、韓国、朝鮮半島全体の都市を考える場合に、長期間存在して、なおかつ広範囲、朝鮮半島のそれぞれの地域に必ずあって、それが韓国の中で重要な位置を占めてきたのが邑城であろうという様に考えました。そこで、とりあえず城下町と邑城を対比させることによって、比較研究をはじめようと考えました。ともかく出発点として今日のこの研究会があるのであり、今後のことも含めて今日は考えていきたいと思っております。

■共同研究の可能性と比較の視点

最後に共同研究の可能性と比較の視点について考えておきます。共同研究の可能性というのは、日本と韓国の共同研究ということがあります。それから異なる研究分野間の共同研究があります。私は建築史ですが、文献史の方がいらっしゃるし、重要な関連分野として考古学があります。実は今日の午前中、青葉城の石垣の修復現場を見せて頂きました。現場の担当の方に、非常に興味深い解説をして頂きました。土木技術史的な観点ということになりますが、城の石垣が、その時期によってどの様な意味の違いが出てくるのかということ、非常に丁寧に説明して下さいました。あれは都市史的な観点から見ても、非常に重要な視点ではないかと思えます。つまり考古学の観点も必要で、そういう共同研究ということが、日本の中だけでも必要になってきています。恐らく韓国でもこれから必要になってくるのだと思えます。そういう多彩な分野間の共同研究の可能性をこの研究会では追求したいと思っているということです。

先程の比較の視点というのは、先程申しました様に、城下町と邑城というのをとりあえず取り上げて、そこから話を広げていけばいいのではないかということ、そうして行けば、古代都城のことも、近代都市のことも対象にしていけるのではないかと。韓国でも古代都城の研究はあるし、発掘も行われています。それから近代の都市計画は色々議論されてると思えますけれども、そういうことも含めて城下町と邑城という視点で、再構成してみるとどうなるのかというのが、現時点で私が考えていることです。

今日は韓国側の邑城に関しての研究を金東旭先生、李相楳先生に、かなり無理をお願いして、テーマを設定していただきました。もちろん二人の方は韓国でも、この研究の分野では第一人者であると思えます。私もその内容に大いに興味があり期待しております。報告よろしくお願い致します。

2. 18世紀に於ける水原華城の建設と商業都市

金 東旭

まず、こういう立派な研究会に参加できたこと、東北大学は韓国でも非常に有名な大学でして、ここで発表できることは光栄と存じます。私は韓国ソウルの京畿大学に勤めていますが、昭和51年から6年間ほど、早稲田大学理工学部建築学科の渡辺保忠先生の所で、建築史を勉強しました。その時、私が勉強したのは、建築生産史でした。大工さんの組織を扱います。その大工の組織を記録した文献の中で、韓国の水原（スオン）のお城の資料で非常に詳しい物がありまして、博士論文を出してから、水原のお城のことを少し勉強し始めました。それでお城を勉強すると、結局韓国の都市は邑城の中で発達をしますので、城だけじゃなくて、その城の中にある都市のことはやっぱり問題になるし、研究の対象に难道ろうと思いました。幸いにちょうどその時期に、後ほど発表する李相棟先生が、同じ大学の学科と一緒に勤めるようになりました。李相棟先生にいろいろ都市史のことを勉強させて頂いて、水原のお城のことを少しまとめることが出来ました。私の場合は、都市自体のことはあまり専門とは言えないですけど、やはりこれからお城のことを考える時には、大工の組織のことを勉強しなければならないと思った時期に、ちょうど玉井先生からこういう研究会へお誘いいただき、昨年から一緒に研究することになりました。

今日の私の発表のテーマは、題目に書いてある様に「18世紀における水原華城の建設と商業都市」で御座います。商業都市を扱うのは大変難しいことでして、まだ韓国においてそのような概念は成立していません。今日の発表を通じて、商業都市を扱うことによって、自分にとってもこれからの課題をどのように研究していけばいいのか展望する機会として考えております。

主に扱う時期は18世紀です。まず18世紀韓国におけるソウル都市と水原都市を比較して、最後に商業都市に関することを述べさせていただきます。レジメ1ページに書きましたように18世紀というのは、韓国において過渡期であると思っております。主にその時までの中央集権的統治体制より少しずつ変化がありまして、農業生産における変化とか、主に商業における変化が著しいと申し上げられます。今日取り上げる18世紀ソウル都市は、その変化以前の都市です。ソウルと水原を取り上げて比較することによって、18世紀以前の都市と、それ以後の都市の比較研究が出来るというように思っております。

(スライドによる説明)

ここにいらっしゃる皆さんは、まだ水原とかソウルにいらしたことがないと思いますので、スライド*などで説明させて頂きたいと思っております。

* この記録ではほとんど省略せざるをえないが一部を写真掲載で代えているレジメ図も参照

まずソウルの位置です。南韓国を横切る、漢江（ハンガン）という大きな川が流れてお

ります。水原という都市は、ソウルを守るために、海岸の近くに形成された都市です（レジメ図1参照）。18世紀になりますと、南の方の豊富な資源とかがソウルに集まるようになります。そのような理由によって、交通要所として水原はもっと広い所に移る必要が出て来ると思います。

ソウル（漢陽）の立地の背景というのは、東西南北が山に囲まれています（レジメ図2参照）。水原の方は海岸と言いますか平らな所に出来ております。現在のソウルは、拡大発展してこれより広いのですが、昔のソウルというのは山城の輪郭の中です。中心部に景福宮という宮殿があります（写真参照）。左の方に社稷壇（シャシヨクダン）という祭事を行う所があり、右の方が宗廟（写真参照）という建物です。そして図2では白抜きになるのが主な幹線道路です。

朝鮮時代初期における石垣は、ご覧になるとお分かりいただけるように（写真省略以下特に指示のないものは省略）、下の方は大きい石が敷かれておりまして、上の方は小さい石が敷かれています。

20世紀初期における南大門の写真です。現在の南大門です（写真参照）。現在のソウルの中心の写真です。山に囲まれているのは現在も変わりません。

18世紀ソウルを描いた地図をあげています（レジメ図3参照）。ここで注目して頂きたいのは、T字の様な道が出来ているのがご覧になると分かると思います。18世紀を過ぎた所でT字の所では、盛んな商業活動が行われるようになります。

この絵は水原の移転する以前の地図で御座います。ソウルを守るために作られた都市として理解出来ます。まず山に囲まれていたことが分かると思いますが、その中に主に一般住民が住んでいました。

この絵は新しい場所に移った水原の絵です（レジメ図4参照）。元々の水原という所は絵の下の方にあたる場所にありました。18世紀末に真ん中の所まで移転が進んでおります。交通がとても便利な所でありまして、上の方はソウルで下の方は南の方へ繋がる場所であります。まず水原の内郭が成立し、その後、外郭にあたる所がどんどん出来ていきました。

城郭の名称を「華城」と変えました（レジメ図5参照）。この水原の主な特徴としては、西の方に山がありまして他の方面は平地でした。西の方に「官衙」がありまして、道が主に十字の形を取ったので違ってきています。この十字の道沿いに商店街が出来ております。現在の水原です。北の方の正門の写真です。西の門と城壁が繋がっている写真です。都市の真ん中を横切る水路の門（写真参照）です。

この石垣は、さっきご覧になったソウルの石垣の積み方とは異なっております。ソウルの石垣というのは、下の方に広い石を敷いて、徐々に上へ小さい石を積んでいました。水原城では上下の石の面積における差はあまり見られず、同じサイズの石を積んでおります（写真参照）。城壁の周りには防御のため施設がたくさん作られております（写真参照）。煉瓦で作られた物です。

この写真は20世紀初期に当たる物で、北の方の門の所にあった商業地域です。これは南の方の物で御座いまして、左右に商店が形成されているのがお分かり頂けると思います。20世紀初期の水原城の城壁がこの様に形成されています。一般人たちの居住地域です。北の門と南の門を結ぶ大きな道路が出来ています。北と南を貫くこの様な大きい道路沿い

に、商業の活動などが頻繁に行われていたと思います。

この図は次の発表者でいらっしゃる李相棟先生がお作りになった図（省略）です。1910年に作られた物をベースにしております。一般住民が住んでいた地区と畑があります。また同じく北と南を結ぶ大きな道路が見られます。上の方に官庁が見られますし、その前の道路がやはり十字の形を取っていることが分かります。この道路の名前は「十字街路」です。この道沿いに商店が並んでありました。ソウルの主な商店街というのはT字の形を取っていましたが、水原では意図的に十字の形を取った道路を作っていたというように記録されています。南の方の外側に居住地が広く見られます。橋が見られます。土地を細長く区画することが特徴になります。

この地域の地名というのは、おそらく昔の「柳川（ヤナゲ）店」という店の名前から由来した地域であると思います。水原のこの部分に見られる様に、上下で広がっている様なこの分布の形は他の所でも見られています。

この図はやはり李先生が作った図（レジメ図6参照）です。ソウルの北の高陽縣（コウヤン）という地域の図です。この地域は中国からソウルに入るために、最後の所で泊まった客舎（キヤクシャ）のあった所です。真ん中の所に官庁があります。普通はこの官庁を中心に小さな町が形成されますが、この都市の主な特徴としては、右側で上下にまたがっているような居住地があります。右の方にあるのが道ですが、上の方は中国に繋がってますし下の方はソウルに繋がる道です。建物が建てられていた土地であります。これも上下にまたがっている様な区画が見られます。

この地域は20世紀初期に酒場が沢山ありました。これはソウルにあった商店の一つの写真です。これも種類は違いますが他の商店の建物を写した写真です。水原城は韓国の戦争の時だいぶ壊されています。1940年～1950年の間に、都市中心部に対する整備が行われました。北の門から南の門に繋がる道路です。昔の道路の幅は壊されて、現在はずっと広い幅の道路が作られています。その時ほとんどの商店も破壊されたと見られています。他の所も直線状に近い都市改革が行われます。でも所々は昔の様な路地が残っています。

現在水原城は世界遺産として登録されています。選ばれたのは主に城壁であると思われがちですが、それだけではなくその中身、都市内部も結構注目されたと思います。

（スライド説明終了）

レジメ2ページをご覧ください。図3に18世紀頃のソウルの図が描かれています。下の表には昔の水原の住民構成と家屋の規模を表にまとめました。水原はソウルを守るために作られた都市でして、あまり規模的には大きくはなかったと思います。都市中心部には約400戸ぐらいの家屋がありました。その中で主に都市中心部にあった244戸の家屋における住民構成、家屋規模が知られています。この表は18世紀地方中小都市における資料として価値があると思います。主に都市に居住していたと見られる階層は良民でして、レジメの1ページに説明がありますように、農民とか賤民に属する人々です。そういう良民たちが住んでいた建物は、6間（カン*）ぐらいの面積があったと思います。244戸の家屋の中で瓦でできている家は一戸しかありませんでした。大きい家屋は20間以上の物もありましたが、普通はだいたい6間ぐらいでした。水原が新しい場所に移ることによって、人口

などもおびただしく増えました。

*日本の尺間法による間(ケン)、ないし柱間の数を表す間とは違って、韓国では柱4本によって構成される建築の最小単位を間(カン)とし、建築の規模もこれで表現する。その柱間の長さは一定ではない。

レジメ3ページ上を見て下さい。新しい水原を作った理由というのは、ソウルの南の方に巨大な商業都市を作るためだと思います。その目的というのは王権を一層強くするための措置だと思います。そういう商業活動を活発にするために、海岸というか平地に村を作っていたと思います。

レジメ4ページをご覧ください。水原のその後の発展過程についてはまだ明らかではありません。建設当時、色々な商人を集めて一つの都市として昇格させようとしたそういう試みは見られますが、20世紀初期においてはそういった資料がまだ見あたりません。レジメ4ページの「18世紀の都市商業化と街路の発達」に表現しましたように、韓国の学会では商業都市としての課題について、まだ活発な研究は行われていません。しかし商業活動に関する様々な文献、資料は出ています。

ソウルでは、官庁用品と都市生活用品を扱う特権専門商店という市塵(シテン)というものがありました。さっきスライドでご覧になった高陽縣(コウヤン)という所でも見えますが、上下にまたがった様な商店、商業活動の様子が見られます。これはあくまでも20世紀初期における資料ではありますが、18世紀においても、ある部分はこの傾向が出ていたのではないかと考えております。類似したことは安城縣(アンゾン)という所でも見られます。

水原という所は商業活動の延長線上で考えることが出来ると思います。現在は商業活動と都市との間の関係についてはこれ以上申し上げることはできません。18世紀以後の商業活動は、色々な形をとって出てきたと思います。従ってその結果として都市における商業活動も色々な形を取っていたのではないかと考えています。これからの課題としては、色々な可能性を持った商業活動として扱っていく必要があるのではないかと考えています。

韓国においては、主に17世紀まで官庁、官衙における活動という役割が大きかったといわれています。従って、官庁と商業施設の関係も、複雑な形ではないかと考えています。こういう課題を解決するのに一番難しいのは、こういう資料や建物が残っていないということです。主に道路拡張の時などに、他の建物として建て直されたと思います。18世紀以後の商業問題、特に都市における商業問題の比重は大きいと思います。

まだ必ずしも十分に研究されていない問題をお話する様になりまして、大変恐縮に思っております。この課題は李相木求先生と私を始め、韓国都市に関心を持っている人のプロジェクトとしてこれから一生懸命やっていきたいと思っています。

私の発表はこれで終わりにします。

金 東旭報告レジメ

主題 韓國の中世都市

朝鮮時代の地方都市：水原華城と地方の邑城

題目 18世紀に於ける水原華城の建設と商業都市

金東旭

(韓國, 京畿大學校 建築學部 教授)

1. 韓國に於ける18世紀

(1) 朝鮮王朝[李朝](1392-1910)の基本體制

中央集權的統治體制

兩班による社會支配(兩班と良人主に農民, 賤民に屬する奴婢を含む)

農業中心の經濟構造と商業の抑制

(2) 18世紀の變化

農業生産力の發展

商品貨幣經濟の進展

全國的な場市(定期市)

都市地域の商人成長

都市の常設店舗の増加

身分制の解體

農民層の分化(富農の成長, 没落農民の都市賃労働者化)

兩班層の分化(没落階層の農民化)

中人層の擡頭(都市の専門職業階層)

2. 漢陽(ソウル)の都市形態

(1) ソウルの歴史

1392年に朝鮮王朝建築。2年後に漢陽に遷都。以後5百年の王朝の首都を経て現在も韓國の首都として存續

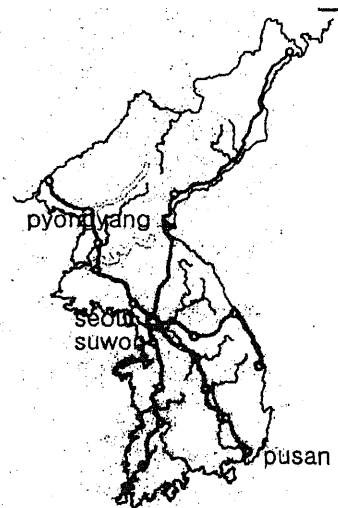


圖-1
水原位置圖

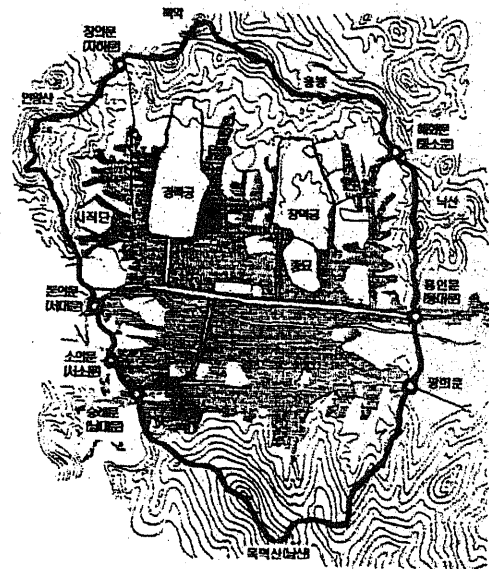


圖-2 朝鮮初期の漢陽

(2)立地：四方の山に囲まれた地勢(伝統的な風水観による立地)

都市の南に半島の中心を横切る漢江が流れる(水運利点)。

(3)城郭：四方の山の頂上を結ぶ長さ約15kmの不規則な形態の城壁。城壁の4大門と4小門を設ける。

(4)街路：東大門と南大門を結ぶ東西の道路と、都心部から南大門を結ぶもう一つの道路が幹線(大路)をなす。中路と小路は地勢に沿って不規則な形態を成す。

(5)居住領域：人為的かつ計画的な領域区分は見られず、宮殿、祭祀施設、官廳が都市の北側に配され、残る所に住民が分散して居住する。後に北部の官廳の周辺に官吏たちが、中部の河川のまわりに商人と手工業者が、南部の傾斜地に良人たちが住む。城外にも早くから居住地が形成される。

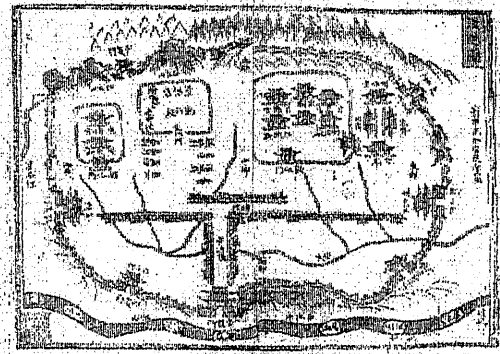


圖-3 18世紀頃のソウル(漢陽圖)

表 舊水原都護府の住民構成と家屋規模
(1789年, 『日省録』 正祖13年7月20日)

身分	家口数	平均家屋規模	備考
高級官吏	6戸	11間	8間-13間
下級官吏	29戸	13間	3間- 19間
準兩班 (幼學, 閑良)	35戸	9間	3間- 27間
中人	35戸	11間	3間- 24間 1戸 瓦家
良人	60戸	6間	3間- 14間
賤役良人	32戸	4間	一部2間以下
賤人	25戸	6間	3間- 11間
奴婢	18戸	7間	3間-10間

3. 舊水原都護府の住民構成と都市形態

(1)立地；ソウルの南、約40km。西部の海岸から都城を防禦。四方に山で囲まれた典型的な地勢。東北方の花山を主山とする。

(2)住民構成(1789年當時)

全體の都市區域の居住家屋は約400戸

都市中心部の家屋244戸の住民と家屋規模

(3)官廳施設と街路

主山(花山)の下に官廳を配置し、官廳の前の東西方向の幹線の街路が走り、官廳の前面にもう一つの街路がT字形の街路を形成

4. 新都市華城の建設と築城

(1)水原府の移轉

1789年、水原都護府の官廳と住民を北側の約6kmにある八達山の下に移轉して新都市を造成

(2)商人の誘致

隣近の商人たちを水原府の誘致。無利子の資本を貸與

(3)華城の命名と昇格

都市を建設して3年後に住民数5,000名になる。

都市の名稱を華城と定め、長官をと等しい正2品に昇格

(4)都市建設5年目には築城を開始。2年半後の1796年に完成

(5)華城建設の動機と目的

ソウルの南側の新しい商品流通の據點都市を建設

増大する臣權に對し王權を強化する目的で軍事と經濟の都市造成

5. 華城の都市形態

(1)立地：ソウルの南側の交通中心地。西側の海拔140mの 八達山を主山とする平地に造成

(2)城郭：西の山の頂上から全長5.4km不規則な形態

4所の城門 5所の暗門のはかに砲樓、雉城、空心墩などの防禦施設を備える。

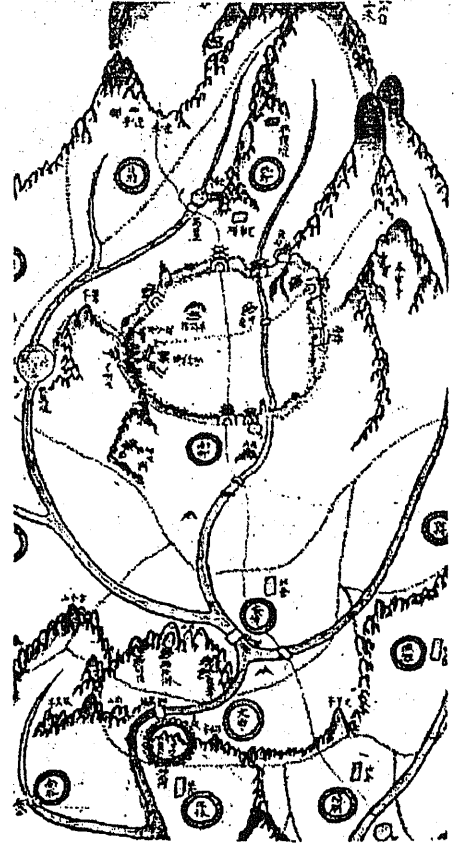


圖-4 移轉された新都市華城の位置

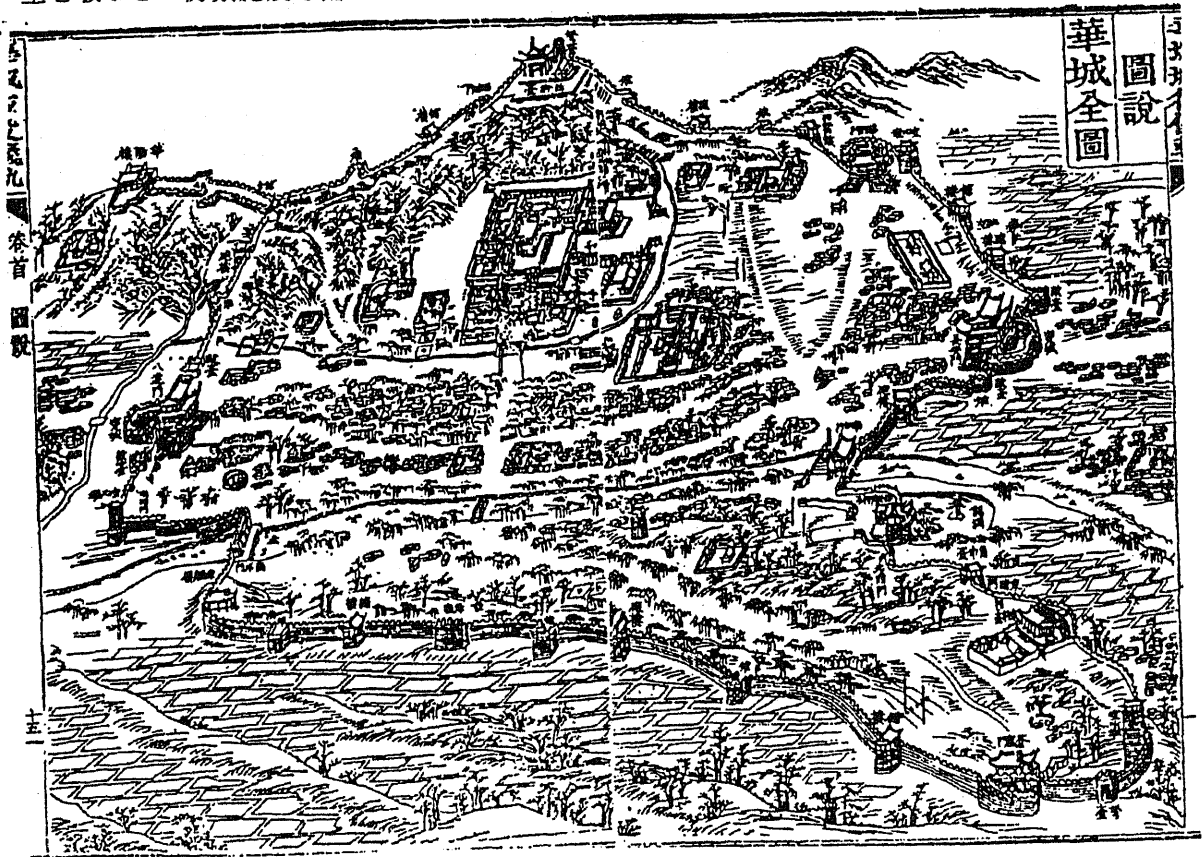


圖-5 華城全圖(『華城城役儀軌』)

(3) 都市施設と街路：主山の下に官廳を配置する。南北の幹線道路と、官廳と東門を結ぶ道路によって中心部に十字形交叉路形成

十字街路及び南北幹線の街路の周邊に商店形成（米塵, 柎文塵, 革塵等）

6. 18世紀の都市商業化と街路の發達

(1) ソウルと地方都市の事例

ソウル：鐘樓の左右街路及び南側の街路に沿って市塵(官廳用品と都市生必需品を扱う特權専門商店)が並ぶ。郊外の交通要地に商業施設が並ぶ街路形成(樓院、松波等)

高陽縣：中國からソウルに入る最後の宿泊地として商業施設が並ぶ街路形成

安城縣：官廳地域と新しく形成された市場を結ぶ直線狀の街路形成

(2) 華城

北門と南門を結ぶ幹線道路が南門の外の梅橋まで延びて都市の中心空間を形成

7. 商業都市の研究課題

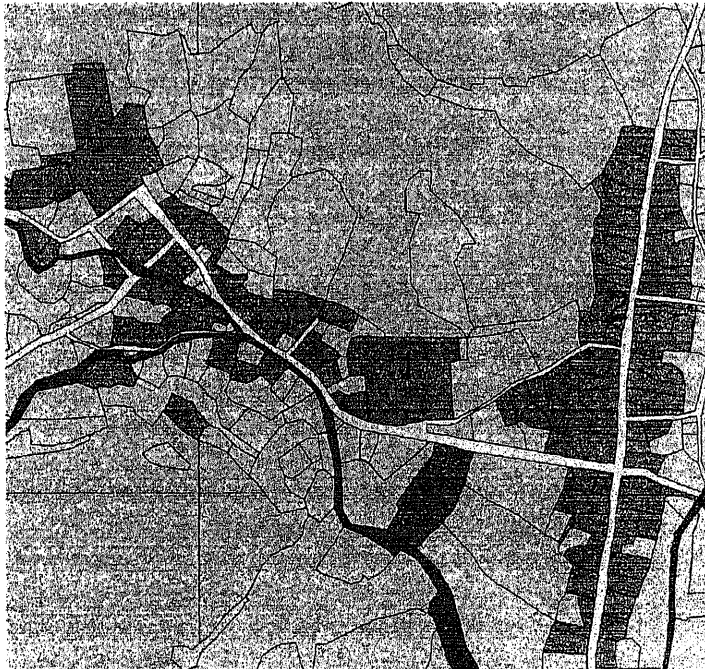
(1) 商業都市の概念

(2) 全國的な商業的都市の存在様態

(3) 都市内の商業施設と他の建物(官廳, 住宅)との關係

(4) 街路邊の商店の分布

(5) 商店建物の建築形態の把握



- 1 官廳
- 2 商店施設

圖-6 1913年作成の高陽縣の地籍圖

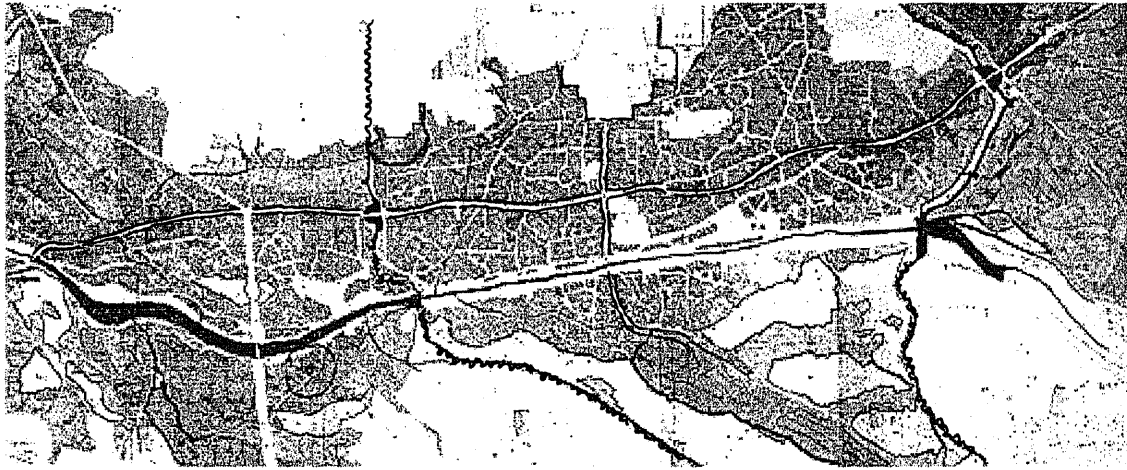


圖-7 1910年代水原市街地(1913年作成地籍圖)

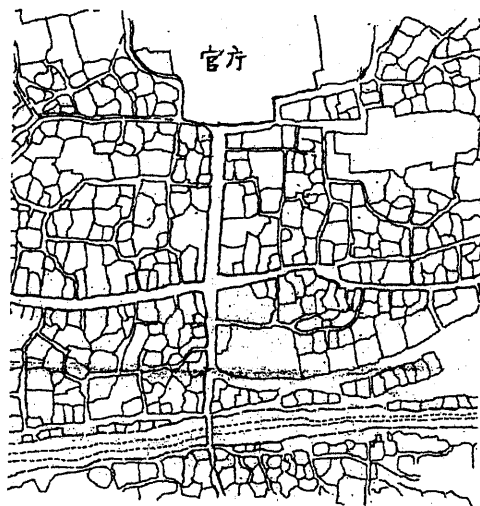
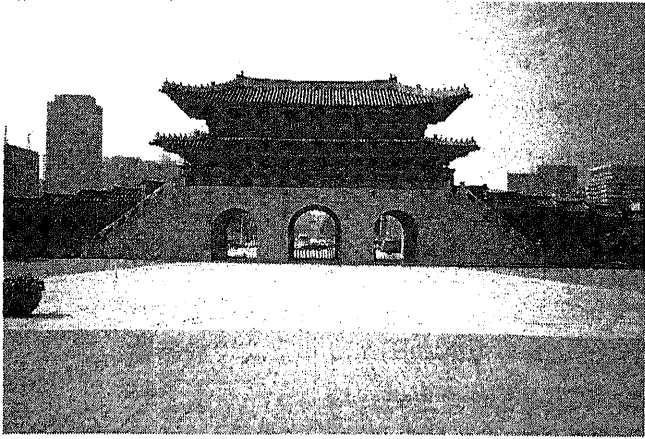


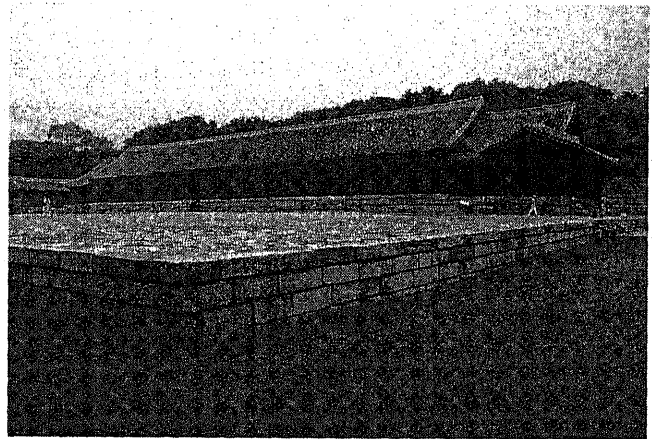
圖-8 上同 (部分)



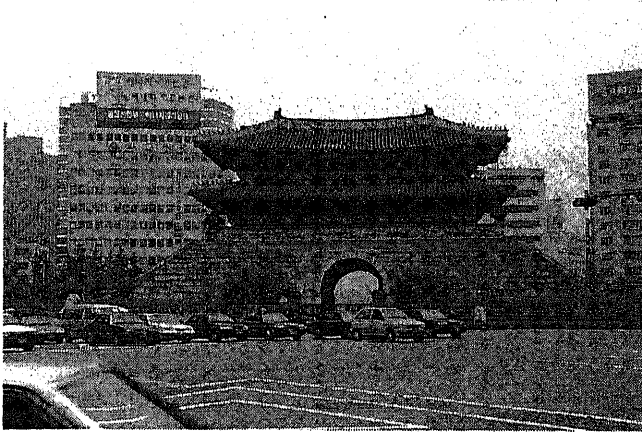
圖-9 1990年代水原中心部



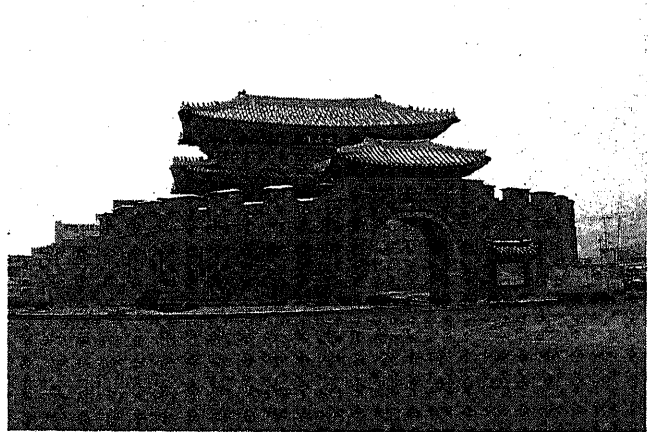
ソウル景福宮 光化門



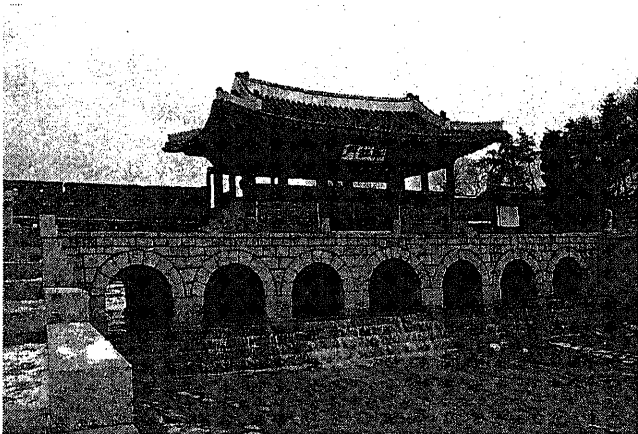
ソウル 宗廟



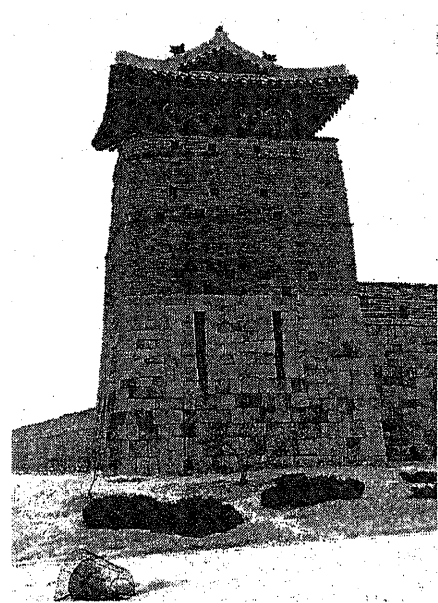
ソウル 南大門



水原城 長安門



水原城 華虹門



水原城 空心墩

3. 邑城の都市形態

李 相棟

李相棟です。金東旭先生が報告した内容を受けて、もう少し一般的な邑城、ないし邑の周辺の話をするように準備をしました。「邑城の都市形態」というタイトルで報告致します。全体的に材料が概括的なものなので、皆様方に邑城というものがどういうものなのかということを理解して頂くための発表として理解して頂きたいと思います。

まず邑城の前に、邑に対していくつかお話ししたいと思います。「邑」は中国語でも古代の都市の出発点として扱われていますが、朝鮮でも文献に「城邑」という言葉が出てきております。邑という単位は朝鮮においても、原形的なものであると思っております。それからの問題は、邑というものと人を表す「都邑」という言葉があります。その面から見ますと、「首都」という言葉を「都邑」という言葉で表していますので、結局「首都」というソウルも邑の一つであると考えております。中国の場合は「都」というのは宗廟があるところを指していました。

それでは本来の内容に入りまして、韓国朝鮮における邑城の分布について説明したいと思っております。図1が朝鮮中期における邑の行政による区別を表した地図です。朝鮮時代においては邑の行政単位を「府」「牧」「郡」「縣」というように分けていました。もちろん「府」が一番大きくて重要でした。その次に「牧」と「郡」「縣」となっています。それから「縣」を二つの段階に分けていました。それとは別に軍事的に重要な意味を持つ地域を「留守府」とか「都護府」とか「大都護府」とかそういう名称でした。下の方の凡例に分けておきましたので、参照して頂きたいと思っております。

図1、図2、図3の3つの地図はだいたい似たような感じの分布を示しています。図2の地図は18世紀の中頃に邑城があった所を示した地図です。図3は18世紀後半の都市部における邑の人口を1000人から区別して表した地図です。図1では、要するに行政単位の重要度を見て頂きたい、それから図2では邑城があるかどうかについて、それから図3は人口を表した地図です。この3つを合わせてご覧頂きたいと思っております。

朝鮮時代は時期によって少し変わりますが、邑が330~350ぐらい存在していました。その中で40%ぐらいの邑が邑城を持っていました。表1は、15世紀後半と16世紀、18世紀、19世紀における文献に現れてくる邑城の数を記録した物です。この表によりますと地方によって、どれぐらいの邑城があったかがわかると思います。また、表2には先ほどの行政単位による邑城の保有率について表しておきました。結果的に行政単位で重要な都市は邑城をたくさん持っていたことが分かります。常識的な話ですけれども、重要な都市は結局人口が多くて、人口が多い都市は邑城を持っていたという話になります。

そういった背景から、あらためて図2の地図をご覧頂きたいと思っております。邑城があった所の点をご覧頂くと、3つの特徴があることが分かります。

一つは西海岸から南海岸に至る所に、点が多いということです。特に黄海道から慶尚道に至る所に分布が多いです。二つ目は、北の方の境界の所では、ほとんどの邑が邑城を持

っています。それから三つ目の特徴です。釜山（プサン）とソウル、それから義州（ウイジョウ）という北の所の間に書かれている線は当時の重要な道路です。それらから見ますと、釜山からソウルに至る所の道路沿いに邑城が多いということが分かります。同じく、北の義州（ウイジョウ）からソウルに至る海岸の所にも邑城が多いということが分かります。

これらのことからもう一度考えますと、邑城というものは結局、海岸の防御、それから内陸の主要都市の防御に軍事的に重要な役割をする所だったということが分かります。朝鮮時代の初期、15世紀の初期に海岸地方の邑城が、短い間にたくさん発達することになります。その目的は、古代から外国からの侵略がいくつかありまして、その海岸を守るための目的を持っております。韓国において、そもそも都市を守るためには、山城がありました。結局、邑城は韓国において、その山城の役割をはたしていたということです。一般的な原則なんですけど、朝鮮時代の初期には邑を防御する、戦争が起きるとその住んでいた場所を捨てて、山城あるいは邑城に逃げるそういう方法をとっていました。住んでいる所を焼き払って山城とか邑城に逃げ込んで、防御をするのが朝鮮時代はじめまでの一般的な原則的な守り方でした。そういう意味で、朝鮮時代の初期までは、邑城というものが山城と同じようなもので、山を背景にして立地されていたというふうに思われます。その話は後ほどまた話します。

次に、朝鮮にあった邑と邑城というものも、地域的に大いに特色があった朝鮮半島の地域によってどんな特徴があったということについて話します。

一つの特徴については図4にまとめて示した地形図をご覧くださいと思います。ちょっと小さくてよくは見えませんが、ここに示したのは邑のまわりの地形を表した地形図です。この四角形一つ一つがちょうど10km×10kmになります。全体的に開放的で平地に位置付けられた場合もありますが、地形が険しい所あるいは山奥に立地する場合があります。その理由は、基本的に朝鮮半島が東側は山が険しく、西側は平地であるという地形によるという点にあります。そのことから、地形が違うことによって、建設される邑城が違ってくるということになります。

もう一つの特徴としては、朝鮮時代の初期に開拓されてくる北の方の咸鏡道を考えます。朝鮮時代の初期に咸鏡道のあたりの地域に、さかんに軍事的な新都市を作ったということです。

それでは邑城の特徴を地方別に簡単に整理していきたいと思います。図5をご覧ください。先ほど申し上げました朝鮮の北側咸鏡道と平安道の所の邑城です。

一番上の右側の會寧（カイロン）をご覧ください。この地図を見ますと左側にある咸興（ハンブン）の場合は山に囲まれた地形を利用して、城を築城しているんですけども、會寧の場合は長方形に計画的に城を築城していることがよくわかります。咸鏡道の鏡城（キョンソン）も同じです。朝鮮時代以降に作られた邑城の場合は咸鏡道以外の所では、こういった計画的な邑城は見られません。

平安道の特徴を一つ上げます。表3を見て頂きたいと思います。これは邑城の規模を段階別に、それから地域別に分けた表です。この表を見ますと、下の方に行くほど大きい規

模ですが、特に平安道の場合は規模が万尺（マンセキ）以上の城が多いということが分かります。他の地域に比べると特徴的なことです。

それから図6と図7に、忠清道、慶尚道、全羅道という朝鮮の東南部の地域の邑城の例を挙げています。そこに全羅道光陽（コウヨウ）という邑城があります。これが邑城の規模としては一番小さいものでした。周りの長さは440メートルしかありませんでした。ほとんど大きな土地区画の一つに当たるといった小さな邑城です。忠清道、慶尚道、全羅道の場合は、光陽の例はちょっと極端ですけれども、一般的に邑城が大きくないということです。その理由としては、地図でわかるように、城内に官衙があってその他の建物があまりないということがあげられます。城内には官衙があり、官衙に勤務している人たちが住むくらいでした。大部分の住民達は、城の外側の方に居住していました。ですから、この地域においては邑城は都市の中心部という機能をはたしていました。それに比べて先ほど図5と表3で説明致しました平安道の邑城が大きくなるということは、都市内部のあらゆる施設と、住民達の居住施設が全部入っていたからです。

以上のことから、邑城は大きく三つに分けられると思います。一つは、全羅道、忠清道、慶尚道地方の邑城で、邑城が都市の中心を構成するという、二つ目は平安道に見られる邑城で、邑城の城郭が都市の外郭を示すということ、三つ目は咸鏡道の邑城で、ここでは軍事的新都市であるということです。これが地形的に見た特徴です。

最後に図7の地図をご覧ください。左側が全羅道の求禮（クレ）です。右側が全羅道の南原（ナモン）という所です。下の方は同じ2つの都市の地籍図を示しました。2つの都市は同じく正方形に近い形をしています。しかしながら、2つの都市は根本的に違う歴史を持っています。それは地籍図による内部の道路パターンを見ればすぐ分かります。左側の求禮には複雑な路地が沢山ありますが、右側の南原の方は条坊制、条理みたいな四角い区画が下にあるのを確認できます。右側は古代新羅が統一した時に作られた都市を示しています。ですから歴史的にどういう歴史を持っているかという差によって都市の形態も違ってきます。現在、今日例に挙げました南原（ナモン）以外にも全州（チョンジュ）、光州（カンジュ）という所にはこういった形が見られます。

今色々と朝鮮における邑城の形態などを申し上げましたが、根本的にはソウルの山城の様な形が根本になっております。

それからここでは申し上げませんでした。金東旭先生が申し上げた商業都市と、商業都市が邑城の中でどういうふうに見えてくるのかという問題などは、調査の作業をしている所です。一つ人口の問題を忘れました。朝鮮時代の邑において平均的な人口というのが3500人位でした。大部分は10000人以下でして、330の邑の中で10000人を越える都市というのは7つしかありませんでした。全般的な都市というのは3000人以下の規模であったということを入念に入れておいて頂きたいと思えます。話題が行ったり来たりしてしまいちょっと複雑に説明することになってしまい本当に恐縮です。

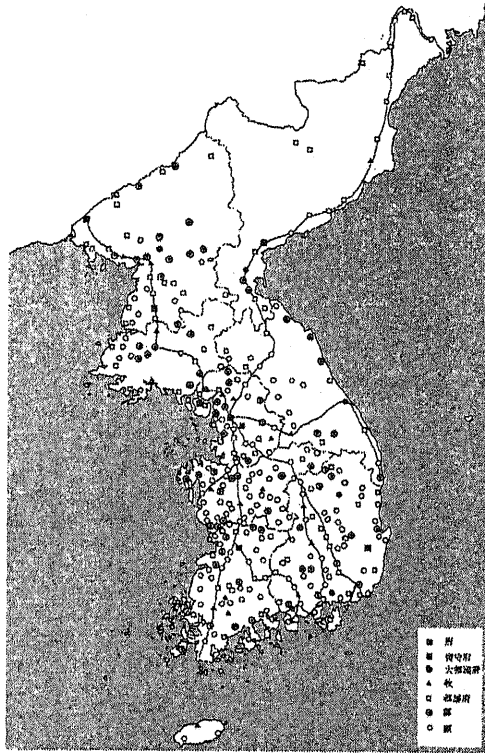


图1 朝鮮時代中期行政別分布

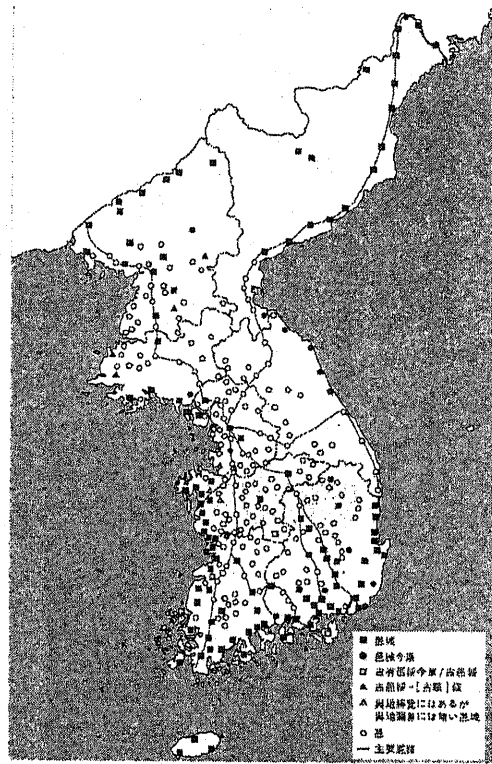


图2 18世紀中頃邑城分布

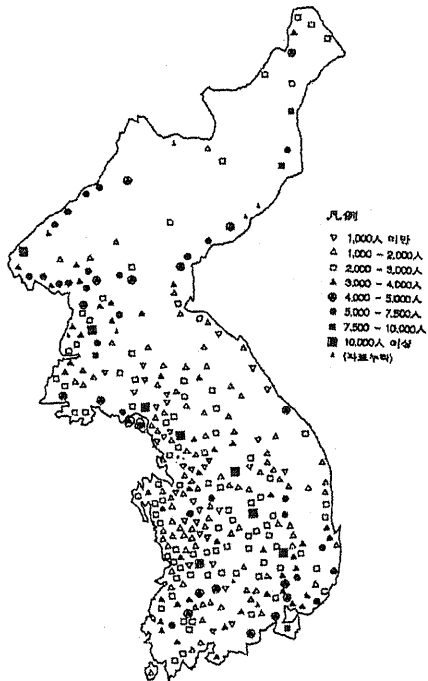


图3 18世紀後期都市部の人口分布

	新增東國輿地勝覽 (1481/1539)			輿地圖書* (1767-1785)			大東地志 (1864)		
	邑	邑城	邑城 保有率 (%)	邑	邑城	邑城 保有率 (%)	邑	邑城	邑城 保有率 (%)
京畿道	37	2	5.4	30	3	10.0	38	5	13.2
江原道	26	9	34.6	26	0	0.0	26	9	34.6
忠清道	54	17	31.5	51	13	25.5	54	20	37.0
全羅道	57	30	52.6	40	19	47.5	56	30	53.6
慶尙道	67	36	53.7	60	27	45.0	70	37	52.9
黃海道	24	8	33.3	23	4	17.4	23	8	34.8
平安道	42	12	28.6	42	14	33.3	42	5	11.9
咸鏡道	22	17	77.3	23	16	69.6	25	21	84.0
合計	329	130	39.5	295	96	32.5	334	135	40.4

(『輿地圖書』에는 295개 邑에 대한 기록 밖에 없으나 당시의 邑의 총수는 334개 였으므로 이에 누락된 邑이 삼십여개 있는 것으로 보임.)

表1 道別 邑數・邑城數・邑城保有率

行政單位	行政單位의 數	邑城數	邑城保有率
府	5(2)	5(2)	100%
留守府	1(1)	1(1)	100%
大都護府	5	3	60%
牧	17(2)	11(1)	65% (63%)
都廳府	69(6)	31(1)	45% (43%)
郡	58(12)	14(2)	24% (23%)
縣	140(16)	31(7)	22% (24%)
計	285(39)	96(14)	33% (33%)

() 안의 수는 興地圖書에 누락된 것으로서 당시의 行政區域 후 334邑을 기준으로 보완한 것임.

表 2 行政單位位階別 邑數・邑城數・邑城保有率 (興地圖書：1757-1765)

規模	京畿道	忠清道	全羅道	慶尙道	黃海道	平安道	咸鏡道
-1,000尺			光陽	瑞海, 咸陽			
1,000尺 2,000尺	南朔	泰安	龜尤 樂安 荷安	慶山, 興海 奉海, 立亭 清河, 德源 善山	延安		
2,000尺 3,000尺		保寧, 瑞山 乾溝 西川	珍島, 翼城 茂茂, 施義 海新	昌原, 迎日 盈德, 安東 海新		朔州	
3,000尺 4,000尺		結城, 忠原 清州 庇仁 陞川	龜州, 興陽 高敞 深溪 順天	新昌, 景山 三嘉, 昆陽 慈川, 尚州 固城	理山	利城 富寧 甲山	
4,000尺 5,000尺		神山	靈岩, 大靜 求禮	星州, 金海 慶州, 登嘉			綾城, 瑞川 羅城
5,000尺 6,000尺		伊州	全州 清州	泗州	襄津	醴山	洪原, 三沐 慶興
6,000尺~7,000尺		海美					茂山
7,000尺~8,000尺				咸安			
8,000尺 9,000尺			南原, 康津 光州				會亭
9,000尺~10,000尺			長興				端川
10,000尺~	漢城 開城 廣州		扶安	東寧	海州 朔州	定州, 義州 昌城, 清原 德蘆, 龜城 龍川, 寧邊	慶源 北清 吉州 咸興
						江界, 平壤 安州	

表 3 邑城規模分布 (興地圖書：18c 中期)

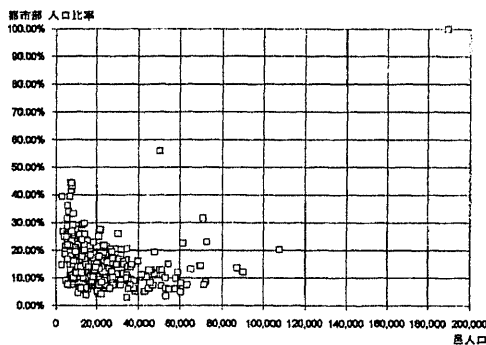


表 4 邑人口と都市部の人口比の関係 (1789)



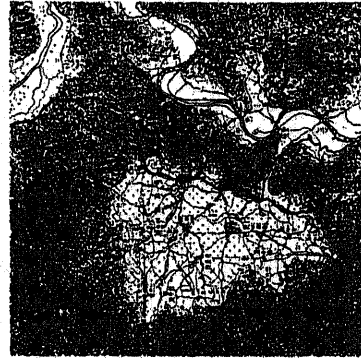
全羅道 成悅



慶尚道 河東



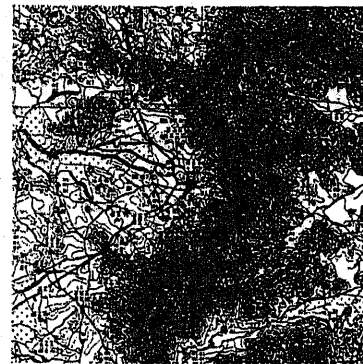
江原道 平康



慶尚道 草溪



全羅道 大靜

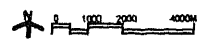


平安道 咸從



全羅道 樂安

図4 邑城周辺の地形(1)





京畿道 廣州



咸鏡道 甲山



慶尚道 奉化



江原道 原州



平安道 龍岡



慶尚道 安東



咸鏡道 鏡城

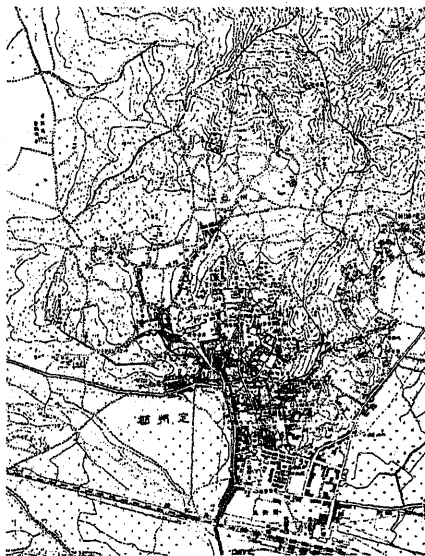


平安道 龍岡

図4 邑城周辺の地形(2)

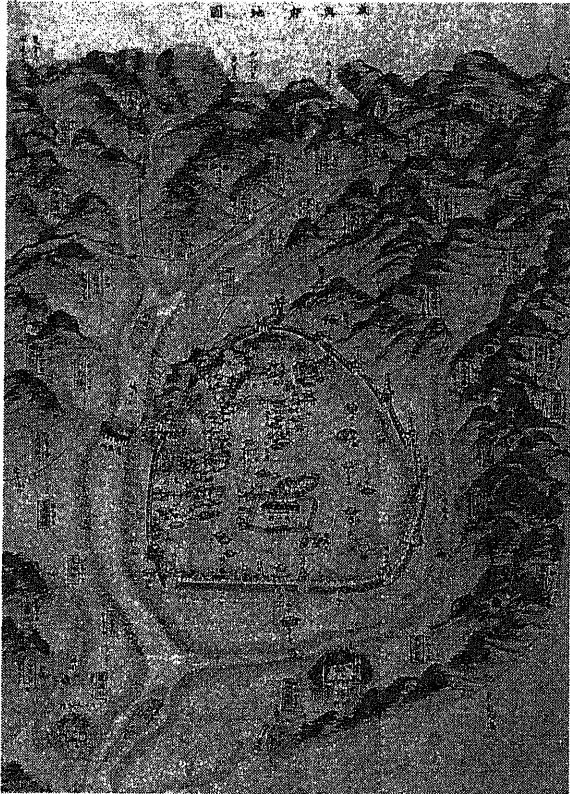


平安道 安州

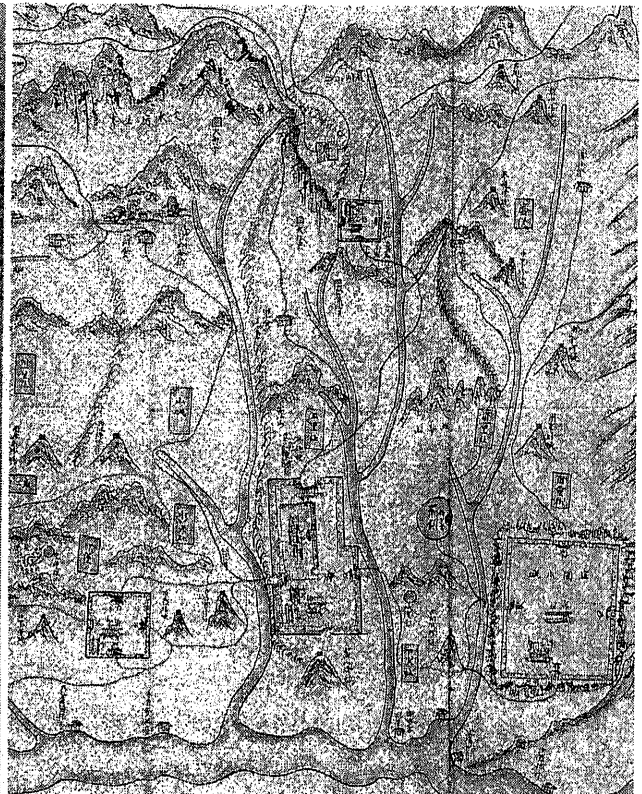


平安道 定州

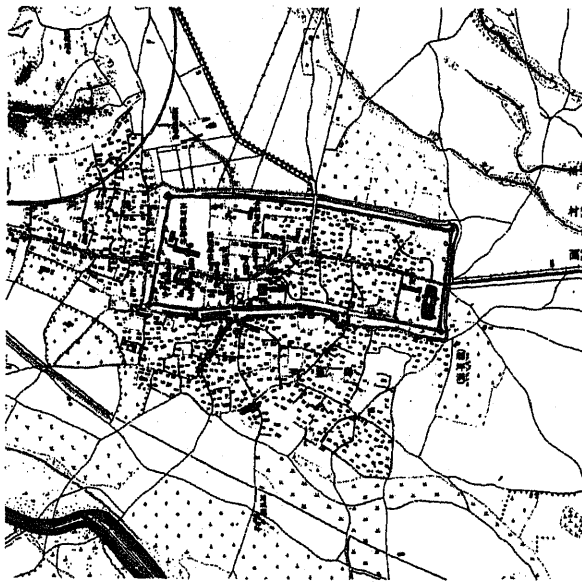
図5 平安道と咸鏡道の邑城(1)



咸鏡道 咸興



咸鏡道 會寧



咸鏡道 鏡城

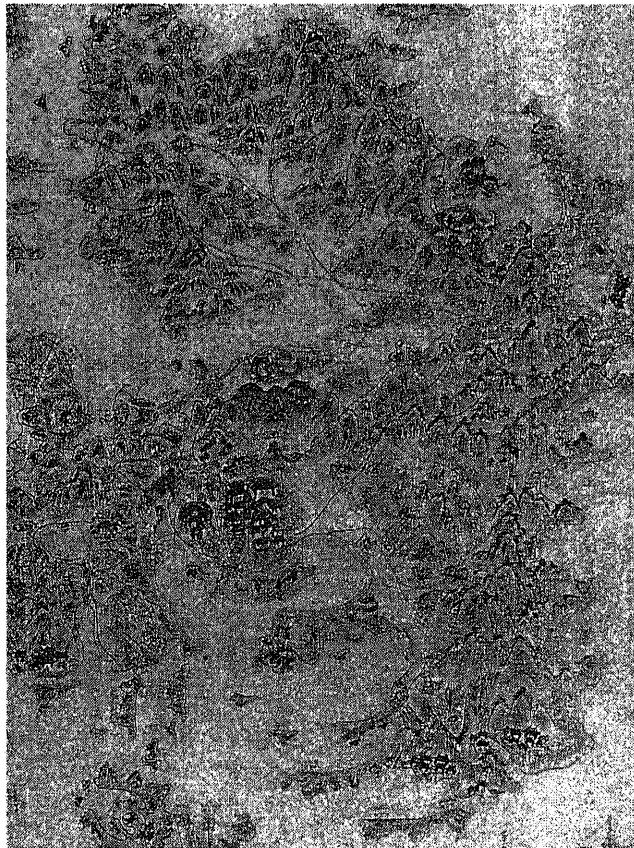
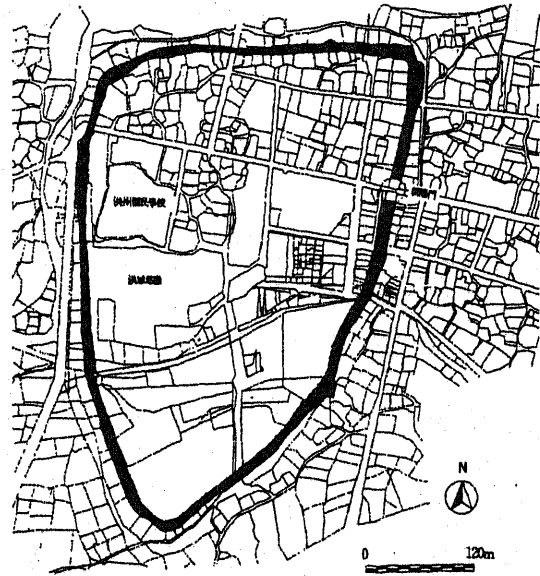


咸鏡道 會寧

図5 平安道と咸鏡道の邑城(2)



忠清道 洪州

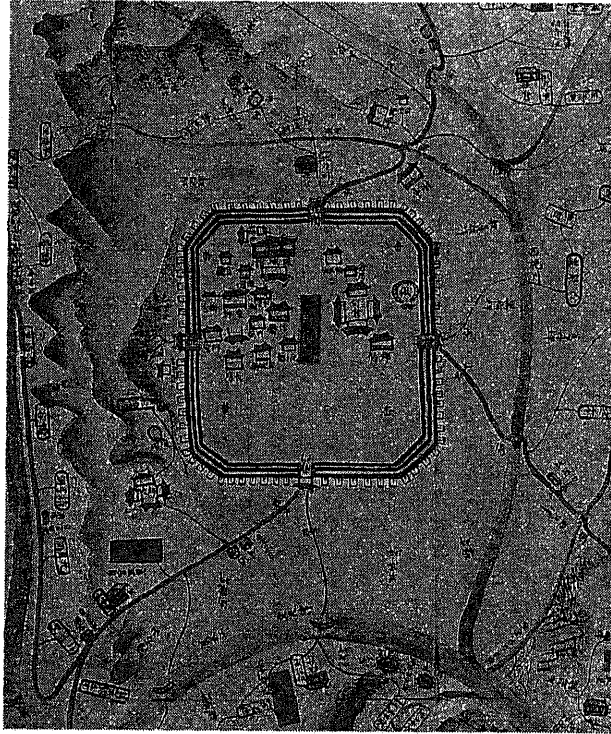


慶尚道 巨濟

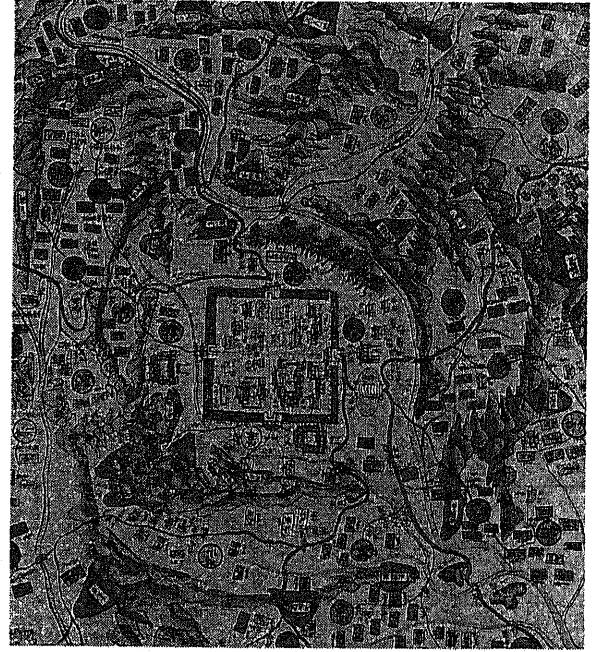


全羅道 光陽

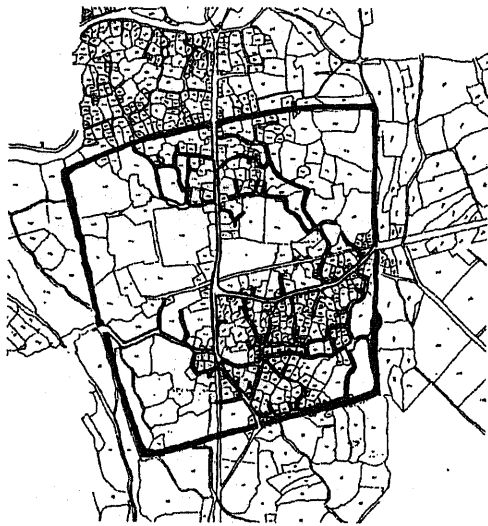
図6 忠清道、慶尚道、全羅道の邑城



全羅道 求禮



全羅道 南原



全羅道 求禮

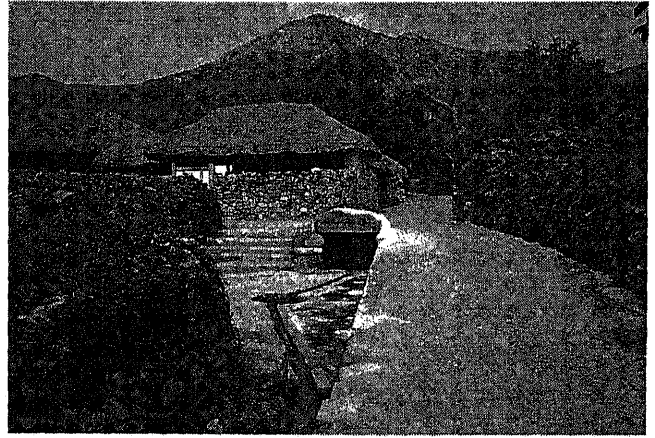


全羅道 南原

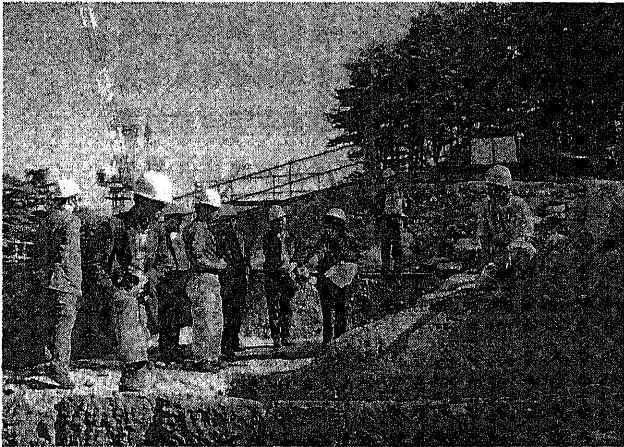
图7 全羅道 求禮、全羅道 南原



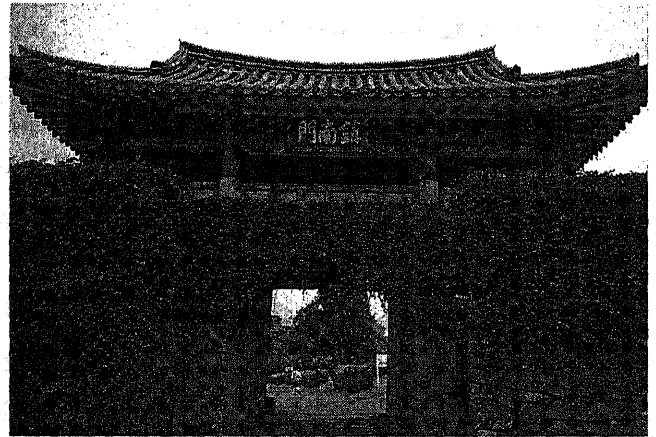
宝城カンコルマムル調査風景



樂安邑城



仙台青葉城石垣修復現場調査風景



海美邑城 鎮南門



仙台シンポジウム 風景



慶州 調査風景

4. 城下町仙台の建設と変容

千葉 正樹

私は城下町仙台のことをお話申し上げます。日本の近世都市史研究において、とりあえず次の3点は一応コンセンサスが得られると考えておりますので、まずそれを確認致します。第一点は、近世初頭は日本の都市史上の画期であるということです。近世城下町という新しい都市形態が成立し、これは現在まで各地の中心都市として継続、機能し続けています。第二点は権力者である武士の城下集住により、近世社会は都市中心の社会として形成されたということです。江戸、大坂、京都を全国的中心とし、城下町を地方中心とする都市間のネットワーク上で、近世の政治、経済、文化は稼働していったと言えます。第三点は、近世城下町は織豊政権期にモデルを形成し、織豊期から幕藩体制成立期にかけて全国的に普及したということです。

近世城下町の基本形態に関しては、これ自体が大変議論が及ぶ所ではありますが、とりあえず山口啓二さんが提出された城下町プランの模式図が、近世城下町を理解する上での大枠として考えてよろしいだろうと考えております。これは秋田藩の例ではありますが、内郭は、城と武家屋敷で形成されて、外郭の街道沿いに町人達が住む空間が置かれる。その外側に足軽町と寺町が置かれて、防備を固めている。ほぼこれが近世城下町の基本形態であったということができるといえるでしょう。

さて、地方城下町というものを考えてみますと基本的に二つの共通課題が我々の前に横たわっていると考えております。第一点が近世城下町モデルの受容過程という問題です。近世城下町モデルは織豊政権や幕府によって強制されたものではなく、またモデルとしてこれこれこういう風にしろという様に明示されたものでもなかったと私は考えております。あくまで各地の大名権力が近世城下町モデルというものを選択して、受容していったものでありまして、その理由と過程、方法を明らかにすること、これはすなわち幕藩体制成立過程というものを空間的に理解する上で大きい足掛かりになるものと考えます。

第二点は地域性と類型の関係がまだ把握されていないということです。各地域固有の歴史的な流れ、文脈といったものが近世城下町にどのような影響を与えたのか。何が前時代から継承されて、何が捨象されたのか。さらに地域を越えた共通性というものを、類型として見出し得るのかといった点は考えていく必要があると思います。今回はこの二つの課題というものを念頭に置きながら、城下町仙台を大急ぎで見渡し、今後こうした課題を克服する上での手掛かりとなるものがないか、探してみたいと思います。

さて、都市史研究会ではまず「真正城下町」として、山口啓二さんの出したモデルの様な万石クラスの城下町というものを想定し、仙台は「複合城下町」という、真正城下町の次の段階にあるものとして取り上げられています。都市史研究会で書かれていることをそのまま書き出してみますと、「複合城下町とは数十万石クラスの城下町で、真正城下町が一段階高度に発展を遂げたもので、自立的有力家中屋敷、大店、市場社会、民衆世界がそ

の指標になる」としています。その次の段階として、江戸、大阪、京都の三都市が「巨大城下町」として位置づけられています。

それでは仙台について歴史を追って見ていきたいと思えます。17世紀末の記述ではありますが「東奥老士夜話」という史料がありまして、仙台建設以前の状況について上手くまとめて記述しています。現代語に訳していきますと、「原ノ町の北裏にある清水沼は、昔大きい沼で西の方へ広がり、考勝寺通りあたりには申すに及ばず、連坊小路の彼方まで見渡せないほどの沼や湿地帯で御座いました。全体に北の山際まで残らず状態の悪い田んぼで、また東の方、苦竹の向かいには小鶴沼がありまして、大沼で、その東は湿地帯や深田が無限に続いておりました。西の大川前（大川とは広瀬川のことと考えていいと思えますが）までは芦原の野谷地で、「堅固繁盛之地形」が御座いました。」というようになります。

つまり、後の仙台となる地域は広瀬川の河岸段丘に堅固な土地がありましたが、その東側は梅田川あるいは七北田川の氾濫源であり、人の住めるような環境ではなかったということが分かります。南小泉から原町、苦竹を結ぶ微高地がありましたが、その北方は北部丘陵の山際まで沼や湿地が広がっていたようです。この微高地は洪積台地の東の端を走っているもので、その東側は沖積平野の湿地帯となっていたために、実質的に人の住める空間はこの微高地の線上に限られていたと考えられます。その微高地の上に東海道ないしは奥大道と呼ばれる交通幹線が引かれ、その線上に都市的な場が形成されていたというのが元々の状況だったと考えられます。現在の仙台城となる前の国分氏時代の千代城は、国分氏の南小泉の拠点に対する詰めめの城の位置にあったものと考えられ、その他山沿いに点々とある城郭は、すべてこの生活圏に住んでいる領主達の詰めめの城の機能を持っていたと考えられます。従ってこういった山沿いの城郭の周辺には、ほとんど都市型の集落は発達していませんでした。

さて1600年（慶長5年）7月、関ヶ原の戦いに伴う上杉領攻略の拠点として政宗が北目に入ります。そして北目城を整備した模様で、発掘調査では江戸時代初期のかなり大規模な掘跡が確認されています。この北目城に居住しながら、北目から南の奥州街道の整備に着手し、同時に仙台の建設を開始したわけです。

最初に作られた仙台城は、戦国期の国分氏の居城そのまま再利用していたものであって、城下から見える範囲のみ近世城郭の諸装置を施す形で成立したと考えられております。ただ発掘を見る限りにおいて、白壁の城壁とか櫓などが最初の段階で本当にあったのかどうかという点はちょっと疑問を持っています。少なくとも最初の仙台城というものは本丸一郭だけで建設された非常に特異な形態であったことは、これは間違いのない所だと考えております。

最初の仙台城下町は後藤雄二さんの図（図1）が初期の仙台城下川を理解する上で、最も参考になります。まず広瀬川の西側は、仙台城の他はほとんど武士の居住域として形成され、わずかに職人屋敷も設けられました。広瀬川河岸段丘の一番低い下町段丘の所に中下級の武家屋敷や卒屋敷と呼ばれる一般兵卒の屋敷が設けられました。この上に中町段丘、上町段丘という段丘面があり、その川に近い地域に中上級の武家屋敷があります。南北に都市域を貫いているのが奥州街道で、最初はたぶん大年寺山の辺りで川を渡っており、そ

の筋に沿って町人達が住んでいました。それともう一つ大手門から東に見通す奥州街道と直交する線の上に、集中的に町人町が作られました。一番外側には寺院があり、また足軽町が作られたりしておりますので、大きくは近世城下町モデルに従った空間配置だと言えると思います。

仙台を理解する上で御譜代町というものが重要になってきます。御譜代町とは伊達郡から米沢、岩出山、それから仙台へと伊達家と共に移動した6つの町のことを言います。この6つの町が中心部に集められまして町方の最上位に格付けられました。これは近世末までその格を維持致します。ただ一般に城下町に町を移動するという時に、町をあげて全部持ってきたというイメージで語られることが多いのですが、実際確かめていきますと米沢や岩出山にも相当規模の住民を残してきたことは確認できますので、町をあげての移動ではなくて町の中のかんりの人間を移動させてきたというように考えております。他に政宗が拠点としていた北目から北目町というものを移しました。それから国分氏の支配していた南小泉方面の町からは国分町と二日町という町を移動致しました。しかし全て移動したわけではなくて、原地にも町並みが存続していたということがその後の史料から確認できます。

さて御譜代町、北目町、国分町、二日町の9町は中心部に連続致しまして、「御日市」というものの開催権が与えられます。この「御日市」の開催権は基本的に持ち回りの形を取るわけで、御日市が廃止された時に、御日市を開催していた町は他の町から、その市でのその町の収入に対応するお金を徴収する権利が与えられました。この時の金額を計算していきますと、北目町は御譜代町1町の約11倍、国分町、二日町はそれぞれ約2倍の収入があったことが分かります。一方御譜代町は特定商品の市を開催する権利を御日市開催権と二重に持っておりまして、また藩や武家屋敷の消費に深く関与していたということが推定されます。

最初の政宗の作った城下町は、未利用の自然乾地であった広瀬川河岸段丘に都市を建設致しまして、国分時代詰めの城としての機能に限定されていた仙台城をその核としたものでありました。北へのアクセスとして新しく奥州街道を整備し都市の中軸とするなど、全体としては新都市建設としての色彩が強いものだったと評価できます。しかし当初南小泉の国分系の町もそのまま存続し、北へのアクセスとして奥州街道が作られたにもかかわらず、東海道沿いのルートを整備するという政策も取られております。すなわち新しい仙台城下町の空間は東海道にあります旧来の都市空間と、新しい奥州街道沿いの空間に二分されているような状態にあったと考えて良いと思います。都市内部でも伊達氏と関係の深い御譜代町が武家屋敷の消費に依存していたのに対して、北目や国分系の町は従来の地域的消費に深く関わっていたと考えられ、その新旧の二元的性格というものが存続していたと考えられます。最初の建設は1603年に始まります江戸のいわゆる天下普請の前からスタートしていきまして、政宗はこの時点においては幕府による都市建設を経験していないということに注意しておきたいと思います。

さて政宗は本丸一つしかない仙台城を当初の拠点としたわけではあります。その後に奇妙な動きをやりまして。「花壇」と呼ばれる場所に別邸を作ったという記録があります。それから国分氏の屋敷を転々として使ったという記録も残されています。最終的には南小

泉の旧国分氏拠点近くに若林城を築き、日常の拠点としました。図1にこの若林城下域と推定される区域を区切ってみました。若林城は一郭で構成された平城でありまして、基本的には近世城郭といえる内容を持っていたものだと考えられます。柔らかく土塁で囲まれてまして、將軍の隠居所であります江戸城西の丸と類似した景観を持っていたと考えられます。政宗は基本的に若林城での暮らしを開始いたしまして、特別な儀式の時以外は本丸に行かなくなります。基本的には仙台城を本丸とし、若林城を二の丸とする使い分けをしていたと言われるわけですが、しかし後世若林城は隠居所というふうには認識されていきません。

さて若林城下町ですが、こちらには町奉行が置かれたり、様々な商業機能が集積されたり、足軽や武士達も移されたりしまして、実質的に独立城下町として機能していました。かつて奥州街道は田町付近か、あるいは広瀬川の向こう側で東海道と分岐していた可能性が高かったわけです。しかし、中心部にありました荒町という町が移され、若林城の軸線と方位が一致する荒町の軸線が新しい都市軸となります。旧来の東海道沿いの都市域にはこの荒町と直交したり平行したりする町屋、町域が再整備されました。この若林城下町の成立に伴って、新しい町人町を共有する形で、仙台城下町と若林城下町が一つにまとまります。すなわち若林城下町の建設は、新しい生活圏と旧来の生活圏を初めて一体化したという点において大きい画期となったと考えられます。

さて1636年政宗が死去致しますと、若林城が廃城されます。若林城の建物はそっくり新しくつくられた二の丸に移したという記録が残っております。若林城下町は西側の町人町を残して全て畑に変えてしまって、武家屋敷は移住を余儀なくされたと言われております。図2は1645年～46年の製作と推定されているもので、初期の城下町よりは少し拡大しております。例えば北東部の勾当台には密教系の寺院群があり、これが仙台城に対して鬼門の境界をなしていたわけです。その外側に武家屋敷が新しくが作られまして、初期の境界の外側に都市域が広がっております。注目されるのは都市域周辺に薄く赤い線が引かれております。後に仙台の都市域を「せんたいわのうち仙台輪中」という言葉で言うようになりますが、この朱線がその輪中の意識というものと何らかの関わりを持っていたのではないかということが指摘されております。しかし都市領域というものがある程度認識されたにせよ、そのかなりの所に深田などが残っておりまして、この全体が一気に都市化したわけではありません。

次の1664年の図面(図3)と比べながら変化の様子を追いかけていきます。この間わずか20年ですけれども、それでも更に都市拡張が進んでいるのが分かります。最も重要な変化は北東端に東照宮が建てられ、宮町が割り出されております。その他東側にもかなり都市が発展している跡がありまして、例えばかつて深田と記述されている所に寺院群や足軽町が作られたことです。

私が注目しておりますのは、最北部に堤町という新しい町ができていることです。1645年段階にも小さい堤が記述されておりますが、しかし1664年段階では明らかに貯水池の水面が急速に広がっているのが分かります。図4は1664年の図に仙台城域の地質状況と等高線を書き加えてみたものです。仙台を考えると、広瀬川のことだけがよく言われますが、私は北の梅田川が実はかなり重要な意味を持っていたのではないかと考えております。一

般に仙台の町は広瀬川の段丘の上に形成されていたと言われているわけですが、実際は北側に梅田川の河岸段丘がもう一つ入り込んでおりまして、上町段丘の一部が再び中町段丘と同じレベルに下がっております。この梅田川の落差というものを考えてみますと、この中町段丘面には梅田川の氾濫源があり、そこには常に水が入り込んでいた可能性が高いと考えています。仙台を語る時に四ッ谷用水が非常に有名です。1664年の図面でも四ッ谷用水の原形が出ておりますが、これは一般に用水という面が強調されておりました。しかし梅田川から北部に供給されている水のことを考えてみますと、これらの領域を乾かして人が住めるようにするためには、堤を作って梅田川の流量を制御する、あるいはこの四ッ谷用水を通して適度な排水を促すといった措置が必要であったのではなかったかと考えられます。

つまり政宗の作った都市に対して二代忠宗の都市というものは、政宗時代にはコントロール仕切っていない湿地帯というもののコントロールにある程度成功して、そしてその領域に都市を拡大していったと評価できるのではないかと思います。その背景には川村孫兵衛というような人物に代表される土木技術者の召し抱えというものが、また江戸の首都建設、天下普請でこの仙台藩の中に蓄積されていった技術があったことは疑えないと思います。全体に忠宗代の都市建設によって城下町仙台の大枠というのがほとんど決定致しまして、仙台二十四町と呼ばれる町の22町まではこの時まで成立しております。政宗時代に仙台北部に対する境界を鎮護する役目を持っていた密教系寺院があったわけですが、その外側に市街地が広がりました。しかし同じく鬼門線上に東照宮が作られたことによって、宗教的にも境界が前進したと言えると思います。忠宗は東照宮の高地の上に立って、真南を見通して新しい町並みを形成させたと言われております。この東照宮から真南に見下ろす宮町の軸線と直交あるいは平行する町が、わずかですけれど作られまして、奥州街道の軸線から考えられる町、荒町の軸線から考えられる町、それから東照宮の宮町の軸線から考えられる町という三つの都市軸というものがこの時確定したといえると思います。その他忠宗代に先程述べた様な御日市というものが廃止されまして、上方出身の商人などが来住していることも確認されます。都市内の商業に見られた二元的状態も終息する方向に向かったと考えられます。

もう一枚図面を出しておきたいと思います（図5）。これは18世紀末、天明期の状況と推定されている図面ですが、ほとんど忠宗代の都市建設をベースにした展開であることがお分かり頂けると思います。17世紀末、元禄期に仙台北部は最大規模に達しました。推定人口は6万人と言われております。しかしこの元禄期をピークとして都市発展は停滞しました。24の町が成立した後、町はほとんど増えておりません。1775年宝暦の飢饉以降衰退が始まったと言われております。この図面は飢饉の後の状況と言うことになり、1664年図と比べて都市域が広がった様に見えますのようですが、北端の武家屋敷は全部「明屋敷」と書いてあり、すでに誰も住まない状態になっていたということが分かります。さらにこれは近世末、江戸時代の終わりの状態だと考えていいと思いますけれども（図6）、確にかつて武家住宅が広がったと考えられる所が水田になっていたり、ないしはただの荒野となっていた様な表現が目立ちます。1772年頃～1812年頃にかけて717軒の武家屋敷が減少したと言われております。この間城下の人口は推定6万人から5万人に減少致しました。

減少の大きい割合は武家人口の減少に伴うものと考えられますが、もちろん町人の人口減少も起きております。しかしこの大崎八幡神社の周辺などを、良く見ますとこちら天明図の範囲を超えて人家が出ての様子も描かれています。町方も24町から減るということはなかったわけです。ですからある程度町人の世界というものが維持されながらも、全体としては縮小したという状態であったと考えております。

さて、近世城下町仙台から近世城下町研究の課題を、もう一度展望という形で整理しておきたいと思っております。一つはこのモデルの受容過程の問題です。これは今のところはっきりしてはおりません。例えば岩出山の城下町は、家康が縄張りをしたという伝承が伝えられておりますが、これは決して明解なものではないわけです。少なくとも織豊政権や幕府の都市建設に参加した実際的な経験の蓄積、技術の移植といったものが背景にあったことは考えたいと思っております。もう一つ大事なのは、この様な絵図面の多くが幕用図として作られておりましたことにも窺えるように、幕府が常に城下町の状況を把握し続けているということがあります。すなわち全国政権の視線にさらされ続けるあり方というものが、モデルを受容する過程の中で働いたのではないかとといった点は考えてみなければならないと思っております。

もう一つは戦国期都市空間との連続、それから再編成という問題です。仙台という都市は元々岩出山で城下町を成立させ、それを在地の中心として城下町を成立させていた場所近くに持ってきて、それを接合して一体化していくという過程を辿りました。つまり別の城下町を新しい城下町として移動してくる、それと同時に古くからある城下町的空間も残っているという状況を考えますと、仙台のような二つの核を持つ状態、つまり仙台城と若林城という二つの核を持っていた様な状態というのは当然現れると考えられます。こういった様な経過を辿った都市が他になかったのかどうか、これは考えてみたいと思っております。

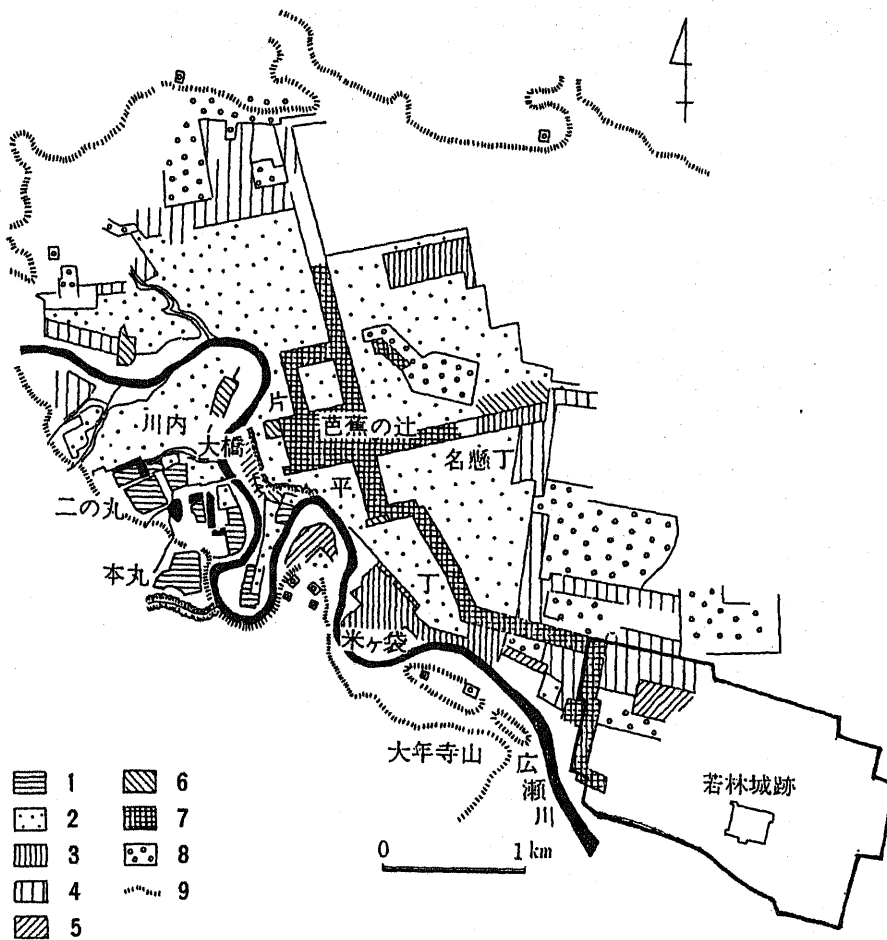
また、隠居をしていなかった政宗の居城である若林城に対して、隠居城というイメージが与えられました。これは当時隠居した人間は別に館を構えるという通念が存在していたことを示唆します。秀吉の場合、秀吉は隠居して伏見城に住みますが、その秀吉の養子である秀次が聚楽第というもう一つの城郭を受け継ぎます。徳川家の場合2代目の秀忠が江戸城で政権を取っている時に、家康は駿府城におります。この様な当主と隠居という二次的な権力、二元的な空間体制というものが近世初期には見られるわけです。政宗の父、それから祖父、曾祖父はそれぞれ別の城に住みまして、大変な抗争を繰り返しておりました。当主と隠居というものが一つの城に住むことはそういった隠居権力と当主権力との対抗というものを終わらせる上で意味があったのではないかと考えられます。

もう一つの問題は地方知行制という問題です。地方知行制とは有力な家臣にそれぞれの領地を与えているという体制ですけれども、その場合に藩内に多くの小さい城下町というものが営まれていきます。いわゆる蔵米知行制、城下町に全ての武士がまとまって住んで藩の側から給料としてお米を頂くという体制であった場合、武士の消費は城下町で消費する分と、首都である江戸で消費する分との二つに分かれます。一方有力な家臣を地方に住まわせる地方知行制を取った場合、武家の消費はそれぞれの住まいする知行所における消

費、それから城下町の消費、江戸における消費と理屈上では三分割されるということになります。このような消費の分散といったものが、城下町的发展を構造的に抑制していなかったかどうかということを確認してみる必要があると思います。近世後期の仙台における武家屋敷の大幅な減少がありました。これは天明期の飢饉の後、役についていない場合在郷住居を常として、仙台北下の屋敷を所持しないという傾向が広がったためであると言われています。つまり全くの空き地になるほど武家屋敷は減ってるわけですが、この割合がそのまま仙台北の武家人口が減ったことを意味するわけではありません。仙台北の武家屋敷の減少は仙台北における消費量の減少ではありますが、同時に在方町、地方の町の消費の拡大に繋がっていた可能性があります。

最後に図の7を挙げておきました。小さい城下町として営まれていた地方の町の状況で、このように城下町としての体裁を全て持っているが、しかし小さい町になります。つまり地方知行制を選択していた藩にとって、中心城下町とはネットワーク的な都市における核の機能を担う存在であって、城下町を語るためにはこのような小城下町の全体を視野に入れて、都市機能の分担や分散というものを考えていかなければならないのではないかと考えます。これで発表を終わらせて頂きます。

図版資料「城下町仙台の建設と変容」



正保期の土地利用

1. 城・藩施設, 2. 侍屋敷, 3. 組士屋敷, 4. 足輕屋敷, 5. 卒屋敷,
6. 職人屋敷, 7. 町屋, 8. 寺社, 9. 丘陵との境界

図1 後藤雄二「城下町仙台の構造—十七世紀の侍屋敷地区を中心として」所収図に『仙台市史』特別編2考古資料の図版から若林城下範囲を書き加える。

* 後藤図は若林城廃絶後、1645～46（正保2～3）年の状況。若林城下町が経営されていた時点では、北東部・東部の武家屋敷・職人町、南東部の寺社は成立していない。

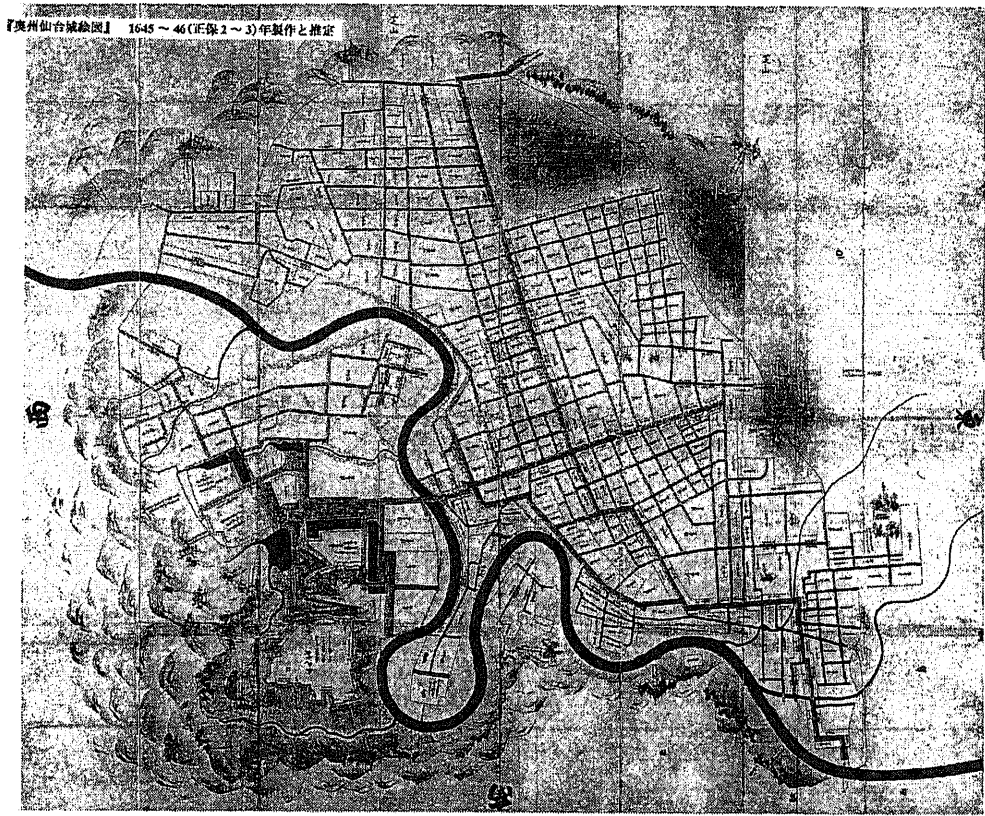


図2 『奥州仙台城絵図』 1645～46（正保2～3）年製作と推定

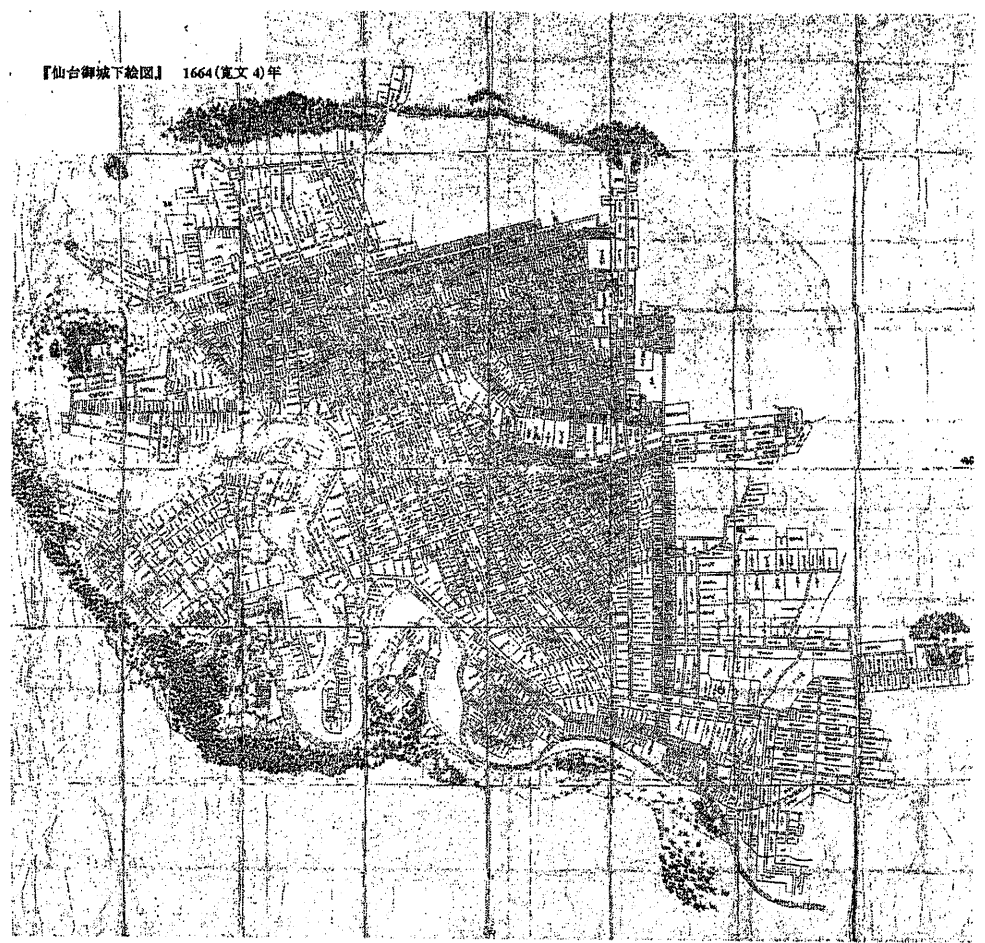


図3 『仙台御城下絵図』 1664（寛文4）年

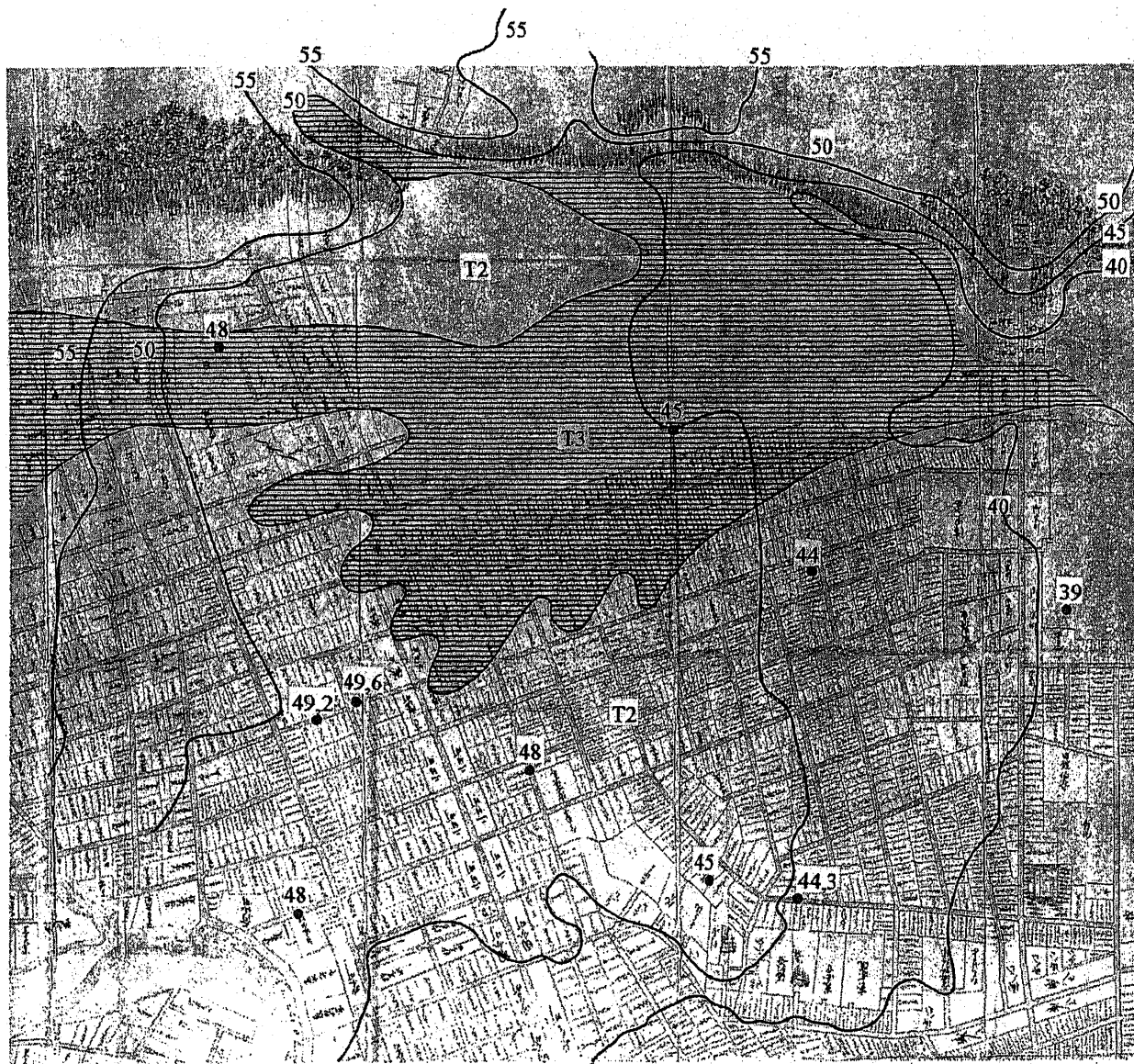


図4 寛文図に等高線と「仙台地域の地質」記載の段丘面を書き加える

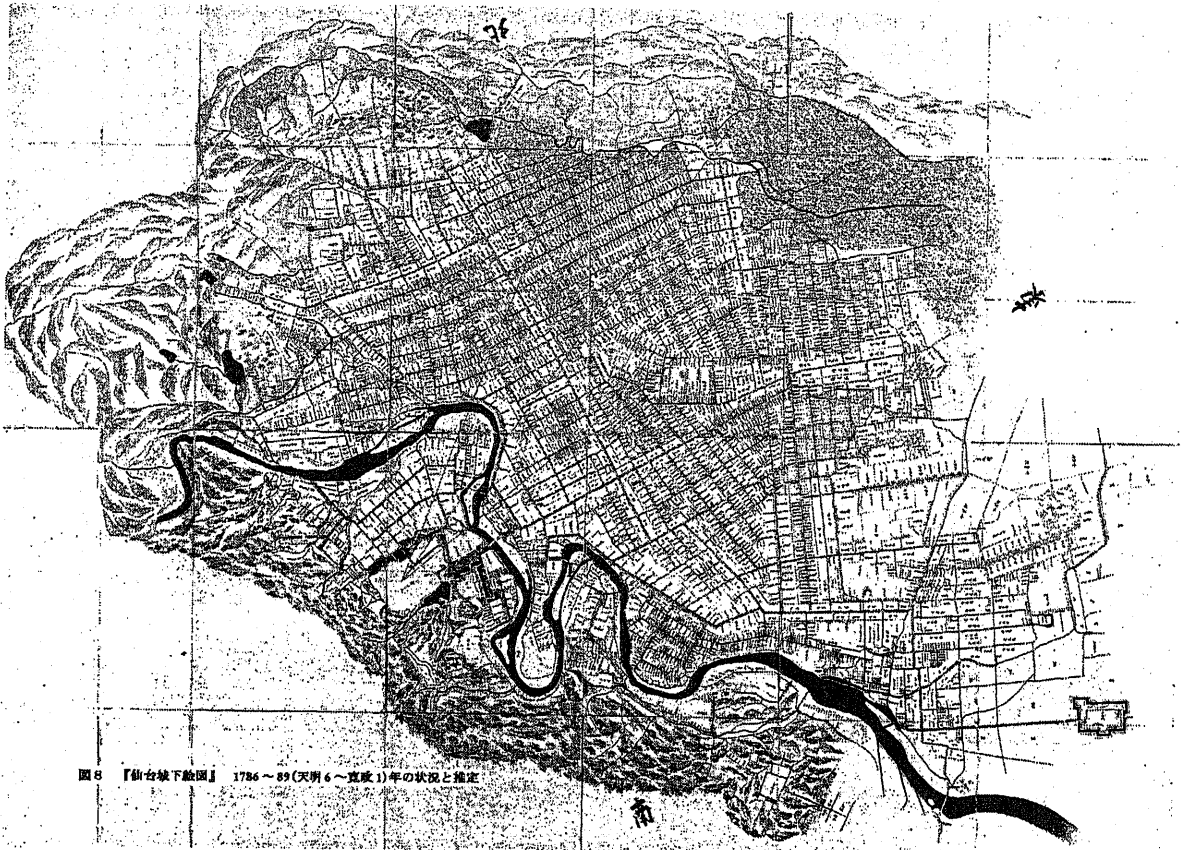


図5 『仙台城下絵図』 1786～89(天明6～寛政1)年の状況と推定

図5 『仙台城下絵図』 1786～89(天明6～寛政1)年の状況と推定

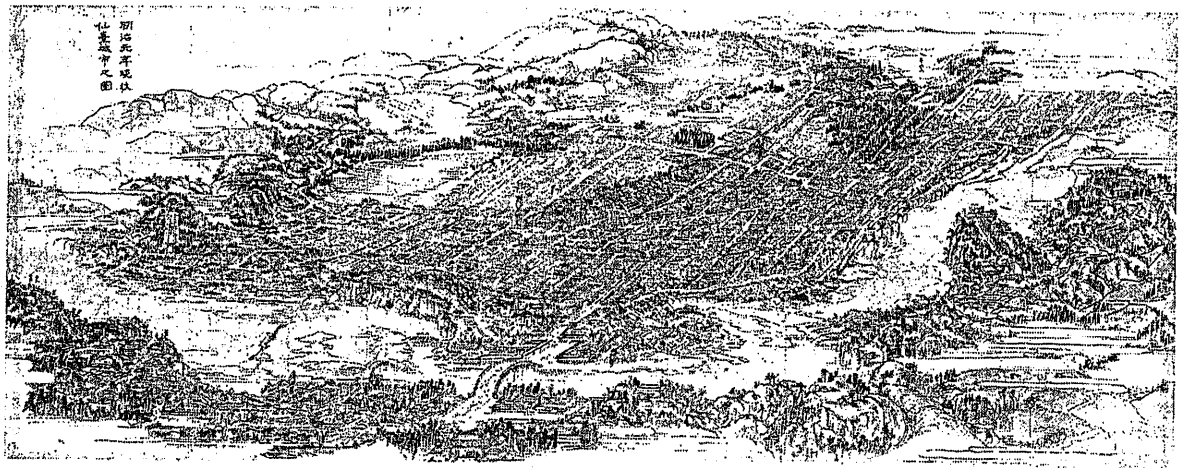
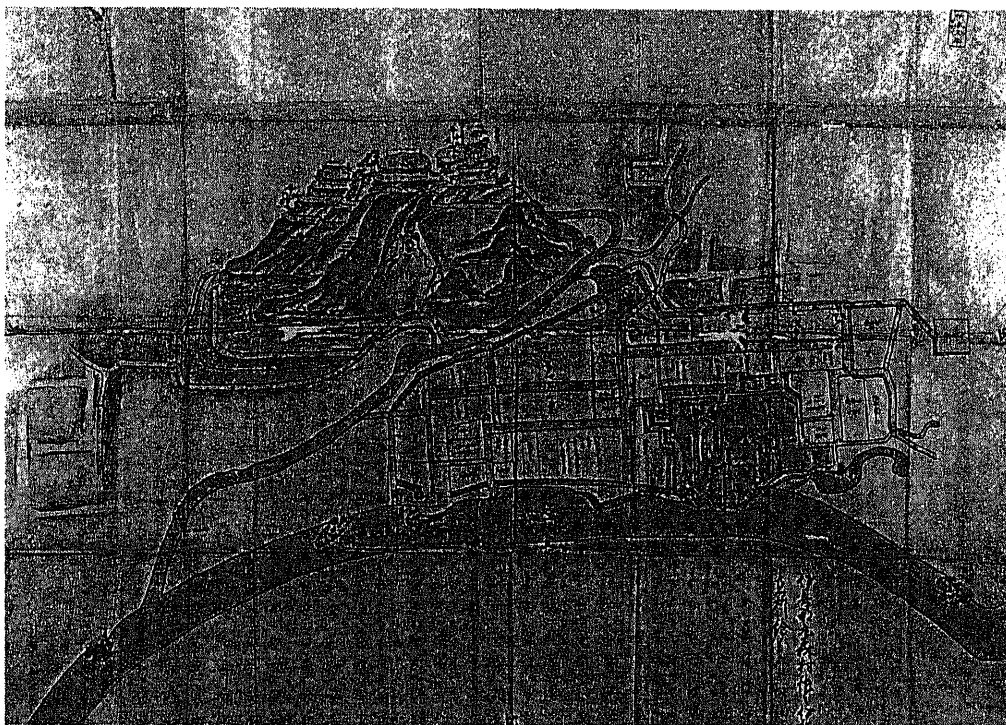


図6 『明治元年現状仙台城市之図』 1868(明治1)年



*18世紀前半の状況と推定。左上（南東）の丸山城は廃城されている。右下（北西）の阿武隈川沿いに佐々氏の居館である鳥屋館^{とやだて}がある。館は枡形や堀を有する平城形態。周囲の「小城下」は、館から順に、佐々氏家臣の屋敷、佐々氏以外の給主屋敷（仙台藩から預けられている佐々氏家臣の屋敷、佐々氏にとっての「外様」）、町屋敷（中央に街道）、足軽町、寺社と並び、周囲を川と堀で区画している。すなわち、近世城下町モデルの縮小形態。

図7 【伊具郡丸森村佐々伊賀在所絵図】

5. 城下町松本について

土本 俊和

信州大学の土本と申します。私は建築史の専攻でございまして、主に京都の形成過程をやっておりまして、それで特に近世初頭の転換期のことをやっております。今日お伝えする城下町は日本の真ん中の高いところにある町で、松本と松代という町です。特に日本の城下町を、どのように読み取るかと言った方法論の点で注目していただきたいと思えます。また、特に私は建築の出身であって都市を勉強していますので、都市と建築の関係をどう繋げるかといった問題を扱いたいと思えます。それから、文献資料が不十分な場合、他の絵画資料とか考古学的な発掘資料とか建築遺構とか、そういうものを総合してどのような結論を加味するべきかという一つの方法を提示したいと思えます。このときに都市の形というところが論点になります。この視点は日本だけじゃなくてヨーロッパで言えば、イタリアのムラトーリ (Muratori) 学派とかアルド・ロッシ (Aldo Rossi) とか、あるいはイギリスのコンゼン (M.R.G. Conzen) とかスレイタ (T.R. Slater) とかによるいわゆるアーバン・モルフォロジー (urban morphology) という分野になると思えます。近世都市の形成過程として、従来山の上に建っていた城が平らな所に降りてきて、平城になっていく特徴がまず挙げられます。それで町割りが計画されますが、同時に水、水系も計画されるという点、すなわち、その平らな土地の上に水系が計画されるという点に注目したいと思えます。それでもう一つ重要なのは、都市が一足飛びにできたのではなくて、非常に段階的に造られたということを実験的に把握したいと思えます。

まず都市が立地する場所によって水の性質も変わってきます。一番最後の資料、A3の一番最後の資料の右上を見て下さい。これは『守貞謄稿』という資料の中で上水がどうなっていたのかということ詳しく記しています。*1) いわゆる三都といわれる京都・大坂・江戸について説明されています。京都はですね、江戸と大坂と違っていて、古代・中世からできてきた古い都市です。そこでは主に井戸水を使ってそれを飲料水としておりました。それに対して江戸と大坂は新しい町で、海辺の湿地に立地するという町でした。今『守貞謄稿』によりますと、大坂は水に塩気が混じっている。それで、川の水を人々がそれぞれの家に運んで飲み水にしていました。井戸水は皿を洗ったりするのに使っていました。江戸の方は川の水を樋で流していたものです。今年の6月(1999年6月)にソウルをまわった時に、共同の井戸をみんなで見学する機会がありました。それは道路に面した井戸で共同の井戸でした。ソウルの場合、その井戸水を人が運んでそれぞれの家に持って行っていったということを取りました。この意味でソウルは、大坂と京都を足して2で割ったような形だと思えます。このように水の性格によって都市のあり方というのがかなり大きく違ってくるというわけです。この他に天水や共同の井戸水を各戸で溜めて飲み水にしていたような小さな村や町も日本にはありました。それで信州の城下町の場合どのような状況かと言えば、まず山に囲われたところにありますので塩水がなく、傾斜がありますので常に清涼な水が絶えず流れ続けているという所でした。川の水を生活用水に使うこと

ができました。そして、扇状地の末端に城下町が立つ場合が多いのです。地下水面が高いので簡単に湧き水を手に入れることができました。それで得られる一つの結論は、松本も松代もまず川の水を利用した都市計画がなされた。後に、都市が拡大する過程で湧き水を使うようになったという点であります。その湧き水を小さな水路で都市の中に流していくわけです。もともと川の水を飲み水に使っていたのですが、すぐに汚れるようになって禁制が出るようになります。井戸は城の中の武家屋敷とかたまには共同で使ったりもしますが、信州の場合は湧き水ないし河川の水を使っています。

それでは、都市の形成過程を段階的に分析する上で、お配りした論文抜刷*2)の中で、まず222ページの表1と表2をご覧ください(掲載略)。これが17世紀前半の資料で、都市の原形を把握するには不十分なものです。この他223、224ページなどに文献資料があります(掲載略)。これも都市ができてから数十年たってからの伝承で、やはり不十分になっています。そこで、都市の形を分析することによって、幾つかの種類が抽出されました。このとき、古い所と新しい所を区別していくという手法を採りました。まず一つの視点は町や街路の基軸が時計回りに10度振れているか、それとも真北か、という点です。224ページの図1(掲載図参照)の真ん中の右の辺りに10度振れた基軸が見えてきます。もう一つの分析の方法は224ページの図2(掲載図参照)になってきます。タイプa(掲載図参照)というのが串刺し型と申しまして、これはいわゆる間口が狭くて奥行きが深い敷地で、短冊形になっていて、これを水路が串刺しているという形です。他方でタイプbとタイプc(掲載図参照)は敷地を水路が串刺しにはしない形です。タイプbとタイプcは町割りと同時に水路が作られたか、あるいは町割りの後に水路が付け加えられたかのどちらかです。タイプaは水路が通った後、水路を跨いで敷地が裏行きに広がった結果と考えられます。それで一つ古い形として浮かび上がって来るものがタイプaであって、しかもこれは水路が河川から水を取っているものです。それに対して新しい形はタイプbないしタイプcで、その水路は湧き水から水を取っている。古い形のタイプaは真北から10度振れています。新しい形のタイプbないしタイプcは真北を向いています。このように巨視的な観点から見た形と、微視的な観点から見たものが一致します。ぴったり一致します。このようなことを一つのモデルにまとめると228ページのような形(掲載図参照)になります。それで古いタイプを持つ形がStep1になります。Step1の形に新しい都市域を付け加える形でStep2という城下町建設がなされてきたと考えられます。さらに城下町が拡大する過程でStep3というような、17世紀前半にさらに拡大して安定期を迎えます。

このような新しい方法で分析するのは、すでに提出されている学説とかモデルとかを再検討するという意味合いもあります。同様な方法で最近やりましたのが、一番最後のページの松代になってきます。ここでは図1(掲載図参照)で水がどこから来ているのかを調べています。図2と図3(掲載図参照)はそれを模式化したものです。図4(掲載略)は町割りの基軸がどうなっているのかを分析したものです。その左の史料1~5まで(掲載略)はどのような飲み水が当時使われていたかが分かるようになっています。図5(掲載図参照)は松代城下町の形成過程を模式化した三段階を示しています。このように信州の持っている城下町の特性を生かして一つの分析方法を示しました。このような方法がソウ

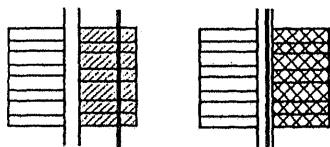
ルなどにみられた井戸とか町割りとかに対してどの程度応用が利くのか、それが私の課題です。

最後になりますが、こういう研究が現代的な意味で都市計画的な課題を誘発すると思います。まず戦後水道が普及しまして、都市衛生が向上しました。しかし、生活用水が流れていた川にゴミを平気で捨てるような時代になってしまいました。そもそも川は人間の生活を支える重要な都市施設でありました。都市の中の水を見直すことが都市の再生に繋がると思います。やっぱり、都市計画というのは、都市を変えることばかりではなくて、都市の見方そのものを変えていくということも大切だと思います。そういう意味で都市史研究というのは非常に有効だと考えます。以上です。

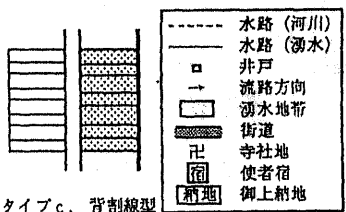
*1) 『守貞謄稿 第一巻』(東京堂出版、1992年) 61-62頁参照。

*2) 畑林真之・土本俊和「近世城下町における都市の原景－水系と町割からみた都市域の形成過程－」(『日本建築学会計画系論文集』483号、221-230頁、1996年)。詳細はこの論文を参照されたい。

【直交型】 水路が地割の隣地境界線
に対して直交する型

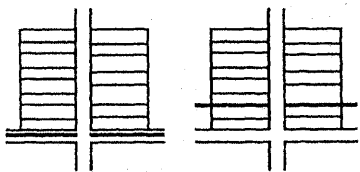


タイプ a. 串刺し型 タイプ b. つら平行型



タイプ c. 背割線型

【平行型】 水路が地割の隣地境界線
に対して平行する型



タイプ d. 街路平行型 タイプ e. 隣地境界線型

- タイプ a. 水路が地割の隣地境界線を串刺し状に貫き、敷地内に取り込まれるように造られた型
- タイプ b. 水路が地割のつらに沿って造られた型
- タイプ c. 水路が地割の背割線に沿って造られた型
- タイプ d. 水路が地割に沿って造られた型
- タイプ e. 水路が地割の隣地境界線に沿って平行に造られた型

図2 水路と地割の形態関係

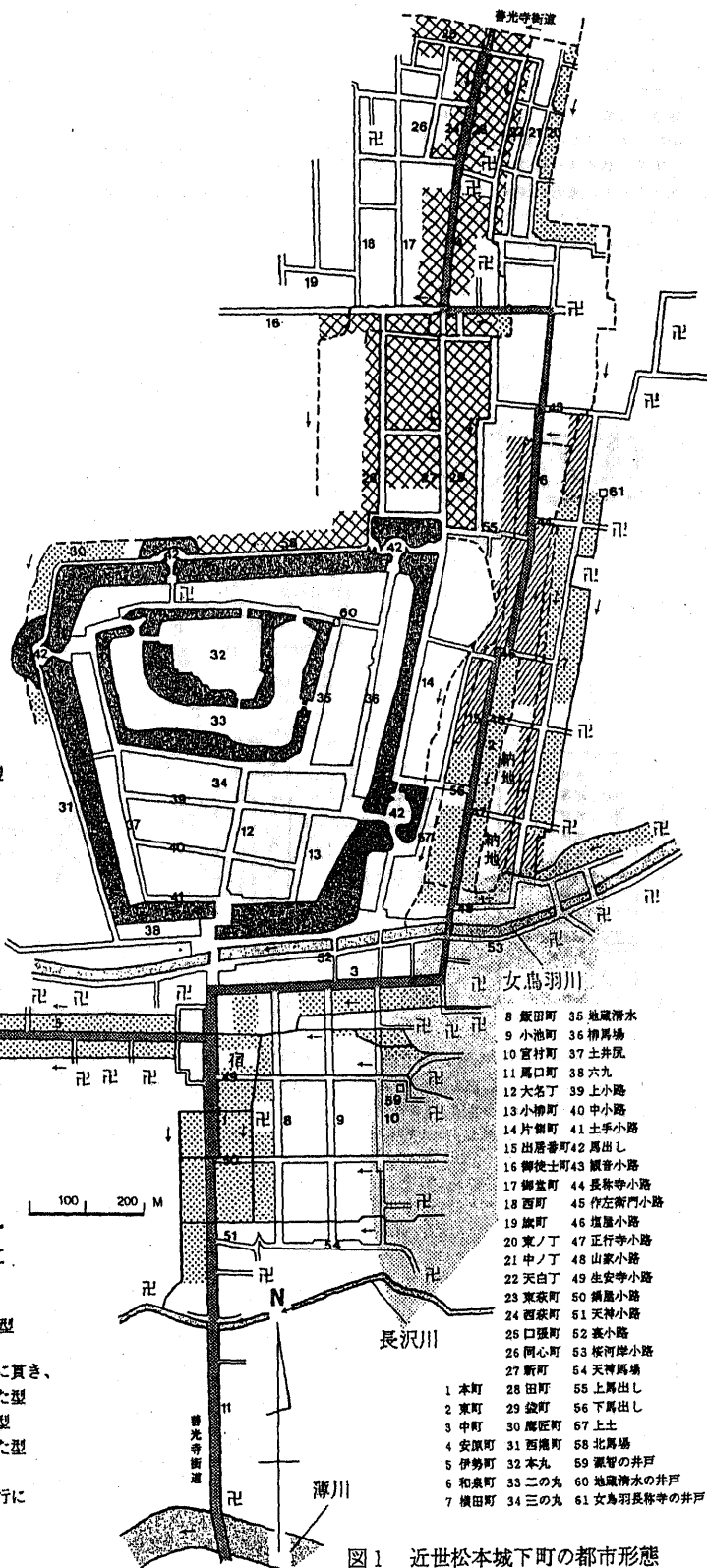


図1 近世松本城下町の都市形態

近世松本城下町（畑林真之・土本俊和「近世松本城下町における都市の原景」より抜粋）

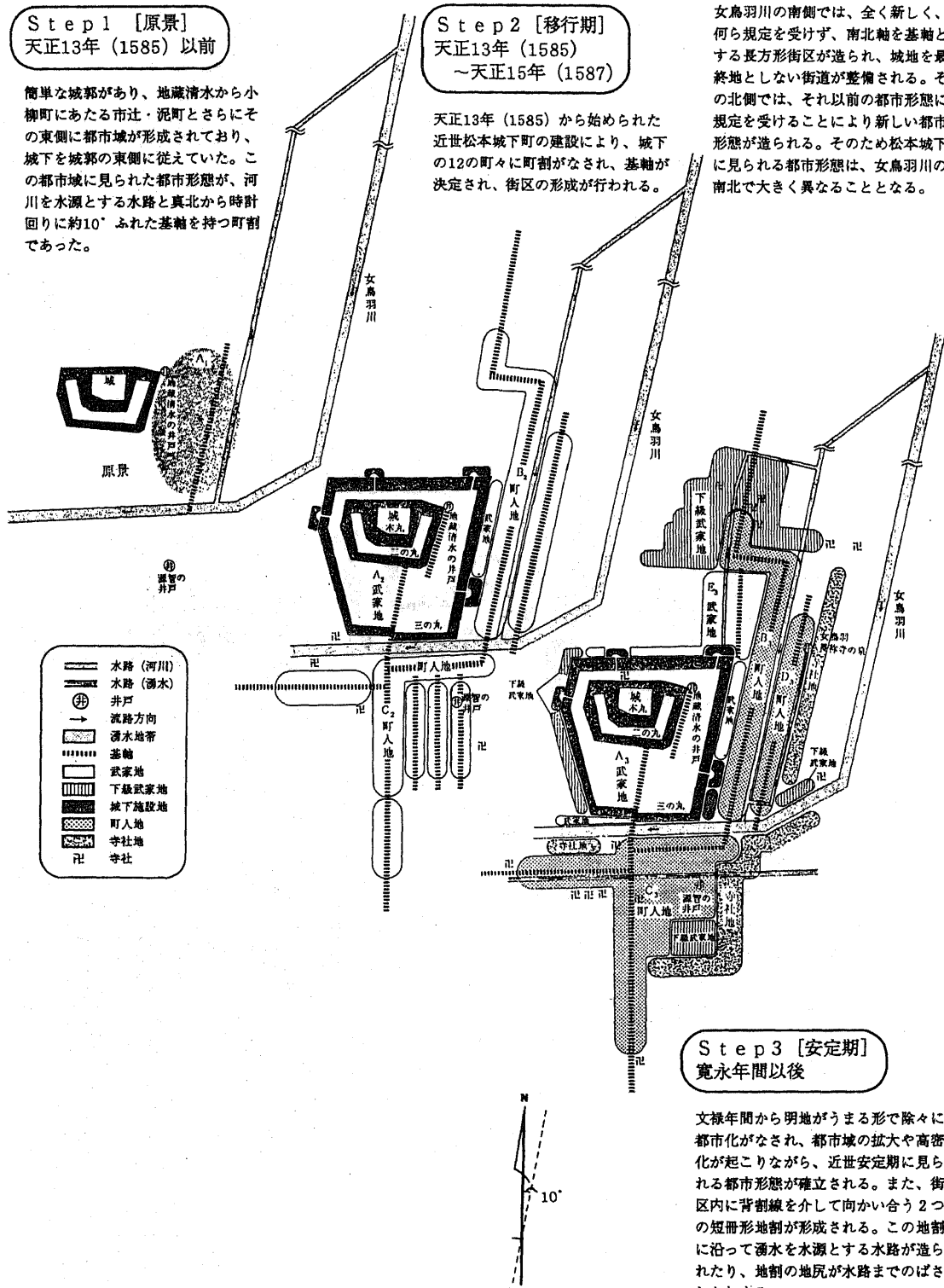
Step1 [原景]
天正13年 (1585) 以前

簡単な城郭があり、地蔵清水から小柳町にあたる市辻・泥町とさらにその東側に都市域が形成されており、城下を城郭の東側に従えていた。この都市域に見られた都市形態が、河川を水源とする水路と真北から時計回りに約10°ふれた基軸を持つ町割であった。

Step2 [移行期]
天正13年 (1585)
~天正15年 (1587)

天正13年 (1585) から始められた近世松本城下町の建設により、城下の12の町々に町割がなされ、基軸が決定され、街区の形成が行われる。

女鳥羽川の南側では、全く新しく、何ら規定を受けず、南北軸を基軸とする長方形街区が造られ、城地を最終地としない街道が整備される。その北側では、それ以前の都市形態に規定を受けることにより新しい都市形態が造られる。そのため松本城下に見られる都市形態は、女鳥羽川の南北で大きく異なることとなる。



Step3 [安定期]
寛永年間以後

文禄年間から明地がうまる形で徐々に都市化がなされ、都市域の拡大や高密度化が起こりながら、近世安定期に見られる都市形態が確立される。また、街区内に背割線を介して向かい合う2つの短冊形地割が形成される。この地割に沿って湧水を水源とする水路が造られたり、地割の地尻が水路までのばされたりする。

図3 マクロ的な都市形成の模式図

近世松本城下町 (畑林真之・土本俊和「近世松本城下町における都市の原景」より抜粋)

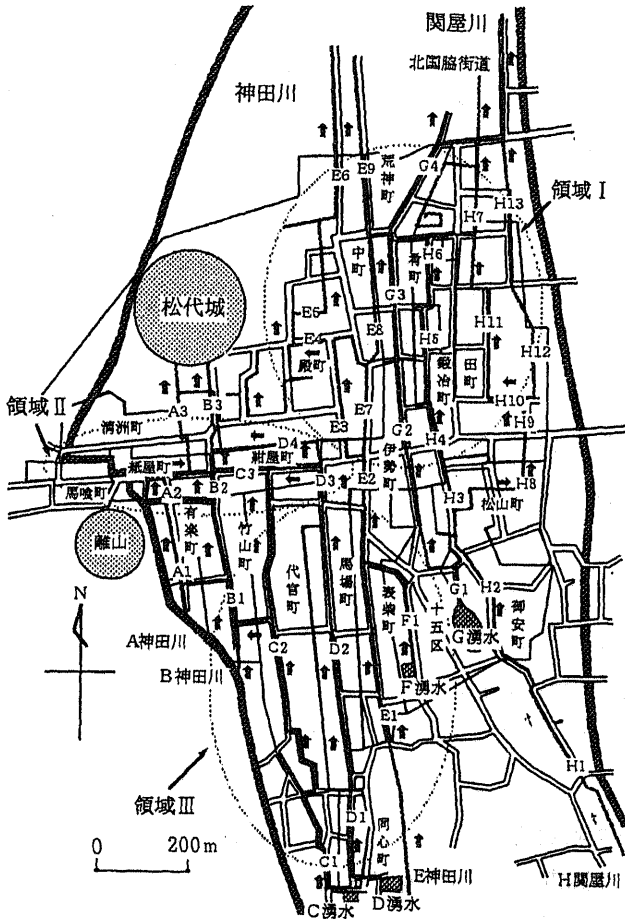


図1 松代城下における上水の経路

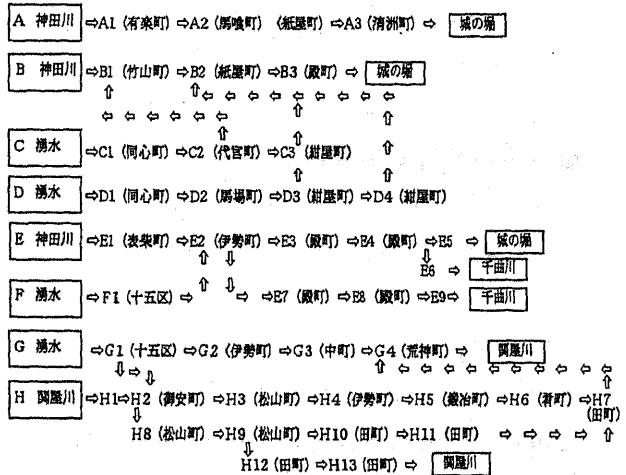


図2 松代城下における上水の経路 (模式図)

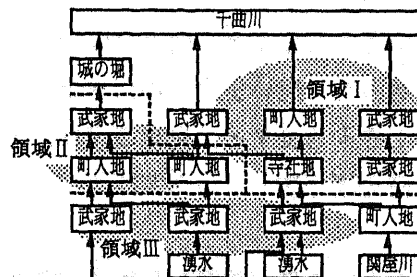
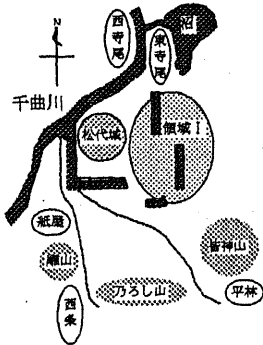


図3 水系から見た職種別配置計画

STEP 1 都市の原景 [戦国末期]

80日の突貫工事ににより城郭とその城郭に規定された真東と真北から反時計回りに約5°ふれた基軸をもつ土塁と堀が形成される。また城郭の南西に村があった。その後、城郭の東側の、真北から反時計回りに約5°ふれた基軸に町々が移転・建設される。この地域は、関屋川の支流から取水し、かつその水系は武家地と町人地が系統化され、城を避けて河川に合流し封建的身分秩序に対応する系統別上水の配置をしていた。



近世松代城下町 (内田実成・土本俊和作図)

STEP 2 都市の移行期 [文禄・元和期頃]

元和8年に真田氏が上田から松代に入封する頃までには、城下の骨格は完成した。その形態は、関屋川を水源とする水路と真北から反時計回りに約5°ふれた基軸を含む一定の基軸を持たない形態であった。その後、真東から反時計回りに約5°ふれた基軸に近隣の村が町人地として城下に含まれる。それは土居の内外で分けられ、内町・外町型の都市形態であった。

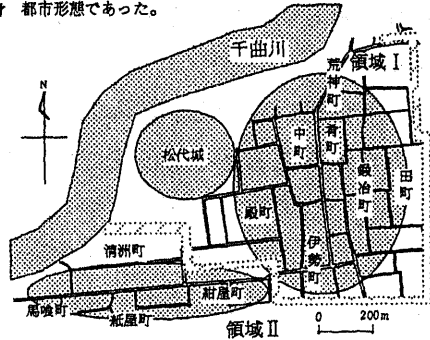
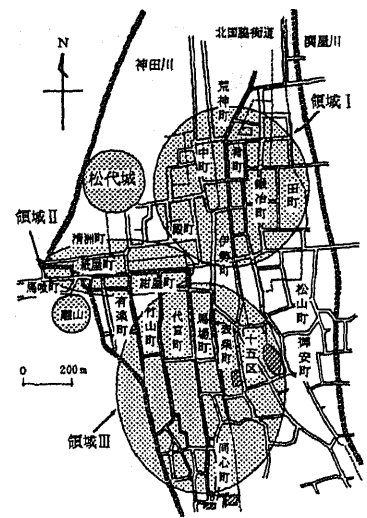


図5 松代城下における都市域の形成過程

STEP 3 都市の安定期 [寛文年間以降]

くだって寛文年間以降に、城下が南へ著しく拡大される。それは、北国脇街道より南側にて町割が行われた。その領域の都市形態は、真北から反時計回りに約10°ふれた基軸をもつ領域であり、南部の湧水と神田川を取水源とし、封建的身分秩序の乱れた上水の配置をしていた。江戸時代を通して、城下全域に整備されている上水をきれいに保つために城下の人々に対して厳しくその使用を規制した。その結果、今日見られるように松代の水系ネットワークが確立されていった。



6. 質疑討論の記録

■金東旭報告関係質疑

小泉和子：先程商店の写真が出てましたけども、日本の場合の商店はお店に入って行って品物が並んでいたり、あるいは関西のように中に入って行くようになっていきますけども、韓国の商店はちょっと見たところ外には壁があって何も売っている様に見えなかったんですけども、中はどうなっているのでしょうか？

金東旭：実際の建物は見てないんですけども、一応商品が並んではいたように思います。内部には生活空間もありました。問屋みたいな機能が強かったのではないかと思う建物です。

小泉和子：そうしますと、問屋以外の小売店に当たるような商店もあったのですか？

金東旭：あったと思います。特にソウルにはあったと思います。

小泉和子：そうしますと、先程の写真に出ているのは問屋のような店なのですか？

金東旭：例えば「店」という字は「問屋」に近い物ではないかと思います。

瀬川昌久：水原の町が移転した後に「華城」という名前が付けられたと言ってもらっちゃいました。「華城」と言いますとどうしても中国人の都市という意味で捉えてしまうのですが、「華城」という言葉の由来を教えてください。

金東旭：ちょっと難しい質問なんですけど、その水原を新しく移転した方は、中国の漢時代の王との関係を理想とした人なんです。それで漢時代の王権を目指して色々な政治改革をしようとした人で、華城の色々な所の門とか建物の名前を、漢時代の宮殿の名前を借りて付けたりします。多分華城というのは中国の古い時代の、王権が強かった時代を理想として付けたのではないかと推定はするんですけど、まだはっきりはしてないです。

平川新：1789年に移転してつくられた新しい都市の形態というのは、それまでの都市の形態と何か際だった違いはありますか？

金東旭：それ程変わった新しい都市とは思いません。基本的には従来の都市とあまり変わらなかったと思うんですけど、その立地を見るとその前までは一応山に囲まれている所を好んだんですけど、わざとそういう所を捨てて、ちょっと平らな所を選んだこと。もう一つは十字型の道路を作っていること。それは明らかに人とか物資の流通を目的をしたのではないかと思うんです。18世紀までも重要な都市は城壁を持つという考えがあったからだろうと思います。

前田洋一郎：第1点、水原の建設目的として、「ソウル南方の巨大商業都建設」ということを挙げておられますが、朝鮮王朝時代の商業都市といいますと、開城もまた非常に有名なものかどうかがあります。それとの関係はどのようにお考えなのでしょう？

第2点、水原の華城建設の目的としまして、王権の強化ということを挙げておられますが、その強化のために王権による軍や経済を直接把握する装置のようなものは、実際に設置さ

れていたのでしょうか？

金東旭：まず2番目の質問は答えやすいと思いますので先にお話しますと、実際この華城を作ってからソウルにあった兵隊をそこに移転して都市を守るようにします。それからこの時期になるとやはり王の側からも商業の資本とか商業の力を、自分の物にしなければならぬという意識が強くなって、こういう都市を作ることによって、自分の権力を強化するということはあると思います。最初の質問の、開城との関係は、18世紀の場合だと、普通の官僚達とソウルの商業勢力が結んでいるように考えてます。それで王の権力が非常に弱くなっていますので、そのソウルの商業勢力と官僚勢力を押さえるために、こういう新しい商業的な都市を作ろうということになります。開城の場合は高麗時代から都市だったので、高麗時代からの都市の形態を守ってきたと思います。そのソウルと開城、華城のそういう比較はこれからの研究課題だと思います。

人間田宣夫：大変おもしろい発表だと思います。一つだけうかがいたい。商業都市ということなのですが、高級官僚、下級官僚、あるいは準両班、そういう人たちの住む居住区域は、商人が住む区域とは明瞭に分ける様な形の都市計画があったのでしょうか？たとえば日本の城下町のように。もう一つは、農業をやるような人は都市の城壁の中にはいなかったのでしょうか？

金東旭：最初の質問なんですけども、韓国の場合は都市の中を性格によってはっきり区分する事はちょっと難しいと思います。ただ長く住んでいると段々官僚達が住む所が固定したり、普通の人々が住む所があったり、商業とか工業をする人達が集まって、住む所が形成する傾向があります。しかし、最初から官僚達が住む場所とか一般の人々が住む場所とか、それがはっきり分けられていることはちょっと見られないと思います。水原の華城の場合も、一応官庁の周りにはやはり官僚達が住んでまして、南の門の周りにはその商業と関係のある人の住宅があったと推定は出来ます。けれども、地域的にははっきり分けられたとは言えません。2番目の質問なんですけども、これは今の段階ではどういう形だったのか全然分かりません。

■李相棟報告関係質疑

千葉正樹：基本的なことをうかがいたいのですが、まず邑という単位は、すべて都市として考えていいのでしょうか？

李相棟：それは立場によって違うと思いますけども、基本的には邑というのは行政で決めた中心ですので、それは行政の中心として成り立っている都市であります。その規模は一番大きい物がソウルで、18世紀中期で20万位の人口、一番小さいのは400人のものまであります。

千葉正樹：そうしますと一般的な商業機能や交通、宿泊機能が集中している都市的な場、都市的な空間というものは、邑以外にもかなり存在していたと考えてよろしいのでしょうか？

李相棟：はい、そうだと思います。その場として例えば宿場町もありましたし、あと商業

の中心として港町みたいな物も現われましたし、特に17世紀、18世紀以降には中央でその商業の拠点になる所は相当人口も増えましたし、都市的な発達もありました。それは邑とは全然別の形で現われます。

千葉正樹：2つ目の質問です。邑城を持つ邑と、邑城を持たない邑に分れると初めて知りましたが、邑城を持つ邑と持たない邑で、空間的に大きい違いはあるのでしょうか？それとも邑城がある場合は単に邑の空間全体が城壁で囲まれたというものとしてよろしいのでしょうか？

李相棟：基本的に言って邑城があると内外の境界が現われますから、形がコンパクトになってゆく、あと役所の位置が決まってしまうので移ることが難しくなるのがありますが、邑城がない場合は全体的な構造が読みにくい場合があります。

入間田宣夫：邑城がある邑とない邑があるわけだけれど、邑城を作ろうということを決めて工事をリードするのは、邑の役所のトップが決めるんですか？それとも住民の意見なども含め積み上げできるのか。どうして邑城ができる邑とできない邑に分れるのでしょうか。邑城の建築というのは、誰がリードして、どのような形で、進められるのでしょうか。建築資金は税金で賄うのでしょうか？そこら辺のことを教えて頂きたいと思うのですが。

李相棟：邑城というのは朝鮮以前の高麗頃、またはそれ以前にまで遡りますから、朝鮮時代の始めの頃に邑城の整備をしたといっても、既にあったものを作り直すみたいな感覚があったと思います。それは国家的な政策で決めた物で、海岸沿いの邑は防衛のために作り直すのを政策で決めた物であって、個別的な邑自体がこの邑城を作る作らないを決めた物では、朝鮮時代始め頃では、ないと思います。あと大きな都市の邑になりますと、それは経済的に余裕がありますから、作っている邑城を修理するとかありますが、それはちょっと別の問題だと思えます。

瀬川昌久：中国語の「城」といいますと、石垣といいますが城壁を意味しますが、邑城の「城」というのもやはり石垣や城壁あるいは城壁で囲まれた空間という意味合いを持つと理解してよろしいのでしょうか？

李相棟：それは基本的には「城邑」と言った方がその中身を表す物に相応しいと思いますが、先に述べた邑城としての中身まで含めて話すのは一般的な話し方、用語の使い方ですので、その使い方で行いました。

瀬川昌久：「城」という言葉自体に都市としての意味合いがどこまで含まれているのかということをお伺いしたいと思います。少なくとも現代中国語では「城」といのは都市そのものの意味合いが非常に強いんですが、先ほどの発表は韓国の邑城では内部に一般住民の居住域を含む広いものがある一方、非常に小さな官街しか含まないような場合もあるということでした。つまり都市性が同じ「城」でも違うと思います。韓国語の「城」という言葉がどこまで都市を意味するのか、都市というイメージを持っているのか、その点をお伺いしたいと思います。

李相棟：「城」というのは都市的なイメージではないと思います。あとはその言葉にこだわりますと、例えば百濟位に遡りますと「城」自体が「村」とか「都市」みたいなのを表したようです。それよりは都市、産業を基準にしますと、高麗頃から「市街」という言葉

が出てきますが、「市街」というのは市場の意味、ストリートですね。あとは、17、18世紀になりますと、「都会」という言葉が一般的に使われるとっております。それで一応ちょっと前までも「都市」という言い方よりは、「都会」という言いの方が、まだ都市的な感覚をもっていました。歴史的な流れとしても日本も近いんじゃないかと思っておりますけども、「都市」よりも「都会」の方がなじみやすい言葉ではないかと思っております。

■千葉正樹報告関係質疑

玉井哲雄：千葉さんの報告は本格的な仙台北下町論ではないかと思っております。都市史研究の上でもいくつかの重要な課題がこの中に含まれておりますので、この時間の中でこの議論を展開することは難しいかもしれません。特に韓国の研究者の方がいかがでしょうか。韓国と日本との対比ということから考えて、何か疑問に思ったことなど御座いませんか？

金東旭：昨日巡視した場所の意味合いとか今日の発表を合わせて、そういう大事さが良く分かってきましたので大変ありがたく思っております。一つ基礎的な問題ですけれども、初期城下町が成立するにあたりまして、町人町ですかそういう足軽とか、そういう仕事に関する何かの技術を持つ人の町と城下町との関係、それは良く分かるんですけれども、農民と城下町との関係というのはどういったものがあるのですか？

千葉正樹：仙台北の場合農民は権力との関係で二つに分けて考えておいた方がいいのではないかと思っております。一つは一般の江戸時代の藩と同じ様に、農民達はその自分の所属する領主に対して年貢という形で米を納めて支配を受けるとというのがまず一つの形態です。もう一つは仙台北の場合、気になるのは、先程見て頂きましたこういう地方の小城下町の場合です。こういった小城下町に住んでいる侍の数は実際には非常に数が多くて、彼らの多くは、実際は自分で農業をやっていました。しかも隣の人の農地を借りたりしている場合には、侍が隣に住む武士に年貢米を納めていたというような実例も見つかっております。いわゆる兵農分離というものが地方知行制でどの程度貫徹されていたのかということについては、もう少し実例を挙げて検証していく必要があると思っております。その場合仙台北の城下に住む人が農業を行うということは、ほとんど行われてはおりませんが、こういった小城下町の侍達は外側に農地を持って農業をやっておりますから、城内に農民が住んでいたとも言えるわけです。

李善姫：私も関心があるのでもう一回質問させていただきますと、仙台北の人口が増える時に農民から町人になるという変化だったのでしょうか。

千葉正樹：例えば地方の小さい小城下町の人口が急速に増える時には、男性人口が女性人口の二倍とか三倍になっている例がいくつか見あたります。これは明らかに周辺の農村地帯から男性人口が町に移ってきている、入ってきている結果であることが分かります。仙台北の場合それがどのような状態になっていたかはまだ私には分かりませんが、恐らくその様な形で農村から町に人口が入ってきたということはまずあったろうと考えています。もう一つ仙台北の商人を考える上で重要なのは、上方商人の問題です。江戸中期以降、近江商人と呼ばれる琵琶湖沿岸に住んでいた商人達が急速に仙台北に進出して、仙台北の商業のほと

んどを支配していきます。実際どの程度の商業人口が上方から移動してきたのか分かりませんが、少なくとも資本という観点で見えていきますと、上方の資本と仙台の資本というのが結びついてしまったということが言えると思います。近江商人の活躍はもちろん全国的に見られるわけですが、仙台藩は近江に一万石ばかりの所領を持っていたということが、何らかのきっかけになっていた可能性はあると思います。

■土本俊和報告関係質疑

玉井哲雄：時間が余りなかったので随分端折って話をさせて頂いた様ですが、先程の千葉さんと城下町の時代としては重なっている時代です。この時期の仙台と松本を、どう対比していくのかについて色々な方法があると思います。文献史の立場で精密にやっていく方法と、建築史の立場で具体的な物に則して、この場合は水系ですけれども、分析していくとその過程が明らかにできるかもしれない。この問題に関して仙台の研究者の方々から質問もあると思いますが、まずソウルとの対比という問題がありましたので、ソウルでこの様な分析を既にやられている李相棟先生いかがでしょうか？

李相棟：都市形態を分析していく方法として、かなり興味深くうかがいました。ソウルの場合、まず一つは、山が周辺に立地しているということが挙げられます。ですから当然ですが山から平地に雨水が流れてくる訳です。それで周辺から南北の方向に小さな水系が形成されます。その水系に従って中流といいますか、ちょっと大きな街道が南北の方向に広がる訳です。それでソウルの場合山から下ってくる水と道路の都市体系というものがほぼ一致しています。しかし日本とは異なりまして、区画がちょっと全体的な区画でなくて、個別的な区画になっております。区画ともう一つは微妙に地形が変わる、その地形が道路の方向を決める、区画を決めることに関わっているのではないかと考えています。

ですからソウルを理解するにはその水系と、もう一つは地形が変わる地域が重要ではないかと考えています。ですが、今土本先生が発表なさった様に、都市の形成過程、変化段階というものをソウルで説明できるかどうかというのは問題として残ります。というのは、地形を形成する方法というのが時代によってソウルの場合あまり変わっていないのではないかと考えているからです。今、土本先生が発表なさった様に、形態的にまず分析なさって、それから文献でバックアップする形での研究という方法がソウルの場合できませんので、そのことが非常にうらやましく思っています。現時点で、韓国の場合文献がかなり少ないという問題があります。勿論今日発表なさった土本先生の方法に対しては、これから参考にしたいと思っています。

千葉正樹：先程私が発表しました若林城下町の軸線と、奥州街道の軸線、この二つがなぜできたのか実は全く分かりません。水との関わりというのは私は全く気が付きませんでした。もう一つ東照宮から南に向かう軸線に関しては、これは東照宮本来が持っている信仰の形だと私は考えています。仙台の場合、四谷用水というのが問題になりますが、これは基本的に奥州街道と直交する形で引かれております。これは奥州街道ができてから後に作られたと考えられる用水ですので、むしろ町割りが先にあって、後で水が引かれたと考えております。

もう一つ仙台は湿地を乾地化しておりますので、掘ればかなりの水が出てくるという状況があったために、外から飲み水を供給する必要は、かなり後の時代になるまで起きなかったのではないとも考えられます。ちなみに広瀬川の水面は城下町よりかなり低くて、この水を飲み水に利用するという事は、ほとんどの住民は考えられなかったと考えられます。従って奥州街道を軸線とする初期城下町に関しては、水の問題ではない何らかの理由があったのではないかというのが、現在私の考える推定です。やはり問題は若林城下町で、この角度と水の問題というのは、考え直してみたいと思いました。

■最終討論

入間田宣夫：さきほど、千葉さんが最後のコメントで、若林城の町割り水と関連するかもしれないということを示唆されましたが、別の考えも申しあげたいと思います。若林は、古くから、仙台平野の中心集落だった所で、弥生時代の大集落があり、東北屈指の古墳があり、古代の国分寺があり、中世の城館があり、一貫して中心なんです。そういう歴史を踏まえて、今日の千葉さんの報告も出来あがっていたと思います。実はあの辺りには条里があるんですね。国分寺の門前に伸びる南北の道路は、おそらく仙台で一番古い道路だと思いますが、古代の条里制歴史を引きずっているようです。あの辺りの町割は、それに規制されているのではないのでしょうか。そのような歴史的な位置付けが若林城の廃止によって大きく変わったということの意味を考えるべきだと思います。単なる可能性の指摘にすぎないんですけども、一言。

玉井哲雄：さきほど、李相棟さんの話の中で、条里制が邑城の地割、道路割に使われたという話がありました。韓国における邑城で条里制の様なものが、邑城の成立する前の地形、それからそれに先行する土地の状況が、邑城の形に関係があると説明されたと思うんですけども、日本の城下町の成立過程についても何かご意見は御座いませんか？

李相棟：韓国で条里のような区画が出てくるのは、統一新羅の統一過程で、例えばさっきみた南原（ナムモン）の都市などは、唐の長安から来て軍隊が駐屯します。駐屯しながら屯田（テイデン）といって四角い格子を造る、それを条を建てる何かの記録が出てきます。その他にも似た様な区画は、例えば新羅の慶州（キョンジュ）なんかは、都市の区画でちょっと古いです。その他にも尚州（サンジュ）とか新羅の統一期において、主要都市で大きかったのには、ほとんどそういう区画の跡が残っています。その区画の跡を、今確認できるのでは朝鮮時代の邑城がその区画の上に乗って建てられます。その条里とか条坊の大きさよりすごく小さい様な、区画4つぐらいの大きさで慶州（キョンジュ）の場合の邑城は建てられますし、その影響で、例えば朝鮮時代以降に建てられた、造られた邑城の街路、道路のパターン等とは全然違うグリッドに近い型が残されています。それは例えばさっきの南原（ナムモン）もそうですし、全州もそうですし、光州なんかもそうです。その条里とか条坊の跡が朝鮮時代の邑城の街路パターンまで残っています。

ただ全州などで現れるのは、その街路の四つ角、クロスする所がT字か十字型かの問題で、中心部に客舎という官衙が建てられますけども、そのグリッドを消して、中心部を消

して官衙が建ちます。だから朝鮮時代においては、グリッドパターンみたいな道路はあまり好まれていなかった様で、グリッドパターンをちょっとずらすといった変化はあったと思われる。

それ以前の問題で、その条里と条坊のどちらかよく分からないんです。例えば慶州（キョンジュ）なんかはそれは条坊だと思いますけど、その他に方向が北の方に正確に合っているものもあるし、相当ずれているものもあります。例えば合っているものは慶州（キョンジュ）とさっき出た南原（ナンモン）、あと尚州（サンジュ）なんかは正確に北に向いています。全州とか光州とか珍州とかは相当角度がずれてます。個人的な考えでは、古代都市から中世への時期で、全部が都市区画、条坊であったとは思いません。例えば屯田、つまり駐屯地の条里みたいなものが先にあって、そこに後で都市が乗っていったんじゃないかという推定をしています。そのように推定しますと、例えば日本の古代として条坊というのは、中を切って敷地を造って中を埋めて使う方法です。条里というのは結局は道路が残りますから、道路から都市が始まっていくみたいな過程が想定できるとしております。

現在そのような問題を一番熱心に研究していらっしゃるの、前に座っている李京賛先生です。今の所、いろいろと確認をしていく段階ですし、あとその区画の内部の構成の論理がどうなっているのかという問題もありますから、そのシステムをどう把握していくかという研究をしています。その背景に、高麗とか朝鮮時代の都市をどう重ねていくか、またそこから探し出すということが、最終的にはこれからの課題ではないかと思っております。

玉井哲雄：どうも有り難う御座いました。発言されていない方で、どうぞ斎藤さん。

斎藤善之：都市というものが政治的な産物であると同時に、経済的な装置であるということを見ると、都市という場において、物流がどうなっていくのかとか、それを担当するための空間が都市としてどうあるのかとか、どういう装置を持っているのかと言うことは、不可欠の視点ではないかと思っております。その点については、なかなか議論が発展していかないかなあと思っておりました。例えば、千葉さんのお話を例にしてお話をさせて頂きますと、近世中後期以降、やはり都市が変貌して行く。特に仙台においても。特に町人の居住空間も、八幡町だけじゃなくて街道沿いに展開する場末町に、かなり濃密に展開してくると思います。今日はその話はあまりなされていなかったと思うんですが、これは今日出されていなかった安政の城下絵図とかを見ると、明らかにそういった場末町、例えば奥州街道沿いだとか南の河原町、長町にかけてとかに、かつてなかった様な町人地が生まれてくる。恐らくそれが先程質問に出されていた、農村と都市の関係ということを含めて非常に重要な場になっていると思うんですね。町人達の願書なんか見ても、中心部の町人達が近世後期に訴えていることの大半は、この場末町を何とかしてくれというものです。場末町というか周辺の町場と中心部の町場とが、対立関係になってきているといった状況があると思うんですね。そういったことを踏まえていくと、また今日の千葉報告とはちょっと違う様な仙台の都市空間の有り様というんですか、特に経済的な観点から見た都市空間の有り様というのが、もう一つある様な気がしています。

千葉正樹：仙台の場末の存在は気が付いてますが、基本的なことはまず江戸に比較してみ

ると明らかに線的な展開だということがいえます。つまり街道軸上に宿場との連結とかそういう形での展開が見られていますが、面的な展開は行ってない、それはなぜか。そこが地方知行制を取っていた城下町の一つの軌ではなかったかということ、今感じとして持っています。というのは、私は江戸で場末の事をやっておりますけども、江戸の場末で造られていた様な生産品が、仙台の場合には地方の小城下型の在町の中になんかそういう機能が実際は分与されていたんじゃないか。場末機能その物が、その小城下型在町が活性化していく事によって、そちらの方に分散していたということが、場末の面的な展開がある程度抑制してはいなかったのかという視点を持っています。もちろん場末というものを無視しているわけではなくて、場末を考えていく上で、その小城下型在町というものを無視できないだろうと考えております。

玉井哲雄：今の議論はまだまだ続くだろうと思います。場所を変えて議論していただけますから、この場では、韓国からいらっしゃった研究者の方で、ご意見ご感想いかがでしょう。宋寅豪先生どうぞ。

宋寅豪：ソウル市立大学の宋寅豪です。建築を専攻しています。土本先生の発表が印象的でした。都市形態を論じる上で自然形態をまず考えるということについて印象を受けました。先ほど李先生がおっしゃいました様に、ソウルの都市形態を考える上ではまず自然形態を考えなければなりません。自然形態がソウルの都市形態を決めたと言えるほど重要なものでした。しかしながら今日は松本城とか松代城の発表をお聞きしながら、自然形態その物が都市形態を決めたのではなくて、社会組織的な物が都市形態を決めて、それからその自然形態がそれに沿っていく、そういう風な印象を受けました。まだまだ私がいけないところがたくさんあると思いますので、色々教えて頂きたいと思います。

今二つ目に言いたいことは、その様な都市形態が建築住居形態の形にどの様な関係を持っているかについて考えたいと思います。少し紹介しますと、ソウルの水系が南北の方向になっておりまして、それによって道路も南北になっているということ、先程申し上げました。その様な南北方向の道路というものは、都市計画というものは、その上に建つ住居にも密接に関わっています。方向を重要視する朝鮮の人々の考え方と関係すると思います。機会があれば今日の松本城における都市形態とそれに関わる住居形態というものを、もうちょっとお話を聞きしたいなあと思います。今日日本側お二人の発表を拝聴致しました。本当に勉強になりました。

李 京贊：まず韓国の二人の先生に感謝します。全体的な内容が普段関心がある内容だったのでかなり勉強になりました。自分の知識が足りないので深い内容は分かりませんが、機会があれば今日発表のあった商人について、その性格そのものが都市形態にどういう風に繋がっていくのか、例えば大商人と小商人がいますけども、そういった商人達の性格によってまた都市とどういう風に繋がっていくのか。あるいは商人そのものが地所を持っているのか、それともグループとか何か組織を持っているのか、そういう細かい所にかかわって都市を結んで考えれば、これから勉強になるんじゃないかと思います。

それから、今日土本先生が発表なさった水とか地形的な側面については、自分も常に関

心を持っていて、一つ今日申し上げますと、全体的な都市形態が水とか水系とかに関わると言うことは、韓国の都市を考える上でも非常に大きな特徴であると思います。ですが、他の観点から見ますと、水を何か線ではなく一つの点にしまして、その点に関わる人々の生活とかいう観点、その観点は大きな都市よりはちいさな都市においては重要な価値を持つんですけども、そういった井戸を中心に関わる人々の生活というものも挙げられると思います。このようにいい研究の機会を用意してくださった皆さんに、深く感謝致します。ありがとうございました。

玉井哲雄：どうも有り難う御座いました。最後に平川先生、まとめということで宜しくお願いします。

平川新：とてもまとめなんてできませんけども、日本と韓国の都市史研究についての比較ということ、文献史学と建築史との融合とでも言うんでしょうか、計ろうという二つの大きな研究上の課題と言うのが今日示されていて、見事にそういう報告が用意されていたなという印象を持っております。そういう意味では今日お聞きした報告全てが、これからの勉強になると思っております。

感想というよりもコメントになるかもしれませんが、金東旭先生から韓国で、新しい都市が造られる場合の報告がありました。新しい要素というのは十字路が造られた程度であるというご指摘が御座いましたけれども、日本の場合には先程千葉さんの方から紹介がありました様に、近世城下町だけでも様々な類型があるということが指摘されておりますので、その点、朝鮮半島の都市の場合に、いわゆる何か典型的なもの、発展段階になるのか、横並びの類型になるのか分かりませんが、そういう指標で何か構想ができるのではないのかという印象を受けました。

それから李相楳先生の邑あるいは邑城が、行政区域になっているということが、どういう歴史的な来歴があるのだろうという問題と同時に、日本との関係ということで見た場合に、近世城下町というのはその行政区域であるし、武士の居住地域であるという点において近似性が感じられます。その辺が見えてくれば比較研究の真髄になるのかという気がします。

それから土本先生のお話、これも目から鱗が落ちる様な話でした。そういう分析の仕方があるのかということですが、論文を読んでおりませんので、お話を聞いた印象だけで申し上げますが、つまりこういう綺麗な形で本当に復原されるのだろうかというのが、文献史学の側からの正直な印象でありました。史料から串刺し型までのモデルを提示されると、これは文献史学の側にもインパクトを与える分析になるのではないだろうかと思われました。大変勉強になりました。有り難う御座いました。

玉井：どうも有り難う御座いました。残念ながら時間になってしまいました。充実した内容のシンポジウムになったと思います。私の方から申し上げます。報告の先生方、討論に参加していただいた先生方ごきょうさまでした。東北大学国際文化研究科アジア社会論講座、千葉先生、平川先生、入間田先生、それから色々協力してくださった大学院生の皆さん、どうも有り難う御座いました。これでシンポジウムを終了します。

参考資料・近世主要城下町一覽

(大場修 作成)

城下町名	郡道府県名	城主	城下町建設者	年	石高(万石)	和暦	西暦	城下町人口	領内人口		平均距離	町地プラン
									甲	乙		
1 長浜	滋賀	湖東守吉	天正2年	1574	-	-	-	-	-	-	総郭型	縦町複列×横町複列型
2 北庄	福井	柴田勝家	天正3年	1575	-	-	-	-	-	-	総郭型	縦町複列型
3 大野	福井	金森長近	天正4年	1576	4	9,296	31,115	33,543	町郭外型	縦町複列×横町複列型	縦町複列型	縦町複列×横町複列型
4 丸岡	福井	柴田勝家	天正4年	1576	5	4,675	21,703	27,584	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
5 龜津	京奈	明神光秀	天正7年頃	1579頃	5	6,339	51,824	46,868	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
6 福智山	京都	明神光秀	天正7年後	1579後	3.2	4,969	31,136	31,815	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
7 三城	広島	小早川隆景	天正10年	1582	-	-	-	-	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
8 若村	岐阜	森蘭丸・長可	天正10年後	1582後	3	3,013	37,146	48,364	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
9 松本	長野	小笠原貞曜	天正10年後	1582後	6	2,523	30,609	51,693	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
10 上田	長野	真田昌幸	天正11年	1583	6	5,453	58,735	71,264	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
11 大坂/天正庚	大阪	豊臣秀吉	天正11年	1583	-	-	-	-	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
12 飯山	長野	岩井信徳	天正11年	1583	2	2,957	32,639	44,652	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
13 金沢	石川	前田利家	天正11年後	1583後	102.2	107,979	1,086,164	997,529	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
14 近江八幡	滋賀	羽柴秀太	天正13年	1585	-	-	-	-	町郭外型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型
15 徳島	徳島	勝家朝政	天正13年	1585	25.7	36,507	123,046	523,286	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
16 大和郡山	奈良	徳臣秀長	天正13年	1585	15.1	14,344	102,43	119,135	総郭型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型
17 東家第	京都	豊臣秀吉	天正14年	1586	-	-	-	-	総郭型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型
18 柳川	福岡	立花宗茂	天正15年	1587	11.9	14,025	127,326	123,991	町郭外型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型
19 高山	岐阜	金森長近	天正16年	1588	-	-	-	-	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
20 大垣	岐阜	伊藤祐成	天正16年	1588	10	16,339	78,711	165,528	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
21 松坂	三重	藤生氏隆	天正16年	1588	-	-	-	-	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
22 高松	香川	生駒親正	天正16年	1588	12	37,698	305,194	377,483	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
23 肥前	福岡	伊藤祐成	天正16年後	1588後	5.1	1	48,837	41,338	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
24 藤上八幡	岐阜	前田利家	天正16年後	1588後	4.8	5,997	54,85	60,638	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
25 広島	広島	毛利輝元	天正17年	1589	42.6	76,484	914,174	980,179	総郭型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型
26 熊本	熊本	加藤清正	天正18年頃	1590頃	54	44,384	730,531	834,065	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
27 西尾	熊本	田中吉政	天正18年	1590	6	14,502	123,159	238,64	総郭型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型
28 岡山	岡山	宇喜多秀家	天正18年	1590	31.5	32,383	350,909	364,443	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
29 飯田	長野	毛利秀頼	天正18年	1590	1.7	9,873	28,393	43,243	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
30 江戸/天正庚	東京	徳川家康	天正18年後	1590後	-	-	-	-	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
31 大津	滋賀	本町忠助	天正18年後	1590後	2.7	1,06	22,687	23,851	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
32 小島	徳島	山本秀久	天正18年後	1590後	1.5	1,856	31,29	34,297	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
33 吉田(豊前)	豊前	池田輝正	天正18年後	1590後	7	8,469	77,031	95,933	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
34 津川	福岡	山内一豊	天正18年後	1590後	5	5,737	-	97,478	総郭型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型
35 龍崎	群馬	神原康正	天正18年後	1590後	-	-	-	-	総郭型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型
36 沼田	群馬	真田昌幸	天正18年	1591	3.5	3,497	41,047	69,806	町郭外型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型
37 岡崎	愛知	田中吉政	天正19年	1591	5	13,171	52,819	66,949	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
38 水戸/天正庚	茨城	佐竹義宣	天正19年後	1591後	36	19,01	281,239	282,123	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
39 会津若松	福島	榊原氏隆	文禄元年	1592	23	22,502	199,249	366,833	町郭外型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型
40 山形	山形	最上義光	文禄2年前	1593前	5	21,828	32,282	37,163	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
41 中野	山梨	浅野長政	文禄2年	1593	-	-	-	-	総郭型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型
42 入吉	熊本	相良長隆	文禄2年	1593	2.2	3,01	54,152	70,465	町郭外型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型
43 伏見	京都	豊臣秀吉	文禄3年	1594	-	-	-	-	総郭型	縦町×横町複列型	縦町×横町複列型	縦町×横町複列型
44 竹山	大分	中川秀成	文禄3年	1594	-	-	-	-	町郭外型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型
45 宇和島	愛媛	藤堂高虎	慶長元年	1596	10	12,181	169,526	194,965	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
46 丸亀	香川	生駒親正	慶長2年	1597	5.3	12,548	62,622	77,827	総郭型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型
47 高崎	群馬	井伊直政	慶長3年	1598	8.2	16,173	97,802	95,792	総郭型	縦町×横町複列型	縦町×横町複列型	縦町×横町複列型
48 宇都宮/慶長庚	栃木	徳川秀房	慶長3年	1598	7	18,536	60,193	70,841	町郭外型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型
49 大坂/慶長庚	大阪	豊臣秀吉	慶長3年	1598	-	-	-	-	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
50 村上	新潟	村上義秀	慶長3年後	1598後	5	7,426	80,004	80,76	総郭型	縦町×横町型	縦町×横町型	縦町×横町型
51 鎌倉	岩手	南満利直	慶長4年	1599	20	28,978	137,826	381,339	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
52 加納	岐阜	奥平昌昌	慶長5年	1600	3.2	4,962	29,475	38,353	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
53 米子	鳥取	中村一忠	慶長5年後	1600後	-	-	-	-	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
54 赤松	兵庫	池田輝正	慶長5年後	1600後	2	3,571	35,558	26,993	町郭外型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型
55 和歌山	和歌山	浅野元正	慶長6年	1601	55.5	60,942	540,969	693,598	町郭外型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型
56 鹿(鹿嶋)	宮城	高橋元隆	慶長6年	1601	7	10,177	175,055	188,645	総郭型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型
57 仙台	宮城	伊達宗宗	慶長6年	1601	82.5	61,709	239,906	815,332	町郭外型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型
58 福井	福井	結城秀康	慶長6年	1601	32	37,376	284,545	264,436	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
59 小笠	福井	京極高次	慶長6年	1601	10.3	10,02	113,612	113,703	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
60 西尾	山口	吉川広家	慶長6年	1601	6	7,272	45,708	44,08	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
61 高知	高知	山内一豊	慶長6年	1601	24.2	31,299	516,545	577,695	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
62 福井	福井	黒田長政	慶長6年	1601	52	46,712	367,478	427,046	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
63 鹿児島	鹿児島	高津家久	慶長6年	1601	77	45,097	896,817	869,113	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
64 姫路	兵庫	池田輝正	慶長6年	1601	15	23,564	223,762	239,249	総郭型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型
65 柳井	滋賀	戸田一西	慶長6年	1601	6	5,58	54,347	63,013	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
66 桑名	三重	木田忠勝	慶長6年	1601	6	12,724	-	83,03	総郭型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型
67 白井	大分	福永貞徳	慶長6年後	1601後	5	10,116	78,986	96,387	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
68 土庫	茨城	松平信吉	慶長6年後	1601後	9.5	8,27	74,801	79,146	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
69 八女郡島	福岡	田中吉政	慶長6年後	1601後	-	-	-	-	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
70 前橋	群馬	酒井重忠	慶長6年後	1601後	17	16,888	178,324	200,058	町郭外型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型
71 田中(藤枝)	静岡	酒井重忠	慶長6年後	1601後	4	1,283	-	50,817	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
72 府内(大分)	大分	竹中重利	慶長7年	1602	2.1	6,844	33,326	38,007	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
73 鳥取/慶長庚	鳥取	池田輝正	慶長7年	1602	32.5	36,503	371,669	373,129	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
74 長岡	新潟	堀氏常	慶長7年	1602	7.4	28,35	-	177,397	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
75 松山	愛媛	加藤嘉明	慶長7年	1602	15	27,456	211,882	235,273	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
76 小倉	福岡	細川忠勝	慶長7年	1602	15	11,594	117,843	131,316	総郭型	縦町複列×横町型+横町型	縦町複列×横町型+横町型	縦町複列×横町型+横町型
77 所沢	埼玉	寺沢玄高	慶長7年	1602	2	8,348	63,229	91,639	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
78 白石	宮城	片倉重光	慶長7年	1602	-	-	-	-	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
79 磐城平	福島	島原忠正	慶長8年	1603	5	5,424	15,377	43,003	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
80 今治	愛媛	藤堂高虎	慶長8年	1603	3.5	8,954	75,102	97,296	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
81 彦根	滋賀	井伊直孝	慶長8年	1603	25	18,577	189,954	194,368	総郭型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型
82 江戸/慶長庚	東京	徳川家康	慶長8年後	1603後	-	-	-	-	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
83 久保田/慶長庚	秋田	佐竹義宣	慶長8年後	1603後	20.5	31,174	412,652	496,277	町郭外型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型	縦町複列×横町型
84 萩	山口	毛利輝元	慶長9年	1604	36.9	21,206	565,368	615,695	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
85 出石	兵庫	小南宗英	慶長9年	1604	3	5,797	35,213	37,420	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
86 津山	岡山	森忠政	慶長9年	1604	10	14,457	106,464	123,947	総郭型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型
87 大洲	愛媛	藤堂高虎	慶長10年	1605	-	-	-	-	総郭型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
88 高山	富山	前田利長	慶長10年後	1605後	10	42,895	116,755	93,316	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
89 松江	松江	堀尾忠晴	慶長12年	1607	18.6	33,381	295,829	319,282	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型
90 松戸(静岡)	静岡	徳川家康	慶長12年	1607	-	-	-	-	町郭外型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型	縦町複列×横町複列型
91 米沢	山形	上杉勝頼	慶長13年	1608	14.7	26,069	128,766	169,028	町郭外型	縦町複列型	縦町複列型	縦町複列型

注：領内人口については、甲：関山直太郎の『近世日本人人口の研究』付録表「府藩県別・身分別人員表」、乙：木村健校訂『旧高旧領取調帳』1969～1979 参照本部編『共武政改(明治12年)』、柳原書店復刻版、1978 による。

城下町名	都道府県名	城主	城下町建設着工年	西暦	石高 (万石)	城下町人口 (明治12年)	領内人口		平均類型	町地プラン
							甲	乙		
92 佐賀	佐賀	鍋島勝茂	慶長13年	1608	35.7	24,657	-	344,951	總領型	横町縦列型
93 新発田	新潟	溝口秀勝	慶長14年	1609	10	10,807	192,604	170,344	町部外型	横町型
94 高岡	富山	前田利長	慶長14年	1609	-	-	-	-	町部外型	横町縦列型
95 弘前	青森	津軽為信	慶長15年	1610	10	32,666	255,133	303,081	町部外型	横町縦列+縦町型
96 種山	兵衛	松平康直	慶長15年	1610	6	14,926	65,783	214,23	總領型	横町型
97 名古屋	愛知	德川義直	慶長15年	1610	61.9	114,888	918,143	866,543	町部外型	横町縦列+横町縦列型
98 犬山	愛知	平岩親吉	慶長16年前	1611前	-	-	-	-	總領型	横町縦列型
99 津	三重	藤堂高虎	慶長16年	1611	32.3	10,59	244,252	179,227	町部外型	横町縦列型
100 伊賀上野	三重	藤堂高虎	慶長16年	1611	-	-	-	-	町部外型	横町縦列+横町型
101 左倉	千葉	土井利勝	慶長16年	1611	11	3,423	119,15	113,051	町部外型	縦町+横町型
102 相馬中村	福島	相馬利胤	慶長17年	1612	6.1	3,278	145,826	151,056	町部外型	横町縦列+横町型
103 高田	新潟	松平忠輝	慶長19年	1614	15	22,119	168,844	251,439	町部外型	横町縦列型
104 鳥取	鳥取	松平重政	元和2年	1616	7	3,509	125,75	143,134	町部外型	横町縦列+横町縦列型
105 備前松山(高松)	岡山	小堀政一	元和2年	1616	5	3,888	26,232	50,326	町部外型	横町型
106 高橋	大阪	土城定康	元和3年	1617	3.6	2,231	54,928	42,078	町部外型	横町型
107 尾崎	兵庫	戸田氏鉄	元和4年	1618	4	12,63	49,615	61,98	總領型	横町縦列+横町型
108 明石	兵庫	小笠原忠真	元和4年	1618	8	18,2852	76,174	88,28	總領型	横町+縦町縦列型
109 萩	萩	高力忠房	元和5年	1619	6	9,845	76,75	80,141	町部外型	横町+縦町縦列型
110 鳥取/元和度	鳥取	池田光政	元和5年	1619	-	-	-	-	總領型	横町縦列+横町型
111 宇都宮/元和度	栃木	本庄正親	元和5年	1619	-	-	-	-	町部外型	横町型
112 福山	広島	木野勝成	元和5年	1619	11	17,239	185,863	203,641	町部外型	横町縦列+横町型
113 岸和田	大阪	松井康成	元和5年後	1619後	6	3,406	90,393	92,651	總領型	横町縦列型
114 角田	秋田	伊藤忠房	元和6年	1620	-	-	-	-	町部外型	横町縦列型
115 大坂/元和度	大坂	德川秀忠	(元和6年)	1620	-	-	-	-	町部外型	横町縦列型
116 久保田(秋田)/元和	秋田	佐竹直立	元和6年	1620	-	-	-	-	町部外型	横町縦列+横町型
117 中津	大分	細川忠興	元和7年後	1621後	10	11,031	99,148	118,234	總領型	横町縦列型
118 松代	長野	奥田昌高	元和8年頃	1622頃	10	9,363	148,942	169,306	町部外型	横町型
119 江戸/元和度	東京	德川秀忠	(元和8年)	1622	-	-	-	-	總領型	横町縦列型
120 入道	福岡	有馬徳氏	元和8年	1622	21	20,907	241,495	279,45	町部外型	横町縦列+横町型
121 水戸/元和度	茨城	德川頼房	元和8年	1622	-	-	-	-	町部外型	横町縦列型
122 宮津	京都	米津高広	元和8年後	1622後	7	9,6	71,136	75,286	町部外型	横町縦列型
123 越前	山形	柄井忠勝	元和9年	1623	14	19,606	95,35	202,537	町部外型	横町縦列+横町縦列型
124 新庄	山形	戸沢政盛	寛永元年	1624	-	-	-	-	町部外型	横町+縦町型
125 京都-二条城	京都	德川家光	寛永元年	1624	-	-	-	-	總領型	横町縦列+横町縦列型
126 秋月	福岡	黒田長興	寛永元年	1624	5	3,61	33,587	35,524	町部外型	横町+縦町型
127 瀬谷	福岡	丹羽長重	寛永2年	1625	6	2,052	63,893	72,788	町部外型	横町型
128 八戸	青森	南部利成	寛永4年	1627	2	10,198	68,197	75,591	町部外型	横町+縦町型
129 白河	福島	丹羽長重	寛永5年	1628	11	10,758	106,309	40,075	町部外型	横町縦列型
130 上山	山形	土城頼行	寛永5年後	1628後	2.7	4,209	31,519	30,828	町部外型	横町縦列型
131 洲本	兵庫	福田宗頼	寛永7年	1630	-	-	-	-	總領型	横町+縦町型
132 小田原	神奈川	榊原正勝	寛永9年	1632	7.5	13,367	92,837	113,842	總領型	横町+縦町型
133 高遠	長野	島原忠存	寛永13年	1636	3.3	4,354	47,888	66,356	町部外型	横町縦列型
134 大徳寺	石川	前田利治	寛永16年	1639	7	9,991	48,766	63,762	町部外型	横町縦列+横町型
135 川越	埼玉	松平康綱	寛永16年後	1639後	8.2	6,206	62,767	80,728	町部外型	横町縦列+横町縦列型
136 小治	石川	前田利常	寛永17年後	1640後	-	-	-	-	町部外型	横町縦列+横町型
137 二本松	福島	丹羽長重	寛永20年	1643	5	7,314	37,348	94,857	町部外型	横町型

参考文献：西村睦男「藩領人口と城下町人口」『歴史地理学』111号、1980年 宮本雅明「城と城下町」『朝日百科 日本の国宝別冊』朝日新聞社、2000



Ⅲ 日韓近代都市住宅の比較研究

1. 북촌의 옛길과 도시한옥

北村の古い道と都市韓屋 (ソウルの都市韓屋)

송인호 · 서울시립대학교 건축도시조경학부

요약 도시한옥은 1930년대에 서울에 출현한 독특한 도시주거유형이다. 도시한옥은, 집에 중심에 마당(중정)을 갖고 있는 전통적인 주거양식이 근대화된 도시 주거지 구조 위에 놓여지면서 완성된 주거 유형이다. 남쪽으로 열린 ㄷ자형 한옥은 남북 방향으로 놓여진 길과 짝을 이루고 있다. 그 도상에 전통 주거 유형과 현대 도시 주거유형을 이어주는 연결해주는 잠재력이 있다.

자연이 투영된 계획도시 한양(漢陽)

한양(漢陽)으로 불리던 600년 전의 서울은 계획도시이다. 서울의 옛 지도를 보면 서울이 자연의 질서와 모양을 존중한 아름다운 도시라는 것을 알 수 있다. 산수화 같기도 하고 개념적인 그림 같기도 한 옛 지도들은 서울의 구성과 아름다움을 잘 담고 있다.¹⁾ 그리고 골짜기를 따라 남쪽으로 흘러내리는 물길은 도심을 가로지르는 청계천으로 모여, 성곽의 동쪽으로 흘러간다. 물길(청계천)의 북쪽에 나란히 서울의 가장 오래된 상업가로인 종로가 계획되어 있다. 동서를 관통하는 주도로인 종로는 남대문에서 시작된 길과 T자 모양으로 만나고, 다시 북쪽 방향으로 경복궁과 창덕궁에 이르는 상징적인 길과 연결된다. 도시의 골격을 이루고 있는 이 도로 이면에는 부정형의 골목길들이 남북방향의 물길과 나란히 놓여있다. 이처럼, 옛 서울의 도시 조직은 산과 물길을 따라서 읽을 수 있다. 서울의 고지도(古地圖)에서 보여지듯이 자연지형의 형태와 질서가 도시형태에 반영되어 있다. (FIG.1)

도시한옥과 1930년대의 서울

1930년에 들어서면서, 농촌으로부터 서울로 인구가 집중되고 서울은 급격하게 도시화와 근대화가 진행된다. 그리고 1936년에 행정구역이 확대되면서, 새로운 주거지가 건설되는 등 서울은 도시형태가 크게 변화하게 된다. 도성의 오래된 주거지역에 있던 기존 대형 필지를 중소규모의 필지로 분할하거나, 도성 밖에 토지구획사업을 통하여 새로운 주거지역을 조성하였다. 전자는 한국인 개인 개발업자에 의하여 시작되었고, 후자는 일본의 식민 정부에 의하여 수행되었다.

이러한 주거지역 위에 지어진 새로운 '전통적' 주거가 도시한옥이다. 도시한옥은 기본적으로 한국의 전통적인 주거형태인 한옥의 연장선상에서 건설되었다는 점에서 '전통

1) 네 개의 산은 북쪽의 북악(北岳), 남쪽의 목멱(木覓), 동쪽의 낙타(駱駝), 서쪽의 인왕(仁王)이다. 서울의 도성은 1394년에 건설되었다.

적'이라고 말할 수 있다. 그러나, 이 주거유형은 부동산 시장에서 '팔기 위한 집'이라는 점에서 새롭고 근대적이었다. 주택경영회사들에 의하여 개발된 이 주거들은 일종의 주택상품으로 건설되었다. 이들은 표준화된 평면을 바탕으로 장식적인 요소를 덧붙이고, 경제적인 가격으로 중소형 한옥들을 공급하였다. 근대적이라고 말할 수 있는 두 번째 이유는 이 주거가 '개량한옥'이라는 것이다. 근대적인 개념의 위생과 생활방식을 바탕으로 기존 한옥의 불편한 점을 부분적으로 개량하였고, 붉은 벽돌, 타일, 유리와 합석 등의 새로운 재료를 사용하였다. 마지막으로, 가장 중요한 것은 이 도시한옥이 갖고 있는 '도시적' 성격이다. 도시 한옥은 근대도시조직과의 관계 속에서 전통적인 주거유형이 진화된 것으로, 주거지와 주택이 동시에 개발된 근대적인 도시주택 유형이다.

이제, 도시형태유형학²⁾(typomorphology)의 관점에서, 도성 안쪽 지역에 재개발된 돈화문로와 가회동의 도시한옥 주거지와, 도성 바깥쪽에 새로 형성된 보문동의 한옥 주거지에 대하여 서술하고자 한다. '도시주거유형으로서의 도시한옥'을 정의하고, 길과 건축 유형 사이의 관계에 주목하고자 한다.

봉익동 11, 12번지의 도시한옥

한양이 새로운 수도로 건설되던 14세기말 이래 돈화문로는 15세기부터 창덕궁과 종로를 이어주는 중요한 길이었다. 오늘날까지도 기존의 가로 폭은 변하지 않았고, 길의 끝에는 역사적 의미를 담고 있는 돈화문이 위치하고 있다. 이 기념비적 길을 중심으로 네 가지 유형의 골목길을 확인할 수 있다. 첫째는 돈화문로와 나란히 바로 안쪽에 있는 피마길이다. 두 번째는 창덕궁에서 흘러나오는 좁은 물길을 따라 있는 골목길이다. 세 번째는 종묘 서쪽 담을 따라 있는 골목길이다. 마지막은 물길과 종묘의 담길 사이에 놓여있는 좁고 막힌 길(cul-de-sac)이다. 이 네가지 유형의 골목길들은 대체적으로 남북 방향이다. 그 중 피마길은 돈화문로와 함께 계획된 길이지만, 그 밖에 골목길들은 자연지형에 따라 또는 편의에 따라 자생적으로 생긴 것이다. (FIG.2)

이 길들을 따라서 'ㄷ'자형 한옥, 연립한옥, 이층한옥상가³⁾와 같은 도시한옥이 남아있다. 봉익동 11, 12번지는 종묘의 담과 물길 사이의 지역이다. 이 조직⁴⁾은 원래는 두 개의 대형 필지로 구성되어 있었으나, 1929년에 50개가 넘는 소형 필지로 분할되었다.⁵⁾ 도시한옥은 필지 분할과 동시에 건설되었다. 골목길은 남북방향으로 계획되었고, 각각의 필지는 거의 1:1 비율이다(남쪽을 향한 면이 남북방향의 길과 접하는 동서면보다 약간 길다). 남북방향의 골목길은 11번지와 12번지 경계부분에서 어긋나 있는데, 주거지

2) Anne Vernez Moudon, "Getting to Know the Built Landscape: Typomorphology", Ordering Space(New York: Van Nostrand Reinhold, 1994). "Typomorphological studies reveal the physical and spatial structure of cities."(p.289)

3) 돈화문로와 피마길 사이의 조직에서 2층 한옥상가를 볼 수 있다. 이것은 'ㄷ'자형 평면이 수직적으로 복제된 유형이다.

4) N.J.Habraken, The Structure of the Ordinary(Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 1998), I define 'tissue' as a small piece of urban district "that reveals the thematic variations woven of a single urban fabric"(p.286)

5) 1929년의 지적도를 보면 가회동 31번지와 33번지는 각각 하나의 대형 필지로 남아있다.

단위가 약간의 시차를 두고 개발되었음을 시사해준다. (FIG.9-A)

가장 흥미있는 유형은 연립도시한옥인데, 'ㄷ'자형 평면 3개가 연속적으로 연결되어 있다. 세 개가 연결된 연립도시한옥은 'ㄷ'자형 평면이 복제된 것이다. 각각의 'ㄷ'자형 평면의 면적은 60㎡ 이하이다. 이러한 소형 필지 위에 고밀도의 주택을 만들기 위한 해결방안이 'ㄷ'자형 평면이고, 이러한 'ㄷ'자형 평면은 각각의 주거 단위의 마당(중정)을 가능하게 했다.

돈화문로 지역은 서울의 전통적인 도시조직이 잘 보존되어 있는 지역이다. 봉익동 11, 12번지의 도시한옥 주거지는 이러한 전통도시조직에 잇대어 건설된 주거지이다. 필지가 분할되는 방식과 주거가 복제되는 모습을 통하여 골목길과 주거유형의 상관관계를 보여 주고 있다.

가회동 11, 31, 33번지의 도시한옥

가회동은 원래 조선조의 상류계급인 사대부(士大夫)계층들의 주거지였다. 이제 전통적인 경관은 많이 훼손되었지만, 가회동 11번지와 가회동 31, 33번지에는 아직 전통적인 옛 모습이 남아 있다. 이 주거지들은 1930년대를 전후로 한 시기에 주택개발업자들에 의해 건설된 도시한옥주거지이다. 그들은 대형 필지나 주거지 안쪽에 남겨져 있던 구릉지를 매입하여 그 자리에 고밀도로 중소 규모의 한옥들을 집단적으로 건설하여 공급하였다.⁶⁾ 가회동 11번지는 서사면 주거지이고, 가회동 31, 33번지는 남사면에 형성된 주거지이다. 그런데, 두 주거지는 경사의 방향과 무관하게, 돈화문로의 골목길과 같이 남북방향의 골목길을 중심으로 한옥들이 배치되어 있다.

이 지역의 대부분의 도시한옥은 남쪽으로 열린 'ㄷ'자형 평면을 가지고 있다. 이 유형은 'ㄱ'자형 안채와 'ㄴ'자형 문간채의 조합에 의해서 구성된다. 안채는 안방, 대청, 부엌으로 구성되고, 문간채는 문간과 화장실, 문간방 또는 사랑방으로 구성되며 집과 골목길이 만나는 경계에 놓여진다. (FIG.6)

이 지역의 도시한옥이 배치되는 원리는 길과 향의 문제를 어떻게 조절했는가를 읽어냄으로써 알 수 있다. 우선, 'ㄱ'자형의 안채는 필지의 안쪽에서 남쪽을 향하게 하고, 'ㄴ'자형의 문간채는 길과 필지 경계에 배치한다. 문간채에 문간이 있기 때문에, 문간채의 위치는 곧 진입방향을 의미한다. 따라서 도시한옥의 평면형태는 필지의 향과 길과 만나는 방식에 의해 결정된다. 한편, 주거지 조직의 구조는 주거유형에 영향을 받는다. 따라서, 주거지의 구조와 주거유형은 상대적으로 불리한 주거 유니트의 생산을 막는 방향으로 서로 영향을 주면서 진화되어 왔다. (FIG.7)

도시한옥 주거지의 남북방향의 길과 남향의 'ㄷ'자형한옥은 진화된 1930년대의 서울에서 전통주거유형과 근대주거조직의 유형학적 도시형태(typomorphology)이다. 길과

6) 좀 더 큰 필지에서는 'ㄷ'자형 한옥이 있다. 'ㄷ'자형 한옥은 안마당을 중심으로 안채 ㄱ자와 ㄴ자의 사랑채가 마주보고 구성된다. 하나는 안방, 대청, 부엌이 있는 안채이고, 다른 하나는 방, 대청, 대문, 화장실이 있는 사랑채이다. 안채가 안주인과 어린이를 위한 가족생활 공간이라면, 사랑채는 주인과 방문객을 위한 공간이다. 사랑채 앞에 좁은 정원이 있다.

주거유형은 동시에 건설되었으며 서로 짝을 이루고 있다. 이러한 방법으로 도시한옥은 빛을 향해 열려있고, 동시에 길로부터는 닫혀있는 마당(중정)을 가지게 된다. 새로운 재료(붉은 벽돌과 함석)와 전통적 재료(기와, 돌, 목재)로 구성된 외벽과 지붕선은 길에 면하여 표층(表層)을 형성하고 있다. 더욱이 경사진 골목길은 도시한옥과 길의 관계를 보다 극적이고 풍부하게 만들고 있다.

보문동 60번지의 도시한옥

보문동, 용두동, 안암동 등의 지역은 1936년에 서울의 행정구역이 확대되면서, 도성의 바깥쪽에 새로 개발된 지역이다. 1939년부터 시행된 토지구획정리사업에 의해 대규모로 주거지가 공급되었었다. 약 $40\text{m} \times 100\text{m}$ 정도의 격자를 기본으로 주거지구구조가 결정되었다. 이 블록이 4켜로 분할되고 그 위에 도시한옥이 놓이면서 도시한옥 주거지가 형성되었다. 보문동 60번지의 도시한옥들은 1940년경에 건설되었는데, 안채와 문간채가 일체화된 완전 'ㄷ'자형평면을 이루고 있다. 이 'ㄷ'자형 평면은 연속적인 지붕선과 남쪽으로 열려진 마당을 가지면서, 역시 남북방향의 골목길에 놓여져 있다. (FIG.9-B)

도성 밖에 새로 건설된 보문동 60번지의 유형학적 도시형태는 도성 안에 있는 봉익동 11, 12번지의 그것과는 대조적이다. (FIG.8) 봉익동 11, 12번지는 바탕이 된 필지의 율곽 때문에 기존의 도시조직에 덧붙여진 것처럼 보인다. 그러나, 보문동 60번지는 격자패턴을 주거지의 기본으로 하고 있기 때문에 기존 도시 조직과 무관하게 확장과 복제가 가능해 보인다. (FIG.9)

결론

근대적 도시 주거 조직위에 전통적인 한국주거에서 진화된 도시한옥은 1930년대에 서울에 출현한 독특한 도시 주거 유형이다. 주거의 건설과 동시에 길과 필지가 분할되었기 때문에 도시조직의 구조와 주거유형은 서로 영향을 미치면서 완성되었다. 이 도시한옥 주거지는 우리에게 중요한 도시형태유형학(typomorphology)의 텍스트이다. 오랜 시간 지속되어온 한국의 전통적인 주거유형이, 근대화되어 가는 도시에 놓이면서 완성된 도시한옥은 오늘날의 도시 건축과 전통건축을 이어주는 연결고리이다.

圖全善首



FIG.1 서울의 전통 도시형 한옥의 유형 연구 / 1990년
출처 : 송인호, "도시형 한옥의 유형연구", 서울대박사
논문, 1990

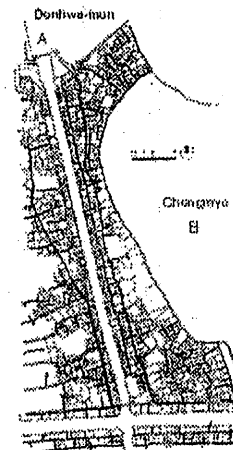


FIG.2 4가지 유형 / 1990년 지적도
출처 : 송인호, "도시형 한옥의 유형연구", 서울대박사
논문, 1990

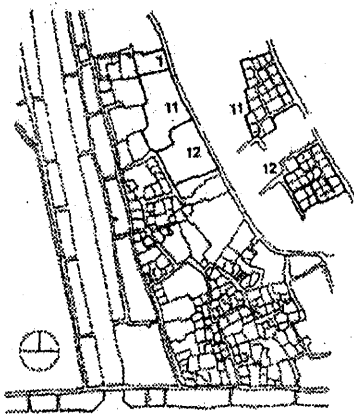


FIG.3 봉림동 / 1990년
출처 : 송인호, "도시형 한옥의 유형연구", 서울대박사
논문, 1990

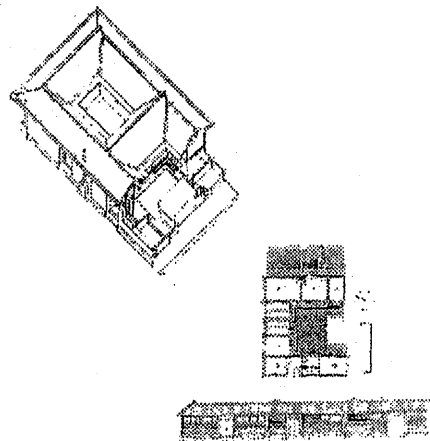


FIG.4 안채와 문간채의 구성
출처 : 송인호, "도시형 한옥의 유형연구", 서울대박사
논문, 1990

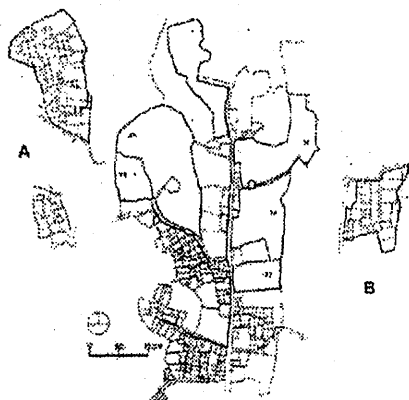


FIG.5 가회동 11,31,33번지의 필지분할 1929년 / 1990년
출처 : 송인호, "도시형 한옥의 유형연구", 서울대박사
논문, 1990

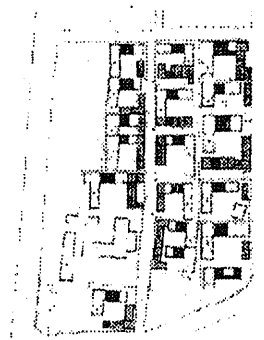


FIG.6 가회동 11번지의 안채와 문간채의 구성
출처 : 송인호, "도시형 한옥의 유형연구", 서울대박사
논문, 1990

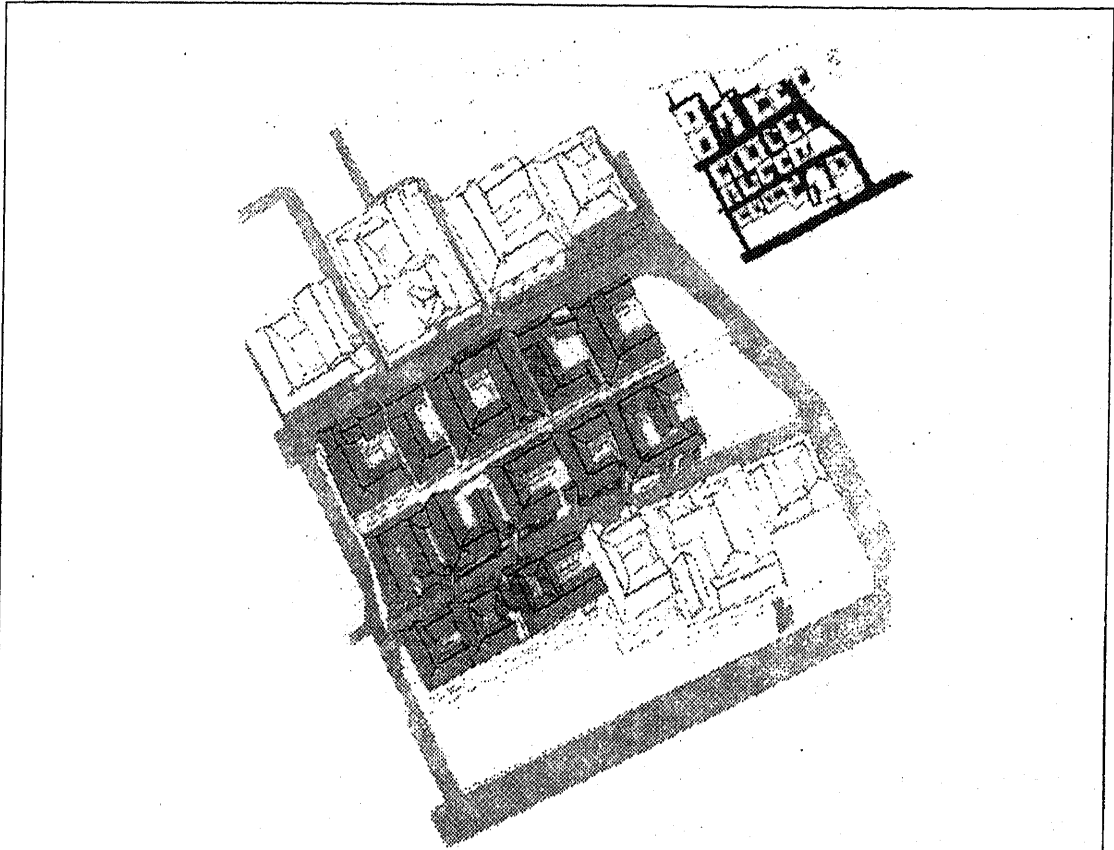


FIG.7 가회동11번지의 AXONOMETRIC

출처 : 김영수, 송인호, "한옥의 주거지구구조와 외부공간구성에 관한 연구", 대한건축 학회, 2000. 1, (pp61-67)

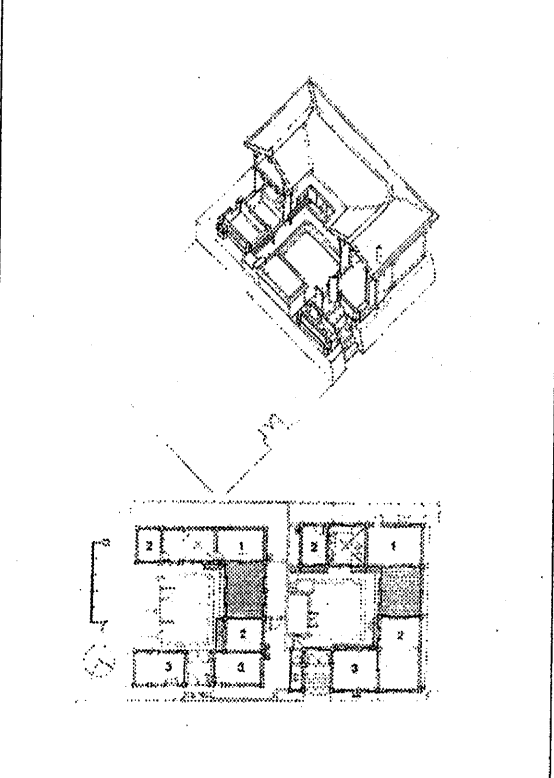


FIG.8 보문동 60번지의 도시한옥과 평면의 AXONOMETRIC

출처 : 송인호, "도시형 한옥의 유형연구", 서울대박사 논문, 1990

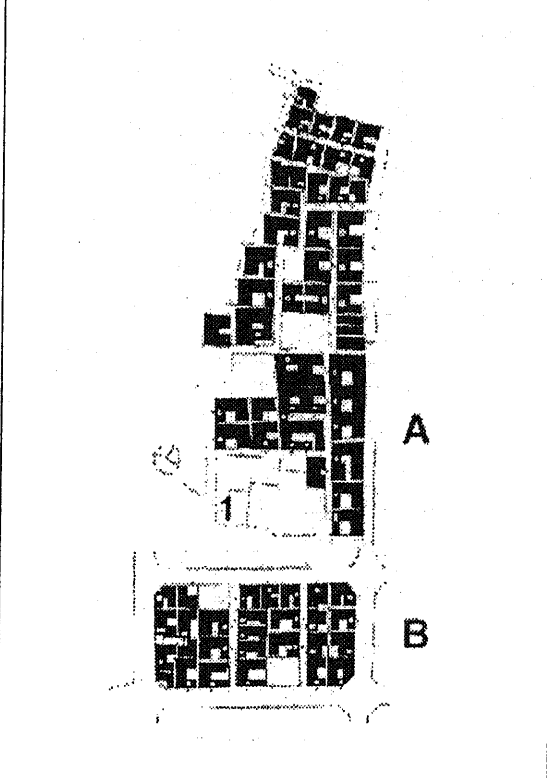


FIG.9 도시한옥의 형태

A: 봉익동 11,12번지 B: 보문동 60번지

출처 : 송인호, "도시형 한옥의 유형연구", 서울대박사 논문, 1990

北村の古い道と都市韓屋（ソウルの都市韓屋）

ソウル市立大学建築都市造景学部 宋寅豪

要 約

都市韓屋というのは1930年代ソウルに現れた韓国の都市居住類型である。都市韓屋は家屋の中心にマダンという中庭が設けられている伝統的な居住様式が、近代化の過程で、都市住居地の構造の上に置かれながら完成されてきた住居類型である。南に開けられたコ字型の韓屋は南北方向に通る道と揃っている。そこには伝統的な住居類型と現代の都市住居類型をつなぐ力が潜められている。

1. 自然が投影された計画都市、漢陽（ハンヤン）

漢陽（ハンヤン）と呼ばれた600年前のソウルは計画都市である。ソウルの昔の地図を見ると自然の秩序と形を大事にした美しい都市であることがよくわかる。山水画のような、または概念的な絵のような昔の地図はソウルの構成と美しさを良く現している。ソウルを囲んだ四つの山とその山々をつなぐ城郭が都城の境界を成している。^{*1}そして、谷に沿って南に流れる水路は都心を横切る清溪川に合流し城郭の東に流れる。水路（清溪川）の北側にはソウルの一番古い商業地である鐘路が計画されている。東西を貫くメインの道である鐘路は、南大門からはじまる道とT字の形を形成し、また北方向には景福宮と昌徳宮に至る象徴的な道とつながれる。都市の骨格を成すこの道路の両側面には不正形の多くの路地が南北方向の水路に沿っている。このように、昔のソウルの都市組織は山と水路によって読むことができる。ソウルの古地図からわかるように自然地形の形態と秩序が都市形態に反映されている（図1）。

2. 都市韓屋と1939年代のソウル

1930年代に入り、農村からソウルに人口が集中しはじめ、ソウルは急速に都市化と近代化が進められるようになった。そして1936年に行政区域が拡大されることにより、新しい住居地が建設されるなどソウルの都市形態は大きく変化した。都城の古い住居地域である既存の大きな敷地を中小規模の敷地に分割するか、又は都城の外に土地区画事業を行って新しく住居地域を造成した。前者の都城内の敷地分割に関わるものは韓国の個人開発業者によるもので、後者の都城外の事業は日本の植民政府により行われた。

このような住居地域に建てられた新しい“伝統的”住居が都市韓屋である。都市韓屋は基本的に韓国の伝統的な住居形式である韓屋の延長線の上で建てられたことで“伝統的”だと言われる。しかし、この住居類型は不動産市場で‘売るための家’という点では新しく近代的であった。住宅経営会社により開発されたこの住居は一種の住宅商品として建設された。これらは標準化された平面を基に、装飾的な要素を重ね、経済的な価格で中小型韓屋を供給した。近代的といえる二番目の理由は、この住居が改良韓屋’であることである。近代的な概念の衛生と生活方式をもとにして、既存韓屋の不便な点を部分的に改良し、赤い煉瓦、タイル、硝子とトタンなどの新しい材料を使用した。最後に、一番重要なのはこ

の都市韓屋が持つ‘都市的’性格である。都市韓屋は近代都市の組織との関係の中で伝統的な住居類型が進化したもので、住居地と住宅が同時に開発された近代的な都市住宅の類型である。

次に、都市形態類型学 *2 (tymophology) の観点から、都城の内側の再開発された地域である敦化門 (ドンハムン) 路と嘉會洞 (ガヘードン) の都市韓屋の住居地と都城の外側に新しく形成された普門洞 (ポムンドン) の韓屋住居地に対して述べることにする。ここでは‘都市の住居類型としての都市韓屋’を定義し、道と建築類型の関係に焦点を当てることにする。

3. 鳳翼洞 (ボンイットン) 11、12番地の都市韓屋

漢陽 (ハンヤン) が新しい都として建設された14世紀末以来、ドンハムン路は15世紀から彰徳宮と鐘路をつなぐ重要な道であった。今日においてもこの道は既存の道幅が変わらず、道の先には歴史的な意味を持つ敦化門 (ドンハムン) が置かれている。この記念碑的な道を中心に4つのタイプの路地を確認することができる。まず、一番目の路地がドンハムン路と沿って内側にあるピマギル (ピマ路地) である。二番目は、彰徳宮から流れて来る細い水路に付き添う路地である。三番目は、宗廟の西の塀を従う路地である。最後は水路と宗廟の塀の間に置かれている細く道先が塞がれた道 (cul-de-sac) である。この4つのタイプの路地は大よそに南北方向である。その中で、ピマギルはドンハムン路と一緒に計画された路地であるが、他の路地は自然地形に従ってできた路地、または便利を図るため自生的に現れたものであった。(図2)

従って、この道にはコの字型韓屋、連立韓屋、二階韓屋商家 *3 などの都市韓屋が残っている。鳳翼洞 (ボンイットン) 11、12番地は宗廟の塀と水路の間の地域である。この組織 *4 は本来、二つの大型敷地であったが、1929年には50筆を超える小型敷地に分割された *5。都市韓屋は敷地分割と同時に建設された。路地は南北方向に計画され、各々の敷地は、ほぼ1:1の比率を持つ。(南を向いた面が南北方向の道と接しながら東西面よりやや長い。) 南北方向の路地は、11番地と12番地の境界部分と行き違い、住居地単位が若干の時差を持ちながら開発されたことを窺わせる。(図9-A)

この中で一番興味を引くものは連立都市韓屋であり、コの字型の平面3つが連続につながっているものである。3つが連結された連立都市韓屋は、コの字型の平面が複製されたもので、各々の面積は60㎡以下である。このような小型敷地の上に高密度の住宅を造るための解決案がコの字型の平面であって、このようなコの字型平面は各々の住居単位のマダン (中庭) を生んだ。

敦化門 (ドンハムン) 路の地域は、ソウルの伝統的な都市組織が良く保存されていた地域である。鳳翼洞 (ボンイットン) 11番地、12番地の都市韓屋住居地は、このような伝統的な都市組織につないで建設された住居地である。敷地が分割される方式と住居が複製される姿を通して、路地と住居類型の相関関係を良く現していた。

4. 嘉會洞（ガヘードン）11、31、33番地の都市韓屋

本来、ガヘードンは朝鮮時代の上流階級であった士大夫（サデブ）階層の住居地であった。現在は伝統的な景観の多くが失われているが、ガヘードン11番地と31、33番地には未だに伝統的な昔の面影が残っている。この住居地は1930年代を前後とする時期に、住宅開発業者により建設された都市韓屋住居地である。彼らは大型敷地、または住居地の内側に残っていた丘陵地を買い入れ、高密度の中小規模の韓屋を集団的に建設し、供給した。*6

嘉會洞（ガヘードン）11番地は主に西斜面の住居地であって、31番地と33番地は南斜面に形成された住居地であった。しかし、この二つの住居地は傾斜の方向とは関係なく、敦化門（ドンナムン）路の路地と同じく南北方向の路地を中心に配置している。

この地域の大部分の都市韓屋は南に開かれたコの字型の平面を持つ。この類型は'ㄱ'字型アンチェと'一'字型ムンガンチェの組合せにより構成される。アンチェはアンバン、大庁、ブオック（台所）などで構成されて、ムンガンチェにはムンガン、ホアジャンシル（便所）、ムンガンバン、又はサランバンなどで構成されて家と路地が会う境界に置かれる。

（図6）

この地域の都市韓屋の配置原理を知るには、道（路地）と方位の問題をどのように調節したかを理解する必要がある。まず、'ㄱ'字型アンチェは敷地の内側で南に向けるようにして、'一'字型ムンガンチェは道（路地）と敷地の境界に配置する。ムンガンチェにはムンガンがあるからムンガンチェの位置はそのまま、進入方向を意味する。従って、都市韓屋の平面形態は敷地の方位と道（路地）と会う方式により決められる。一方、住居地組織の構造は住居類型に影響を受ける。従って、住居地の構造と住居類型は相対的に不利な住居ユニットの生産を遮る方向にお互い影響を与えながら進化したのである。（図7）

都市韓屋の住居地の南北方向の道（路地）と南方向の'コ'字型韓屋は、進化した1930年代のソウルで現れた伝統的な住居類型と、近代住居組織の類型学的な都市形態（typomorphology）である。道（路地）と住居類型は、同時に建設されながらお互いに影響を与えている。このような方法で都市韓屋は光に向けて開いていて、同時に道からは閉められているマダン（中庭）を持つようになる。新しい材料（赤い煉瓦とトタン）と伝統的な材料（瓦、石、木材）で構成された外壁と屋根の線は道に面して表層を形成している。さらに、傾斜している道は都市韓屋と道との関係をよりドラマチックで豊かにしている。

5. 普門洞60番地の都市韓屋

普門洞、龍頭洞、安岩洞（アンナムドン）などの地域は、1936年にソウルの行政区画が拡大される過程で、都城の外側に新しく開発された地域である。1936年から施行された土地区画整理事業により大規模な住居地が供給された。約40m×100m程の格子を基本とする住居地構造が結成された。このブロックが4つに分割され、その上に都市韓屋が置かれ、都市韓屋の住居地が形成された。普門洞60番地の都市韓屋達は1940年頃建設されたもので、アンチェとムンガンチェが一体化された完全'コ'の字型平面を成す。この'コ'の字型平面は連続的な屋根線と南に開かれたマダンを持ちながら、やはり南北方向の道（路地）に置

かれる。(図9-B)

都城の外に新しく建設された普門洞60番地の類型学的都市形態は、都城の中にある鳳翼洞(ボンイドン)11、12番地の例とは対照的である。(図8) ボイドン11、12番地は元敷地の輪郭のために既存の都市組織に重ねて付けられているように見える。しかし、普門洞60番地は格子パターンを住居地の基本として使っているために、既存の都市組織とは無関係に拡張と複製が可能であるように見える。(図9)

6. 結論

近代的な都市住居組織の上に、伝統的な韓国住居から進化した都市韓屋は、1930年代にソウルに出現した独特な都市住居類型である。住居の建設と同時に道(路地)と敷地が分割された為、都市組織の構造と住居類型はお互い影響を与えながら完成して来た。この都市韓屋の住居地は、我々にとって重要な都市形態類型学(typomorphology)のテキストである。長い間持続されて来た韓国の伝統的な住居類型が近代化される都市に置かれながら完成された都市韓屋は、今日の都市建築と伝統建築を繋げる重要な役割があると考えられる。

注

*1 四つの山は北の北岩、南の木覓、東の駱駝、西の仁王である。ソウルの都城は1394年に建設された。

*2 Anne Vernez Moudon, "Getting to Know the Built Landscape : Typomorphology", Ordering Space (New York : Van Nostrand Reinhold, 1994). "Typomorphological studies reveal the physical and spatial of cities." (p. 289)

*3 ドンナムン路とピマギルの間に二階韓屋が見られている。これはコの字型平面が垂直的に複製された類型であると考えられる。

*4 N.J.Habraken, The Structure of the Ordinary (Cambridge, Massachusetts : The MIT Press, 1998), I define 'tissue' as a small piece of urban district "that reveals the thematic variations woven of a single urban fabric" (p.286)

*5 1929年の地籍図を見るとガホイドン31番地と33番地は各々の一つの大きな大型敷地として残っている。

*6 より大きな敷地においては'開いたロ字型韓屋'があった。'開いたロ字型韓屋'はアンマダン(内にある中庭)を中心とするアンチェㄱ字とㄴ字のサランチェが向かい合う構成を持つ。一つはアンバン、大庁(デチェン)、ブオック(台所)があるアンチェであって、他はバン(部屋)、大庁(デチェン)、デムン(大門)、ホァジャンシル(便所)があるサランチェである。アンチェがその家の女子主人と子供の為の家族生活空間であるなら、サランチェは主人と客の為の空間である。サランチェの前には細い庭があった。

2. 日本における近代都市型住宅・住宅地の形成 —20世紀初頭の動向を中心に—

松山 恵

□はじめに

3年間にわたる日本・韓国の都市空間に関する共同研究の中で、筆者は1999・2000年度に行われたソウル中心部・都市型韓屋地区（内需洞・嘉會洞地区）の実測調査に参加する機会を得た。本稿では、これらの都市型韓屋地区と対比的に捉えられるであろう同時期の日本の動向、日本の近代住宅地や都市型住宅について論じていきたい。

今回の共同研究が行われる以前にも日韓両者の住宅に関する比較等はなされており¹⁾、すでに居住形式における類似点などが数多く指摘されている。但し、ここで扱われた事柄や分析方法は限定的なものであり、両者の住宅やそれを取り巻く居住環境・都市空間の特質を解明するにあたっては、今後さらに多様な視点から分析が行われていくべきものと言えよう。本稿において取り扱う事例は日本のもののみであり、両者の特質・差異などを提示するには至らないが、それらを究明していく上での前提となる作業として以降の分析を位置づけることとする。

20世紀初頭から開発が始められた上記のソウル都市型韓屋地区に対し、ここでは日本の都市の中でも東京を例に取り上げ、近代以降、明治期（1868-1911年）から大正期（1912-25年）にかけての動向に注目する。本稿前半では東京に数多く形成された一大事業としての近代住宅地について、開発時期や事業主体、他の計画に及ぼした影響などの点から画期的な数例をとりあげ、その特徴を指摘する。また後半では、ソウル都市型韓屋地区と同じく都市中心部に位置した近代初頭の住宅地地域について、従前の江戸期の状況などを考慮しながら街区や都市型住宅の成立過程を明らかにする。

□東京における近代住宅地の開発・形成過程—一大事業としての近代住宅地

東京の近代住宅地に関しては、これまで都市近郊・郊外に大規模に開発された事例を中心に実態の解明が進展している²⁾。明治維新〔明治元（1868）年〕から大正期にかけての、おもに20世紀初頭に開発された一大事業としてのこれらの計画には、当時の社会情勢や新たな住文化の形成などが敏感に反映されたものも多い。以降はこのような各住宅地の有する特色に注目し、幾つかの画期的な事例の分析の中から、この時期に開発された近代住宅地の特徴を明らかにしていきたい。

1. 草創期・月島の開発

—伝統的集住環境の継承と展開

はじめに、東京に生み出された近代住宅地の中でもいわば草分け的な存在の、月島の住宅地を取り上げる。月島とは隅田川の河口付近、江戸期には土砂の堆積

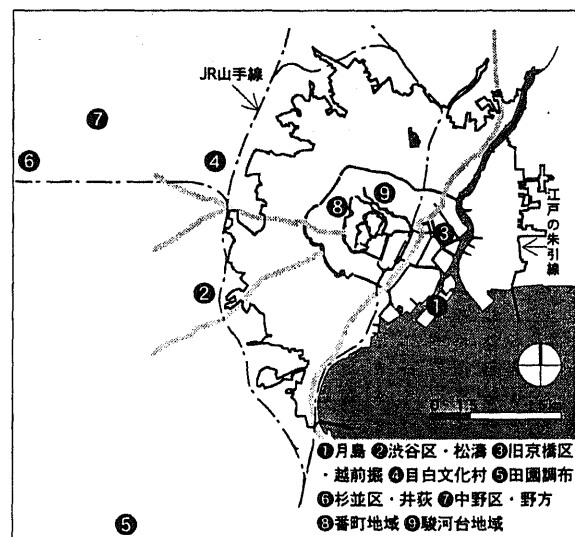


図1 本稿に登場する東京の近代住宅地、および地域の分布状況

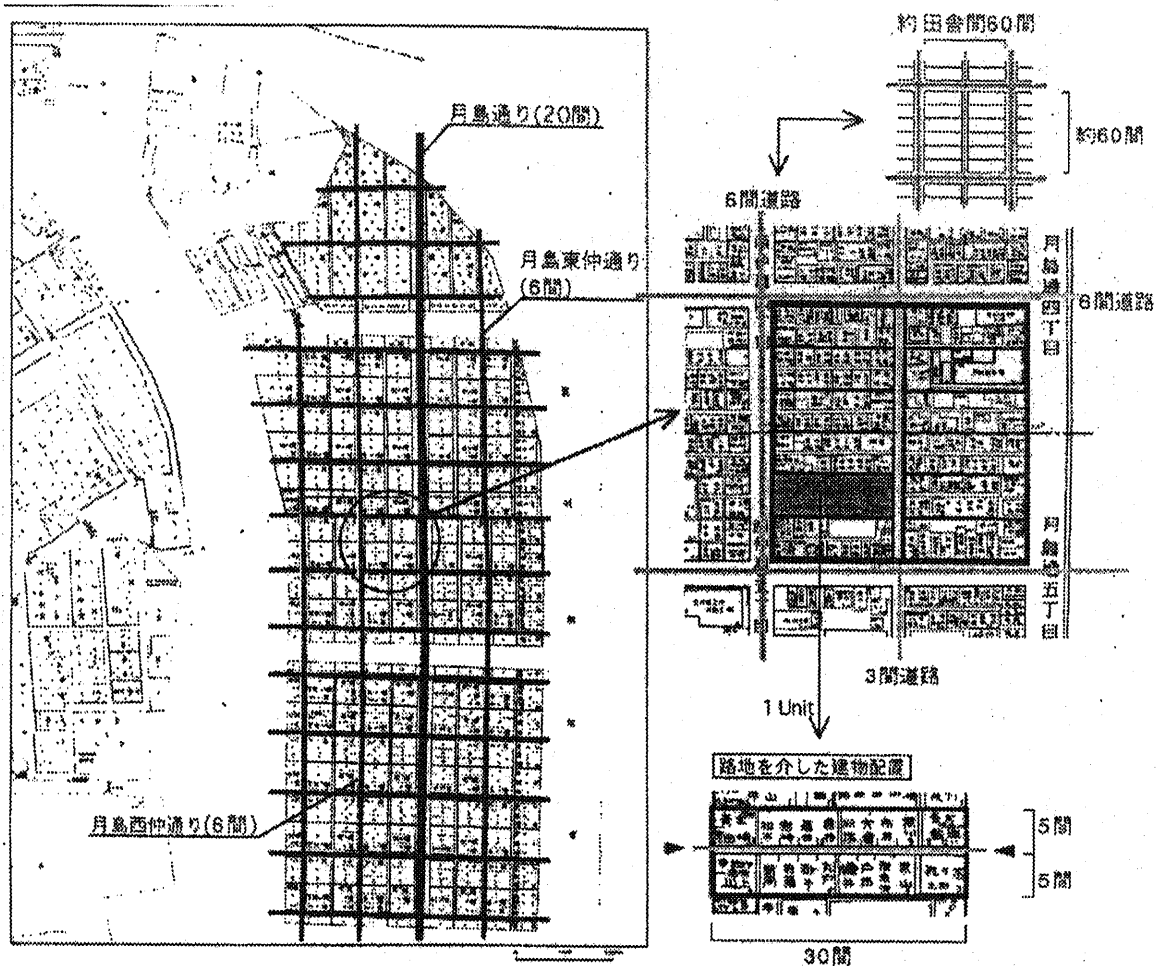


図2 月島における街路計画・建築配置

などによって既に形成されていた石川島・佃島の南端部、東京湾上に造成された埋め立て地である。この地は明治18（1885）年から段階的に造られていったが、東京湾の埋め立てに関しては、近世都市・江戸においては土地拡張・人口増加に伴う宅地供給の手段として、また現代でも月島南方の十三号埋立地（いわゆる「お台場」一帯）では臨海副都心が開発されるなど³⁾、各時代ごとに都市内部の過密化解消を主な目的として反復されてきた。ただし、この月島の埋め立ては維新期に明治政府により推進されていた港湾整備や築港計画に伴うものであり⁴⁾、上記のような意図というよりは、東京の近代都市化・都市計画の一環として位置づけられるべきものと言えよう。

明治初頭の近代都市計画に基づく月島であるが、内部の街路計画や住宅などは従前の江戸期のを少なからず踏襲したものとなっている（以下、図2を参照）。街路計画は、月島の中心にひかれた幅20間の月島通りを背骨として、一辺がほぼ60間（田舎間）の正方形街区を割り付けるように幅6間程度の道路が縦横に配されている。この60間四方の正方形街区に関しては、広く知られる江戸草創期に開発された中心部の町人地（日本橋・京橋地域）のものと同様であり⁵⁾、月島の街路計画はそれに則した可能性が高い。また各正方形街区に注目すると、内部は月島通りに平行に走る幅3間の道路により2分されるとともに、それに直行するように幅1～2間ほどの5本の路地が等間隔で入れられていることが分かる。これにより、街区は同規模の12の短冊状敷地（約間口10間×奥行30間）によって構成されることとなった。

以上の街路計画に続き、今度は月島の住宅について見ていきたい。正方形街区を構成する間口10間×奥行30間ほどの短冊状敷地において、中央に通された幅1～2間の路地を中心に、その両側に住宅は配されている。当初、月島の住宅の多くは近世以来の9尺×2間の平屋建て長屋であったと考えられる⁶⁾。この零細な長屋やそれにより敷地内が埋めつくされる状態は、前述の街路計画が中心部のものを継承したのに対し、むしろ江戸の周辺部に広がっていた場末地域の様相に類似するものと捉えられよう⁷⁾。また月島では、埋立事業の主体である東京市による土地経営（「貸渡」）が行われ、明治期、土地は3等級に分類され地料が徴収されていた⁸⁾。当時の「貸渡」相手やその規模等の詳細は不明であるが、埋め立て完成以降、日清・日露戦争を契機として月島には数多くの機械・鉄鋼関連工場が進出し⁹⁾、大正9（1920）年には人口が約3万人にもものぼっており、活発な屋敷経営が展開されていた様子が窺える。現在、月島に残る昭和初頭の住宅には数軒連続する長屋形式のものも多く、また間取りや意匠も統一されていることから¹⁰⁾、ある程度の規模・前述の敷地全体（約 間口10間×奥行30間）などの範囲を特定の地借人が借家経営を行っていたものと考えられる。またこの大正～昭和初頭には、表通り沿いを中心に木造2・3階建ての住宅が増加し、間取りにも新しい形式への展開が認められる¹¹⁾。

2. 近代住宅地の開発__東京の近代住宅地開発における3つの動向

近代都市計画の一環として明治初頭には着手されていた月島であったが、むしろ東京において住宅地開発が真に活発化するのには日露戦争以後、明治後期からのことである。その後、大正期（1911-26年）にかけての東京においては数多くの特色ある住宅地が誕生する。それらの住宅地には、明治後期以降の急激な人口集中に伴う近郊農村へのスプロール化を背景として、開発時の土地政策や生活改善運動、開発者の理念などが多分に投影されていた。ここでは前身である近世都市・江戸の名残をとどめながらも、その桎梏からはほぼ解放された方法により形成された20世紀初頭の近代住宅地について、大きく3つの動向にふまえ、各々の代表的な事例をみていくことにしたい。

2-1. 大名屋敷跡地の開発__渋谷区松濤

まず初めに取りあげるのは、近代以降、東京の内部に突如生み出されることとなった巨大な余地を舞台とした住宅地開発である。明治維新（1868年）に伴いそれまで江戸の約7割を占めた武家地は概ね政府に収用され（「武家地上地令」）、その結果、近代初頭の東京には多くの余地が出現した。これにより、中心部には官庁街・オフィス街がもたらされたが、その一方で周辺部に位置する活用法が定まらない武家地跡地の中には荒廃するものもあった¹²⁾。ただし武家地の中でも1筆で大きな面積を有した大名屋敷はその広さゆえ比較的開発が容易であったため、明治期、それらは住宅地開発の中心地となる。江戸の大名屋敷は使用目的に応じ数種が存在したが、郭内（外堀の内側）以外のものに関しては、収用された後、多くは豪商や維新时期に躍進した財閥、旧大名に払い下げられていった。このように維新を境に様変わりする大名屋敷の地所において、明治中後期以降、払い下げられた人々の手により近代住宅地が形成されていくこととなる¹³⁾。

上記の大名屋敷跡地の開発によりつくられたものに松濤の住宅地がある。松濤は東京有数の盛り場である渋谷の道玄坂界隈を緩やかにのぼった高台に位置し、現在でも、東京都知事公邸などを含み各住宅が比較的大きな地所を持つ高級住宅地として名高い。以降、この松濤の住宅地形成の過程を明治～大正期の地図を眺めながら辿っていくことにしたい。

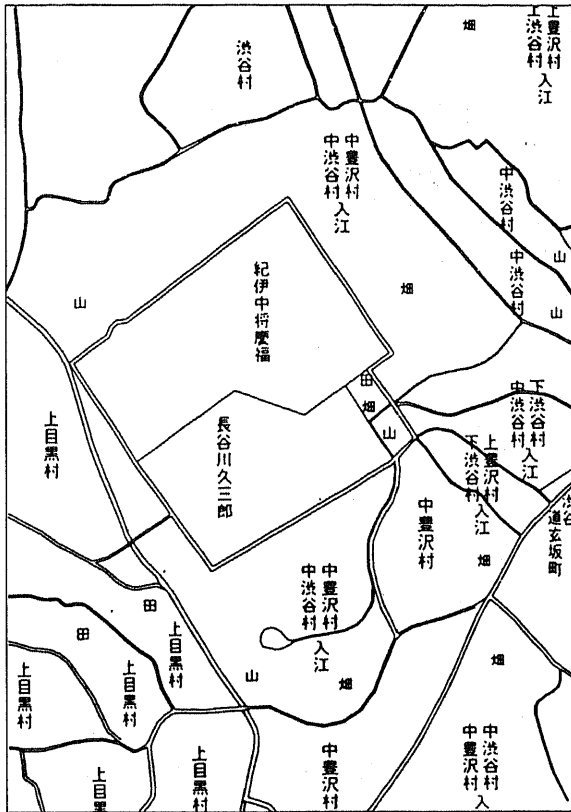


図3-1 幕末期 [安政期 (1854-59年)] の松濤

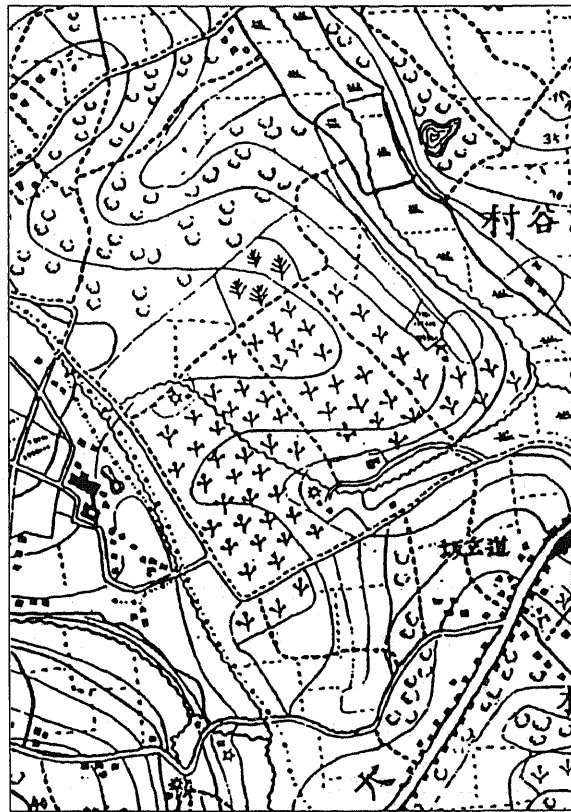


図3-2 明治13 (1880) 年の松濤



図3-3 明治42 (1909) 年の松濤
 図中矢印に「鍋嶋農場」の文字が見える。



図3-4 昭和12 (1937) 年の松濤
 図中矢印に「鍋嶋邸」がある。

0 250 500 M



幕末期段階 [安政期 (1854-59年)], この地は御三家である紀州藩の下屋敷を主体とする武家地で構成されていたが (図3-1¹⁴)、維新を迎えた明治初頭 [明治13 (1880)年] の状況からは、当時一面が桑畑として利用されていたことが分かる (図3-2¹⁵)。これは、前述のように武家地跡地の荒廃を懸念した明治政府が、主要輸出物であった生糸生成のために武家地跡地を転用 (「桑茶令」) した結果である¹⁶)。つまりこの頃の松濤は周囲も畑に囲まれ、宅地化はほとんど進展し

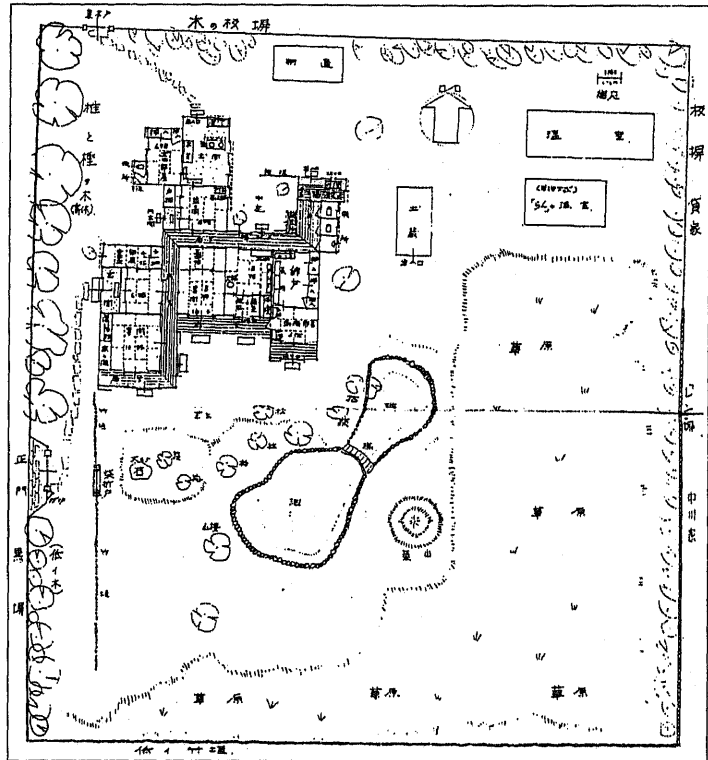


図4 明治初頭・京橋区越前堀 鍋島家の借家

ていなかったと考えられる。このように荒廃した状態にあったこの地であるが、明治後期 [明治42 (1909)年] までには、取得の時期などの詳細は不明であるが、先の武家地跡地払い下げにより旧大名・華族の鍋島家が所持し、「鍋嶋農場」をひらいていたことが分かる (図3-3¹⁷)。この時期の内部の利用状況を見ていくと、ここは起伏に富んだ地形をしているが、それにそぐわない、且つほとんどその起伏を考慮することなく碁盤目 (グリッド) 状の街路が計画されている様子が窺える。その後、松濤は大正9 (1920)年に宅地分譲が開始されるが、その際、この既存の碁盤目状街路に則りながら公園や商店等を内包した計画がなされ、また住宅地中心部には開発主である鍋島家の邸宅が構えられた (図3-4¹⁸)。

ここまで地図をもとに松濤の住宅地形成の過程をみてきたが、現在のところ住宅地内の建物などの詳細は不明である。20世紀初頭、松濤のような武家地跡地の住宅地開発は鍋島家のみならず、払い下げにより出現した財閥・旧大名などの都市地主によって東京の各所で展開されていたと考えられる。また鍋島家に関しては、ここ松濤以外にも、中心部・京橋地域 (旧京橋区越前堀) の大名屋敷跡地において広い庭付きの貸家を建てるなどの不動産経営を手広くおこなっていたことが確認される (図4¹⁹)。

2-2. 東京近郊の開発__土地会社・電鉄会社などによる開発

大名屋敷跡地の展開に続き、次に取り上げるのは明治末から昭和にかけて進展した都市近郊における住宅地開発の事例である。近郊開発の先鞭をつけたのは日本国内でも関西地域 [阪急沿線・明治43 (1910)年~] であったが、前後して東京においても特色ある計画が頻発されていく。開発主体に注目すると、それらは電鉄会社や土地会社、信託会社、学校法人、またその系列会社などに分類することが可能であるが、ここでは土地会社と電鉄会社による2つの住宅地開発をみていくことにしたい。

(1) 目白文化村 (箱根土地株式会社)²⁰

明治後期以降の東京において、都市内部の過密化や住宅不足等からスプロール化が進展

し、近郊農村の開発・宅地化が急務となる。そのような中、移入された欧米の田園都市（ガーデンシティー）思想や、近代に生成された中産階級（サラリーマン層）を対象とした新しい生活習慣・住文化を提案する運動は実際の計画にも大いに反映されていく。

目白文化村は上記のような機運の中、箱根土地株式会社によって大正11（1922）年から開発された住宅地である。箱根土地株式会社はそれ以前にも軽井沢の別荘地開発・住宅地経営〔大正7（1918）年～〕などを行っていたが、これらは一部の文人や富裕層のみを対象としたものであった。それに対し、当初貴族階級の邸宅が散在していた目白において、目白文化村は大正11～14（1922-25）年の間に4期に分けて段階的に計画・開発が行われたが²¹⁾、これらはいずれも中産階級への住宅供給を目的としたものであった。これは、既に操業が開始されていた山手線目白駅・高田馬場駅〔明治42・43（1909・1910）年開駅〕への便・立地関係を念頭に意図されたものでもある。住宅地の街路・敷地計画は、4つの開発段階により差はあるものの、従前の農道を一部利用しながら微妙な起伏のある地形の上に格子をのせたグリッドパターンから成る。また、ここでは特色ある住宅も生み出されていった。現存する開発当時の住宅の多くはスタッコ仕上げ・下見板張りによる和洋折衷型の文化住宅であり、住宅内部は椅子式の生活を基本とした設計がなされている。また、新しい居住文化の創造を目指した大正期の生活改善運動の影響からは、従前の各部屋を廊下がつなぐもの（「中廊下型」）とは異なる、居間を中心とした配置の「居間中心型」の提案もなされた（図5）。

（2）田園調布（東急電鉄・田園都市株式会社）

目白文化村が土地会社によるものであったのに対し、次に取りあげる田園調布は電鉄会社、現在の東急電鉄により開発された事例である。現在、田園調布は東京随一の高級住宅街としてあまりにも有名であるが、それは開発者の理念を投影した印象深い街路計画などが大方維持されてきたことに由縁する。

田園調布は東急電鉄により、自らの沿線上に形成された住宅地第1号として広く認識されているが、厳密には開発は鉄道が敷設される以前から着手されていた²²⁾。当初の開発主体は、明治初頭から銀座煉瓦街などの東京の街づくりに携わった渋沢栄一を中心とする田園都市会社であった。その名の通り、この会社は英国のハワードに始まる田園都市運動にちなむものであり、実際、田園調布の開発以前にはレッチワースなどの視察もおこなわれていた。住宅地内部は、それら欧米の田園都市の放射状道路（エトワール式道路）を直接

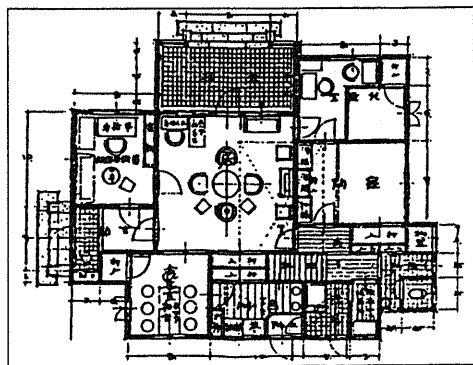


図5 大正11（1922）年・東京平和博覧会住宅展示会（文化村）に
出展された住宅

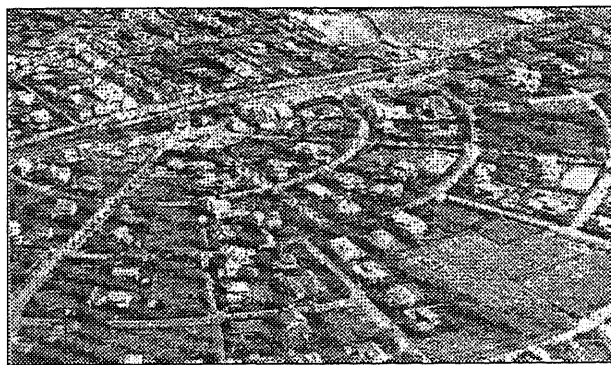


写真1 開発後、間もない田園調布
〔昭和元（1926）年の状況〕



写真2 震災後の土地区画整理事業により
生み出された杉並区井萩の町並み

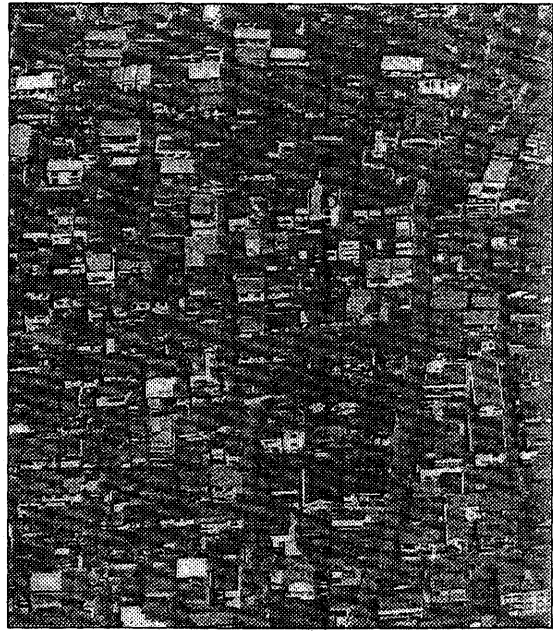


写真3 震災以降無計画に形成された住宅地
—旧農道に沿って住宅が建ち並んだ
中野区野方の町並み

的に受け継いだ、同心円と放射線からなる独特の街区形成がなされた（写真1²⁴）。この印象的な街路計画のほかにも、田園調布では良好な住環境を形成・維持していくことを目的とした幾つかの建築規則（個々の住宅を建てる際、堅固な塀を設けない・坪あたりの単価を一定額以上にする・建坪率を定める など）が設けられ、敷地購入希望者・住民によりほぼ遵守されていた²³。

2-3. 関東大震災と土地区画整理事業—東京郊外・西部地域の農地開発

明治後期から着実に進展していた近郊・郊外へのスプロールは、大正12（1923）年の関東大震災を契機に東京西部地域において加速度的に進行、拡大していくことになる²⁵。この西域における住宅地開発は既存の農地の切り売りにまかされ、計画性を欠いた無秩序な開発が展開されたところも多く、現在でもこの時期の開発過程・区画整理の有無が街路や住宅密集度などに多大な影響を及ぼしている（写真2・3²⁶）。

震災の前年、大正11（1922）年に制定された都市計画法（旧都市計画法）は東京を中心とした半径10里（16Km）の内側を都市計画域に設定した。それは、ほぼ現在の東京23区内に相当するが、当時は農地がひろがる東京市の郊外・郡部を包括するものであった。震災後の西域への爆発的なスプロール化に対し、農地の整地整理・良好な住宅地としての利用促進をはかるため、この都市計画法と共に準用されたものに土地区画整理事業が存在する。この事業の特色として、農地を開発・宅地化する主体は、その地域の土地所有者や自治体を中心に組織された「土地区画整理組合」であったことがあげられる。西域の住宅地開発の中でも、土地区画整理事業が本来の意味・役割を十分に発揮できたものに杉並区の井萩がある。井萩では、当時急速な宅地化を懸念した町長が町内の関係者（主に土地所有者の農家）の協力を得て、大正13（1924）年から土地所有者587名・総面積254万4759坪（840ヘクタール）にも及ぶ、ほぼ町全体を取り込んだ土地区画整理が実施され²⁷、整然とした町並みが形成された（写真2）。

□近代初頭における東京中心部の住宅地

ここまでは日本の近代、おもに明治から大正にかけての20世紀初頭に開発された東京の近代住宅地について、幾つかの注目すべき事例を取り上げながらその動向を探った。これらはいずれも大規模な開発を伴うものであり、月島のような新規造成地や大名屋敷跡地、近郊・郊外の農村地域というように、従前の土地利用・屋敷割などの影響の少ない地域に点状に形成されていった。その一方で、東京中心部においても近代初頭、数多くの住宅地地域が存在した。これらは前身である近世都市・江戸の影響のもとに成立しており、またその内部では現代にもつながる東京の都市型住宅の生成が認められる。以降、本稿後半では、この東京中心部の状況を明治初中期を中心に論じていく。これは冒頭で述べたように、近郊・郊外の事例に関する実態解明のみが先行していることに加え、調査をおこなったソウル中心部・都市型韓屋地区との対応・比較などもある程度可能な事例と考えられるからでもある。

1. 江戸、東京中心部の住宅地__街区や屋敷割の成立・展開について

近代初頭の東京中心部とは一般に経済・流通上の中心地、旧町人地の日本橋・京橋地域であり、せいぜい大正期までを視野に入れた場合でもそれらの南に位置する銀座辺りを含めた一帯をさす。しかし、これらの地域が近代以降の住宅地・都市型住宅の規範を生み出したとは考えにくく、むしろそれらは旧武家地地域に存在した。

武家地の中でも徳川幕府直属の家臣（旗本・御家人）の屋敷、つまり幕臣屋敷は、江戸の広範に分布したが（図6²⁸⁾）、後述するように維新期の武家地処理において住宅としての利用が継続されるため、これらが近代初頭の東京中心部、いわゆる山の手と呼ばれる地域の住宅地を形成していくこととなる。以降、江戸城に程近い郭内（外堀内）の旗本屋敷地域（番町・駿河台一帯）を例に（図6）、その明治初中期の動向を見ていきたい。

1-1. 江戸期～明治初頭、郭内（外堀内）番町・駿河台一帯の屋敷地構成

明治維新〔明治元（1868）年〕による取用後、大名屋敷はその巨大さゆえに一大事業としての近代住宅地への転用（先の松壽の例）等がはかられるのに対し、それに比べて非常に小規模な屋敷の集合体である幕臣屋敷地域はその機能を一挙に転換させることは容易でなかった。郭内の番町・駿河台一帯の旗本屋敷も、結局その多くが明治政府の官吏用住宅（宿舎）として転用されることとなり、街区や屋敷規模はもちろん建物までもがそのまま温存されることとなった。

近世的性格が多分に引き継がれることになったこの地域の街区や屋敷割について考えてみたい。近世初頭、江戸城の防備を固めるためその北西に開発された番町・駿河台地域一帯は、おもに旗本屋敷により構成され、江戸期を通じ街区や屋敷規模などが改変されることはなかった。この地域は、幾筋も小さな谷が入り起伏に富んだ地形をしているが、台地上の旗本屋敷を中心に屋敷地の奥行は30間（京間）にほぼ統一され、且つこの2屋敷の集合から成る短辺が60間（京間）の長方形街区によって形成された。つまり、先の月島でふれた中心部の町人地と同様、この郭内旗本屋敷地域も江戸草創期の都市設計の基準寸法（京間60間やそれを2分した京間30間）に則った街区・屋敷地が計画的に割り付けられており²⁹⁾、それは近代へも受け継がれていった（図7³⁰⁾）。

2. 明治初頭、東京中心部の住宅地内部__建物構成や居住形態などについて

このように江戸期の屋敷割や建物などが継承されることとなった東京中心部、番町・駿

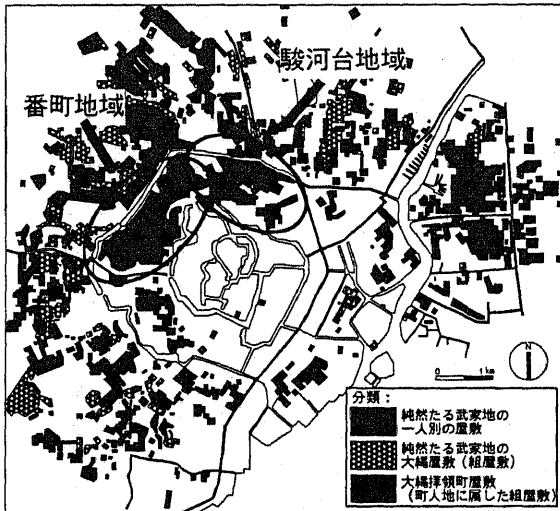


図6 幕末期〔文久2（1862）年〕幕臣屋敷分布



図7 明治初頭（1886-88年）番町地域の街区と屋敷割

河台一帯の旧旗本屋敷地域の明治初中期の状況を、維新期に編纂・作成された配置平面図³¹⁾などから詳しく見ていくことにしたい。

2-1. 建物配置と「御殿」の平面構成の特徴

はじめに、屋敷内部に存在する建物やその配置を簡単にみておきたい（図8³²⁾）。屋敷の規模は前述のように奥行は京間30間ほど、地域の屋敷間にも差はあるものの坪数は1000坪前後となっている。外構は表通りに面する部分には梁間2～3間ほどの「表長屋」が設けられ、隣地との境界には「生垣」などが配されている。屋敷中央に位置する主屋は「御殿」（御殿建物）と呼ばれ、江戸期には基本的に屋敷を下賜された（屋敷を所持する）幕臣の居所として利用された。「御殿」や「表長屋」以外にも、屋敷内には「中長屋」³³⁾や「土蔵」、「稻荷社」などの様々な建物・施設が存在する。上記の内、主屋の「御殿」に関しては、近郊・郊外のものもふくめ近現代の住宅地を構成する独立和風住宅、いわゆる庭付き一戸建ての祖形と考えられており³⁴⁾、近代都市型住宅のひとつの型と言える。その内部は一般に「座敷」と呼ばれる式台・玄関部分から始まり、奥にすすむに従って公的なものから私的なものへと展開する（図8）。空間は機能分化されており、表向きの公的な接客空間の「表」から主人が公務などを行う「中奥」、最も奥まったところの「奥」は私的な生活や夫人のための空間であり、これらに「台所」を加えた4つの空間（居所）から成立する。

2-2. 屋敷利用の実態―屋敷内の複合的利用

前掲のように屋敷内には主屋（「御殿」）のほかにも様々な建物が存在する。中には大きく居室化し、ひとつの独立した住宅としての利用が窺えるものもある。この成立背景について以下しばらく考察したい。

本来、旗本屋敷は拝領主である旗本やその家族らによる利用が意図されており「御殿」はその住居として、また家臣や奉公人が「御殿」や「表長屋」などに

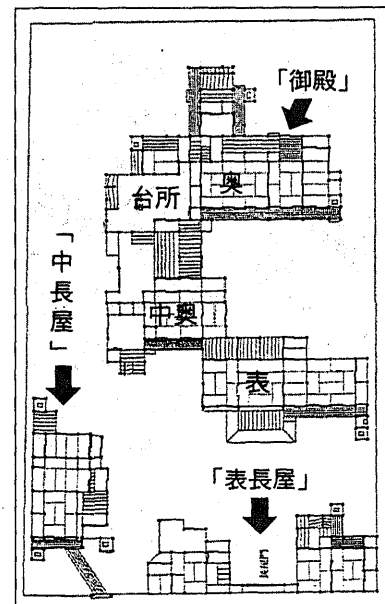


図8 建物配置と内部空間

居住することがあった。しかし実態としては、これ以外の人々が屋敷内に居住することが江戸期を通じ恒常化しており、当時の史料からは「荷持」などの町人が長屋に居住することや、拝領主とは必ずしも密接な関係をもたない武家が屋敷内を「地借」する様子が頻繁に確認される³⁵⁾。この内、他の武家による「地借」は文字通り彼ら自身による住居の普請をも意味した。番町・駿河台一帯の旗本屋敷にも、幕末期〔安政3（1856）年〕、拝領主以外の武家への貸借（他の武家による「借地住宅」など）が認められるものが数多く存在する³⁶⁾。これらの屋敷内部にある大きく居室化した「表長屋」や「中長屋」、独立住宅などは、上記のような貸借関係をもとに生み出された可能性が高い（図9）³⁷⁾。

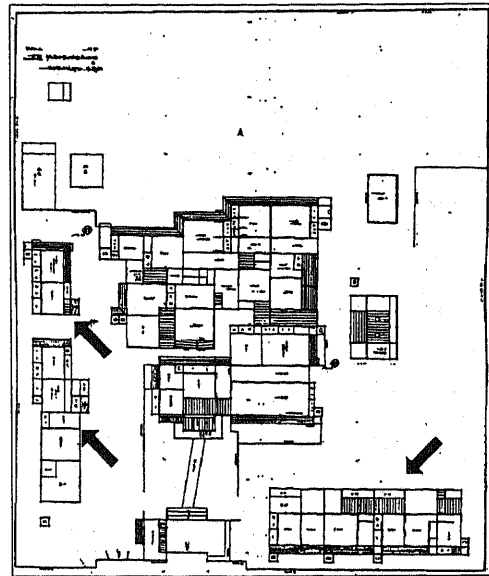


図9 「長井又五郎屋敷地絵図」
 図中矢印の建物（「中長屋」）は賃貸により生みだされていた可能性がある

2-3. 東京中心部の旧旗本屋敷地域の景観_明治21（1868）年の写真から

維新後も住宅地としての利用が継続される幕臣屋敷跡地であるが、明治21（1868）年の旧旗本屋敷地域・駿河台辺りの状況からは、住宅の多くが維新时期の配置平面図にみられる「御殿」や「表長屋」などと差ほど変わらぬ建物によって構成されている様子が窺える（写真4³⁸⁾）。この時期の居住形態については、前述した幕末期段階の屋敷の貸借関係・複合的居住が解消されていたのか（もしくはされていなかったのか）は定かではない。しかし、それらに伴い成立したとみられる「中長屋」などの主屋以外の住宅は型として存続し、前述の「御殿」と同様、近代東京の都市型住宅の典型を生みだしていったと考えられる。大正期の東京中心部の独立住宅・貸家には、それらの住宅に類似した平面構成などを持つものが数多く見いだせる（図10³⁹⁾）。

以上、明治初中期の東京中心部の住宅地をとりあげ、街区や屋敷割、都市型住宅の成立



写真4 明治21（1868）年駿河台（旧旗本屋敷地域）の状況

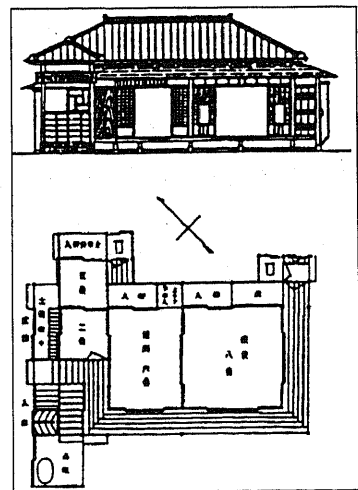


図10 大正期東京市内の借家

背景などについて検討した。最後に、ここで扱えなかった事柄について少々記しておきたい。本稿前半でとりあげた近代住宅地は、関東大震災前後〔大正12（1923）年〕に顕在化する中心部の住宅問題などを契機として成立するが、ここで論じた時期はそれ以前の状況と考えられ、その間（明治中後期～大正期）については解明が待たれるところである。加えて本文中、調査をおこなったソウル都市型韓屋地区との比較にまで踏み込むことは出来なかったが、互いの居住形態・住宅内部の複合的利用には類似する点も認められる⁴⁰。上記の両者とも今後の筆者の課題である。

□おわりに

本稿では調査をおこなったソウル都市型韓屋地区との対応から、近代初頭に開発・形成された東京の近代住宅地、および都市型住宅を取りあげた。これらを巡る動向は下記のようにまとめられよう。

前半部分においては、おもに明治から大正にかけて開発された一大事業としての東京の近代住宅地について、幾つかの注目すべき事例を取り上げた。近代都市化を背景に成立した月島の街路計画や居住形態は江戸の要素を多分に含んだものであり、また維新後にもたらされた近世都市の巨大な遺物・大名屋敷跡地などは住宅地開発の格好の舞台となった。このように、明治初頭に開発が始められた住宅地の計画・成立要因には従前の近世的性格を見いだすことが可能である。ただしこれらの住宅地が実際に多くの住民や施設を抱え、その役割を十分に担えるようになるのは明治後期からのことであった。この過程においては近代産業の萌芽や中産階級（サラリーマン層）の誕生などがあり、明治末・大正期以降、住宅地内部の居住形態や住宅の間取りなどは、当初からは異質なものと着実に変化していったものと考えられる。また、大正から昭和初期にかけては新しい住宅地の形態を模索する動きも生まれていった。東京の都市空間に大きな痛手を負わせた関東大震災〔大正12（1923）年〕を契機として、それに相前後して深刻な問題となっていた東京中心部の過密化やこれに伴う近郊・郊外へのスプロールは、さらなる近代住宅地形成への原動力となった。この時期の開発は欧米の田園都市思想に感化されたものも多く、当時の生活改善運動などの影響は住宅の間取り改変にまで及んだ。

これらの近代住宅地は明治期には海上造成地や大名屋敷跡地、大正期には諸外国と同様、私鉄沿線などというように、いわば点状に形成されていった。この時期に生みだされた住宅地は現在でも当初計画にもとづく比較的良好な住環境を維持しているものも多いが、形成された後、自らをとりまく周辺地区の街路計画などに影響を与え、住宅地の規模を拡張していくような現象が見られることはほとんどなかった。このようにある一定区域を対象とするにとどまった上記の近代住宅地に対し、本稿後半ではそれらを生み出す背景でもあった東京中心部の状況を取り上げた。

東京の中心部、いわゆる山の手とよばれる地域の住宅地は江戸期に幕府直属の家臣である幕臣（旗本・御家人）の屋敷であったものが多く、近代初頭その影響は大きい。維新後の武家地処理において幕臣屋敷（跡地）は専ら住宅としての転用がはかられたため、従前の街区や屋敷規模、建物などは大方維持されていくこととなる。またこの幕臣屋敷に関しては所在地への直接的な影響のみならず、近・現代へも通ずる住宅の型を生み出す場でもあった。旗本屋敷の主屋（「御殿」）などは現在の和風独立住宅（いわゆる庭付き一戸建て）の祖形であることに加え、江戸期に培われていた屋敷の貸借・複合的居住は、主屋以

外の独立住宅などを屋敷内部にさまざま内包させる結果となる。維新後、屋敷の所有・利用関係は再編されたものの、江戸期に生み出されたこれらの住宅は型として存続し、東京の近代都市型住宅を成立させるに至ったと考えられるのである。

以上が本稿の概要である。最後に付言すると、分析は日本の事例のみに終始したが、類似の開発過程を辿った近代住宅地は韓国においても存在した（存在する）と考えられ、その比較検討から互いの研究史への新たな視点を見いだすことも可能であろう。特に、後半であつかった東京中心部の住宅地などはソウル都市型韓屋地区との直接的な比較なども可能な事例であり、今後の課題として位置づけておきたい。

註

- 1) 『日本と韓国の住居の近代過程の比較考察—住様式の持続と変容—』住宅建築研究所、1987年など。
- 2) 例えば、山口廣 編『郊外住宅地の系譜 東京の田園 ユートピア』鹿島出版会、1987年。また日本全体を対象としたものには 片木篤・藤谷陽悦・角野幸博 編『近代日本の郊外住宅地』鹿島出版会、2000年がある。
- 3) 臨海副都心計画に関しては、平本一雄『臨海副都心 物語「お台場」をめぐる政治経済力学』中公新書、2000年に詳しい。
- 4) 厳密には、東京の近代都市化に向けた「東京築港計画」に端を発する明治17（1884）年に開始された「東京港濶筋浚渫事業」と表裏一体の関係にあったのが月島の埋立事業であった。築港計画と月島の生成との関連性については『中央区沿革図集【月島篇】』（pp.175-184、東京都中央区教育委員会、1994年）を参照。
- 5) ただし中心部のは京間である。江戸中心部の都市空間については、玉井哲雄『江戸町人地に関する研究』（近世風俗研究会、1977年）・同『江戸—失われた都市空間を読む—』（平凡社、1986年）に詳しい。
- 6) 大正10（1921）年に作成された「住宅間取平面図」【大正10年月島調査社会地図】（前掲4）【中央区沿革図集【月島篇】】pp.52-53】を参照。
- 7) 江戸場末地域の居住空間については、拙稿「近世後期における江戸周縁部の居住空間」（『日本建築学会関東支部研究報告集』、1999年）。
- 8) 前掲4）【中央区沿革図集【月島篇】】pp.185-186。
- 9) 当時月島の主要工場には日本煉炭・東京鋼作所・月島鉄工所・東京精米などが存在したが、月島住民（労働者）の最も大きな受け皿となったのは佃橋【明治26（1893）年架橋】を渡ったところの石川島・石川島造船所であった。
- 10) 『中央区文化財調査報告書第2集 中央区の木造建造物』東京都中央区教育委員会、1993年。
- 11) 前掲10）【中央区の木造建造物】pp.124-128。
- 12) 明治初頭の武家地跡地の状況については、『都史紀要13 明治初年の武家地処理問題』東京都、1965年に詳しい。
- 13) 江戸期の所持主（大名）が近代以降の住宅地開発を行った例（文京区西片町）もある。西片町に関しては、稲葉佳子「阿部様の造った学者町」（前掲2）【郊外住宅地の系譜 東京の田園ユートピア】所収など。
- 14) 『復元 江戸情報地図』（朝日新聞社、1994年）をもとに作成。
- 15) 『明治・大正・昭和 東京一万分の一地形図集成』柏書房、1983年より抜粋。
- 16) 『桑茶令』に関しては、小木新造『東京時代』（筑摩書房、1986年）、および前掲12）【都史紀要13 明治初年の武家地処理問題】に詳しい。
- 17) 前掲15）に同じ。
- 18) 前掲15）に同じ。
- 19) 『藻汐草 石渡敏一・獅子の思い出』p.173、創林社、1985年。
- 20) 目白文化村に関しては、開発主体の箱根土地会社の開発意図やその変化なども含め、丹念な分析が行われており（藤谷陽悦「堤康次郎の住宅地経営第一号 目白文化村」（前掲2）【郊外住宅地の系譜 東京の田園ユートピア】所収）、本稿も参考とした。
- 21) 目白文化村においては、昭和4（1929）年10月分譲開始の第5期も予定されていたが実現をみなかった（前掲20）藤谷陽悦「堤康次郎の住宅地経営第一号 目白文化村」p.163）。
- 22) 藤森照信「田園調布誕生記」（前掲2）【郊外住宅地の系譜 東京の田園ユートピア】所収）。
- 23) 前掲22）に同じ。
- 24) 『朝日新聞』平成13（2001）年2月15日朝刊、35面。
- 25) スプロール化の一方で、都市内部の住宅問題・不足を解決する手段として、東京市や同潤会による住宅政策の展開【RC造の集合住宅の提案など】も試みられた。同潤会の事業に関しては、佐藤滋・高見澤邦郎・伊藤裕久・大月敏雄・真野洋介『同潤会のアパートメントとその時代』鹿島出版会、1998年に詳しい。
- 26) 両写真とも、長谷川徳之輔『東京の宅地形成史「山の手」の西進』pp.216-219、住まいの図書館出版局、1988年。
- 27) 前掲26）【東京の宅地形成史「山の手」の西進】pp.174-177。
- 28) 『江戸復原図』（東京都教育委員会、1989年）をもとに作成。
- 29) 平井聖監修、波多野純著『城郭・侍屋敷古図集成 江戸城Ⅱ（侍屋敷）』pp.240-242、至文堂、1996年。
- 30) 基図は、『五千分の一 江戸—東京市街地図集成』柏書房、1988年。
- 31) 『旗本上ヶ屋敷図』（東京都公文書館所蔵）。これは維新时期【明治元～3（1868-70）年】に番町・駿河台一帯の旗本屋敷が明治政府の官舎として転用される際に作成・編纂されたと考えられており、130屋敷分の配置平面図が所収されている。
- 32) 「進藤三左衛門屋敷絵図」【前掲29【城郭・侍屋敷古図集成 江戸城Ⅱ（侍屋敷）】所収図（p.244）】を基図とした。
- 33) 「中長屋」とは「表長屋」が敷地境界に接して建つものに対し、屋敷内側に位置する長屋形式の建物として捉えられていることが絵図上の文言などから分かる。
- 34) 大河直躬「江戸時代の中・下級武士住居と近代都市住居」（『太田博太郎博士還暦記念論文集 日本建築の特質』pp.417-456、中央公論美術出版、1976年）。
- 35) 拙稿「幕末期における旗本屋敷の居住実態について—幕末期江戸・幕臣屋敷における屋敷地利用と居住形態（2）—」（『日本建築学会関東支部研究報告集』、2001年）。
- 36) 前掲35）に同じ。
- 37) 実際「長井又五郎屋敷地絵図」においては、安政3（1856）年時点、拝領主（長井）が居住する中、屋敷内が「新御番山本小三郎」へ「貸置」されていることが確認される【『諸向地面取調書』p.432（『内閣文庫所蔵史籍叢刊』第14巻、汲古書院、1982年）】。（前掲35）参照。
- 38) 「明治二十一年 全東京展望写真帖」（玉井哲雄 編『よみがえる明治の東京 東京十五区写真集』角川書店、1992年 所収）。
- 39) 近間左吉『貸家建築図集』鈴木書店、1921年。
- 40) 2000年度のソウル都市型韓屋地区・嘉會洞の実測調査では「門間房」などに他の世帯を同居させている状況が見られた。これは幕末期・幕臣屋敷の「表長屋」などにおける「貸置」（「借地住宅」）に類似する居住の形態と推測される。